

そして少女は夢を見る

しんり

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第四次聖杯戦争では少し外側にあつて戦争を見守り、第五次聖杯戦争のただ中の少女がのんびりしつつも戦う。そんなお話。

目次

Zero編

第一話 1

第二話 8

第三話 14

第四話 23

第五話 31

第六話 38

第七話 46

第八話 53

第九話 60

第十話 68

第十一話 76

第十二話 84

第十三話 92

第十四話 99

エピソード 107

番外編

アンデルセン 114

セイバー陣営 120

Bad end 125

SN編

第一話 128

第二話 137

第三話 146

第二十七話	339
閑話休題	334
第二十六話	326
第二十五話	318
第二十四話	310
第二十三話	302
第二十二話	294
第二十一話	286
第二十話	279
第十九話	270
第十八話	263
第十七話	255
第十六話	246
第十五話	239
第十四話	230
第十三話	222
第十二話	214
第十一話	207
第十話	200
第九話	193
第八話	185
第七話	179
第六話	168
第五話	160
第四話	153

エピソード	442
第四十二話	436
第四十一話	428
第四十話	422
第三十九話	416
第三十八話	410
第三十七話	404
第三十六話	398
第三十五話	392
第三十四話	386
第三十三話	380
第三十二話	373
第三十一話	365
第三十話	360
第二十九話	353
第二十八話	345

Z e r o 編

第一話

交通事故にあつたと思つたら何故か転生を果たしていた元成人、現赤ちゃんです。

名前は未だない。嘘です。響です。フルネームで水谷響というそうです。

さて、気だるい熱から目が覚めて、事故にあつたけど生きてるのかと思つて周りを見回そうとした目に一番に飛び込んできた知らない人に、「起きたのね響。お母さんですよ」といきなりお母さんと名乗つてこられた私の気持ち誰かわかりますか？

わかりませんよね。正直私の方がわからなかつたし。

思わず、誰ですかあなた知らないですと叫んだ筈の音が赤子の鳴き声だつた衝撃も計り知れない。

何、何で？ え、赤ちゃんの声？ 私の喉から？ という混乱は火を焚いたように燃え上がつて成人にあるまじき泣き声に変換され、そのまま寝てしまつて挙げ句それから三日間泣き続けてしまつた記憶は封じてしまいたい。

泣いてスツキリした私は、まず現状把握に勤めることにしました。手を伸ばしてみれば、予想に違わぬ小さな紅葉のような、ふつくらしてて柔らかかそうなもち肌。誰かと上げた声は、「あう〜」という鳴き声。

そしてたゆんと目の前に揺れた仮称母の豊満なボディ。

考えなくても自分が赤ちゃんになつてるのは再確認できました。前世、と呼ぶべきこの私の記憶が正しければ、これはライトノベルなどや二次創作でよく使われる手法、転生を体験しているのが嫌でもわかる。というかわかつてしまう悲しいね。

一応言っておくとゲームとか諸々好きだったけどでもキモオタとか称されるほどフィギュアとかグッズに散財する傾倒に陥らなかつたよ。どちらかと言えば、深く考察までしないにわかでしたし。とい

うのは余談か。

とにもかくにもここがどんなところか知りたいと思ったものの、幾ら仮称母や父、そして7つ違いの姉の会話を聞いてもさっぱりわからなかった。

ただ、生活レベルを見るに、自分の過ごしていた頃よりも少々過去のものであったのはわかった。

だってアナログテレビ。何より懐かしのブラウン管テレビである。幼少期（今も幼少どころか幼児だけ）のテレビゲームにはこれであつた。涙がちよちよ切れそうなほど懐かしい。前世の私が何歳だったかは敢えて伏せておくが。

しかし、生きている年代が分かっても肝心の世界観というものはよくわかっていない。

でも、両親も仲良く子供の面倒もしつかり見るちゃんとした家庭なので特別変な世界ではないと思う。思いたい、というのが正確なところではあつたけれど。

何はともあれ、すぐに死んでしまいそうなフラグはないかな。これなら、前世覚えてるんですとか痛いものも押し隠して普通の一般的な子供を模倣すれば普通に成長して暮らすことはできるだろう。

……なんて安易に思った日もありました。

その数日後に今住んでいるのが『冬木市』という、知らないように知っている単語であることを目にして耳にして悟りました。

それ、何かのフラグだったんじゃない？ と。

思い返せばまだ赤子の私は日中を殆ど寝て過ごしているので、ニュースといつても仮称母（そろそろ仮称でもなく本当に母として認めようかと思ってる）が好んで見る旅グルメの番組を目撃していただけ。

現住所を知ることもなくその腕に抱かれていただけだったのである。畜生、もつと起きておけばよかった。

たまたま地元のご当地グルメを探すと題して、冬木を巡るとかテロップで出た瞬間、あコレ死亡フラグたつてない？ 大丈夫？ と考えた。

冬木市。架空都市だったはずである。原作は型月とも呼ばれる会社発の fate シリーズの舞台でもあったはずである。

大元の原作は PC 版かつ 18 禁ものというのを知っている。一応リメイクされたのをプレイしているし、派生作品の EX シリーズと G O もしている。型月全体でいえばそれくらいしかしてない知らない所詮にわかだけだ。

死ぬ前に派生マンガの魔法少女ものを読んだり調べたりとかしてたので記憶に齟齬はあまりないはずである。

おっと、話が逸れつつある。修正。

冬木市といえば、聖杯戦争にてこの世の悪の泥？ を被って大火災が起きたり、サーヴァント同士の戦闘でなんかあったり変な生物もと海魔？ が川に現れたり。えーと、生気を吸われたり？ あ、あとホテルの爆破とか！

……少々記憶が原作よりもその 10 年前の大々の被害の認識が強いけど。

まあここが本当にそちらなのか、それとも魔法少女もののほうなのか、はたまた人理焼却コースなのかはまったくどの世界かわからないわけですけども。

……こんな時に PC というか、何かネットで検索できるものがあればなあ。と思わざるを得なかった。インターネッツは偉大つてはつきりわかるね。ネット依存症になってまうやろー！

そんな下らない思考にふう、とため息をついて目を閉じると自然と眠たくなってきました。赤ちゃんは寝るのが仕事と言いますし、自然的な現象ですね。

そうして眠り始めたらあら不思議。なんか白い四角い箱の中、前世だと思わしき成長した手足で目が覚めた。鏡はないので顔は見えないが。でも何故かここが『夢の中』であるとはつきりわかる不思議。明晰夢、とは違うと普段なら当てにならない勘が言っている。

そして何故か白っぽい椅子と分かるものに座った私の目の前には、SF 映画でも見ているような感じで空中に電子的な青い画面にキーボードが浮かんでいた。

これが私の想像の産物であるならば、ひどく安直というか捻りが無いと思う。でも、こういうチープな感じが好きだったりするので、わかりやすいといえればわかりやすいのかも知れない。

「ええと？ 操作は……ん、マウスないってことはタッチパネル？」
パネルを動かすものがないかと視線をさ迷わせる。が、その視線に合わせて画面が移動したので慌ててしまう。……何故夢の中でこんなに苦しむのか。

画面の選択はタッチでマウスクリック。ドラッグは視線の移動など。で、記入は手元のキーボード。基本的な操作さえわかれば後はもう慣れさえすれば問題ない。

まずは一番大きな画面を選び、じっくりと観察する。

画面は通常のPCにおけるデスクトップ画面のようにも見える。画面左側に歯車のアイコンで設定、と下に書かれたものがあつたのでそれを選択してみる。

パツと広がった画面には各種設定という文字が踊り、そこには何というかいろいろ書かれていた。

えーと、接続先設定。バージョン設定。セキュリティ設定。再生設定。個人設定、と書かれている。

先ず上の接続先設定から確認。開いた画面には、周辺に接続。魂に接続。『××』に接続、とこれは何か文字化けしている。世界に接続、とあつた。

なんじゃこりゃ。と思いつつも、後者二つにするのは怖くてまず周辺を選択してみた。

瞬間的にぱつと幾つかの画面が展開し、現在赤子を見つめている視点の画像、いや動画といえいいのか？ が一番に見える。後は見知らぬ男性の顔を見ていたり子供を見ていたり。

その画面ごとの脇に詳細という文字があつたので凝視し選択してみると、画面の三分の一ほどに文字列が並んだ。

それは個人名から始まり、現在の状態、感情パラメーター？とタブで来歴となっていた。

個人名、水谷綾子。状態、子供（水谷響）の世話。感情パラメーター

には幸福、疲労、心配、愛情となっている。グラフになっているが、今のところ幸福が強いようだった。

しかしまあ感情はそのくらいにしておいて、来歴のタブを開いてみる。

出身地は冬木市。家庭不和もなく育っている。系譜は曾祖父に呪術師の類いの血を継いでいる。実家は冬木の小さな神社を管理する家。主な祭神は天照大神様。土地を継ぐのは兄となるらしい。上京後数年、現夫と出会い恋人に。社内恋愛であったという。出張先に実家のある冬木の名前が出たので、身籠った彼女は母の力も借りられるからそちらに一緒に行きたいとして現在の家に至る。

そして姉を生んで以後子宝に恵まれなかったが、ついに私が生まれた、と。

特筆すべき点だけ纏めて、メモ機能がないか探した結果見つけた画面に箇条書きで書き出す。

そして次に目をつけたのは、呪術師、という点である。

呪術といえば水天日光、えーとその後が出てこないけど、そんな宝具名を使う玉藻の前が扱っていた。そして神社の祭神は天照大神。ここもまた玉藻の前に繋がる点である。玉藻さん好きでした。キャス狐さんマジ良妻巫女可愛い。げふん。

確か呪術というのは魔術と違って周りを変えるのではなく、自己を変えるというもの……だったはず。

その家系の末であるというならば、この前世というべき自己が表出したというのも納得はできないこともない。

がしかし、そこに至るまでの某かがわからないので困っているわけだけど。

とここまで考えて、次にいくことにした。深く考えるのは後でもできるし、うん。

接続はもう少し気にはなったが、次のバージョン設定の確認だ。

出ている画像を全て閉じて、元の設定画面に戻る。

画面を開いてみると、バージョンα2.1となっていた。更新日時は2月10日。

でもインスタール完了はその半月後くらいの3月頭になっている。詳しく見てみると、今でもバージョンα1.2とか1.6とか少しずつ変わっていつているのがちよつと怖い。

何、今の自分って完成形じゃなかったの？ 自己の定義についてすつごくあやふやになってきてしまいそうになったので、深く考えないことにした。たぶん深く考えるとドツボに嵌まる。

そこから更に下に目を通すと、バージョンβに移行しますか？と なっていたので見なかったふりをして次にいくことにする。

次、セキュリティ設定。これは何かよくわからないが、外部からの影響レベルについて、みたいである。よくわからん。

でも要するに、ウイルスを検知してデータが喰われるのを防ぐって ことでしょ？ 設定は強になつてるし、不便がなければそのままでもいいや。不都合が出たら変えればいいんだし。

はい次、再生設定。これは先程のような、母の画像映像を再生という が見る際の設定らしい。大きめの画面で再生するか否か、というもの だ。

別にアニメを見るわけでもなし、小さめの画面でも不便はないだろうと 変につつかないことにする。セキュリティと同じである。

そして時間はかかった気がするが、最後。個人設定である。

……はい。何というか、設定というよりも今の状態というべきか。それが記されていた。

水谷響。2月10日生まれ。女。

起源『接続』。属性『無』。

なんじゃそりやと仰天しつつも続きを見ていく。何か信じられないものを見ているような気分である。

現在の魂バージョンα2.1。記憶名『××××』名称特定不能。魂レベル3。現在魂との接続レベル60%。バージョンアップを勧めます。

未アップデートβ。仮称平行世界者。記録名不明。バージョンアップを勧めます。バージョンアップ時霊子虚構世界への接続を開始します。

魂拡張段階レベル1。

次バージョンβ、接続レベル50%以上時レベル2に移行。

とこのようにまあ、なんか突っ込みたいところが多い文章となっていた。

ええと、まず起源についてはこの現状を納得できるものはあるけれど。属性無って何ぞ。確か架空元素かそんなものではありませんでしたっけ？ 記憶違い？ わからないんだけど。

なんかありえないものを見た気分ではあるが、夢ではないけど夢の中なここに確かにあるし、そして何よりも私の知り得ないことも識ることができているという点が納得せざるを得ないところというか。何というか？

記憶名が文字化けしているのは、前世の名前が思い出せないと感じたのでそのせいだと思う。

接続レベルが60%となっているのも理由だったのかも知れない。でも、気づけなかったのはたぶん、それが普通だと認識していたからなのだと思う。たぶん。

もうよくわからないので、とりあえずバージョンアップの承認だけすることにしました。

面倒くさがってるわけじゃない。ないっつたらないのである。

見ていたら疲れてきたので、白い椅子に背中を凭れて目を閉じる。

途端に感じたふわふわとした感覚に身を任せ、目覚めのその時を待つことにした。

第二話

水谷響です。先日めでたく三歳となりました。

お祝いもしてもらい、ケーキも美味しくいただいてもうそれだけでも満足です。美味しいものは世界を救うのです。半分冗談だけど。

さて、そんな三歳児な私なのですけれど、前回よりレベルがあがっています。現在では魂レベルというのが15となり、バージョンもγ。接続レベルも55%となっています。

結局その意味は何だったかと言うと、言葉にすると難しく、しかし自分としてはそんなもの、という感覚での理解となっているのですが。

ともかくとして、バージョンと割り振っているものは、魂の今まで巡ってきた世界？ 前世という記憶を掘り起こして無理矢理繋ぎ合わせて今の私へとインストールしているということだ。ただし、例外的に平行世界の向こう側の生きているそれに繋ぐこともできるらしい。まだやってないけど。

バージョンアップしても、それまでのαやβはそのまま保管され、100%の接続度として存在している。

かといって多重人格となるわけではなく、αのデータが私という根幹として下地、つまりはCドライブとかそんな感じの存在となる。

そしてその中に必要な部分を裁定して上書きもしくは新しくフォルダを付け足すような形で保存される。

裁定の基準は無意識下での選択なのでわからないですけど。自我は切り離してあるが、データとしてはある程度固めて置かれているよ。うだ。

魂拡張段階レベルがその容量の拡張で、魂レベルというのは出力するための電力の供給？ を示すそう。レベルがあがれば、電力を流すためのコンセントが増える、みたいな感じ。

で、バージョンの接続レベルというのが記憶などのダウンロード状況らしい。

簡単に説明するところなるが、やはり自分でも理解はできていな

い。

しかし、他にもいろいろ分かったことがある。

まず接続先の設定について。周辺は前に説明した通りで、最近では少し範囲が広がったようではある。

魂への接続については、自分とその他ランダムで他人の精神に繋ぐことができるらしい。ただ、抵抗力やら同調率やらよくわからないもので弾かれる方が多い。

しかし、自分だけに繋げると、なんと体感時間の思考時間と、現実時間のズレが大きいことがわかった。つまりは高速思考と呼ぶべきものができる。

予想では慣れれば並列思考もできないことはないはず。

使えるかはわからないですけども。

まあだいたいこのような感じでした。そして新たにわかったのは、『接続』する先は魂だけじゃないところだ。

とはいえ、これはβの月の聖杯戦争に繋いでて気づいたことなわけだ。

どうやら、この『接続』というのは、月でいえば私のそれはハッキングに近いもの。でもそこには私を観測した結果のNPCがいたので、SE・RA・PHの目を誤魔化せたというわけです。そして記録はリセットされたりして途切れていたりするが、月の在り方や電脳体を此方で応用するための方法もわかる。感覚的な理解でしかないので、説明は控えるが。

ということだ本題。

要は外の前世の私というものを辿って、そこにある『電子的情報』を手に入れられるということだ。

つまりどうということかって、わからないことは何でもググれるってことですよ。まあ私の見たことがある範囲に限って、という但し書きはつくのですけどね。

現実世界じゃ三歳児なので情報を得るところの話じゃないし。と
いうか、にわか知識しかないので、原作の情報を少しでも得られるアドバンテージは大きいと思います。

生存戦略という点でしかないけれど。赤ちゃんからのやり直しの
ような状態とはいえず、次の生で再びこの自意識が芽生えるとは思え
ないので、命は大事にです。

他二つの接続に関しては……、はい。見てはならないものを見た気
分になりました。

文字化けしていた方については夢殿に接続と今は表記され、それは
魂のインストールが進んだことで得ることができました。言葉の通
り人々の夢を渡ることができるといっわけです。

……まあ、波長が完全にといっつていいほど合わなければ夢は見ない
のですが、合う範囲の方が広すぎて、しかも結構遠い地域まで視える
ため色々嫌な気分になることはありませんが。たまには綺麗な夢を
見たいものです。

だって本当、人の見ではならないものまでよく視えるものなので。
それでも、見ないということはできないので、少しばかり不便に思い
ます。

最後の項目であった、世界に接続はまさか魔術師が望むものを垣間
見ることになるとは思っていませんでした。いや、予感当たったの
だとは言えますが。

これについては詳しく掘り下げる気にはなれませんね。
だってたぶん、これってバレたら結構ヤバイのでは？と直感しまし
た。

抑止力が働いたのか繋いでいたのは数秒。もしかしたらほんの刹
那だったのかも知れないけど、充分すぎたのです。

……お陰さまで何か妙に嫌な予感がする。それも近いうちにはこ
なくせに気づいたら嵌まつてる意外と大きめの落とし穴的なやつ。

あくまでも予感でしかないけども。気をつけようとは思う。けど、
たぶんうっかり忘れてるんだらうなとは思ったりもしている。

いつくるかわからないものを警戒できるか！ できるのは四次と
五次の聖杯戦争だけだよ！ 五次なら特に日にちの確認だけはでき
るから！

四次は始まりさえすれば予定は判りますからね。

……はあ。とはいえ、四次も厳密には数年前くらいから用意されてるんだっけ。本格的に始まって、この子供の足で災害から逃げられるはずはない。

かといって死にたいというわけではないのだけど。

所詮生き物というのは、死んでしまう時は呆気ないもの。生きるときは生きるし、死ぬときは死ぬ。運命なんて陳腐な言葉に収めるつもりはないけれど、でも何れ起こるべき事象なのだからその時は大人しく受け入れるべきだと、私は思う。

私はあるがままを受け止めるつもりではあるけど、きつとそれを人は諦念と捉えるのでしょうかね。

諦めるつもりは、ないのだけど。

母の呼び掛ける声が遠くから響いてきたので、殆ど一瞬でスイッチを切り替える。

夢の中の私と、現実の私を切り替えて瞬く。

「おはよう、響。よく眠れた？」

笑う母に頷きを返し、目を擦る。

子供の情報をインストールして模倣する私に、彼女は疑念を覚えることなく機嫌よく笑っています。

「お母さん」と母を呼ぶ部屋の入り口に立つ姉を見れば、着替えをすませてランドセルを背負っていた。

七つも離れていれば、当然のことである。姉は10歳の可愛らしい子供だ。

私は記憶のせい……いやおかげで、精神だけはオバサンのような気持ちになっではいるけど。

何にせよ、姉がグレる気配がないのはいいことだ。ついでにいえば、小学校の服が、プリヤのような感じではないので限りなく原作に近そうなことに気づいてしまつて落胆してしまつたものだ。

プリヤならなあ……魔法少女たちというかカードの件に関わらなかつたら平和そのものだったのだが。

イリヤのことは好きだったので、勿論一度はその姿を見てみたいと思つたりしました。こちらでは割りと死亡フラグしかないので無理

ですけど。

ちなみに四次五次合わせてマスター陣営で好きなのは凜ちゃんです。精神的に強い女の子って憧れるよね。サーヴァントだと悩むけど、やっぱ赤弓さんかな。凜ちゃんとセットの赤色主従はほんと好き。ふあてごで初めて手に入れた星4だったのも印象的なんだよね、うん。アニメのUBWも良かったです。あ、勿論EXの方の無銘さんもいいと思いますよ。

でも五次の他のサーヴァントも好きですとも勿論。私がFateに入ったのって五次からだし。

ごほん。また脱線している。これは私の悪い癖のようだ。

母に着替えさせられてご飯を食べる。その間に姉はもう行く時間だと家を飛び出るように走っていった。

私がおもそとご飯を食べていると、二度寝してか慌てた様子の父がリビングに飛び込んできて母に軽く怒られている。

勢いよく朝食を掻きこんで急いで出ようとする父だが、母が呼び止めた。そして慌てすぎてよろよろのネクタイを結び直してとびきりの笑顔で「いってらっしゃい」と言っている。

そんな母に嬉しそうに父は「いってきます」と笑ってでもやっぱり急ぐように飛び出していった。姉とまったくそっくりな様子に父の慌ただしさが遺伝でもしているのかなとか下らないことを考えてしまった。

そしてご飯も食べ終わった私は保育園に預けられ、母は復帰した仕事に行く。その帰りはだいたい6時ぐらいのようで、半くらいにはいつも迎えにきてくれる。

なので私は大人しく保育園で積み木を積んだり周囲の子の遊びに引っ張られたりしつつ過ごす。

どちらかといえば本を読む方が好きなんだけど、仕方ないよね。こればかりは。

昼寝の時間とかは夢というか、あちらに時間まで引きこもって前世で読んでいた漫画とか本とかを読んだり、たまに自分の状態を確認したりしているのは誰にも言えるわけのない話である。

最近ではゲームも引き込めるようになったので更に趣味の範囲が広がってしまったでござる。古いのしかまだできないみたいだけど。その内増えていくようなので楽しみです。

まだまだ自分の『チカラ』は完全に制御も理解もしきれてはいないが、中々楽しくなってきた。今の現状は、悪くはないものだ。

たぶん後は友達を作ればいいんだろうけど、子供は……苦手だ。周囲から情報をインストールして事なきを得てはいるが。

だから当たり障りなく仲良くしているのだけど、気疲れしてしまうので今のところ友達は遠慮したいと思います。まず精神年齢が合わな過ぎて辛いので……。

第三話

こんにちは、水谷響です。

私は今、夢を見ています。

赤く重苦しいカーテンや毛足の長く踏めば柔らかな感触のしそうな絨毯。

白い窓枠から溢れる光のあたるその中心には、成人女性が三人並んで寝ても窮屈ではなさそうなサイズのベッド。それを覆う布地さえも赤々としていて、埋もれるように横たわっている存在と同化を果たしているようだった。

金色の刺繍の施されたその上に投げ出された赤い艶のある髪もほっそりとした足も手も白磁のようで美しく、私は夢とはいえ見えないものを見てしまったような錯覚を覚えます。

でも、これは所詮夢。

私のものではない夢。

微睡む少女の見る夢。

ここ数カ月、何の影響かわからないけれど、私は現実世界の姿で彼女のベッドの端でこの夢を見ている。

しかしその間、彼女は決して目覚めない。目覚めたくないのかも知れない。

彼女は、それ以外のことを知らないのだから。

私など到底及ばぬほど、彼女は無垢で無知で何よりもヒトの営みを知らない。

勝手に情報を開いてしまったけれど、でも少し寂しいとも思えた。けれど彼女は眠る。眠り続ける。

これは夢と知らぬが故に、気づけぬ故に。

そうなると、この夢に囚われた私は暇なわけなのですがね。困ったことに。

たぶん彼女と波長が合ったから……だとは思っただけ。

まだ完全に把握しているわけではないけど、この夢を見るチカラは、いつかの魂が発現したものだ。

その私は夢殿を渡り歩いては人の穢れに気圧されて引きこもる生活を送るような引きこもりだったらしい。時代背景なんて千も昔の話のようである。

いやまあそんなのは余談でしかないですが。

さて、まだ体感一時間程度は暇だ。

どうするかなあと思いつながらその少女の寝顔を眺める。

散策するにも、彼女の知っている世界は狭いようでこの部屋のある屋敷の外観は全てを把握できない。

はつきりとしているのは食堂と見事な庭園、そしてそこまで通じる廊下だけ。どこもかしこも豪華な造りで、長い歴史と財力を感じさせるものばかりだ。

「いやはや……、本当に」

美少女の寝顔は非常に眼福だと思う。

その寝顔にさえヒトとしての何か欠落しているように、まるで人形のような無機質なものであるのが恐ろしくもあるが。しかし同時に美しくも儂くもある。

人というのは、本当に不思議なものだ。

なぜ感情が不足していれば人形のように見えてしまうのか。

彼女を見る毎にそう考えてしまう。考えても、答えなんて出るわけもないのだけれどね。

「……………」

眠る彼女の傍らで私は子供ののように足をぱたぱたとベッドに打ち付けて暇を潰す。

その内飽きてきたぐらいには、きつと目覚める時間だろう。

「あなたはだれ」

そう思っていたら、この数カ月もの間眠り続けていた少女の瞳が開いていた。

寝転んだまま少し離れた私の顔を見ている彼女に、驚いていた私はすぐに微笑みを浮かべた。

感情はなく無色透明で透き通った宝石のような人形のような眼差しを捉えて。

「はじめまして。私は響です。あなたのお名前を聞いてもいいですか？」

数カ月の間に技能としてインストールされた言語機能を使いつつも、意図して優しく声を落とす。

僅かに首を傾げた少女は、薄らと身に纏っていた警戒を霧散させて淡々とした声音で名乗りを返した。

「ソラウ」

声音さえも人形のように硬質だけれど、それはきつと人との触れ合いを知らないからだ。

だから彼女の世界は、こんなにも美しいのに暖かさも冷たさも感じられない。

もつと暖かみのあるものを見たいという私の欲でしかないけれど、折角目覚めたのならば話をしましょう。

私が納得いくまで、あなたが満足ゆくまで。

刹那にも等しいこの夢のひとつの中で。

「私は、この夢の中の住人であるあなたのことが知りたい。対価に私は私のことを答えるし、あなたの望むものを可能な限り見せたいと思います」

だから、よろしくしてくださいと握手のための手を伸ばす。

彼女は無機質な眼差しに僅かに色を混じらせて私と手を交互に見やった。

「……………」

じつくりとした長く感じる沈黙の後に、彼女は細く長いしなやかな指先を伸ばして私の手に重ね合わせた。

「よろしくお願ひします、ソラウさん」

少女は無感情ながら小さく頷き、呟くようによろしくと言った。

そこまででこの夢のひとつきは明るい窓から金色の光を射し込んで終わりを告げた。

何かを言いかけた少女に、私はまたと笑みを向けて目を閉じた。

その瞬間には私は自身の夢、いつもの白き空間に座っていた。

目を開いてそれを確認したら、私も外の様子を見て目を覚ます。

お昼寝の時間が、もう少しで終わるようだったから。

それから翌日も、その次の日も、毎日のように私と彼女は夢の中で逢瀬を交わした。

男女のような甘酸っぱいものでは決してなく、まるで姉妹のようなものを思わせる。

姉をもう一人もったような、その情緒のなさにまるで妹でもあるような感覚を抱きながらも己を語れぬという彼女に私は自分のことを語る。

私自身の語れることなどたかが知れているし、薄っぺらい紙のようなものだけだ。

こんな私でも、多少はどういうものがあつたかとか、どんな景色を見たことがあるかとか語れることもある。

時には夢の一部分を譲ってもらい、その景色を見せたこともある。彼女は私の語る薄いものにも興味を示し、見せられた景色に何かを感じているようだった。

時に他の人間から得た夢の残骸、感情の見本といえれば聞こえはいいけれど、それを眺めたりだ。

夢の残骸は、人の無念後悔幸福願望様々な心の跡。

人とはどういう存在で、心とはどんなに多様なのか。それを彼女にあるがままに見せる。

かつてあつた生の私では到底御せず受け入れ続けたものだけけれど、取捨択一できる術を識った私だからできること。

私という自意識、もしくは遠い未来の術を得たからこそそれは可能なことだから。

そして少女は、人を識り、心を知った。

日をおう毎に心の在り方を覚えた少女は、それまで目を向けることのなかったことに何かを感じ、私にそれを尋ねた。私はそれに答えを出すわけでもなく、共に悩み共にそれへと名前をつける。

知らねば在り方はわからず、名前がなければ区別がつかない人の不可思議な心の機微は、それまで心というものを解さぬ人の紛い物でさ

えあつた彼女に衝撃をもたらしたらしかつた。

それまで無機質で義務的なものと思つていた使用人たちの心の隙間を見つけてはその形に思い悩む少女の変化は、夢の中とはいえ見ていてとても面映えて見えた。

「ビビキ、あなたは不思議なヒトね」

とある日。出会つてから一年は経過した頃である。

突然そう漏らした彼女に、私は首を傾げた。

私は他人からみれば確かに不可解な在り方だとは認識しているけれど、常に意識しているわけではない。

それに、こうして誰かに言われたのは初めてのこのなのでどうしても反応が鈍くなつてしまつた。

「ありがとう、といえばいいのかな。変だと思われる自覚はあるけど、初めて言われたし」

そう言つた私に彼女は少し瞬きして苦笑の形に唇を歪めた。

「お礼を言うことではないと、私でもわかるわ。でも、それがあなたなのよね」

「そう、なのかな？ うん。ソラウがそう感じたのなら、そうなんだろうね」

彼女はまだ心が未熟だからこそ、そのままの本質を掴んでいる。その内にこれは薄れてしまいそうだが、それもまた成長のひとつだろう。

そうそう、彼女の名前を呼び捨てにすることになつたのは結構前のことである。なんか、さん付けは違和感を感じるそうぞ。

きつと、変な言葉使いになつてしまつたのだろう。まともに他言語を話すのは彼女が初めてだから。

「そう、それで、昨日初めて婚約者になる予定の人と会つたの」

今まで屋敷のあそこのあれはどうで庭の花がここが綺麗に咲いていたとか父が時折指導してくれる魔術がどうか、という話をしていた彼女の家の中の人以外の初めての話題である。

彼女は優秀な、代を重ねた名家の魔術師の人間であるからして、その内に出てくる話だとは想像がついていた。そこに驚きは少ないも

の、彼女がどう感じたのか気になって訊ねる。

「どんな人だったの？」

そこには純粹な興味もあった。

ソラウは、ほっそりとして美しい指先を頬に当てて「そう、ね」と考え込んだ。

これが原作の通りであるのなら、その相手はロード・エルメロイその人だとは思うけれど。いや、年齢的にまだロードじゃない？ その辺りは調べようと思ってなかったというかそんな気にしてなかったけど。

結果はそう変わらないだろうからどうでもいいし。

「うちの家と同じく代を重ねた家系だからか、自信に満ち溢れていたわ。家を誇る気持ちがあるのは私も同じだけれど、彼は嫡子だからかそれが特に強いようだったわ。言葉の端々にそういうものが、滲み出ているようだった」

でも、と口ごもった彼女は言葉に表すのが難しいよう眉間に皺を寄せて唇を引き結ぶ。

暫くその様子で考え込んでいたソラウだったが、それらしい言葉を見つけたのかひとつ頷いて「例えるなら」と口を開いた。

「三日ほど前に見せてもらった、あのよくわからない狂人の夢のようなものを感じたわ」

「あーなるほど」

なるほど、狂人の夢はさておき、彼女に対して彼は一目惚れというのをしてしまったらしい。

確かに人形と見紛うほど整った彼女の造形に、最近は感情の色がこもってますます魅力的になっているのでその結果は納得のいくものだろう。子供の私が言うのも何ではあるが、それだけ少女は美しい。

年頃の男子など慣れてなければ魅了にころつと転げ落ちること間違いないね。私が男だったらきつとそうなる。

今まで男だった記憶はないから予想の範囲を越えないけれど。

「悪い人ではなかったんだよね？」

「それはそうね。そう感じたわ。お父様も自身の才能に溺れず研鑽を

重ねることのできる天才だと、とても誉めていたわ。彼、アーチボルト家でも特に才能が突出しているそうなの」

「現状は相手として不満はない、と」

「ええ、それは勿論。それにもし嫌だと感じてもお父様が決めた相手だし、私は嫌だとも言えないわ。……本当は少し、この年頃にある『恋』という物語のようなこともしてみたかったけれど」

困ったように微笑んでみせるソラウに、私は「そっか」と呟いてその顔を見つめる。

彼女は連綿と続く魔術師の家の子らしく、しかしその覇権争いのために魔術を習っている。兄が無事嫡子となれた故に他家に嫁ぎ、そして血を繋ぐために子を成すことを厭わないだろう。だからきつと、恋に憧れを抱いてしまうのだろうか。

その結末を思い起こして、苦いものを感じる。

まだ暫し先の未来ではあるけれど、彼女は聖杯戦争に参加する婚約者に付き添い、使い魔として召喚された英霊の魅了に抗うことなく受け入れて恋に燃える。その結末は、結局のところ結ばれるわけもなく、空しく散らされるだけ。

それは、こうして語り合うようになって感情を知り心を語る少女にはあまりに重い。

「ならば、ソラウ。その婚約者となった人に、恋はなくとも、愛を抱いてみよう？　これは私が強制できることではないけれど。でも、苦楽を共にするのならば、嫌だと思ったことも、良いと思ったことも伝えてみよう。その彼が、私が以前語った彼女ののような眼差しをしていたのならば、きつとソラウに伝えてくれるから。今度からソラウは、受け入れるだけじゃなくて自分の心を伝えてみて。私に語ってくれるようにさ」

ならば、少しくらい少女に手を貸すくらい、してもいいだろう。

結末が変わるとも、変えられるとも言えないけれど。ちよつとしたアドバイスなら、許されてもいいと思う。

変わらないのならば、それは世界の抑止力。変わるのならば、それは私の自己満足。ただそれだけのことだ。

「愛を？」

「うん。私も、大それたことは言えないけどね。でも、夫婦の間に義務しかないのならそれはとても息苦しいものだからね。それなら早い内から嫌だと思つたところを、自分の好みに変えるのも……ありだと私は思うよ」

彼女に勧めるのは自分好みじゃないなら好みになるように変えればいいじゃないということですよ。

「そういうのって、言わないと伝わらないし。ね？」

「……考えて、みるわ。確かにまだ出会つたばかりだし」

私の言葉に頷いて、ソラウは未だ誰かに見せたことはないであろう笑みをその美しい顔に花開かせた。

白く眩いその笑顔は、彼女を幼くさせる。

けれど成長した後のその笑顔の美しさは、きつと可憐な野バラではなく、手入れの行き届いた大輪のバラのようになることを想像させられた。

「何よりも私には、ヒビキという友人がいるのだもの。例え彼が駄目でも、あなたと話をするだけで私は幸せというものを感じているわ」
思わぬ言葉に、頬に熱が集まつてしまふけれど、嬉しさが込み上げてきて言葉に困つてしまった。

私の私欲で彼女の傍にいたというのに、それを捉えていてそう言うのだから。彼女は少し、私の想像とは違う方に成長してきている。

「あ、はは……ありがとう、ソラウ」

照れ笑いでその言葉を受け取つて頬をかく。

彼女の世界には、確かに暖かな空気が漂っているのがその言葉の証拠だろう。

夢の暖かさは、幸福を。冷たさは、敵意を抱いているものだから。

この私は彼女の夢の中しか殆ど入っていないけど、『私』は確かにそれを知っていたから。

だからここは、こんなにも居心地がいいのだ。

彼女が私を知つて、真正面から受け入れているから。

そして私を快きものと捉えているから。

暖かなこの夢を見てみたいと思った結果に囚われているのだから、まったく私は呆れたやつである。

これがまた治ることがないのだから、笑えてしまうのだけどね。

うん、まあそれでも、ソラウが幸せと言ってくれるのならそれでいいか。

何せ、年は離れているとはいえ私の初めての友人だからね。

第四話

冬の寒い日です。小学生となった私こと水谷響は、登下校を共にする子と別れて住宅街のひとつにある一戸建ての我が家に帰宅致しました。

明日は休日のため姉は仲の良い友人の家に泊まると言っていたので、私が帰ってきたのを見届けて戸締りだけ念押しし、早々に駆け出て行った。

とはいえ、行き先は五軒ほど先の幼馴染の家なのでそう急がなくても良かったらと思う。

いや、彼女の元気の良さは長所だとは思っていますが。

そう考える私に対し、私は母に似て穏やかな子だね、と近所のおば様は笑っているけれど。さて、どうなのでしょう。

兎も角、家で一人になった私は玄関にしつかり鍵をかけてから手洗いうがいを済ませて二階の私の部屋に戻りました。

少し前までは姉と一緒に部屋だったのですが、中学生の年頃はやはり自室がほしいもののように。

父が趣味の物を飾っていたのを母がてきぱきと片付け（飾っていたものは収納棚の中にしまわれた）、姉は部屋を勝ち取ったのでした。

二人だと少し手狭だった部屋も、一人になれば広いものである。

私用に使われた勉強机の横にランドセルをかけて、宿題を取り出す。

今の私の前はめんどくさがりだったが、まあ流石にこの年頃のものがこなせなくてどうするという、少しの見栄もあつたりなかったりする。

私からすればひどく簡単な計算問題を終えて、ふと喉の渴きを覚える。

そうならば何か飲み物を飲もうかと考えて一階に下り、リビングに入る。

「？」

しかしそこには、見たことのない男の人が座っていた。

いや、見たことはある。しかし会ったことはない。

私は識っている。けれど知り合いではない。その存在は。

開かれたドアに気がついて、「やあ」とやけに親しげに笑みさえ浮かべられた。

逃げ出そうと思わず足を一步下げると、彼はにこにことしつつも立ち上がり、大仰な仕種で無害だよと言わんばかりのアピールをする。

「ごめんごめん、驚かせるつもりはなかったんだ！」

白々しい笑顔は曇りなく、彼を知らない人間から見れば毒気を抜かれるものはあつただろう。

しかし流石に不法侵入者に毒気を抜かれるもなにもあつたものじゃない。

いくら小学生といえども、見知らぬ他人が家の中にいるなんて、警戒して当然である。

「あなた誰ですか。警察、呼びますよ？」

部屋に入る前に気づいていれば玄関脇にある電話を……いや、そもそも家を出て近所のおば様方に助けを求めたのに。

こういうときは働かない勘に、少し己自身を罵倒して距離を保つ。

じりじりと近づく男に、私もまた背中は見せずに玄関に後ろ向きで進む。

僅かに無言の合間に、リビングで男の見ていたテレビのニュースが、聞こえてきていた。

『本日で二軒目、同じ手口で惨殺された家が発見されました。また、現場には前回と同様の何かの凶のようなものが描かれているとのこと、警察は同一犯と見て捜査を進める方針だと公表しました』

こくり、と唾を飲み込んで、焦りを押し殺す。

「あー、今流れてるニュース。ほんとに犯人、捕まると思う？ 君は」

「……、私が通報すればすぐだと思います」

「あはは、やっぱバレちゃう？ いやーこれでも興奮は抑えてたつもりなんだけどね！」

にこにことしつつ、とうとう玄関に背中を張り付かせた私に手を伸ばした男は、恋でもしてるように頬を紅潮させていた。

子供のか弱い力で青年の力に敵うはずもなく、あっさりと掴まってしまうた私を、彼はうつとりとした目で見下ろす。

「実家の倉におんぼろの本があつてさ、そこに悪魔を喚ぶための魔方陣？　みたいなのがあつてさー、それが冬木なら喚べるかもつてあつてね！　来てすぐに目についた若い夫婦の家に行つて、そんで試してみただけど、やあつぱダメでさ。何か間違つてたかなーつて一昨日もやってみただよね。あの家は三人子供がいて、でも両親は年食つてて好みから外れてただけど。でも子供が良い反応してさあ！　親を目の前で殺して、血を集めて魔方陣描いてみたけど、どーもまた上手くいかない！　んで、子供だけでもういっちょやってみただけどさ、それも上手くいかなかったよねえ。何が悪かつたんだろうね？　んで、今日はたまたま君が見えて、なんていうかこう、びびつときたんだよ！　運命つてやつ?!」

私の腕をつかんでリビングに引つ張り、棚に置いていたガムテープを取り出した男は楽しそうにそんなことを言いながら私を拘束していく。

しかし、どうやって入ったのかはまったくの謎なのだけど、何でしようか、ピッキングでも覚えてるのですかね？　この人は。

「あ、で、オレが誰かだっけ？　オレは雨生龍之介！　巷じゃよく、殺人鬼だのなんだの、必死こいて探されてるんだけどねー。でも警察も無能なのか、それともオレが上手く隠れてるのか!」

愉しそうに笑いながら私をガムテープでぐるぐる巻きにしてソファに転がせた彼は、私の姿をまじまじと眺める。

そう。彼こそは倫理観の破綻した殺人鬼、雨生龍之介その人である。

何の因果か私に目をつけたらしい彼はこうして家に浸入し、舌舐めずりをしている。

まるで蛇が獲物を品定めしているような目付きだ。

こうなれば私も一応、殺される前に最後の抵抗をする覚悟を決めた。

だから今は暴れず、大人しくその行動を見つつそのタイミングを計

る。

「やっぱさー、もう少し試してみたいってのが子供心みたいな！ そんな感じでね。あ、でも君可愛いしすぐに殺すのつてもつたないなあ。どうせなら呼び出した悪魔にぐっちやぐちやに壊されるのも見てみたいし！ ……あ、そうだ、まだ血以外って試したことなかったし、試してみようかな。えーと、血の代用っていったら何がいいかな」

一人で盛り上がる雨生龍之介は、魔方陣を描くのに代用するつもりで勝手に収納棚を開けていく。

この男、なんて遠慮のなさなんだ、と思ったがたぶん帰ってきた家人をも殺すから関係ないと思ってるのだろう。

そうなたら共働きの両親が同じ時間に帰ってこないのが特に悔やまれる。

同時刻ならどちらかが囹になれば助けを呼べるものを……と思っただけどその場合私はすでに事切れてるはずだ。けれどそれは少し嫌だ。

「仕方ないし、クレヨンにでもしとくかな」

姉と私の分二つの箱を片手にした雨生龍之介は、テーブルを動かして絨毯を剥ぐとフローリングに直接描き始めた。

困った展開だ、と思いつつ集中して魔術回路のスイッチをいれる。

現実世界で魔術を使うのは初めてのことで、上手くいくかはわからない。

どちらかといえれば私は呪術を使うようだけど、私的にそう大して結果は変わらないのでどちらでもいい。

眠っている間に起動をさせることはあるとはいえ、ぎこちない感覚にもう少し真面目にオンオフの練習はしておけば良かったと後悔しつつどこを触れられても良いように全身に信号を発する。

本当なら、離れていてもできるのが一番いいのですけどね。今の私にはないものねだりです。

「えーと、この子はここをよくつてつと」

テーブルに放置していたらしい古文書を片手に、描いた魔方陣の横

に立って彼は棒読みで尚且つところどころ間違えながら召喚の呪文を唱え始める。

これは触れられるのはこれが終わってからかもしれない。が、まあ警戒はそのまま構わないだろう。

どちらにしてもここで成功しても、失敗しても私が殺されればそこまでの話だし。

そうなれば物語に支障は殆どないとはいえ、流石に私も死んでしまいたいわけではないです。絶対彼に殺されるのは痛いだろうし。

「つて、やっぱダメだよね。まあ仕方ないか」

呪文を終えても何も起こらないそれに、彼はあっけからんと諦めて私ににこやかな笑顔を向けた。

外面はいいだけに、邪気のない狂喜の笑みは子供のような純粹さを感じさせる。

それはひどくアンバランスさを感じさせもするが、嫌に彼はそれが似合っていた。

「お待ちせしてごめんね。じゃあこれから、楽しい愉しい、パーティーをしようか」

どこから取り出したのか鋭く磨かれたメスを持った雨生龍之介は横たえさせていた私の足を掴んでその手を振るう。

私の魔術は、その効果を直ぐに発揮せず、足の筋を切られてから現れた。

「これで、何かあっても逃げられ、な……？ 何、目が回っ」

驚いて瞬く間に、私の術は彼を蝕みそうしてその体は傾いだ。

ドサツと音を立てて倒れながらもうめき声をあげない様子にちやんと術が効いたのだと安堵して鼻で深く息をする。……口はガムテープで塞がってるから仕方ないのです。

ちなみに彼に施したのは、触れたら体に送られる信号にたいして動きを止めることと、脳に向けて意識を失うという私の命令を繋いだのだ。

正直上手くいくかは時の運もあったのだけど、成功して良かったです。未熟で拙いのは再認識したけど。

でもこの後どうしようかと少し思い悩む。倒れても、拘束されてるのではね。動くに動けないというか。

どうにかもそもそと芋虫のように動くが、ソファから転げ落ちて彼の頭に足をぶつけたただけだ。……流石にその程度じゃ死なないとは思う。

でも術がしつかり効いているようで、何よりです。

「むぐぐっ」

誰か助けてほしい。せめてこの拘束を解いてくれれば……。

「んん?!」

いたい！ 手の甲が何か痛い！ あと熱い？

何ですかもう！ 私悪いことしてないし、むしろ助けてほしいんですけど。

痛いのはノーセンキューですよ勿論。

前世の事故だって、痛みを覚えてないからあんまり気にしてないだけなんです。

「貴様が俺を喚んだ物好きなマスターか？ ……ふむ、縛られるのが趣味とは、中々なマスターのようだな」

痛みが治まって開けた視界に見えたのは、室内なのにブーツ。落ちてきたのはやけに確りとした男の声。しかして顔をあげた先には子供の姿。その手には分厚い本を掲げ、その表情は幼い中に、大人の持つ理性を感じさせた。

とりあえず一言。

「んんぐ、^違ふぐ……」

こんなのが趣味な小学生とか嫌ですよまったく。

だからこら、何か書き出すんじゃないですよ。何でもいいからこの拘束を解いてください。

「フン、全サーヴァント中一、二を争ってもいいほど非力なサーヴァントに助けを求めるとはな。マスター、お前見る目がないんじゃないか？」

『何でもいいので早くガムテープといってください、お兄さん』

「……………」

いつの間にか繋がっていた目の前の少年との魔力のホットラインに、念を送るように思念を伝えると驚いたような顔をされた。

しかし、とりあえずはガムテープをとってくれるようで傍らに足をつけて、拘束を解いてくれた。何故か口は最後にはがされて終わったが。

とりあえず彼の事はさておき、念のため雨生龍之介の頭に彼の本を拝借して少しばかり強めの力で殴っておいて、警察と両親に電話する。

少年は「暴力女か」とか、震える声音で電話をしていた私を「その年で演技派とは将来は何になるつもりだ」とか下らない茶々を入れてきた。

まったくもって失礼な話だ。

でもとりあえず助けてくれたのもう少し働いてもらうために外に出てもらい、庭から窓まで歩いてもらった。

：何故って、非力な小学生である私が一人で成人男性を倒せるわけがないでしょう？

窓は開いていたと工作して、近所の友達だと思っけど誰かが助けてくれたのだと言いつつします。

どうせ私一人しかいなかったんだから信じるも信じないも関係ありませんから。納得してくれたならそれで結構。

「ええと、一先ず警察が来る前に自己紹介しとく？」

「ふむ、能天気のように見えるが、それに反して冷静なようだな。お前、変な子供だな」

「はいはい、お兄さんも十分子供に見えますよ。私は水谷響。一応、助けてくれてありがとう」

「俺はハンス・C・アンデルセン。此度の聖杯戦争は、というか適正があるのもそれだけだが、キャスターのクラスで現界したサーヴァントだ。所詮三流最弱の外れくじだがな！」

はっと鼻で嘲笑った少年もといアンデルセンには苦笑を返しておきます。

アンデルセンの名前が示す通り、童話作家の彼は、聖杯戦争という

のに相応しくないほど非力な魔術師でさえない存在なのだから、外れくじといわれればまあそうだね、としか言えない。

「とりあえずもう少し話したいところだけど、詳しいことはまた改めて、でいいかな、アンデルセン。上の右手が私の部屋だから待っていてくれていいよ」

「そうだな。だがしかし、お前の話がどう受け止められるのか気になるので俺はここに残ろう。霊体化して待っている。事が終わったら先ほどのように念話でいいから話しかけてこい」

「うん。それではまた後で」

何かに気づいたのか、少しばかり目を眇めたアンデルセンは、光をまとつてふとその姿を消す。

けれど姿が消えただけでそこにいるのはつながった魔力の流れからわかる。

とりあえずアンデルセンについては後回しにし、雨生龍之介の腕と足を自身にされたようにガムテープでぐるぐる巻きにしていたら、遠くからサイレンの音が聞こえてきた。

さて、ここからがある意味佳境ですね。

お父さんお母さん、早く帰って来てくれると嬉しいです。後、流石に切られた足が痛くなってきたので、アドレナリンが切れてきた証拠だと思います。

一応、意識としては皮膚が繋がっているように接続していると、認識。

たぶん、よほどのことがない限りひとまず動かすのに問題はないはずです。だから後は表面の傷がどれくらいの程度かが問題ですかね。

あ、でも何か面白い発見があるかもなので、彼の持っていた古文書は軽くコピー？ みたいな感じでパラパラと眺めて私の精神世界にデータを送りつけておきました。

最近、変な力の使い方がないので、やっぱり魔術師も呪術師もなれないと思いました、まる。

第五話

なんとか凶刃から逃れ、サーヴァントを喚んでしまった一般人な水谷響です。

雨生龍之介が逮捕され、事情聴取の前に病院に連れられました。仕方ないですよ。

一応筋を切られたとはいえ、傷自体は浅めで動くのに支障はないとこのことで治療したからには動かすのは大丈夫のようです。ただ、暫くは急に動かすのはダメだと言われたので、生活がし辛くなるのは嫌だと思えます。

まあ無理矢理繋げた状態であるのを見抜かれなかったのは良かったような、そうでないような複雑なところではありますが。

簡単な事情聴取はされたけど、とりあえずはまだ子供で、切られたショックで取り乱していて正確な状況把握はできてないと断じられ、付き添っていた父と母と共に家に帰宅です。時刻は事件当日の午後八時です。

帰ってきたと聞いたのか、姉が幼馴染のお母さんに連れられて帰ってきて、改めて状況説明です。

わたわたとした様子で説明する私に、姉は涙目でしきりに謝り倒してくるので逆に私が泣きたい気分だ。

父も母も、怖かっただろうよく我慢したと私を抱き締めてきたので、とりあえず記録の中から大泣きしていたのを引っ張り出して泣きました。何だか違う意味で辛いです。

泣いているのは騙しているとは思わないし、家族の不安を取り除くことに必要なことと思っているのでそれはいいのです。

だけど、精神が、社会人だった前世の記憶が「マジ泣きとか精神年齢考えろ」と突っついてくるような気持ちなんですよ。辛い。泣くのとって頭痛くなるし瞼は腫れるし、嫌なんですよ。精神衛生上はスッキリすることもあるんですけど。

「今日はお母さんとお風呂に入って寝ましようね」

優しい母の提案に断ることはできず、流されるままにお風呂に入

り、布団に入りました。というか入れられた。

一応アンデルセンには話は明日でよろしくと念話しておき、早々に就寝です。

神社の方もけっこう長く続いていたからか血を辛うじて劣らぬようにつないでいたのか、魔力の質も回路も決して悪くはないので、彼の存在も安定している様子なのでいいだろう、うん。

とりあえず今日は疲れました。

疲れすぎて翌日目が覚めたのはなんと午前9時半。普段は7時起きなのでかなり遅い。

父は本日も仕事で、母はお休み。姉は母から無事を伝える意味も込めて改めて幼馴染み宅へ遊びに行かせ、姉もそれもそうだと思っただけ。姉の幼馴染のお姉さんには可愛がってもらっているのでは非とも安心させてほしいと私も思う。

父は遅い出勤時間だったのでギリギリまで家にいたけど、早めに帰ってくるよと出る際に言っただけで行った。

家族仲がいいことは何よりなので、とりあえず私はにこにこ顔で二人を送り出しておきました。

母は昨日のことを思い出させるようなことは口にせず、ホットケーキを焼いて、部屋で食べても良いわよと笑った。

視線がフローリングに向かっていたので、部屋にいる間に魔方陣を綺麗にするつもりなのでしょう。

反論もするつもりはなく、むしろその言葉に甘えて部屋に戻って机にホットケーキを置く。

「アンデルセン、出てきていいよ?」

背後に振り返って声をかければ、あふと大きく欠伸をした少年が現れる。

改めて彼を見れば、あまり手はいれないのかはねている水色の髪に水色の瞳。衣装も黒と青系統と、統一された感じはする。

記憶に残っていたものを引っ張り出せば、うん。間違いなくCCCとFGOに出演しているアンデルセンその人である。

「やっこの呼びだしか。少し母親に甘えすぎなんじゃないのか、お前。

今何歳だ」

「七歳だよ。だからアンデルセンをお兄さんって言っても、不思議じゃない年齢でしょ？ あ、ホットケーキ半分食べる？」

「ああそれは悪くない。悪くはないが、やはり貴様は子供らしい無邪気さが足りん。かといって女らしいものも感じられんということとは、よもや男の娘とかいう属性じゃないだろうな！ やめろやめろ、男が女らしい属性を持ったところでもてるわけじゃないぞ」

何とも言えない言葉に、ホットケーキをナイフで切り分ける手を止める。

この見た目儂さを感じさせもする少年、声で少年っぽさを裏切っておきながら更に皮肉やら刺やら毒がありまくりだ。

いや、まあでも無邪気でも女らしさがあるわけでもないのは自覚しています。

「生物学上も戸籍上も女で間違いはないんだけどね。あとたぶん、男の娘つてもてるためにやってる訳じゃないと思う。というか判つてわざと言っていますよね？ ……まあそれはいいとして、昨日の続きを話そ」

やや強引に続きそうな話を区切る。

それもそうかとあっさり引いて頷いたアンデルセンは、勝手知ったる何とやら、とばかりにベッドの縁に腰かけて足と腕を組んだ。

それが何故か彼らしいと感じつつ、フォークにさしたホットケーキを口にほうる。

「えーと、まずはサーヴァントってやつについて？ 聖杯戦争からでもいいけど」

「……聖杯戦争とは願いを叶える万能の願望器を手に入れるために魔術師たちが争うことだ。サーヴァントは争うために呼び出される下僕だな。まあ駒ともいうが、人間よりは強い力を持つるのが殆どだ。俺は毛ほども役に立たん童話作家だがな」

ふん、とそこで胸を張られても困るのですけど。

いやまあ記憶にある媒体上の彼もこんな感じだったような覚えはあるけども。

たぶん相性での召喚だろうに、何故彼だったのかはよくわからないですね。

それから数分、もしくは数十分ほどアンデルセンによる聖杯戦争談義は続く。魔術師のことやら聖杯を求めるマスターやら何やら罵りも混じりつつの話は体感では一時間弱過ぎたのではないかと思うくらい彼は饒舌だった。

どちらかと言えば聞き役に徹する方が好きな私としては、長いなと思うだけで特には気にはならないです。

もしかしたら、静聴する私に気をよくしたのもあって語りに熱が入ったのかもしれない。

「それで、水谷響。お前は何か望みがあって俺を喚んだのか？」

「んー、別に望みとかはないけど。あの状況だと通報するにできなかったから誰でもいいから助けてほしかったただけだし。はい、残りの一枚どうぞ」

話の合間に二枚と小さいのが一枚あったホットケーキを食べて一枚残したのを渡す。

それに変な顔をしたアンデルセンは、少しだけ私の顔を見てそれからお皿を受け取った。

食べるときに一緒に切ってしまったから、後はもうフォークをさせばいい状態だ。まあフォークは私が使ったもので悪いけど。

「あ、でもアンデルセンは何か望みとかあるの？」

「……俺にあるわけがなからう。俺が望むのは早に締切が終わるのと、締切の後の解放感を味わうことだからな！ さて、しかしお前の根底に何が根付いているのか興味が出てきた。その虚ろいだ中身にもな。望みがないというのならば早々にリタイアしろ、と言いたいところだったが。何、全てのサーヴァントがぶつかり合うまで多少の猶予はあるだろう。ならばゆっくりと観察させてもらうことにする」

「ふーん、そっか。まあ何でもいいけれど。とりあえずこれからよろしくってことでいいんだね？」

「まあ、そうともいうな」

頷いたアンデルセンに、手を差し出して「改めてよろしく」と笑う。

彼は少し面倒くさそうに手を伸ばして、重ねた。

「ふん。俺によろしくするのはお前くらいかも知れんなマスター」

「そんなことないと思うけどなあ。いつかそういう人が現れても不思議じゃないよ。人間いろんな人がいるし」

「確かに、そうだがな。そんな奇特な人間ほど俺を喚ばないものだ」

「ふふ、じゃあ何時喚ばれるか楽しみにしていたらいいと思うな。ああでも、私は明日からも学校だから、好きに過ごしてくれていいよ。ついてきてくれてもいいけど、家にいるなら物を壊されなかつたらそれでいいし」

わかつたと頷いたので、後は特に何も考えず父親の書棚から拝借してきた漫画を開く。

趣味のものではないからか特別面白いとか楽しいとかは思わないけど、暇を潰せるものというのは大事だ。

別に友達と呼べる人が少ないというわけではないですよ、勿論。

ただ毎日のように遊ぶのは気力がもたないだけだし、それに昨日の怪我もあるからね。今日は安静にしますとも。

まあ母が学校に行くのに送り迎えをしてくれるそうだけど。しょうがないことだよな、それは。念のために数日は、と松葉杖も持たされてしまったし。

「馳走になった。皿はどうしておけばいい、マスター？」

「んー？　じゃあ受けとつとく」

マスターという呼び方に少しばかり刺を感じさせたが、特に気にせず近づいてきた彼からお皿を受けとる。

じゃあ一階において渡してくるか、と立ち上がると足が痛みを訴えてきた。ずきずきとするけれど、歩ける程度に繋がっているから、動かすことに問題はない。

うん、この程度の痛みならば大丈夫そうだ。痛いのは嫌いなものかわりはないですけどね、負ってしまったものは仕方ないですから。これ以上の痛みはご免被りたいものですが。

「あら、もう食べたのね。美味しかった？」

「うん。美味しかったよ。ご馳走さまでした」

掃除機をかけていた母が手を止めて笑う。ちらりと見えた床はもう魔方阵が消えていた。

血のあとも、絨毯で覆われて見えないし。これなら幼いトラウマを刺激はしないだろう。うん。

「宿題はもう終わったのかしら」

「うん」

「あら、いい子ね。ふふ、今日は響が食べたいものを作ろうかしら。何が食べたい？」

「えー、じゃあオムライスがいいな！」

にこにこ笑顔で好物のリクエストをしておきます。母もまた笑顔を返してわかったと頷いてくれたのでそれでいいかと。

材料の買い出しを一緒に行きましようと言われたので私もまた領きを返します。母はほつとしてくれたので、良かったと思うだけ。

「何時買いにいくの？」

「お掃除が終わったらね。それまでお部屋で待っていられるかしら」

「もちろん！ じゃあ終わったら呼んでね、お母さん」

「ええ」と笑った母に同じように笑顔を返して、ててと部屋に駆け足気味に戻る。たぶん、こういうところは父や姉に似ていると笑われるのだろうけど。

部屋に戻った私を出迎えたのは、なにかを書いているアンデルセンだ。

彼は顔を上げず「戻ったか」と呟いた。

「響よ。お前は自分が魔術師ではないと言ったが、その傷を繋いでいるのはどういうことだ？」

「えつと……う？ これは感覚的にこうしとけば平気かなって、感じでやってるんだけど。何かおかしかった？」

今までインストールした記憶の中にも魔術師や呪術師であったものはない。だから自分の中のそれは感覚的に扱うことが殆どだったので、今も特に気にしたことはなかった。

アンデルセンは妙な生き物を見たともいうような目で私を見てください。

何、感覚で動くのは動物だけ？ いや人間も動物なのに変わりはないし。残念なガキとか言うのは止めてください。

「つくづくおかしな女だな、貴様は」

「ほんと失礼な。アンデルセンってばデリカシーに欠けるって言われなかった？」

「さてな。お生憎と俺は女に縁遠い生涯をすごしたものでな」

「ん、でもアンデルセンって、死に際に初恋の人の手紙を握りしめていたんじゃないっけ」

「よく知っていたなと言いたところだが、お前も人のことを言えないくらい遠慮というものをしない女だな！そういう繊細な話はおつと絹にくるむように柔らかく傷つけることなくするものだぞー」

「うん、それはそのままアンデルセンにも言えることだからね」

暫くそんな感じでやや気安いやりとりを交わしていると、何故か時間かけっこう経っていた。不思議だ。

母の呼び声に従って行こうと思ひ、アンデルセンを見れば早く行けだなんてしつしと追い払うように手を振られた。ここは私の部屋なのだが。

「何かあれば令呪でよべばいい。毛ほども役に立たんがな」

「うん、わかった」

人のベッドを占領していたアンデルセンが起き上がり霊体化したのを尻目に、部屋を出る。

母の「誰かと話をしていた？」という問いに、アンデルセンって境界とか張れるのかな、キャスターのクラスだしと思いつつ気のせいだとゴリ押しておきました。

はたして、これから何日、この生活を送ることができるのか。

原作などあてになることはない記憶の中の未来に、意味のない期待を込めて母の手を握ります。

第六話

アンデルセン先生による聖杯知識の元の指導によって使い魔を作る程度はできるようになりました水谷響です。

昨日も元気に学校に通いました。本日は休日です。

彼を召喚するに至った際の怪我により、片手に松葉杖のある生活になってますがそれでも日常は変わりません。そんな松葉杖生活は一週間で終わりではありませんが。

同級生たちの心ない好奇心に精神的に殺されかけたりしましたが、未来の主人公君になるだろう少年に助けてもらったくらいで特に代わり映えのないものです。

子供の自分としてはこれが当然なのですが、人嫌いなアンデルセンは私についてきてはあれやこれやとぶつくさ言っています。

他の人に聞かれないのならそれでいいとは思いますが、聞かされる私としてはたまには加減をして黙ってくれと思うこともしばしばです。つらい。

「さて、どうやら誘うように彷徨っているサーヴァントがいるようだ。響、練習した通りあれを飛ばしてみろ」

「はい」

アンデルセン先生の指示した通り、作った使い魔を出します。見た目は彼の出演作品な目のような形のエネミーですが。

道具作成のスキルによって作られたものです。私は魔力供給とどいう形がいいかという提案程度しかしてません。

作る際にある程度私が外郭を魔力で構成したもので、私が作ったと言っても半分くらい間違いはないですが。

ちなみに人には見えづらいよう魔術的な加工はしているとのことだ。

ここ暫くはアンデルセンが教えてくれて張った結界の中だけ飛ばしていたけれど、今日は遠い距離を飛ばすことになります。ちよつと緊張するね！

「さっさと目を閉じて俺にもイメージを共有しろ、馬鹿者」

「馬鹿は失礼だって何度言えば分かるのさ。ひどい」

「ひどいのはお前の口調だろう」

そんな感じに、仲は悪くない私たちです。

アンデルセンは割りりと馬鹿馬鹿と言いつつも面倒を見てくるので、一回男のツンデレはいらないという話で口論になりましたけど。ええ、関係ない話でしたね。

目を閉じて見えたのは、闇の帳の中にある倉庫街。

黒い髪にチャーミングな魅了の気配のある泣き黒子な美男子と、金髪で凛々しい騎士の少女がそれぞれ槍と見えなけれど剣らしきものを構えています。

『ほう、ランサーとセイバーか。あれが三騎士と呼ばれるクラスだぞ。そら見ろ、素人が見たところで到底よくわからん剣戟をかわしていやがる！ 出会ったら死んでしまうな！』

私は集中のために黙っているが、アンデルセンが実況者のように野次を飛ばすので、ついつい黙れという意味合いを込めて現実で叩いてしまった。

余計に煩くなってしまったのを残念に思いつつ、倉庫街を上空から俯瞰します。

そこで気がついたのは、仮面を被ったへんな黒尽くしと、ライフルかな。銃を構えてるおじさんとお姉さん。

後はランサーのマスターさんの姿である。

セイバーのマスターさんは銀髪の赤色の瞳な美人さんで、使い魔に撮影機能がないのが残念だと思う。

美人な人は見ているだけで目の保養になりますからね。アンデルセンもその点見た目だけは悪くないんだけど性格が台無しなので残念です。

そんな感じで見えますと、何故か宙を飛ぶ牛が牽いてる戦車がランサーとセイバーの勝負に乱入しました。

すごい大きな男の人で、その横のマスターさんらしき小柄な人との対比がすごくお腹にきます。

『ふん、輝く顔のデイルムツドに、騎士の王と名高いアーサー王、そし

て征服王イスカンドルか！ 此度の聖杯戦争は中々な人物ばかり集まっているとみた。もちろん、使えない三流サーヴァントの俺との対比も含めてな！』

『だからそれ威張ることじゃないよ』

我慢できずツツコミをしてしまいつつ、戦況を見守ります。

ライダーもとい征服王イスカンドルが発破をかけてくるけど、申し訳ないことに私たちキャスター陣営はこの通り非力で脆弱な二人組なので。

ちなみにどうせもう寝るだけだから、ベッドに横になっている私たちです。アンデルセンはベッドの下で私から奪った毛布にもふつと包まりヒーターの前に陣取っていたりする。

この人私に対して遠慮も容赦もしないんですよ？ ひどいよね。手を伸ばせば届くのでツツコミをする位置としてはいいですけど。

ライダーの言葉に釣り上げられて、金ぴかの眩しい青年が現れた。王の中の王とか何とか言っている。慢心王とかA.U.Oとかどこぞでは言われてる人物でもありますね、そういえば。

ちらりと使い魔をその赤い双眸に捉えられましたが、様子をよく見る為にちょうど彼より下の位置に浮いていたからかすぐに視線を外されました。一応見逃してもらえるようで一安心ですね。でもちよつと心臓に悪かったです。

そんなちよつと混沌とした空間に真っ黒い鎧が現れて、咆哮をあげた。わかる範囲の残りのクラスから考えてもバーサーカーです。

いやほんとに、私たちは勝てる見込みもないですね！ 戦うつもりもないから考えるまでもないけど。

『おお、この金の偉容に傲岸不遜。そして王の中の王とききた。こいつの真名は予想も容易だな。が、何だあのバーサーカー。まったくもって理解できんぞ！ そも、見えん！』

『凄い戦闘だねえ。凄いいしかわからないけど。アンデルセン、どの人とぶつかってもすぐ死んじやいそうだね。まあ戦うまでもなく降伏するだろうけど』

『それはお前にも言えるだろうマスター。おっと、解説してくれると

は中々いいやつじゃないか征服王』

戦闘については門外漢なアンデルセンは、軽く笑いつつバーサーカーの動きについて語ったライダーにうんうんと頷いている様子です。

確かにあのよくわからない攻防を解説してくれるのはありがたい限りですね。

ところで、この映像もう持ちそうにないけど大丈夫？

『しがない三流サーヴァントとマスターが作ったものだからな。見破られて可笑しくないし、壊されなかつただけ有難い話だったな』

『デスヨネー』

と言っていると、映像がぶつぶつと途切れてくる。これはサーヴァント同士のぶつかり合いで起きる魔力波に耐えきれなかつたのだろう。そろそろ使い魔の限界が訪れている証左です。

仕方ないな、と話しているとバーサーカーがセイバーに襲いかかっていく。

かなり途切れ途切れながら見える映像を繋ぎ合わせて状況を把握していると、バーサーカーにランサーが協力して戦おうと……と、え？

『バーサーカーがはねられた……?!』

『ああ、見事にぶつ飛んだな』

ライダーによって撥ね飛ばされたバーサーカーはそのまま霊体化してしまった。

そこまでで映像は完全に途切れてしまったので、呆氣にとられつつも使い魔を自壊させます。いやぁライダーは中々破天荒そうだというのが最終的な印象になりました。

自壊させたのは流石に魔力の痕跡を追って来られないとは限らないので、念のためというやつだ。進んで殺されに行きたい訳でもないし。

それにはアンデルセンも同意を示してくれたので良かった。そこだけは意見合うんだね、私たち。

「さて、寝るとするか」

「そうだね。おやすみ」

「ああ」

今日一番の出来事も見えたことだし、さっさと寝ることにしました。

眠気も限界だし。子供に夜更かしは厳禁ですよ。

まあ私は体が本格的に眠りに落ちても、精神はその半分の時間は活動してるのだけど。

レム睡眠とノンレム睡眠を自分でコントロールしている状態に近いのかな。

何年も見続けた白い空間で目を開き、特に何かを意識するでもなく手元のキーボードを操作する。

毎日一応自己状態の確認をすることを自身に課しているので、指が覚えている通り、見慣れた画面が表れた。

普段と違うのは、先日の怪我の状態が出ていることだろう。ほぼ無意識に魔術を行使しているので、目に見える形でわかるのはかなり気も楽だ。それに、けっこう回復も進んでいるように思える。

問題もそうなさそうだったので、目を閉じてこの冬木に来ていると言っていた私の初めての友人と繋がるか試してみることにする。

「……、ヒビキ、来たのね」

数分か数十分かくらい経った頃、普段より狭い彼女の寝室に座っていた。

声をかけられて振り返れば、出会った時よりもずっと成長して魅惑的な肉付きになった女性が夢では見慣れたドレス姿で立っていた。

夢の中での成長は、つまり精神の成熟を指し示しています。

「ソラウ、どうしたの？ 疲れた顔してるよ」

夢だと言うのに疲労の色濃い顔に、心配してしまうのも友人として当然だろう。

彼女は柔らかなく微笑みを浮かべて、私に近づいてきた。

そして、私の頭を撫でて「ありがとう」と囁いた。

「ヒビキこそ、何だか……揺らぎ、みたいなのがあるわね。どうかした

の？」

「んー……あつたといえばあつたよ」

そして、彼女に私がサーヴァントを召喚したこと、そこに至った過程、サーヴァントの情報を話せば彼女はとても複雑そうな顔をした。

まあ無理もない。彼女は婚約者と共に参加者として冬木に来ているのだから。

「ヒビキ、あまり外を出歩いてはだめよ。あなたはまだ、ほんの7歳の子供なのだし。キャスターも聖杯も欲していないのなら、引きこもっているのも一手よ」

「うん、心配してくれてありがとう。でも、あんまり学校を休みたくなーいし……ごめん、極力早く帰ります、ハイ」

ギツと令嬢にあるまじき視線を向けられて思わず背筋を伸ばしてしまいます。彼女が本気で怒ったら敵いませんから。

「うー……でも、ソラウも気を付けてね。魔術師殺しだっけ？が関係者にいるってソラウ自身がいつてたし、婚約者さんに巻き込まれて危ない目に合わないでね？ ソラウが私を心配してくれるように、私もソラウが心配なんだから！」

「……ええ、わかってるわ。ありがとう、ヒビキ」

私がかんで言えば、ソラウははにかみ笑う。

その笑顔は少女の彼女の彼女を残していて、成熟した肉体とのギャップに、何とか萌えますね！ ええ。

非常に眼福でございますとも。

「婚約者さんとランサーの関係はどう？ 今日様子見てたけど、あんまり上手く噛み合っていないようにみえたけど」

「あら、童話作家とはいえ、多少は道具作成もできたのね。……いえ、それは今の話に関係はなかったわね、ごめんなさい。……確かに、ヒビキのいう通り噛み合っていないわ」

はあ、と物憂げにため息をつく姿も様になっているのだから美人さんは本当にお得である。

いやそれも本題とは全く関与のない話だけど。

「もういつそ、ランサーの魅了に屈して気も楽になりたいくらいよ。」

しないけれど」

「あはは、ソラウが言うのと冗談に思えないからこわいなあ。でもそうなるとますます関係が拗れちゃうよ?」

「そうよね、それが困りどころなのよね」

悩む様子のソラウに、私も腕を組んで少し考えてみる。

婚約者さんは勝てる手を打っていきたいと考えるタイプなのに、喚んだサーヴァントは真つ当な戦士、いや騎士ときた。戦士や騎士といわず、武人というのは腕を競い凌ぎを削ることに生き甲斐を見いだしているものだとは認識していたりする。

見た限りだと彼もそういうタイプのようなだから、最終的な目的が一緒でも、そこに至る過程に不和が生じるのも無理はない話だ。

「うーん……たぶん魔術師と武人って、考えてることがまったく同じ方向を向いてないから、だから合わないんだと思うな。魔術師同士なら、最後の目的は一緒なのは分かるけど、武人はその最後の目的は一緒だと限らないでしょう? もしかしたら目的といわず聖杯戦争って意味さえ違うのかもしれないけど。たぶん、そういうことだと思うの」

「……成る程。確かに聖杯を手に入れるという目的は一致しても、それに望む願いは一緒のわけがないわよね。それこそ、キャスターのクラスでない限り」

「たぶんね。うちのキャスターはそのくくりからはずれてるけど、たぶん始めからそっちを喚ぶつもりだったら事態はまた違っただろうねー」

原作のことも思い出しはするが、所詮ずれてしまったどこかの世界での話だ。今言ったことも、そのもしもに含まれたどこかであるかもしれない可能性に過ぎない。

ソラウはそれに同意を示して、ふと窓の外を見た。

「そろそろ、初戦を終えたケイネスが帰ってくる頃かしら。ヒビキ……また、夢で会いましょう」

名残惜しいという表情を浮かべてくれる彼女に、思わず笑みが浮かんでしまう。これは、嬉しいから出てしまうものだ。

「うん。いつてらっしやい、ソラウ。その内現実で会えれば嬉しいな」
「そう、ね。ふふ、そう言ってくれると嬉しいわ」

柔らかな肢体が、私を包み込んだ。

そう思った次にはもう、僅かに感じた温もりは消えていた。

白い空間に戻った私は、繋がらない人を除く参加者たちの思考を夢から繋ぎ合わせていく。

その結果を集めきるよりも先に、私は深い眠りの淵へと落ちていくけれど。

まあ大丈夫。私の精神は眠るけれど、無意識の内の自分がその操作をしているから。

恐怖することはない。恐怖したことはない。何故ならそれは、すべて私の一部でしかないから。

前世の記憶を無意識でインストールするくらい、私の一部は勝手にしかし自己を一番理解しているから、それでいいと思います。

考えることを放棄したわけでも、するわけでもないけど。

もしかしたらその思考さえ、自分自身に塗り替えられているのかもしれないですが。

とりあえず、明日も学校なので余計な思考は回さないことにしましょう。

私が私であるということに変わりはありませんから。

第七話

昨日はセイバーVSランサーの戦闘を見て夜更かしをしたために起きるのが遅くなった水谷響です。

眠たい目を擦りながらご飯を食べた後に母に車で学校に送り届けられました。

授業中は温かい日差しに思わずうとうとしてしまいましたが、概ね何事もなく学業は終わりです。

だいぶ足の痛みもなくなってきたので、今日の下校は試しに自分の足で帰ると訴えたため数日ぶりに徒歩での下校です。

母に念を押して言われたように、いつも以上に休憩を挟みます。

ゆつくりとした足取りとなりますが痛みもそうないし、それは良いことですよね。

「ふう」

やっとのことで家の近所にある公園まで帰って来られたので、公園内のベンチで休憩をとることにしました。

久しぶりに子供にとっては長距離な学校から家までの距離を歩いたことで冬にも関わらず熱をもつ足を冷めます。

というか、血行がよくなって痒くて仕方ない。いた痒いつてやつです。

「きやはははは」

「お兄ちゃんこっちだよー!」

「ふ、この我に敵うにはまだまだだぞ童子らよ」

公園を駆けずり回る少年少女らに、微笑ましいなと思つた笑顔をぴたりと固める。

……今、何というか、昨夜も聞いたことのあるような声があった気がしたな。気のせいかな。

思わずガン見してしまいそうになる気持ちを堪えて、さりげなく視線を私と年代と、上級生の子供たちに囲われたその金色を見た。

ああ、現代風なラフで少しだけ寒そうな格好をしているが、あの目立つ金髪に赤色の瞳。間違いなく昨夜の王の中の王様であった。

何故にここにいるのか。

……見なかったことにして、さてと視線をそらす。

「帰ろう」

決断を下すのは早かった。

遊びに興じている間に関わらずさっさと家に帰ってごろごろする。

これが一番心に優しい行動だ。

知らない人とは話しちゃダメとも言われたし、私の判断事態は間違いないはずです。

そう、思っただんです。

でも現実是非情ですね。

「ほう、令呪を持っているのか、童子」

不自然にならないように逃げようとしたのに、何故目の前に金ぴかが立っているのでしょうか？

そもそも、逃げようとしたから追ってきたのでしょうか。たぶんそうだと思いたい。令呪に気づかれたからかもしれないけど。

「だ、誰です、か？」

緊張とその威圧感から体は強張り、喉の奥もからからと渴いていく。

怖いわけではないのだけど、肉体がその圧に押し負けて緊張状態になつていくのが自分でも分かります。

黄金色から漂う、人ならざる気配はただの非力な子供には重く厚く苦しいばかりの圧をかけてくる。

僅かに滲む唾をこくりとのみこんで、目の前の存在を見つめる。

「ふん、子供だてらに中々の精神を持っているではないか。よいぞ、その精神に免じて王を見上げる不遜を許してやろうではないか、童子」

「……………」

何が面白いのか笑い声をあげる男に対して怪訝な表情は隠せません。いったいどこに気に触れる要素があるのかまったくもって分からないです。

意思の疎通ができてない気がすると思いつつもランドセルを握りしめて唇を引き結ぶ。

「何だ童子。言いたいことがあるのならば言え。何のために口がついていると思っている」

「……え、と……だから、誰、ですか」

圧をかけてきている当人が言うことじゃない気がする。

心の中でそう思いつつ、最初の質問をもう一度口にします。

それに対して、彼はああそういえばとばかりに目を瞬かせました。

「この黄金の偉容を見知りおけ、童子。我こそは王の中の王、ギルガメッシュである。子供にはちと難しいやも知れぬが、この我の活躍を特に調べることを許す」

「王様。ギルガメッシュ?」

「ふむ」

得意気に頷く金の王、ギルガメッシュではあるが、いまいち何を言いたいのかは掴めない。私なんて構ってもいいことないですよー。

こんな心の内を知られればアンデルセンにはきつと間抜けか貴様とか悪態つかれそうだけど。というかアンデルセン何も言ってることないんですけどどういいうことですか。

「とみに、童子。お前はその令呪をもって何を望んでいる? どうやら戦いの備えもないように見えるが」

どうやら令呪にしても私自身にしても、何の偽装も施していないことが気になったらしい。

だから遊びを放棄したのかとも暇人なのかとも思ったりしたけど、これを言って怒られるのは嫌なので黙っておこう。

「特には、何も……別に、キャスターも執筆できればそれでいいって言ってたし。私たちは、戦う気は一切ないよ」

「ほう。やはりキャスターのマスターか。マスター共々、変わり種のように聞こえるな」

「変わり種……うーん、まあ否定はできないかも?」

思わずギルガメッシュの言葉に頷いてしまいながら、「しかし」と続いた言葉に首を傾げる。

「キャスターからも棄権しないのかと言われなんだか? 望みがないというなれば、それを手放そうと考えなかったのか」

あーそうですね。そうなりますよね。サーヴァントは聖杯から聖杯戦争や現代の知識を付与されるそうだし、お互い望みがないならそうするのが普通なのは確かだろう。

でも、そうするととなると、そこが安全地帯かどうかもハッキリと分からない。まず前提として、家族に何と言って説得するのかという問題もつきまとう。うちは無宗教だから教会に行く必要もないし。

つまるところ私は、どうあがいても闘争のない日常こそを何よりも大事にしているというだけだ。

まあ聖杯戦争に婚約者と参加している友人は心配なのですけど。え、自分の心配はしないのかって。それはまあ痛いことは嫌だと思っ
ていますが。

「私は日常生活を送ることが大事だから。日常に時々刺激のあるくらの生活が楽しいよね」

「ほう」

「それに、棄権すると教会にお世話にならないといけないんですよ？

お母さんとお父さんとお姉ちゃんやんと離れるのは嫌だもん」

つんと澄ました顔で言いますが、内心冷や汗ものですよ。

べ、別に重要なこともなにも言っていないし？ 教会がアサシンのマスター抱えてるのを知識として知ってるとか口が滑っても言わないですし！

「ふ、クツ、フハハハハ！」

そんなことを考えていると突然金ぴか王は笑いだした。何故。

そんな気持ちで顔を見上げれば、すごく愉しそうな顔をして笑っているではありませんか。

不審者と思われても仕方ないんですけど大丈夫ですか？ あ、でも回りに人がいる気配がないですね……何故でしょう。不思議だなー。

「よいぞ童子！ 実にいい、気に入った。貴様の名を聞いておくとしよう」

「えーと？ ……水谷、響です？」

笑いながらの言葉に少しばかり身を引いて名乗りをあげる。

「そうか。響、お前は中々見所のある子供のようだ。見目も悪くない。

……うむ、成長した後傍に侍らせるのも悪くないな。しかと食をとり、眠り、遊ぶが良い。我も暇な折をみて遊んでやることも吝かではない」

まだ喉の奥で笑う気配を見せながら、英雄王ギルガメツシユは金色の粒子となつて姿を消した。

突然消えた圧力に思わずかくん、と膝を折つて頭を抱えれば、実体化したアンデルセンが彼にしては珍しく慰めるように肩を叩いてきた。

もう、逃げた挙句に他人事だと思つて！

「実際被害にあつたのはお前の方だからな。何、問答無用で殺されなくて良かったじゃあないか。あの男は気に入らないものは殺すことに躊躇いはないようだからな」

「うう……次絡まれて逃げたら令呪使つて呼ぶんだからね？ 一人だけ逃げるとかダメだよ？ アンデルセン」

恨みがましく見上げれば、彼は肩を竦めて答えてみせた。

まったくもつて頼りにならないサーヴァントだが、一人よりは二人の方が心強いからね。倒そうと思つてるわけではないし。後アンデルセンなら大丈夫つて信じてるよ？

視線を反らしたアンデルセンにやっぱり面倒そうになったら惜しまず令呪を使うことを心に決めました。

どうせ使う場面もそう多くはないでしょうし、そのくらいの扱いでいいはずですよ。

「善処する」

「うん。出てこなかったら無理矢理にでも呼ぶから安心しておくね」

「鬼か貴様は」

嫌そうな顔しても知りません。

につこり笑えげんなりとされたが、今日身の危険がないからと逃げたのはわかつてるんだよ？

流石にアンデルセンでもマスターの危険に見ない振りはしないつて私信じてるんだからね。何せツンデレですし。違つて否定されてもねえ。

何だかんだ言いながら使い魔の作り方教えちゃうアンデルセン先生だしなあ？

「そんなことで俺を絆そうとしたところで意味はないぞ。それにお前が思った以上にほんこつで情けなく、なおかつ俺の本を読んでいた読者だったから見返りとして教えたに過ぎん！」

そんなことで感謝するなど顔を背けられたので、そういうことにはしておきます。

ほんこつというのも、正直反論はできないのでその言葉は受け入れておく。

なんにしろアンデルセンが次は後ろにいてくれるなら安心である。

自分より口達者で余計なことを言いもするが基本的に私よりも話すという行為はできるので、余程のことじゃないかぎり対サーヴァントはお任せするつもりである。

それで敵対することになったら仕方ない。三十六計逃げるに限るってやつです。どうにかして逃げます。

もし殺されたとしても、それは私がそこまでしか生きられない決まりだっただけだろうし。

人間に定められた寿命というのは殺されることまで含めて生まれた時に定められるものですから。

それが早かったか遅かったかなんて、決めるのは自分でしかない、というのは私だけの考えなのかもしれませんが。

死にそうになっても、死にきらなかったのならそれは生きるとき時だっただけ。雨生龍之介が私の家に押し入った時がその例だろう。

この世界では、まだ私が死ぬときではなかったから傷をつけただけに留まった。ただそれだけということですよ。

世界が違えば、その私は死んでいたかもしれない。そういうifの話になってその事実はおしまいになります。

「はいはい。でも私、アンデルセンに感謝してるのは本当だからね」

「……解っている」

呆れたと言わんばかりに小さく息を吐き出して、アンデルセンは霊体化してしまいました。

ほんの少しだけ耳が赤く色づいていたし、照れてるんだね、とか思ったけど罵詈雑言が返ってくるだけなので口にはせず足に力を込めて立ち上がる。

腰が抜けそうになったけど、どうにか帰れる程度には動けそうだと。あれ、でも私、あの王様の言葉に何か引つ掛かった気がするんだ。

確か…？

「んん？ 暇を見て遊ぶのも…って、つまり来るのが確定してるよね？ それもけっこう近い内とみた」

『そうなるだろうな』

アンデルセンまで同意してきたので、これは近日中にまた金色の嵐がきそうだと。そんな予感がひしひしとしてきたが、考えないことにする。

どうせアンデルセンも実体化させるし、どうにかなるだろう。

その時の流れでどうにでもなるだろうし、それに場を支配するのはギルガメッシュになる。ならば殺されない程度に流れに従うだけである。

私は基本的に、考えるより感情に従うタイプなのだ。

いや、考えるべきことはちゃんと考えるけど。考えたって、どうにもならないことが世の中にはあるのです。

そういうときは流れと自分の感情に従った方がいいと思います私は。

第八話

ニュースで昨日ホテルの爆発があったと放映されていました。最近は物騒だと感じる聖杯戦争参加者の一人な水谷響です。

やはり聖杯戦争においては場違い？ 感はすごいですが、あんまり気にせず相変わらず今日も学校に通います。

連続殺人犯が捕まったとはいえ、そんなニュースが起きたのですから少しだけ下校が早まりました。学生からしたら少しだけ嬉しいニュースですよ。いや、少しばかり不謹慎かもしれないですけど。

でもたぶん、ホテルの爆破は流れの通りセイバー陣営の本場のマスターさんによるものだろう。

彼とは一切波長が合わないので一度たりとも夢が繋がったことはないけど。

あ、私の夢見は前世よりも何故か範囲が広がってしまって、一応コンテンツロールもできるようにはなっています。別に説明する必要を感じないので詳しくは割愛。

今日もゆっくり徒歩で帰宅した私を待ち構えていた現代服な暇人王、ギルガメッシュを何故か家にあがらせた現在。

更に暇だと煩く言っていたので、父のゲーム機を引っ張り出してリビングにてプレイさせています。

私はそれを横目にしながらテーブルで宿題。アンデルセンは面倒そうな顔をしつつ横のソファで本を開いて時々羽ペンを走らせている。

たまにギルガメッシュが見てみると言うこと以外は何事もない時間となっています。

いや、実は先ほど姉が帰ってきたけど。アンデルセンに認識阻害をしてもらい、友達と遊んでると言い張っておきました。

「そうなんだ」と納得してくれた姉は時計を見て慌ただしく部屋に戻って着替えて、部活の友達と遊んでくると出ていった。姉もまた、嵐のような人である。

「我を友人と称すなど、普通ならば極刑にもあたる不敬である。が、今

の我は気分がいい。許すぞ童子」

「はい。次は気を付けませす」

片手をシユピツとあげて返事をして、宿題を再開です。字を書くのに時間がかかってしまうので仕方ない。けど時間の割に字があまり綺麗でないのはなんとかな感じだ。

習字を習いたって言ったら習わせてくれるだろうけど、そこまでして綺麗な字が書けるようになりたいとかじゃないし。あと、字を書くより本を読む方がいい。

というのはい訳になってしまっただろうか。

「フハハハハ！ 見よ響、全てこの我の領土にしてやったぞ！」

「わーすーい。さすが王様だね！ 私にはまだ難しく、そんなことできないやー」

SLGゲームなのだが、難易度マックスで何度か滅ぼされかけているのを見たが数時間でここまでできるのか。

よくやるなと凄くなって気持ち半分だが、賛辞を送ると機嫌良さげに「そうであろう」と得意気な顔を浮かべている。

もう機嫌がいいならそれで構わないや、とやや投げやりを考えているとそのゲームをもう一回するには飽きてしまったらしい。

「暇になってしまったぞ。何かないのか響」

「ええ？ うーん……何かある？ アンデルセン」

「俺が知るわけないだろう馬鹿め。と言いたるところだったが、オセロがあっただろう」

確かにそういうのあったなと思い、テレビの横の棚を漁る。

確かここに、そういうボードゲーム系が幾つか入っているはずである。

「オセロ、オセロ……ふむ」

聖杯の知識でも確認しているのか思案顔のギルガメッシュは放っておいて、オセロと他に将棋やら囲碁やらチェスやらある分を引っぱり出す。

とはいえ一度に全部は運べないので、何回かわけて運ぶのだけど。「アンデルセンは私がそういうの下手って分かって言うんだからも

う」

「だが負けても楽しむお前にはちょうどいいだろう」

「ひどい言い様ー！ 負け続けたら流石に私でもつらいんだからね？」

そう言いつつもオセロの駒の数を半分ずつ分けて両脇に置く。

これでひとつ準備完了である。

「はい！ 三回くらいやろ！ その後はアンデルセンと交代でどう？」

王様」

宿題もあと数ページ残っているので、交代は必須です。必須なんですよ、そこで何故と驚いてる童話作家さんやい。

「うむ、それで我は構わん。せいぜい楽しませてみせよ童子」

「う……努力はするけど、期待しすぎないでね……？」

愉しげな英雄王様に腰が引けつつも、勝負開始です。

最初の一回は手を抜かれて勝たせてくれましたが、続く二回とも負けです。悲しいけどやはり。

「後は頑張つてね。何、アンデルセンならいけるいける頑張れ」

そんな感じで半ば棒読みなエールを送ると嫌そうな顔を向けられる。

私の知ったことではないけどね！ マスターは見ての通り宿題をしないといけないからね、仕方ないね。

出していたゲームを全て遊んで再度暇になってしまおうが、もうやるものもないというやつです。

え？ アンデルセンとギルガメッシュの勝負はどうなったか、なんて。

当然の如くギルガメッシュが圧勝していきましたとも。ゲームに本気出すとか大人げないと思うな私。

「ギルガメッシュって飽き性だね」

「ふん、当然だ。結果が見え透いた勝負ほどつまらんものはないからな」

あ、はいそうですね。流石王様はすごいね。性能の差をむぎむぎと

見せつけられたというわけですね。

いや、そこを勝負しようとか思っていないけどさ。

「じゃあ次はトランプでいっかー。神経衰弱しよー」

なんだかもう考えるのもめんどくさくなってきたから、出したボードゲーム各種をしまつてから新品のトランプを取り出す。

新品ならば傷がついてないし、途中で混ぜれば多少はいい勝負にもなるだろう。

「よいぞ。手を変え品を変えて挑んでくるのを相手取るのもまた実に楽しい」

機嫌は落ちてないならもう何でもいいと何度目かの感想です。

バサバサとテーブルにトランプを落とし広げて更に手でかき混ぜる。

綺麗に並べて開始すれば、これが中々いい勝負となった。

まず一度出て失敗したら同じ数が出た限りはそれぞれ取るのは当然のことながら、一巡するごとにかき混ぜては並べ直していきます。

一番手はハンデとしてギルガメツシユ固定なので、三番目の私は有利なようなそうじゃないような。

「えーと、これだ！ ああっもう、外した！」

思いの外三人して熱が入りつつ、現在は四戦目。私、ギルガメツシユ、アンデルセンの順でそれぞれ一回は勝っているという結果。かなり善戦したとっていいと思う。私頑張った。

今回は負けそうだと思いつつ終盤はそれぞれの手番で場のカードをかきまぜて次に回します。

「ふ、残念だがこの勝負我がもらったぞ！」

「いやいや英雄王。今回響の次は俺の番なのだが？ ……と、そら！」

これで俺の勝ちだな！」

「なんだとお!？」

うっかり順番が頭から抜けていたらしい王様を横目にして、アンデルセン先生が見事四回戦を勝ち取りました。

いやー中々濃い内容に、私はもうくたくただ。

負けたギルガメツシユはもう一回と言っているけど。子供か。

「もう夕方だよ。王様もマスターさんのところに帰らないとじやないの？ 聖杯戦争つて夜にするものなんでしょ？」

「それもそうだが、あやつはつまらん男だ。かしずいて我に奉じてこなければ即座に契約を切っていた。だがそれに対しお前たちは見所がある。見事我を興じさせてみよ」

「そんなこと言われても困るよ、王様」

まったくほんとに嵐の目だな、この王様は。とんでもない難題ですよ、それ。流石神性持ちの王様の中の王様であると思わせる。

アンデルセンも面倒そうな顔を隠しもしないし。

「その程度できなくてどうする童子。童子らしい振る舞いを見せればそれだけで笑える余興になるぞ？」

「む、それどういう意味ですかー！ アンデルセンといい、ひどい言い様ですねっもう」

むむむと眉間に皺を寄せてふいと視線をそらしてしまう。

何故この男二人は人を貶めてくるのやら。流石の私でもちよっぴり傷つくこともあるんだぞ？

だからほらギルガメツシユさん、その大笑いマジで止めてくれませんか。精神のどこかがほんとに傷ついてるんで。いや本当に。

拗ねるといふ行為をして尚且つ笑われたという点にのだけど。

「ふ、そう拗ねるでない。その表情は中々に見物であるが。それに免じて今日は帰ってやるとする」

「もう来ないでもいいです」

「照れるな照れるな。次は土産のひとつでも用意してやろう」

素直な気持ちをストックレートに言ったのに斜めに解釈されて尚且つ餌でつられました。悲しい。

できればお菓子とか買ってきてくれると嬉しいです。

思わずぼろつと言ってしまったえば大爆笑の上霊体化して帰っていきましました。

つい昨日にも見た気がする光景だと思う。

「お前は真性の馬鹿か阿呆か」

「何も言わないで……今自分でも反省してるから」

やってしまった感を覚えつつ、肩を落とす。

深く考えず返答してしまうのはよくないよね。直るとは思わないけど、直すように努力しよう。

広げたままのランプを集めて元の場所に戻し、それから部屋に戻ってランドセルを机の横にかける。

これでやっとゆっくりできると思いながら本を読んでいると母や姉が帰宅して、にわかにかが暖かくなった気がする。

私はこの暖かさが好きだと、ギルガメッシュとのやりとりのどころなく試されてる感を思い出してそう思った。

晩御飯を食べてお風呂に入れば後は寝るだけ。

寝て夢を見て、また明日が始まる。

夢の中では知らない他人のものを垣間見ること多々あるけど、時間さえあえば友人のソラウとつながる。

今日も今日とて夢で会った友人は、婚約者がセイバー陣営の拠点に攻めいったが失敗し挙げ句に魔術回路がズタボロにされた上撤退に令呪使用で残り一画のみと聖杯戦争継続も厳しくなったと嘆いていた。

正直なところ、それを機にソラウは安全な場所に移動してほしいものだがどうだろうか。

「それは、でもできないわよ。ケイネスが選択しない限り、私は婚約者として彼を支えないとだもの」

ソラウは普段婚約者さんについてああだこうだと文句とか言っているけど、なんだかんだ婚約者さんを気にかけている。

役にたたない原作知識からすればかなり変わった考えを持ったと感じますね。

でも私としては友人が危ない橋を渡るのは見ていられないんですよ。わかってください。

「……ありがとう、ヒビキ。まだケイネスが目覚めていないから何とも言えないけれど、相談してみるわ。だからそんな、泣きそうな顔をしてないで」

「む……そんな顔、してないよ」

指摘されてごしごしと目元を拭い、ソラウに抱きつく。

夢の中だというのに彼女からは薔薇のような匂いが薫った。

「はいはい」

仕方ないなど言わんばかりに背中を撫でられて、私は不満顔だ。

「死んじや駄目だからね、ソラウ」

「……ええ。言われなくても死んでなるものですか」

強い意志のこもった眼差しに、ほんの少し安堵を覚える。

死にたくない、と強く思うのなら彼女は大丈夫だ。その意思が

あつたのなら、死ぬべきでない時に生きていられる。

ここには恋に従った女はいないから、きつと。

私の友人は大丈夫だと、そう信じています。

第九話

寒い夜です。そんな中で、私もとい水谷響は宙を舞っています。

というのは少し語弊があるか。より正確に言うならば、どこぞの金ぴか王の片腕に乗せられて空中を移動しています。

我がサーヴァント、アンデルセンはもう片方の腕で小脇に抱えられています。

何故かは知りません。というかあなた、お昼に遊んだばかりじゃないですか。

「寒い。寒いです王様あと眠い」

「んん？そうか、生身の人間は特に寒さには弱いのであったな。少し待て」

とん、とどこかの家の屋根に降り立ち、私とアンデルセンを置いたかとおもえば金色の波に手をつっこむ。

そこから取り出されたもふもふの毛皮で作られているらしいマントを体にぐるぐるつと巻き付けられた。

「あったかあい」

「王の財宝がひとつであるのだから当然だ。くるまっていれば魔力回復もする優れものであるぞ。とくとその身で味わうがよい」

「ふわあい」

今まで感じたこともない居心地のよさに、つい寒さで冴えていた瞼が落ちかける。それくらいぬくぬくなのである。幸せ。

アンデルセンもギルガメツシュに悪態つきながら同じく毛皮を要求していたりする。何だかんだギルガメツシュも彼のことを貶しつつ渡しているのだから、男の友情？というのはよくわかりません。いえ、この二人に友情があるとは思っているわけではありませんが。

「ギルガメツシュ……どこに、行ってるの？」

「セイバーの陣営の本拠地よ。貴様の家を出た後にライダーめと出会せてな。王の格を問うなどと不遜極まりない宴を開こうなどと宣う故に、この我が王とはなんたるかを証すのだ。貴様らを連れていくのは、何だ。……うむ、余興である」

「……何それ……。良い子は、もう寝る時間なんだよ……。寝ちやうよ……。？」 いいの……。？」

「すでに眠りかけているではないかたわけ！　せめてこの私の格を焼き付けてから墮ちるがよい！」

そうは言われても、健康的な生活を送っている子供には、夜更かしは難しいですよ。

……まず今何時かわからないんだけどね。あ、アンデルセンは姿を消しやがったひどい、マスターを見捨てるなんて。

あれ、でも霊体化しても渡されたマントは一緒に消えるんだ。へえ。

「うむ……。ギル、ガメ……。うるさい……。眠い……。」

「くっ、今寝るでない！　響！」

再び抱えあげられてわざとらしくゆっさゆっさと揺られながら空の旅。

私は何でこの人に気に入られたのやら。もうほんとに寝させてくださいよう。

ちよつとだけ気持ち悪くなりながらも、目を閉じているとその動きが止まった。

うつすらと目を開くと、お城のような建物の屋根に立っていました。記憶が正しければアインツベルンのお城のはずです。

何かを言おうかと口を開くより先に、すどんと落ちていく重力を感じる。

「……う……。」

先程よりも強い浮遊感に、エレベーターが到着した時みたいな気持ち悪い酔った感じになって呻いてしまう。

視線を感じた気がするが、その気持ち悪さを堪えるために気のせいとして目を閉じる。

ああ、世界がぐるぐるしてる気がする。一気に気持ち悪さが押し寄せてきたぞ……。少しは加減してよ英雄王。

「ええと、それでアーチャー？　その腕の娘は、一体どういうことだ？　まさか、拐かしたというわけではあるまいな」

「これなる童子は、何、王たるこの私の姿を再認識させるために連れてきたまでよ。なあ響？ 貴様も私の威光を見たいであろう？」
「別に、そんなことひとつも言っていないし……王様がおうぼー、なんだもの」

酒を受け取って美味しくなかったのか、自分の宝物から一等品を出してから座ったギルガメッシュの胡座をかいた膝の上に乗せられてからの会話である。

まったく、私ほど凶太い人間じゃなかったらセイバーライダーとギルガメッシュの王様三人の間の空間は耐えられなかったよ？

いや、私も耐えられているのは眠たいからに他ならないんだけど。ぱっちり目が冴えてたら流石に全力で拒否しますとも。

とうるか本気で眠気がヤバくなってきたんですけど、ギルガメッシュさん。何だかんだ子供好きなんですよ？ なんとる非道か。

「ははは！ この空気の中見事剛毅な小娘よ！ 余のマスターも、これくらいの神経を持つんものか」

「な、何を言うんだこの馬鹿！」

いやあ、流石にこの空気で言葉を挟むのって、厳しいんじゃないですかねライダーさん。

ほら、セイバーの視線も心なしか冷たいですよ。……あれ、どつちかと言えばこれはギルガメッシュに向けてですね。

『マスター、余裕のようだな？』

『眠たいんだもん。というか、たぶん寝たふりしてた方が遥かに楽なだけ。流石に王様三人の間にいるの、威圧がはんぱないわー。代わらない？ アンデルセン』

『断る。英雄王に気に入られているのはお前の方だしな。我慢しておけ。帰りに菓子でもねだっておけば良からう』

アンデルセンとそんな念話をかわしつつ、ふわふわな毛皮に頬擦りする。

あくこの中はあったかぬくぬくで幸せだあ。外のことなんて知らないんだから、うふふ。

セイバーのマスターらしき人とライダーのマスターも私とギルガ

メツシユを見て少し困惑したままです。

そう思いつつ眠気の狭間で会話を聞いていると、王様談義の開始である。

ギルガメツシユのお酒はやっぱり美酒らしい。そりや英雄王の庫のものですしね。全ての源と称する庫を持つギルガメツシユとしては、聖杯もまた自身の持ち物だと言うのが持論だそうだし。流石言うことが違いますね。

ライダーは受肉を望んでいるそうだし。受肉して、再び征服を成し遂げたいと。

それを暴君と反したセイバーは、聖杯の力をもってして、故国の救済をしたいと、そう語った。

故国の滅びを悼む故の、望み。

だけどそれは、二人の王はそれに相反する考えだろう。

話していただけでも感じられる通り、彼らは過去を悔いることはないのだから。彼女とは、相容れることないだろう。

まあでも個人の考えはその人だけのものだ。だからうん、酔っぱらいに絡まれたと思って、ライダーの言葉を割りきるのもひとつの手ですよセイバー。彼女は真っ直ぐなようだから、少しばかり気負いそうな気もするが。

個としての王よりも全としての王の在り方をよしとしたのは、彼女自身なのです。だから例え間違えているとしても、意味がないことだとしてもそれを決めるのは彼女です。

なんて、眠たいので私は何も言いませんけれど。というか、言ったところで変わることはありませんから。

「王様、うるさい……」

それでも耳に響く嘲笑をあげるギルガメツシユがうるさくて、文句を言うために毛皮から腕を伸ばして頬をペシペシと叩く。

これも眠いからこそなせる行いなのですよ。

だからアンデルセン、念話で爆笑するな。あなたも眠かったんじゃないんですか。

『お前からの魔力は十全だからな。特別眠りが必要なわけではない。』

何時もは何となく寝ているだけだ。しかし……ふん、お前はやはり、俺の想像しないことを時にするな。英雄王が怖いのではなかったか？』

『まあ、実際のとこ怖いというより、なんというかなんだけどね。でも、今は……どうにも眠たいからねえ。眠さからか、そういうの、あんまり感じてないかも』

手を下ろして、身動きする。

あれ、なんか令呪が、とかなんとか言われてる気がするけど。気のせいかな。……うん、気のせいにしておこう。

「ククツ……」

だからさ、私のことも含めて笑わないでくれませんかねAUOやい。

むむ、と目を閉じつつも眉に力を込める。しかし、それを見られたのか軽く指で弾かれた。痛い。

思わず薄目を開いてじとりと睨みつけると、ふんと鼻で笑われてしまった。

「ん……？」

ふ、とにわかにかに空気が変わったのを感じました。

これは、殺気というものだろう。

もぞもぞと動いて毛布から顔を覗かせると、なんか回りに黒いどくろ面達がいきました。彼らはアサシンのサーヴァント、ですね。大概喚ばれるのはハサン・サツバーハなんだっけ？ 暗殺者集団であったと言っていたか。

『アンデルセン、近くに寄つといた方がいいんじゃない？』

『勿論そのつもりだ』

「ちっ、時臣め……ゲスな真似を……」

自身のマスターについて悪態ついたギルガメッシュは、近くに立ったアンデルセンのいるであろう場所をちらりと一瞥して、ひとつ酒を注ぎ杯を仰いだ。

ライダーが杯をかかげ、誘いをかけたがナイフが飛んできてそれを弾き飛ばした。

それに静かな、それでいて猛りに満ちた顔で立ち上がったライダーから強く風が吹く。

「あ、わっ……」

「そら、毛布に戻れ響」

「ん、はあい」

「キャスター。貴様も自分のマスターを掴んでおけよ。貴様らは軽い故この我が手を貸してやること、光栄に思うがよい」

「フン、言われずともな」

実体化したアンデルセンが、英雄王の隣に立って、彼の腕の中から出ている私の肩を掴んだ。

彼らは何でわかりあってるの？ なに、人への理解力が高い人って皆そうなの？ それはこわいんですけど。

というか視線が強い気がするんだけど、どうしたらいいんですか。

私が内心わたわたしている、ライダーが固有結界を発動してアサシンの群衆へと殺到した。

その砂塵といたら、目を開けているのも億劫なほど。

耳を衝く声に、足音に、彼らはなすすべもなく蹂躪されつくした。

すべてを圧してしまった後はもう、宴のお開きである。

僅かに私に視線は向いたけど、私は何かを答えるつもりも、答えられるものもありはしない。

ライダーの宝具でもある固有結界の熱に危うく当てられかけたが、あの熱もおさまったのならば後はもう鎮まっていくばかりです。

つまりなんと言うか、私の気力も尽きてしまったということですね。

とつても眠たい。眠気の最高値に達してる。とにかく寝かしてください。

「ギ……、……め……も、ね……」

重たい瞼を数度持ち上げたけれど、やはり耐えきれることなく、私の体は眠りに落ちてしまった。

精神は起きているが、それも肉体時間で10分くらいのものだ。

アンデルセンに糸パスを通じて視界を共有する。

『おいマスター。とりあえず英雄王に家に運ばせるが、セイバーたちの目が痛いぞ? どうしておく』

『どうもしないよー。私、こっちももう寝てしまおうし。寝た後のことはアンデルセンに頼むよ』

『あまり期待はするなよ。俺は弱小サーヴァントだからな』

寝てしまった後の布団かけたりとかはお願いしとけば、なんだかんだお願いごとを聞いてくれるアンデルセンは応えてくれる。だからそこはいいでしょう。

一応再びギルガメッシュが私とアンデルセンを運んでくれるよ
うで、行きと同様に抱えられたようだ。

何かを言いたげなセイバーに、彼は彼女の願いを肯定してそれでいて嘲笑った。

性格が悪いというか、趣味が悪い人だと思えます。

「おい、マスター。こやつの学校とやらは明日も早めに終わるのだったか?」

「ん、ああ。確か今週はすべて同じくらいの時間に終わるそうだが。

……まさかアーチャー、マスターを連れ回す気か? 俺は止めはしな
いが……まあ少し足だけは気に留めてやれ」

「確か貴様の召喚の際に切られているのだったか」

「本人の起源で繋がってはいるようだがな。別のことに気をとられれば、すぐに崩れるぞ。このマスターは大概、自己犠牲をするタイプの
ようなのでな」

ほう、と愉しげなギルガメッシュの笑い声が聞こえた気がする。

何さアンデルセン……私の魂の記録を垣間見たのか。それならそ
うと、言ってくればよかったのに。

まあそれは私にも言えることですけど。

だって彼のそれは、あまりにも苦悩に満ちていて、けれど全て、人
への理解で充ちていたから。

彼は望みを何一つ手に入れることができなかつたからこそ、今ここ
にいてただ在ることだけが真実なのだ私というマスターと自身の読者を見ている。

生前のように己の胸に渦を巻く想いを隠し、その物語を綴りながら

もただ書くということ、語るということを選ぶ。それが、彼が彼たる所以なのだろうけれど。

そんな思考をしながら、私の意識は深く深く、眠りの淵へと落ちてゆく。

第十話

はい。我がサーヴァント、キャスターなアンデルセンから早朝聞いていた通り、本来は敵の立場なはずの英雄王ギルガメッシュに連れ回されている水谷響です。

昨夜？ ……深夜に王様たちの宴から帰っても、戦闘の余波からか精神まで完全に睡眠モードになっていました。

起きてびっくり、夢をひとつも見なかったのは久しぶりでした。

まあ起きてすぐにアンデルセンから、学校終わって帰ったらA.U.O襲来が確定していると言われて朝から疲れてしまったのですが。

英雄王の財のなすがままにふらふらと店に寄って、ふわふわで手触りの良い長めの赤いマフラーを購入されたのは何故でしょう。

ついでに満足そうな顔をしている理由を教えてほしいのですが。

「そら次だ、次」

何でか私を着飾ることに面白みを見出したらしいので、仕方なくそれに付き合います。

けど、正直センスが良いのと悪いのが半分ずつあるのはどうかと思うの、ギルガメッシュ。

それからお願いだから、子供にそんな金を使わないでください。……ん、いや、ギルガメッシュからしたらはした金かもしれないけど。

「もう疲れた！ 王様、少しは休憩させて！」

「む、もうか。貴様は体力のない童子よな。貴様の家の近くの童子らはもつと遊び尽くすぞ？」

「あの子達より中で本読んでいる方が気楽なんですー。というか、男の子と一緒にしないでよ」

近所の子供たちは男の子が多くて、それに引っ張られるように活発な子達が殆どだ。

だから正直彼らと比べられても、比較的運動の得意でない私は自然と置いていかれる。そっちの方が気楽だし。

でも私がゆっくり帰るのを待っていた英雄王は、子供が好きだからかすっかり空気に馴染んで遊んでいた。

この人本当に王様なのか。とか思ってしまうのは仕方ないだろう。疑ったことはひとつもないですけど。

それから暫く休憩したら、また食べ歩きやら買い物やら、散々に振り回された。

庶民的だな、と言ったら時に財を振る舞うこともまた王の責務でうんたらかんたら。買った後の袋は英雄王の庫の中にしまわれ、大量に某かを買ったようには一見見えない。

移動する倉庫とか便利だな、と言ったら駄目か。うん、心の中にしまっておこう。

「王様？」

河川敷に来たと思ったら、夕焼け色に染まった川の向こうを、ギルガメツシユは見つめる。

金の髪が、沈み行く太陽に透けて美しく輝いていた。とても、眩しい。

目を細めてその顔を見上げれば、光に染められてなお赤い瞳がすうつと細められた。

「うあ、まぶしっ!」

そして突然鎧を纏ったものだから、太陽光が反射して目を焼いた。

なに、なんですか！ 嫌がらせ!?

「童子、魔術師とは世を謀りその痕を隠すであろう。貴様はそれができぬ、と申すか？」

「え、と？ た、ぶんアンデルセンに協力してもらえば結界は張れるとは思うけど……？」

「ふむ。ならば貴様の魔術の力量をここで見せるがよい。ただし、この私の闘いをその目に焼き付けながらな。……あの犬めは、我手ずから誅してやらねばならんだろう」

なんのことやらと慌てつつ、アンデルセンに実体化してもらおう。

「対岸にバーサーカーがいる。ここで戦うつもりだろうな。響、協力はあるが、俺をあまり当てにしてくれるなよ」

「うん」

顎で示された先を一瞥して、魂に蓄積させた夢の記録を、人の知識

を検索して想定して、回路に魔力を通す。

アンデルセンもそれに合わせたように自身の物語の一節を唱えました。

ことバフかけに関しては物語にあつてればすぐく優秀なアンデルセン先生だからね！

川の流れに沿ったこの河川敷だけを外側の現実と繋がりをずらす。ずきり、と魔術回路が傷んだ気はするが、王様が力量を見極めると言ったのだ。ならば、彼の想定を越えなければきつと、彼は興味を失ってしまうだろうとそんな予感がする。

いや、どちらかといえば確信でしょうか。私が彼の興味に足るものがあるかといえば自分ではわかりませんけれど。

広い河の向こうへと、金色が一斉に殺到した。

土埃をあげるそこから、ひとつの黒色が弾丸のように飛び出して英雄王目掛けて片手にしていた黒い槍を投擲する。

ギルガメッシュは剣を飛ばしてそれを相殺し、その頭上に大きな何かを出そうとしていた。

「うえ……何あれ、反則じゃないの？」

河の水に僅かに足を沈めながらも、しかしその上を走っているように見えるバーサーカーの姿は反則と言わずなんというのか。

たぶん、水に関する加護か何かがあるのだろうけれど。それでも正直ナイワーと言いたい。

アンデルセンも同意見のようで英霊は非常識の塊みたいなのがごろごろいると嘆いている。そりゃね、童話作家からすればそうなるよね。

それを言ったら今の私だって、大概常識外なことしていますけど。

だって河の一部と現実の認識をずらすなんて可笑しい……いやこれ、すつごくキツイんですけどね、実際。

普段使わないからか魔術回路ビキビキとっています。普通に痛い。もう涙目です。

「魔力は足りるのか、マスター」

「わかんない……アンデルセンの見立てだと、どのくらい持ちそう

……？」

「……そうだな、もう少し出力を落としたり一時間はいけるんじゃないか？ 後のことは知らんがな」

「それって限界ギリギリじゃないのさ。ううつ、倒れたら昨夜と同じく後は任せたま、私の親愛なるキャスター」

「ふん、承知した我が読者殿」

アンデルセンなら何とかしてくれる。

後のことは頼りにしておけば悪いようにならないだろう、英雄王について以外は。

その英雄王とはいえば、金とエメラルドの複雑な色を発す乗り物に飛び乗っていた。

そこから飛び出る光線がバーサーカーを目掛けていくが、最初にギルガメツシュが飛ばした剣でもってそれをそらし、避けられない角度のものは地面に転がって避けてその際に掴んだらしい石を武器としてまた別の光に投げる。

爆発と閃光が目と耳に轟き、河が飛沫をあげて被弾していることを訴える。

無茶苦茶な戦いだと思うのですが、どう思いますかアンデルセン先生。

「俺には理解できんな。が、俺は戦いというものを興じるのは無理だとハッキリわかった」

「見応えはあるけど、ね。それまでだよ。私もはつきり何してるかわからない、し……ああ、にしても頭痛いし足痛い！ もうやだ！ 帰りたい！」

「魔術に力を使っているから足の筋をつないでいた魔力も回ってないんだろ。だがしかし、これは今暫くかかるだろうよ」

「わかってるよう……。と、アンデルセン……。たぶんライダーがきてるっぽい。念のため、気を付けてね」

「了解した」

ずらした境界線に入り込んできた強い力に、更に頭が痛む。

私を起点に、上流側からならばまだ流があるからいいが、下流側か

ら来られると流が遮られてそれを押し出すために無駄な魔力が消費される。

足の痛みも尋常じゃなくて、地面にぺたりと座り込んで両手を膝につける。

もう冬だというのに、背中に汗が流れていくのが感じられるのが気持ち悪いです。

「うむ、これはひどい戦いもあったものだ……ありやあ余とはまた違った意味での蹂躪よな。バーサーカーには効いておらぬようだが」「ああ……あれもアーチャーの財宝だつていうのか？ ……つて、あれは昨日の、キャスターのマスター、か？」

ちやうど近くについたらしい、ライダー陣営が痲癩をあげつつも更にバーサーカーに攻撃をするギルガメッシュを見ての感想です。

しかし、私に気がついたらしいライダーのマスターは、やや警戒しつつ私に近づいてきます。

まあ見るからに弱ってるし、子供だから何時でも捻るのは簡単だとは思うよ。

「お、おい。お前、キャスターのマスター……だろ？ ……顔色が悪いな。大丈夫、か……？」

「……んん……、大丈夫……じゃ、ないかも……？ アンデルセン、宝具使わない？ もうきつい……このままじゃ、無理。痛い、から、辛い。少しだけ容量変えて欲しい、なあ」

話しかけられて、どうにか気力の殺がれていたのから少しだけ回復しました。

でも痛いのにかわりはなく、瞬きすれば目尻にたまっていた涙がこぼれ落ちる。

ライダーのマスターの反応なんて知らないです。宝具と聞いて慌てているようだけど大丈夫。キャスター陣営は二人揃って攻撃能力はないのです。

「おいおいマスター、俺の遅筆ぶりを忘れたとはいうなよ。そう簡単に貴様の物語を書き上げられるわけがないだろう！ 無理だ！」

「アンデルセンのばか！ ばーか！ 令呪使うに決まってるで

しよっ」

「そう言われればそうだな！ そんな便利な……いや待て、それは疲れを感じるものではないだろうな？ それこそが重要だぞ！」

いや、そんなの知るわけないじゃん。

つい呆れ半分に彼の蒼くなつた顔をじとりとした目で見上げつつ、令呪の宿る左手を掲げる。

「……令呪をもつて、命じます！ アンデルセン、物語宝具を、今すぐ、書き使いなさーい！」

「ああもうくそ」とか聞こえたが、聞こえないふりをしつつ手をおろして地面の土を握る。

少し気力が回復したとはいえ、魔術回路に走る痛みに変わりはない。

そこへ下流から更に、セイバーの気配がして結界を通り抜けてゆく。

ほんと、もう、そつちからとか、勘弁してください！ 死んでしまいます！ これくらいじゃ死にませんけど！

メルヒエン・マイネスレーベンス
「貴方のための物語」

少し遠くで、アンデルセンの声が聞こえた。

途端にこのからだに沸き上がる何かに、私は一瞬身を固くしたけれどそれは彼の魔力だと認識すれば、受け入れるのは容易だった。

魂の情報を書き換えられるのは苦痛ではあるけれど、それも記憶のインストールの際に何度か感じたことのあるものだ。

それ程度の痛みはその時ほどでも、先程までの魔術回路の暴走に近い状態の痛みより遥かにマシと言うもの。

令呪による宝具の使用の影響か、急速なまでのその変化に、周辺を囲う力場が元に戻ろうとする力に圧されかける。

「さて、俺が書き上げた物語は予定の五分の三といったところだが」「おいキャスター、本当にお前のマスター大丈夫なのか？ ピクリともしてないぞ?!」

ライダーのマスターはとてもお優しいらしいです。

私など、とるに足らぬ小娘だというのに心配するなんて……聖杯戦

争の参加者でも、まだまだ精神が成熟しきっていないのでしょね。それは、ああ……なんて、望みがあることなのでしょうか。

「つ、大丈夫ですよ。ライダーのマスターさん。私、死なない程度のことなら平気ですから」

「……」

のろのろと顔をあげて、ライダーのマスターに微笑む。

そしてセイバーと、アインツベルンの小聖杯がきたのを、少し遅れて離れたところで戦闘の様子を窺うランサーと彼女の婚約者の姿を視界に入れる。

ここまでの役者がこの場に揃うのは異例か。いや、この世界では、正しくあるがままだろう。

私はそれを見て、観て……、そして想う。思った。

受け入れることしかできない私だけれど、それでも。それでも私は、と。

「ふむ、そう書けていないと思ったが、存外効果が出ているようだな？

マスター」

「うん、ありがとうアンデルセン。あなたの書く物語が本当に完成するのを楽しみにしてるから」

私の姿と流れていく魔力を確認してか頷く彼に、私は笑みを返しておく。

そんなやり取りにギョツと眼を見開くのはライダーのマスターである。

「キャスターのマスター……お前、そんな簡単にポンポンと真名を言うなんて馬鹿なのか?! ……というか、アンデルセンってあのアンデルセン!? 子供のなりをしてるのに!?!」

「うるさいぞライダーのマスター。俺とて好き好んで子供の姿で現界しているわけではない。だが知っての通り俺は生憎ただの童話作家でな。サーヴァントとしてはとるにたらん最弱な三流だ。そう警戒したところで無駄だ無駄無駄」

さすがに三大作家、有名なためにすぐにその名は知れる。

当然子供の姿だから驚かれるのも無理はない話だ。私も予備知識

がなければそうなたはずだもの。

ステータスの隠蔽はしていないので、もしかしたら能力値の低さで二重に驚かれているかもだが。……一応言っておくけど、他の作品から考えれば幸運だけはランクDにあがってるんだよ？　これはマスターの私によるものだとは思うんだけど。

そう思いながらふうと息を吐き出して気分を入れ替えます。

戦闘の姿勢を見せているセイバーとかランサーとか、絶賛戦い中のアーチャーとバーサーカーとか、私一人でこうも位相をずらすのも厳しいので、早く終わってほしいものです。

アンデルセンにせっかく、宝具を使ってもらったがやはり長時間は厳しいものがありますから。

「そ、れよりも……まだ、終わらない感じ？　日が暮れたら、お母さんが帰ってきちゃうのに……」

「それは後で英雄王に文句を言うことだな。俺には手に負えん」

「アンデルセンにそんな期待、するわけないよ。……うん、でもお陰で少し持ち直した。ありがとう」

「礼を言われることは何も言っていないが？」

ふん、と鼻で笑ったアンデルセンに何も返さずに笑っておく。

痛みに変わりはないが、軽口をたたくことでかなり気分も変わった。これはアンデルセンがアンデルセンだからだろう。

なんだかんだ、彼を召喚できて良かった……かもしれない。肉体労働はしないけど。

乱闘模様になっていくのを、何故かライダーのマスターと共に見守りながらそんな場違いなことを考えておりました。

第十一話

戦闘が激化してもうどのくらい経っただろうか。

気がつけばもう空は黒く、それを黄金の輝きが照らしている。

早く帰らなきゃ、と思ってもこれが終わりを見せていない今帰れはしない。というかそもそも足がたぶん、動かない。動かないというよりも動かさないんだけど。

だって今結界もどきを作るので魔力すごく使ってるし。

バーサーカーの狙いがセイバーに変わったりそれを追いつたり英雄王がいたり、ランサーが自分のマスターを守ろうとして被弾して戦闘に混じったり、ライダーが豪快な笑い声をあげてたり。

とんでもなくカオスな空間となっております。

まだ宝具の撃ち合いがないだけ、ましと言うものだろうけれど。

でも、そろそろ終わりそうでもある。そんな予感を感じていた。

「チツ、またもや尾を巻いて逃げおつてからに、あの狂犬め……」

ぶつくさとバーサーカーについて悪態つくギルガメッシュが、乗っていた輝く舟を庫にしまって私の側に降り立つ。

ライダーのマスターはびくりと体を震わせたが、それでも彼は私を心配してか逃げはしなかった。

「ふん、どうやらここまで持ち堪えられたようだな童子」

「王様、無茶ぶり、だめ絶対」

戦闘が終わって、無理矢理外界と隔てたそれから魔力を流すのを止める。

とたんに重くなるこの体は、たぶん言うなれば魔力不足と体力がつかしたのと、であるだろう。

魔力は休んでれば回復するとは思うんだけど、どちらにせよ体を動かすのは今日のところは難しそうだ。

座りながらも、地面に倒れそうになった私を支えたのはライダーのマスターだった。

「お、おいアーチャー、キャスターのマスターをどうするつもりだ？」
「知れたことを。だが、我もこやつ働きには満足した故な」

「早く家まで送ってね、王様……足痛い」

何やら急に機嫌よくニヤリと笑う英雄王を見る。

顔を上げ、近づいて来たその金色に包まれたままの足をてしてしと叩く。弱い力なので多目に見てくれるはずである、王様ならね！

「む。……そういえばそれについては忘れておったわ」

「昨日アンデルセンから聞いていたんじゃないんですか？ やだなあ。……あ、ライダーのマスターさん、心配してくれてありがとう。私は大丈夫だから、もう帰っても大丈夫ですよ」

できる限り、笑顔を浮かべた私に、彼は物言いたげに口を開く。

でも言葉にはできなかったようで、「そうかよ」と呟くように、でもどこか言い訳するように言っただけ腰をあげた。

そんなマスターを差し置いてライダーは笑いながらギルガメツシユに声をかけている。

先程の戦闘に思うところがあつたらしく、次は十全な調子で戦おうと言っている。

挑発されたりしているが、ギルガメツシユは愉しげに言葉を返していた。

その真意はわかりはしないが、それでも機嫌は悪くはなっていないようです。

その二人の王のやりとりを見つめていたライダーのマスターの横顔は、初めて見たときよりも、何かが変わっている様子だ。

きっと、それは征服王の影響なのだろう。王様というのは、ただの人には眩くて、そして強い影響を与える。それがどういった内容であれ、だ。

それはもしかしたら私にも、言えることかもしれないけれど。

「……」

そんな様子を、見つめながら私は落ちる瞼に、強い眠りへの強制力に抗えずに意識をおとした。

約束したとおり、この場の後はアンデルセンがどうにかしてくれるだろう。

ふわり、ふわりと落ちる、落ち行く意識の中、私の魂は夢を渡る。夢なのか、それとも世界と世界の隙間なのか。

私にはハッキリと理解はしていない。する必要はないのだ。だって私は、ただ見ているだけの人間ですから。

見るだけで、関わることはできないのが夢というものです。

「おや、珍しい。こんなところにお客人とはね」

ぱちり、と目を開きます。

落ちてたゆたっていた私の精神が声に応じて目を覚ます。

横になっていた体を認識して体という殻に命じて上体を起こしました。

起きたと見なした目に広がったのは、一人の青年とその足元に輝くような花々。

私の何かが、彼が人とは違うと言っていました。そしてここは、どこもしれぬ、理の外側であると感じます。

「私と似ているが、違うみたいだ。君はどうしてここにきたんだい？」
「……わかりません」

「ふうん、そうなんだ。言葉にすることはできないが、理解はしているんだね。いやはや、本当に珍しい。それでいて人らしい精神を保っているなんてね。君、よく壊れなかったね」

美しく微笑むのに、どこか冷たいものを感じました。彼の顔には感情が在るのに、そこには何かが伴っていないのです。

ですが、彼の言ったことは正しくて私は何もいう言葉が浮かびません。

ただ曖昧な笑顔を浮かべるだけです。

「ああ……なんだ、最初から君も、そうなんだね。ふふ」

先程の笑みに、それが籠りました。

それ。そう、心とでもいうものでしょうか。私にもそれは確かに存在しています。

「あなたは……この塔の主、ですね？」

ここは、この理の外にある塔は閉ざされていると認識できました。そこに唯一在る存在は、目の前の青年だけです。

ということとは、ここは彼のための塔であるはずです。

「うん、まあそうだね。私はここに閉じ込められた憐れな男さ」

「そうなんですか。きつとかなり恨まれていたんですね」

なるほどと頷いた私は、薄く繋がる自身の確認をします。

大丈夫、ここは隔絶された場所のようですが、アンデルセンのお陰か問題なく回線と呼ぶべきそれは安定しているようです。流石相性で呼び出した人だけあります。

いえ、むしろ彼の宝具があつたからこそ、ここに繋がったのかもしれないかもしれませんけれど。

「ははは、さてどうだろうね」

軽やかに笑う青年は私へと手を伸ばしてきました。

何だろうと、首を傾げて綺麗な紫色の瞳を見上げます。

「ん？ いや、そこに座るよりもこちらに座った方がいい。座り心地は私が保証するよ」

「は、はあ」

ため息のような返事を返して差し出された手をとりました。

するとどうでしょう。彼は私の手を引いて立ち上がらせたと思いきや、そのまま慣れた様子で抱き上げられてしまいました。

肉体の年齢をそのまま反映している私の体は幼い子供のものですので、そう重たいとは思いませんが会話をし難いのではないのでしょうか。

ちなみにこういった場所で実際の重量というのはあまり関係のないことです。

ほら、夢の中だと体が軽く感じたり重く感じたりする、そんな理屈です。要はそうだと思えばそうなる、ということですね。

「魂の質量は凄いのに君の体は軽いんだね。少し驚きだ」

「そうですね？ たぶん精神だけだからだとは思いますが。魂はまだ残っている空白の部分リソースを引っ張って外の殻を作っているだけなので、そのせいかもしれませんね」

なので彼の認識では質量がある、と思っけていても私個人が現実での体重を反映させているのでその通りになります。

これはおそらく、私と彼が夢を渡る者同士、ということからできることなのでしようけれど。

「ほうほう。そうだとすれば、少しばかり私とは違うようだ。まったく人というのは時に面白おかしい存在がいるものだね」

「確かにそれは同意します。……ですが、膝の上に乗せる理由がわかりません。あなたはロリコンですか？」

「ロリコンとはまた、ひどい言われようだね。私は美しい女性に惹かれるだけだよ。その点でいえば君の魂はその大きさの割に美しい。磨き抜かれた宝石みたいだね」

柔らかくとても美しい声の旋律です。でも今の私の体にそう言うのは早いというものです。

そういうことを言外に伝えたはずなのですが、彼は年齢をそこまで気に留めていないのでしょうか。不思議な人もいるものです。

……いいえ、数度現実でそういった人もいましたけれどね。

でも目の前の彼は、私についてたぶん魂が気にかかっていることは予想に難くありません。

実質理解したかはともかくとして、現実の私に英雄王は興味を。いえ、秤をかけているようですので。

そういった点でいえば、先程までの結界『もどき』は続けて正解だったのでしょうか。

いえ、殺されるのは構わないのですが、やはりできる限りのことはするべきと私の根本、魂がそういうものですから。

「これが君の肉体かな？ ……なんだ、君のところ今アーサー王が現界しているんだね。いやしかし、それでも数度可能性の世界を覗いたが、君みたいな存在は初めて見たよ」

彼の眼が、その力で今の私の肉体を世界の隙間から窺い覗いているようにです。

過去何度かそういった世界を覗いているということは、やはり力あるものの証明ですね。こんなところからそれが出来るということは、眼がよろしいのでしょうか。

私にはそうした眼は、ありませんから。

あつたとしても、私には不要だったものでしょう。もしかしたら最初の私にはあつたかもしれないけれどね。

「そう、でしょうね。私は可能性の中に紛れ込む、極小さな一粒の金平糖みたいなものです。あなたのような世界に確固とした影響を及ぼすものではなくて、あくまで娯楽の嗜好品みたいなあつてもなくても構わないような存在ですから。……与えられたものは受け入れるのに、何故か過去は散々求められてしまいました。それもせんなきどこかの過去の話でしたね。すみません、つまらない話をしかけました」

「いいや？ とても面白いよ。私は特にそうした執着はないのだけだね。……うん、でもボクと違って感情を得て発露できるのは、とてもいいことだと思うよ。ボクもそうしたところは、思うところがある」
にこやかに語る彼に私は「そうですか」としか返せません。

……いけませんね。何時かの生で、誰かから何でも受け入れるだけでなく何かを返せと言われていたのです。

律儀にそれを守る私が馬鹿らしいとも思えたことが何時かにありましたけれど、確かに瞬間的に思ったこと感じたことを返答したことで会話が弾むこともしばありました。

やはり、自分の中でも先達の部類に入る記録も侮れません。

「花の魔術師さん。私は水谷響です。あなたのお名前をお伺いしてもよろしいでしょうか」

「……、……」

遠く、私の現在を視ていた彼の顔を見上げて私は言います。

僅かに驚いた風情の彼は、紫色の瞳をすがめて私を見下ろしました。

まるででなくとも検分する彼に悪い気はおきません。だって、私も大きな存在ですからね。下にある存在を見極めるのも、時に重要なことなのです。……たまに化かされたりもしますしね。

あ、いえ、それは私だけかもしれませんが。

「いいよ。私はマーリンだ。君は本当に、ヒビキでいいんだね？」
存在証明というものです。ええ、構わないのです。

「今の私は確かに水谷響ですから。ベースは違うとはいえ、自分に代わりはないです。だからこそ、私はあえてこう言いましょう」

現在の私は水谷響以外の何者ではないのだと。

世界の外側に認知されてしまえば、私という存在は殆ど固定されてしましますが、それでも構わないと思います。

違う名前の魂の大元と一緒に自分もいますが、世界にそれは関係ありません。あくまで私は私というやつです。

現状不満を抱くこともありませし、私という在り方は不満を抱くこともしません。

それに近いものを感じるのは不満などではなく、多量の呆れだった事実だったりしますから。その点、英雄王に反論するのもそこからです。

口が悪くなったのはアンデルセンを見ていたからだと思いたいです。過去の記録にも関与するところはありますけれどね。

……いいえ、実のところは不満を抱かないではありません。

私は人間の性能のうち怒りや憎しみ、恐怖といった感情が欠落しているのです。

「よろしくお願いします、マーリンさん」

「可愛い女の子には、さん付けせずに呼ばれたいものだね。だが、よろしくヒビキ。君は特別なお客さまだ」

「ええ。この閉ざされた塔にもう一度くるのも骨が折れそうですが。マーリン、世界を覗き見るのは構いませんけれど、あまり私をからかわないでくださいね」

「努力しよう」という彼の言葉は薄っぺらくて信用なりませんけれど、まあ構わないでしょう。

そろそろ肉体が限界なのか、私を呼び戻そうとしていますし。

彼と出会えた奇跡に感謝も感動も残しませんけれど、これにてお別れです。

何、人生何が起きるかわかりませし、結ばれてしまった縁というやつは意外と長く続くものです。

いつかその内巡り会うことになることでしょう。

現実での、初めての友人が気にかかるところですし、今回のところはもう帰ってしましましょう。

別れの言葉を口に行っている途中で、私の意識は再び落ちてゆきました。

第十二話

夢の中に落ちていったと思ったたら何故かあのマーリンに出会ってしまいました水谷響です。

性格はまったくと言っていいほど違うのですが、似たものを感じてしまったのは誰にも言えやしませんね。言える相手もいませんけれど。

彼と別れてから大分経ち、たぶん深夜から朝方にかけてどれかの時間で友人であるソラウと会うことはできました。繋がる前後は彼女以外とのラインを切っていたので基本的には完全に眠っている状態でしたが。

疲労困憊の彼女ではありませんでしたが、どうやらセイバーとランサーの一戦の約束をあの乱闘の最中にしており、会う直前にランサーが敗れたそうです。

魔術師殺しのセイバー陣営の協力者対策として、衛宮切嗣防弾チョッキと、対物理障壁を張れる使いきり礼装を身につけた上で勝負に挑んだそうです。

本当はあの乱闘の直後に倒れた私に駆け寄りたかったそうですが、英雄王がライダーのマスターに押し付けて帰っていくものだから出るに出不れなかつたとのこと。

戦闘している近くに待機しているだなんて危ないと思うけれど、拠点が仮の物である以上守る上で離れている方が不安だと視認されない程度の距離にいたそうだ。

距離があつたとはいえ彼女に何事もなくてよかったです。

それはそうとしても、ライダーのマスターにお礼を言いに行かないといけないな。ご迷惑をかけたこともお詫びしないと。

改めて庇ってくれたことにもお礼を言おうと。

そう言ったらあんな無理矢理で無茶苦茶な結界を張ったんだから無理するなと言われてしまいました。

優しい友人を持って私は幸せです。

婚約者さんに魔術師として興味を持たれたらしいですが、ソラウが

『あなたほどの魔術師があんなにも才能のある子どもを調べたいとは言わないわね?』と凄んだらしいです。私の友人がこんなに強い。一応婚約者さんは聖杯戦争中の敵だし、ひとまずは対セイバー戦だと切り替えたらしいですが。

まあ、確かにあの結界は魔術回路フル回転のうえにアンデルセンの宝具による魂の拡張プラスをしてしまったので、肉体にかかった負荷も結界の張り方としても類を見ないだろう。魔術師から見ればそれはそれは気になることでしょうとも。それくらいはわかります。

ん、肉体の負荷を考えるにもしかしたら起きてても動けない可能性が……? いやいや、まだ考えないでおこう。

ランサーが敗れたため、ソラウたちは早々に帰国してしまうのとのことだ。

ランサーが敗れたというのに射撃されたそうなので、礼装がなければ本当に危なかったらしい。

婚約者がかの城を襲った際の魔術師殺しによって魔術回路めっちゃくちゃになっちゃったこととかかなり問題だそうだ。

次代に刻印を継ぐためにも殺されるよりも前に離れてしまうとのこと、すでに冬木から離れた他県に移っていると言っていた。

聖杯戦争の途中だし、追ってはいかないはずだ。アサシンとランサーが脱落したただけだし、衛宮切嗣もその仲間も、そちらから手を離すことはできないはずだと踏んでいるそうです。

それでも気を付けてねとはソラウに念押ししましたが。

そしてお別れして、私の目が覚める。

目覚めた、のだけでも。

「マスター、目が覚めたのか」

「アンデルセン……おはよう?」

アンデルセンに挨拶を返しながらベッドの横の時計を確認して、思わず呻いてしまった。

なんと。お昼も近いではないか。

「魔力の不足で熱が出たようだ。お前の母が朝様子を見て慌てたようだが、休みをとって今はキッチンにいるぞ。どうする」

「ん……、そう、だねえ」

上体を起こして、足を動かそうとする。いや、動かそうとしたのだけど。

「足、動かない……。無理しすぎたかなあ……」

自分の体を見下ろして確認するが、やはりうまく神経が接続できていない。魔力を動かして繋げてみるが、どうにも足は動く気配を見せない。

「ふむ、あんなに盛大な魔力行使をしておいて存外回復しているようだな。魔力の生成量が多いのかもしれないな。普通の人間とは並外れてるが」

私が魔力を操作するのをまじまじと見ながら、アンデルセンはそう言った。

その言葉に首を傾げて自分の体を見下ろすけれど、何時もよりは少ないなあという程度しかわからない。

「そう、なんだ？ 自覚はあんまりないけど。……うん、でも今日は殆ど動けないかも。足、すごく痛い」

「そういえばギルガメッシュも少しばかりやってしまったかともいような顔をしていたな。たいそう見物だったぞ、あれは」

愉しそうなアンデルセンに笑って、体から力を抜いて横たわる。

そんな私を見て、彼は私の勉強机に座った。何時もとは反対の場所に、何でだか笑みが浮かんでくる。

見咎められたら拗ねられてしまいそうなので布団を口元に引き上げて視線を天井に向ける。

途端に、眠気が再び襲ってきた。

これはたぶん、一種の防衛反応なのだろう。魔力を回復するのに睡眠、食事は基本だ。その他の方法は押して知るべし。残る三大欲求である。私は前者二つの欲が大きいのですけどね。

「響、入るわよ」

「ん……」

母の声に閉じかけた瞼を押し上げて、こてんと首を横に向ける。

アンデルセンはすでに霊体化して姿を消してしまっていた。こう

いう時は素早いんだよね。

「起きていたのね、良かった……。もう、心配したのよ？ まったく目が覚めないし熱もあるし……。時折咳き込んでいたから風邪だとは思うけど。昨日はウェイバー君が連れ帰ってくれたからよかったけど、疲れたからってベッド以外で寝るのはダメよ！ いいわね？」

「……うん、ごめんねお母さん」

「体調が悪かったのなら早めに言うのよ？ 響はそういうの言わないから心配だわ。でもウェイバー君にはお礼を言うのを忘れないようにね」

「うん……わかった」

たぶんライダーのマスターさんが母に暗示でもかけたのだろう。

そのわりに本名を名乗るのは迂闊というか、なんというか？ いや、悪いこととは言わないけどね。

「さて、起きているのならすぐにお粥を持ってくるわね」

「はい」

優しく微笑みを残し、母が部屋を出ていく。

それを見送って、喉の違和感を咳で追い出す。

「うう……。風邪っていわれたら、気になかった頭痛が戻ってきた。

……魔力、もう少し普段から使うことにしよう」

『普段から魔術回路に魔力を殆ど通していないから痛むのだろうな。まあそれでもあんなのができる俺のマスターは中々やらかしてる感はあるが』

「やらかしたとか、酷い言い様……」

いやそれでも自覚がないわけでないよ、勿論。世の中の『普通』の魔術師からすれば研究したい一品ではあるだろうし。眼がいいわけではないが、彼らの目指すものを単一でなしえることが可能な存在など、現代にはそう存在しないだろうし。

でもわざわざやろうとするのがよくわからないのですけどね、私には。

すぐに戻ってくる足音が聞こえて、アンデルセンが口を閉ざす。

私は部屋に入ってくるお母さんを見ながら上半身を起き上がらせ

る。

「はい響、自分で食べられそう?。」

「うん、大丈夫だよ。お母さん、今日はごめんね」

「いいのよ、気にしなくて。じゃあまた後で器を取りにくるから、食べたらゆつくり寝るのよ。いいわね?。」

「はあい」

頷いた私の膝の上にほかほかの丼が置かれる。

背中が楽になるようにとクッションを置いてくれたので、少し力を抜いてもたれ掛かる。

それを見てレンゲを渡され、それじゃあと私の頭を撫でて再び母は部屋を出ていった。たぶん、普段土日にしかできていない、それも時間があつた時しかできない掃除をするつもりなのだろう。

「たんたん、と階段をおりていく音を聞いて、レンゲを器にいれる。
「ふう」

あまり熱々のものは得意ではないので掬いあげたそれにふうふうと息を吹き掛けます。

程よく冷めたらぱくりと口に含み軽く咀嚼して飲み込み、それを器が空になるまで繰り返すだけです。

ちよつとずつ掬っては食べてとしていくけれど、段々と疲れてきて腕を上げるのも億劫だ。

「アンデルセン?。腕疲れてきたから食べさせてくれたりとか、しない?。」

そこで椅子に座っているアンデルセンをちらりと窺うと、驚いた顔をした後フンと鼻で笑われた。

「馬鹿め、俺にその経験がないとでも思ったか?。……当然ないから謹んでさせてもらおうとも!。物語を書くのにネタがあるのとないのでは雲泥の差だからな!。ちなみに、対価として諸々をお前を参考に書いてもいいかマスター」

「なあにそれ。アンデルセンってばほんと突然だね。どこで何の話を出すのかは知らないけど、私個人の名前出さないのと、個人の特定できる要素の排除は絶対だよ?。書いても面白いものになるとも思え

ないけど。ということで、ちゃんと冷まして食べさせてね」

わかったと嬉々とした表情で頷いたアンデルセンが中身が半分ほどになった器とレンゲを受け取って、先程の私と同様に冷まして口まで運んでくれる。

うむうむ、手も疲れないし照れてるような何とも言えない顔をしているのを見るのはいい。アンデルセンは見目が少年だし、私もまだ幼いから、第三者視点が見たらきつと微笑ましい光景なんでしょうね。

別に彼をからかって遊んでるわけではないんですよ？ いえ、そういう刹那的な楽しみは大事ですし反応を楽しんでいるのも確かですけど。

さて、食べ終わったら少しだけ時間をおいて横になります。冗談半分にアンデルセンに添い寝するかと尋ねたら「貴様は娼婦か何かか！」と吐き捨てて霊体化されました。これは確実に照れと貞操観念の有無についての言葉だったのでしょうか。面白い反応です。

「ふふ、おやすみ、アンデルセン」

返ってこない返事は想定の通り。

そのまま目を閉じて、意識を精神へと落とし込みます。

目を開いて何時もの白い空間であることを確認しましたら、まずすることは肉体のスキャンをすることです。

ソラウに会う以外は寝ていたの、今からやることになりました。別にいつでもできることだしと後回しにしていたので仕方ありません。

母はああ言っていました、基本的に体調管理はここで問題なくできております。

ただ昨日のような事態は滅多に起きることのないことです。自身の肉体の脆さが前面に出してしまいました。少しだけ反省です。

いいえ、それはいいのです。

確認したところ、魔力も消費量の三分の一ほど回復しているようです。後一日は大人しくしておけば確実に回復しそうです。

発熱も今日の内に治まることでしょうし、頭痛も同様ですね。

要は至る箇所の魔力が不足してしまったというだけです。体

内を循環するために供給が止まり、そういった現象が起きてしまうようですね。

アンデルセンに書いてもらった効果を確認してみたら、魂の拡張に、魔力回復速度の向上と抗魔力の上昇となっていました。

だからきつと戦闘での魔力の余波にライダーの固有結界の時よりも耐えられたのかもしれないね。

とはいえ、彼もまだ構想途中であったから中途な出来上がりになってしまったと嘆いているようですけれど。

無理に頼んだのは私ですが、それでも聖杯戦争の終了に間に合う気がしませんのでそれでよかったのかもしれない。

本当に最後まで書くことができるのかはわかりませんが、彼の書く物語を楽しみにおきましょう。

人の作るものに価値のないものなどありませんからね。「ああ……駄目ですね。そろそろ精神も切り替えをしなければ」

どうにも、昨日の戦闘の影響かはわかりませんが私の自意識が水谷響とは外れてきてしまっています。

決して離れきるわけではないのですが、あまり家族を不安にさせるわけにもいきません。

ベースの人格に近づくのも、魂に近づくのも、水谷響という子供には相応しくありませんから。改めて私の記憶を引き出さなかった記録にある、年頃の子供という情報をインストールしましょう。

……もしかしたら、ギルガメッシュは私のこの、人とは違う部分を確かめているのかもしれないね。あくまでも予測の範囲を越えませんが。

いや、でも間違っではないです。

私は人らしい感情を備えてはいますが、根本的に全てを封じた私の記録を基にしたデータ群でなりたっています。そのどれも結局のところ私でしかありませんが。

ただ、どうしても普通の人間とは違う……と思うので、見る人が見れば破綻している、と思われるのでしょうかね。幾度かそんな記録があります。

ります。

それでも、古い魂の記録から考えれば今の水谷響という私は随分と人らしく近づけているとは思いますがね。

さて、確認も済んだことですしそろそろ意識を眠りにつかせるとします。流石にこのままですと回復の速度も少しばかり下がってしまいますからね。

起きてからすることといえば、だいたいの事情に通じているのは英雄王その人でしょうから、もし来たのなら話をしましょう。

もし来なかったら、使い魔でライダーのマスターを探してみるといいかもしれません。

第十三話

目覚めてすぐ、足が動くのを確認できました。おはようございます
こんにちは、水谷響でございます。

戦争に終わりが近いと勘が告げています。いいえ、どちらかと言う
ならば確信というものでしょうね。

昨日はご飯を食べる他は基本寝ていましたが、本日は朝起きたとこ
ろ母は熱の下がった私をそれでも心配して学校を休みなさいと、念に
は念を入れて来週から学校にいこうねと言いました。

「わかった」と頷いた私だけれど、微笑んだ母の……いいえ、暖かな
平穩の裏にそれは足音をさせずに忍び寄ってきているようです。

それはたぶん、その未来のひとつを識っているからこそ判じている
のでしょうか。私という存在は在れども、私の……私とアンデルセンと
いう存在ではその未来を変じさせることは不可能というものです。
それは、間違いなく。

非力な子供の力では、その大きな運命の流れを変えることはできま
せん。

「ほほう、随分中身が成長したではないか童子」

「王様」

一人でも大丈夫だからと送り出した母が会社に出勤前に作りおい
てくれていたお昼の食事をおえて部屋に戻った私を出迎えたのは、勉
強机に座るアンデルセンとベッドに躊躇いなく寝転がって肘をつい
ているギルガメツシユだった。

思わずアンデルセンとギルガメツシユを見比べてしまったのは無
理ないだろう。完全に不法侵入者だ。霊体化できるサーヴァントに
鍵もへつたくれもないですけど。

結果なんて、一応部屋に張ってあっても効果は一度くらい攻撃を防
ぐというだけのものだから入るのも容易だろうし。

「……聖杯戦争もだいたい進んだみたいだけど、ここにきても良かった
の？」

座る場所はないかと仕方なくギルガメツシユが寝転ぶ足元近くの

ベッドの淵に腰をかけて、聞いてみたいことを聞いてみる。

彼は金色の杯を寝ころんだまま傾けて中身を仰ぎ、愉しそうに笑って答えた。

「なに、私のマスターが代わったものでな。あやつは我が自由に動き回るのもまたよしとしている」

「そうなんだ。……じゃあ、遠坂のマスターさんは亡くなったんだね」

「ああ。見知らぬ人間の死を嘆くか？ 響」

英雄王が猛禽類みたいな鋭い視線を向けてくるが、私は首を傾げるだけです。だって、質問の意味が理解できないです。

「……知らない人の死を嘆くほど、私という人間は出来ていません」

「ほう、そうか。……では肉親ではどうだ？」

「お母さんたち、ですか？ それは悲しいと思います。死は誰しにも訪れますが、やはり別離の時というのはどうしても悲しくなってしまうものです。私とて、それは例外ではありません」

視線に負けることもなく、私はそう言います。しばらくじっと見つめられていましたが、何やら満足そうにギルガメッシュは頷きました。

そして、私に杯を示して酌をしろと言ってきます。自由に勝手がすぎる王様です。

「やはり貴様は私の目に敵うに値する小娘よな。貴様ほどの素材が未だこの世に生まれ落ちるとは、中々この時代も悪くない！ 何より、人の作った娯楽の品はよい。……まあ剪定は必要であるとは思うかな」

お酒を仰ぎつつのお言葉である。

まったく、人間の作るものには価値は見出だしていながら増えすぎたからよくないなんて、横暴だと思うよね。

まあ私はそれが悪いとも言えません。一応一人残らず殺すとは言っていないですからね。

……もし残らず殺すと言っても、世界の抑止力が働くでしょうけれど。

それに私はわかります。彼は少なからず人の営みというのを愛し

ていると。暴君ではありませんでしたが、それでも敬われた王様です。人は価値あるものを記し残してきた生き物ですからね。

「キャスター、貴様先の戦いで物語を綴っていただろう。完成はしたのか？」

「残念ながら未完成だ英雄王。しかし俺にしては珍しく今は筆が乗っている。完成まで二日といらんだらうよ」

「そうなんだ。でもアンデルセン、一番に見せるのは私だからね？」

「ああ、そのつもりだがマスター」

「なんだと？ ……ふむ。では響、見終わったならば我に読み聞かせるがよい」

ふふん、と更に上機嫌になった英雄王に追加された酒壺を傾ける。

まったく。何が彼の機嫌をそこまで上げるのか。 ……まあたぶん新しく代わったマスターと、私たちキャスター陣営が愉しいからだろうけど。

「では書き終わったならば此度の聖杯戦争での貴様の役割は終わると言うわけか」

「まあそうなるだろうと思うが」

「そうだね。アンデルセンってば書き終わったら座に帰るって最初の頃から言ってたもんねー。 ……あれ、でも王様、何時の間にそれ聞いたの？ あの王様たちの宴のあと？」

「そうだ」と、頷いた王様にやっぱり男同士の通じ合う何かがあったんだろうなと思う。

「さて、飲み終わったところでそろそろゆくとするか。響、そしてキャスター。終わりの時まで三日とないと我は予想している。ゆめ、約束を違えるでないぞ？」

最後の一滴まで注いだ杯を一気に仰ぎ飲み干して、ギルガメッシュは高笑いと共に霊体化していきました。

ついでに押し付けるように土産だとブランデー入りのチョコレートを買ったのですが嫌がらせなのでしょうかね？

それはアンデルセンにたぶん先払いの褒美って意味だと思うというごことで渡しました。私には食べられないから仕方ないですね。

「じゃあちよつと鳥形の使い魔作るのを手伝ってね、アンデルセン」
「何のために作る？ 特に戦闘の気配もないだろう」

「ライダーのマスターさんにお礼の手紙を書こうと思ってね。月曜日
まで外には出ないし、お母さんも出てほしくないみたいだから。せめて
手紙でお礼をしようかと」

私の発言に僅かに呆れたような顔をされたが、気にせず拙い文字で
英文を紙に書いていきます。

便箋は桜模様の優しい色合いです。日本の文化に触れてほしいで
すからね。時季じゃないのはわかっているのですが、手紙なのだから
いいでしょう。

折角ならライダーもマスターさんもこの地に伝わる物を見ておい
て欲しいというただの私の我が儘だし。

ギルガメツシユはこのまま最後まで進めば、きっと見ることになる
でしょう。記録にある未来と相違がなければ、ですが。

ソラウはもう帰ってしまいましたが、夢でなく現実でいつか見せる
機会があればいいなとは思っています。

「はい。ちよつと校正してね」

「俺は編集ではないぞ？ いや、人の書くものを見るのが嫌いなわけ
ではないが」

書き終わったものを見せれば、アンデルセンはさつと目を通して文
法が合っていないところを指摘してくれる。

流石は童話作家。自分が言われただろうことを言ってくる。

「うん、ありがとう」

合格をもらったので折りたたんで丸めて小筒に入れる。小筒は使
い魔の作り方を応用してあります。アンデルセンと共同で作った鳥
の使い魔の足に手紙を入れた小筒をリボンで何重か巻き付けてくく
り、ライダーのマスターの元へ行くように命令する。

そして窓を開けると勢いよく飛び立ち、見る間に青い空に溶け込ん
でいきました。

折角だしと暇潰しをかねて使い魔の目を借りて冬木市を見下ろし
ます。

広がった景色は見慣れているはずなのに不思議と知らない場所を見ている気分だ。まあ普段見ることのない景色だからだろうけど。

しばらく飛び、使い魔はライダーのマスターがいるらしき木立の中に入っていく。使い魔と彼の繋がりをつなげたので迷うことはない。バサバサと小枝にとまって、眼下で寝袋に入って寝ているライダーのマスターが見える。

しかし完全に寝入ってしまったている様子なので、ライダーがいないかと地面に降り立たせる。

『ライダー、イスカンダル王。いませんか？ キヤスターのマスターです』

少しだけ魔力を調整し、使い魔を通して声を発すると、ライダーは実体化して首を傾げた。

使い魔を一度空に浮くように命令し、その肩に乗せると「おお」と驚いたような声があがる。

『母に出かけるのを禁止されちゃったから、かわりに使い魔でお手紙を届けにきたんです。この鳥にくくりつけてるので、取ってください。桜の便箋で、お二人に目で日本を知ってもらえたら嬉しいな』

『そうかそうか。余のマスター宛でよいのか？』

『うん、起きたら渡してください。それとライダーはこの使い魔を彼の眼が覚めるまで持つてると、少しは魔力を吸えますよ。私からのお礼です』

『うん？ そんな礼をされることはしとらんがなあ』

首をしきりに傾げるライダーに軽く笑ってしまう。

惚けたふりをしているのかと思いつつそれに答える。

『ギルガメッシュとバーサーカーたちの戦闘の余波を遮ってくれたから、そのお礼です。マスターさんは送ってくれたし庇ってくれたし、感謝感激です。マスターさんは私が倒れてもキヤスターを倒すように言わなかったのもポイントアップですよ。本当にありがとうございます』

『よせよせ、その程度のこと気にせんでもよい！ 幼げな戦いも知らぬ子供を害そうなどと思えぬしな。それにキヤスターのマスター。』

お前は聖杯を望んでるようには見えなんだ。余がギルガメッシュを征した暁には余の臣下に下つてもよいぞ？ あの英雄王にも一目おかれたあの魔術！ あれがもうちと派手であれば文句なしだが。うむ、しかしキヤスターめ共々物怖じしないところとか、その年頃にしては見所がある」

楽しそうに笑い声をあげるライダーに、から笑いが浮かんでしまう。

まったくもって、王様というのはどうしてこう個性が強いのかな？

セイバーも遠目でみてもきりつとした美人だし。というのは話に脈略がないか。

『それはマスターさんに言ってあげてください。私も、アンデルセンも臣下にとりうのはお断りいたしますから。私にはそういうの考えてないですし。アンデルセンは……編集はもういらん、今は×切に追われずにいられるのを堪能させろと言ってますので』

「そうか、残念だなあ……。此度の聖杯戦争では振られてばかりだのう」

『まあ……皆だいたい何かしら望みを持ってたり仕える人がいたりとかしますからね。仕方ないですよ』

そんな感じでライダーの肩に使い魔をとまらせたまま会話をします。

現実でアンデルセンがあだこうだと文句をつけたりしてくるのに回線が混じったまま反論したりしていると「仲がいいのはよいことだ」と笑われたりした。

私のサーヴァント殿は反論したいようだが、私は「そうでしょう」といっておいた。嫌味たっぷり皮肉たっぷりな言葉は返ってくるけど、本気で嫌がってはいないからアンデルセンはやっぱりツンデレだと思えます。

太陽がだいぶ傾いた頃、だいぶ使い魔の魔力が尽きてきたのもあつてお別れします。

きつと、彼とはもう会えない気がするので、ここで話すことができたのはある意味よかつたかもしれない。

ライダーのマスターも目が覚めそうなので、ちよūdいだろう。

『またいつか、会えることを期待してます』

「おおさ。勝ち上がる余を遠くから見えておるがよい！」

『ギルガメッシュは強いと思います。だから……うん。ご武運を、征服王。私はどちらが勝とうが構いませんが、何にしてもあなたの心が晴れやかなまま終わるのを願ってます。それじゃあ、さようなら。マスターさん、ウェイバーさんにもよろしくお伝えください』

そう残して、使い魔との接続を切る。その後は自爆させるだけなので周囲に被害の及ばない上空に行つて自爆の命令をしておく。

眼を開けて時計を見ればそろそろ姉が帰ってくる時間だと思ひ横にしていた体を起こした。

そこへちよūdよく部屋の扉が軽くノックされて、返事を待つことなくすぐに開く。

ひよいと顔を覗かせた姉と数度会話をかわして、安心した顔をして姉は自分の部屋に戻つていった。母も姉も、心配性ですよね。

それ自体はとても嬉しいし、くすぐったく思えます。

気がついていないだけとはいえ、家族はこんな私を好いてくれますから。感謝の念が絶えません。

私もこの環境は、とてもよい、そして私の魂の記録の中では特に幸福なものだと思っています。

少しでも長く、この生活が続けばとても嬉しいです。

例え叶わないことだとしても、それでも願わずにはいられませんでした。

第十四話

私は恐怖を覚えません。私は怒りを覚えません。

そのふたつの感情を理解はできませんが、自分の心に抱くことはついでできないままです。

それは魂の色がどうしても精神に作用してしまうからです。

どこかの世界では、確かに表面的にそのふたつの感情を示すことはできましたが、やはり私にはそれを継続させることはできませんでした。

私という個の魂がここまで表層に出なければ、普通の人間としての振る舞いに問題は生じなかったのでしょうか。それは今や夢幻と消えた可能性です。

アンデルセンは、そんな私を魂の底まで見抜いたようです。

いいえ、夢に見てしまったのです。私が夢を見るその傍らで。

この夜。聖杯戦争の終わりの予感を身近に感じさせました。

そんな時に、無言でその物語を差し出されたのです。

人の心を理解し、人の感情を有し、しかし心の底では何も望むべきことも心を揺り動かす愛も感じはしないことをつづった、人の姿をした器の物語。

彼らしい絶望の影を感じさせる話ではありますが、物語の中で完成された美しい器は、色とりどりの花々に飾られたと締め括られています。

これはきつと、彼なりに感情を得ろという言葉の表しなのでしよう。……本当に、ツンデレなんですから。

でもそんな彼のことは、嫌いにはなれません。

ふと思えば私にはもったいない人が、私に関わってくれる。この上のない幸せだと思います。

いつの記録でも、どこかの点で、そんな人と関わることもあるのです。

だから私は人というものを嫌いになりきれないのでしよう。

自覚はなかったとはいええ、夢を渡す私は人の穢れを負いやすくありませんでしたから。

その穢れを払う方法を教えてくれた人にも、感謝は尽きません。

ええ……彼もまた、英霊の座についていることでしょうけれど。私には会う価値などありません。

いや……しかしそれは、今の私には関係のない話でした。

「狼煙、か。あれはここにいてるぞとかいう自己主張だろうな。目立ちたがり、いいやマスターを集めるものだろうな」

予感がするままに目を覚まして窓の外を見ていた私の隣にアンデルセンが立つ。

彼に「そうかもね」と返して、礼装という形で渡された彼の本^{物語}を撫でる。

「ねえ、アンデルセン」

「……」

横にある彼の顔を、覗き込みます。

私の方が身長が低いので、当然下から見上げる形です。

「あなたに、令呪をもって願^告います。あなたの身を蝕^呪む痛みが、この現界の間消えるように。……重ねて令呪をもって願^告います。あなたに、心からの感謝が伝わることを」

「……ハッ、お前は、やつぱり底なしの馬鹿者だな。こんな俺に、そんな無駄な命令を下すなど」

「馬鹿だ」と、困ったようにも呟くアンデルセンに、私は笑います。

きつと、この偽らざる感情^願が伝わったのでしよう。

「あなたの書いてくれた物語、大事にします。あなたは私との出会いを覚えていなくてもいいですから。ただ、どこかの読者はあなたの物語に確かに感謝をしたのだと。だから、うん。あなたのこれより未来のマスターが、あなたの書くに足る人物であることを願います」

「ふん、そんなのはわからんな。未来のことなど、現時点のこの俺とは一切関わりないとこだ。しかし……それでもお前の願いは確かに受け取った。いつか、どこかの召喚でお前の物語を再び書くとしてよ

う」

もつと悪態づくかとも思ったが、最後ということでも意外と素直になっっているようだ。

まったくもって、彼は私にとって得難きサーヴァントです。

この世界でこんなにも私を理解する者が増えるとは思いませんでした。私を理解するのは、大抵がどこか変な人ばかりなのですけどね。

私の表層意識は完全に『普通』の人間に近いと認識はしているのですが、人を見る瞳があれば、わかってしまうのでしょうか。

「お前の……いや。我がマスターであり、我が読者である、水谷響の未来に痛みのない安寧があることを願っておくでしょう」

囁くような男の声が、淡い燐光とともに消えかかる。

「ありがとうございます。アンデルセン。私のキャスター」

消えかけたその姿に笑って、手を伸ばします。

彼は残った半身を、消えかけの手を私の手に重ね小さく笑いしました。彼にしては珍しい皮肉の感じさせないものです。

「ああ……」

吐息のような声を最後に彼の姿はこの世界から消え失せた。

そして感じる寂しさは人間の機構として自然なことだろう。

これは、過去に幾度も感じたものですからわかっていきます。

感情というのは、色んな場面で見えてきて知っています。この肉体で感じるのは初めてのことはありませんが。

「うん。でも、なんだかんだこの二週間くらいは、楽しかったなあ」
楽しかった。楽しかったのです。

彼の記憶を見たときから、同類のものを除いてこの世界の誰よりも理解し得る存在だと思いましたが。

彼はきつと、魂の記録の中でもかなり特別だと思っています。

そこに恋愛感情というのはもつれ込まないですね。

私には、恋も愛も、理解はできても受け止めるだけしかできませんから。

私自身に備わっていないわけではないのですが、どうにも薄っぺら

いものでしかないです。

親愛も友愛もこれがそうなのだろう、ということではできませんけれど。ソラウとかね。

ただ、人の感じる他人への強い愛の心はどうしても抱けない。

強い感謝を幾人かには向けたが、そこにも恋も愛も違うものでしかないのです。

「……きつと、今夜で終わってしまうね」

運が良ければ、世界が私の生を許したのならば私は生きているだろう。

……残念ながらこの家は、狼煙のあがった市民会館からそこまで遠いわけではない。

今夜の戦闘の余波を被ってしまう可能性は高い。

一応結界は張るし、アンデルセンが作って置いていた礼装が幾つか残っている。

ないよりはある方がましという程度のもですが。

私は彼の作ったそれらを持って、ベッドに横になります。

ゆつくりと瞼を閉じ、やがて肉体は眠りにつきます。

目覚められたのなら、きつとそこは地獄なのだろう。

そんな確信にも似た未来を感じながら、私は白き魂の箱でその時を待ちます。

何時もと違うこの空間に首を傾げて確認する。

「は、な?」

ぽつん、と足元に転がっていたそれに瞬きます。

一瞬花の彼によるものかと思いましたが、すぐに違うと思う。……たぶんこれは、彼の物語の影響だ。

あれは私の表面ではなくて、深層に影響を及ぼすようだ。流石、アンデルセン先生である。

「まったく、理解したうえでこれなのだから、こ憎たらしいものですね。いつかまた会う機会があれば、文句をつけるところですよ、アン

デルセン」

思わず笑ってしまいながら、ソファに横になる様に寝ころび、つんとその花をつつく。

花弁を散らした傍からひとつ蕾が開くのが不思議です。

花から感じる暖かさに目を閉じながら、私は目を閉じる。

そうしてどこか遠くで、何かが壊れていく夢を見る。

金色の光り。赤黒い血。赤い炎。

誰かの悲鳴。誰かの怒声。誰かの悲嘆。

誰かの痛み。誰かの怒り。誰かの嘆き。

これはきつと、世界の隙間にあいた孔から見えるもの。

視すぎてしまったら、きつと囚われてしまうもの。

だから私は、それから目をそらして深く眠ります。

私にできることは、何時だってどこでだって、ありはしないのですから。

私にできるのは、ただあるがままのものを受け入れることのみ。

それは過去から続く、どうしようもない真実なのです。

他人の願いの皮を被ることはできるけれど、私はどこかで破綻してしまうからできない。

どこかの誰かのように、自身の糧に、燃料にすることも能わない。

どうしようもなく、見た目だけの見せかけだけの、私の友人以上の人形だと思えます。

私はでも、それでも人の生を歩くのはきつと、世界がそれを望むからなのでしよう。

私はいつだって、そうなのだから。

何かの犠牲となることだって構わない。私はそうでしか在れないから。

ふ、と耳を澄ませばパチリパチリと何かのはぜる音が聞こえてきました。

意識すればそれはどんどん大きく耳鳴りのようになる。

その音に引っ張られるように急速に精神が目覚め、肉体を起こす。

すると、開いた視線の先には、私を挟むように頭上で積み重なった瓦礫が視界に映る。

けれど、私の体は足に角材が乗っている他は問題ありません。足が傷ついてしまったことに何かの因縁かと感じつつ、上体を起こします。

手をついた先は、体を包んでいた布団だが、埃や石くずに汚れてしまっている。

瓦礫に角材が乗っているので僅かに隙間があったので、その隙間から無理矢理足を横に捻って手で引っ張りながら引き出します。膝より下だったので助かりましたね。

両足を出せたのでやっと落ち着いて、私はようやく周辺へと目を向けました。

瓦礫から見える先にはパチパチと炎が爆ぜる、天をも焦がすような赤い世界が広がっています。

「ああ、これは……」

私の回りには、炎の爆ぜる音しか聞こえない。

人の呻きも、聞こえてこない。

……きつと私が無事なもの、彼のお陰なのだろう。破れてしまった礼装を見下ろしてそう思う。

でも、彼の書いた物語は無事だから良かった。それだけが、私が今心配する事柄でした。

ここは地獄です。赤い灼熱の世界です。

世界に開いた孔は閉じ、その災禍をこの一帯に撒いただけ。

聖杯の、黒き泥はこの世の全ての悪を詰め込んだもの。

先程夢で私が視ていた孔は、黒き聖杯の開いた点だったのです。

家族はきつと、この土塊のどこかに埋まってしまったでしょう。

私のいる周り以外は瓦礫と炎しかありません。呻きさえ、聞こえてこないのです。

その喪失の悲しみを抱きながら、私は膝を抱えて本をその中に包む。

ある程度炎が収まらない限り、出ても助かりはしない。焼かれたら

痛いですし。

やっぱり死ぬのなら痛みはなく、というのが私の信条でもありますから。

そこだけは譲れません。いいえ、それだけはですね。

どんな死でも構いませんが、やはり痛くなければそれがいい。

そんなことを考えていただけでどのくらいの時間がたち、どのくらいの人が死んでいったのかはわかりません。

でも、それでも私は、彼に見つけられました。

彼。私を、見定めるかの王は。

ただ裸に赤い布を纏っただけという凄くコメントのしづらい格好で、でした。

まるで犬か猫のようにひよいつと掴み上げられた上にそのような姿だったもので、複雑な気持ちになってしまうというものだ。

彼は死にはしないと思っていたのですが、さすがにそれは予想できませんでした。

ギルガメツシュの気紛れかとも思いましたが彼が私を助けるというのならば、拾うというのであれば、それを拒む必要も意味もありません。

だから私は、ただその赤い瞳を見つめました。

私はまだ世界に生きることを認められたのだから。

認められる限り、私は決して死ぬことはないし死ぬことはできないのです。

そこに喪う悲しみはあれども、私は今までもこれから、その在り方を変えることはできないですから。

ギルガメツシュに抱えられて遠のく赤い世界を見つめながら、私はそつと微笑みました。

「おやすみなさい、お父さん、お母さん、お姉ちゃん」

家族の顔を思い浮かべながら、私はその死の安らぎを願って別れを告げます。

私の異常性を感じながらも受け止めた、優しい家族には笑顔で以て

別れるべきだと私は思います。

くつくつとギルガメッシュが喉を鳴らして笑われてしまいました
が、そんなに可笑しいことだとは思いませんよ。

いえ、普通の人間の反応ではないとは自覚していますけれど。

彼の反応に苦笑してしまいがちながら、私は目を閉じてしまいます。

少しくらい家族の夢というものが見えたらいいなど、そう願いま
す。

エピローグ

冬木の新都の大災害から三年が経ちました。

私は一時、聖堂教会にお世話になりましたが、母の兄が私を引き取り、五年前に亡くなった祖父母の家をそのまま与えられました。

なんでも、伯父は奥さんと別の家をもっているそうでそちらにいるそうです。だからと言って仲が悪いわけではありませんよ。

……ただ、母が亡くなってしまったことに、一家で私だけが生き長らえてしまったことに喜びと悲しみが入り交じってどうにもならないようでしたが。

それ自体は悪いとも言えませんので、伯父からは両親の残った遺産から適度な金銭を渡され生活をしています。

ついでにいうなれば伯父の娘さん、つまりイトコが私をとんでもなく嫌っているので離れて暮らした方が子供のためになるという判断でもあります。

離れてしまうことで苦勞をかけさせる分伯父が毎日送り迎えする、と言ってくれましたが、その関係で週に何度かという程度にしてもらいました。ゆくゆくは無くしてしまうつもりです。

それに一応、一時的にお世話になった聖堂教会の神父が、近所でもあるから定期的に様子を見に来てくれることになったので伯父も安堵しているようです。

聖堂教会の神父。言峰綺礼さん。やはりというか、ギルガメッシュのマスターに代わった元アサシンのマスターであります。

知識としては識っているとしても別に彼に何かがあったのかとか聞く気もないですし、彼も受肉してなお王様なギルガメッシュからの命令ということもあって従っている風情でした。

命令とはいえ、見ていると対等なところもあるようですが。

まあでも、流石に引き取った孤児となった子供たちを魔力供給源にするという発想はないな、と思いましたけどね。

何故かギルガメッシュが愉しそうに言ってきたので、私の精神衛生上よろしくないから私から魔力を持っていけと契約してしまったの

ですけども。あの王様私がそう言うてくること狙いなのが丸わかりです。どちらかといえば、私がどう判断するかというのを愉しんでいる様子でしたが。

すでに息も絶え絶えとなった子を除き、子供たちはそれぞれ本当にそうなのかはさておき、親戚筋の方に引き取られたり、見るからに怪しげな人たちに引き取られたりしてその姿を聖堂教会から消していきました。ほぼ虫の息だった子供はすでに安らかな眠りについていきます。

私はその中でも最後になったので私以外がないことは間違いないです。これで魔力供給源にしていたら「マジナイワー」と言うのは間違いなしですよ。まったく。

ええと、後はそうですね。

ライダーのマスターとは、彼のアルバイトをしている期間に数度会うことができました。

お互いそんなに聖杯戦争の話をすることはありませんでしたが、簡単に日本語の指導役みたいなことをしたので嫌われてはいはずです。

彼のホームステイ先にも伺ったことがありますし。

彼は私が家族を喪ったことを聞いてというか、知って割りと親身になつてくれたのです。ありがたいですね。それに、本当に優しい人です。

そこで魔術の基礎を習ったのですが、彼はすごく教えかたが上手で思わず夢で会ったソラウにそういう話をしてしまいました。

ソラウは私が教えて良かったのにと少し嫉妬のようなものを見せつつ、何かを考えた様子で心配してしまいました。

彼女と婚約者さんは、いろいろと派閥争いでごたついているようですが、資金を貯めその後帰国したライダーのマスター、ウェイバーさんも巻き込んで何とか乗りきったらしいです。

そういつたことについて詳しい話は聞いてないですが、近々婚約者とは結婚するそうです。

その上で、早急に魔術刻印を一族の誰かに継がせて、更にその人か

ら自分の産んだ子供に継がせるとのことでした。

なんとも、ハードな人生を歩む友人であります。

無理はしないでほしいなと思いつながらなんだかんだソラウト、彼女の婚約者さんの家の後見を受けて奔走するウェイバーと交流は続いています。

ここ一、二年はエアメールを送ったやり取りなので時間はかかれども楽しいですよ。

あと、直接関与したことも顔を合わせたこともないのですが、セイバーのマスター衛宮切嗣は一人の少年を養子に迎えて、時折海外に愛娘を取り返そうとその家に行っているようです。

そう言峰がちらりと教えてくださいました。なんでも、今の彼は特に脅威にはなりえないし興味も失ったがそれでも動向を気にしてしまふのだそうです。執念深いというか、何というかですね。

そんなことはともかくとして、彼の養子である子とは同級生ですので、関わる機会はないにしても話の節々にその人の影響が出ているのを感じられました。

だからと言って何かある、というわけではないですけどね。

間桐の家とか遠坂家とか特に関りは持っていないので割愛します。遠坂家の娘は同級生とのことですし、いつか関わる機会も出てくるかもしれませんね。

兄弟子に当たるのだという言峰は会わせる気はないようですし、私も会おうとは思っていないのでそれでも構わないでしょう。

「さて、今日は掃除しないとね」

ぽかぽかと暖かい春の日射しに洗濯物を干し終えた私はうんと背伸びをする。

一階建ての家だが一人で管理するのは骨が折れる。伯父は週四ぐらいの頻度ではくるけれど、片付けはてんでだめな人なのだと思えば、伯母が言っていた。

彼女は日中私が学校に行っている間、夕食を簡単なものとはいえず作ってくれているので実にありがたい話です。

まあそんなこともあると納得して、それ以来自分でできる範囲のこ

とはするようになっていますが。

料理も土日の内に深山町にある伯父の家にお邪魔したりしているし、たまに教会で作れと王様に引つ張られたりすることもある。

ギルガメツシユにはたまに魔力を根こそぎもっていかれることがあるのですが、何をそんなに使っているのやら。

祖父母の使っていた部屋と自分の部屋、それから水回りの掃除を終わらせると、あんなに高い位置に日がのぼっていたのに、今はすっかり傾いてしまった。時間の経過は早いね。

今日は伯母もこないの、残っている食材を使って自分で晩ご飯を作ります。

凝ったものを作るのは面倒なので、簡単にチャーハンと付け合わせにサラダで完成です。

そんな簡単なご飯を食べ終わってからすることもないので戸締りの確認だけしてささっとお風呂に入ってしまった、髪を乾かしてからお布団に籠る。

ここ二年冬場から初夏にかけてたまに朝目が覚めたらギルガメツシユが暖房がわりに私を腕におさめていることもあるが、それ以外は至って平穩で何事もない毎日を過ごしています。家の鍵は随分前に複製されてしまったので諦めました。

学校などに行けば被災者の残った子供ということでも最初の頃は腫れ物を触るような扱いでしたが、まあ年がたてば気にもならなくなりました。

元々そうしたことは気にしていない方でしたし、そんな扱いをされた記録はいくつもありますからね。

いつも通り夢を渡った後に三年前に比べて色が少し増えた白い空間に戻る。

普段はその花やら何かの飾られてゆくその空間にいますが、たまにぱったりと意識を失う時は花の彼のところに行ったこともあるので、その際に渡された輝く花も在ったりします。それは一輪だけです。

あの人、私を支点にしてこの世界を観測するつもりなのです。嫌だ

とは思ってないのですが、私生活を見られるのは女として恥ずかしいです。流石の私もそういう恥じらいはもっていますから。

まあそう訴えても彼は笑って流すだけでしたし、ギルガメツシユにもそれは通じないですが。

魂の記録のインストールもあの戦争でだいぶ進んできたので、器の中で区画ごとに取り分けているような状態となっています。更に要すれば、フォルダわけしてるみたいな感じですね。言葉で表現するならば、おおよその時代ごとや世界の種別、名前のリンクをしているものと、という感じでしようか。

それもいつかきつと、語れる時がくるかもしれないね。今の私から別の私に繋がる同じであって少しだけ違う私の可能性の物語が。

今はまだ、この先に続く人生を歩まねばなりません。

いつ終わりの時がくるのかは今の私にはわかりませんが。

その時まで、今しばらく私の物語は続くことでしょう。

花が開く、いつかの時まで。

——女の話をしよう。

女はただ日常に埋没した。

変化ばかりの。変化の少ない。普遍的な日々。普遍的な人々。

そして時々^{予想外}の非日常。

女は平和を愛していた。

けれどその愛は一方的なもの。

誰に求めるわけでもない愛など、愛と呼ぶにはあまりに稚拙だ。

けれど女はそれで良いと言う。

それがいいのだと人形^女は笑う。

では日常が日常でなくなったならば？

そうなったのならば女はどうなるのか。

答えは変わらない。

何故なら日常とは変化の日々だからだ。
変化する日常が日常であるからこそ。
女はそれを容易く受け入れる。

女はそうして受け入れ続けた。

けれど何事も限度というものがある。

器人形の容量を越えたそれらは受け入れる器人形を壊そうともがく。

けれど器はまだ未完成な土塊。

容量が足りそうにないならば新しい土塊をつけたすだけ。

そうして器人形を大きく広げしかし美しく見えるようにけれど決して

脆くなきようにと整えられてゆく。

乾燥させて焼きあげて更に美しい模様化粧を携えられながら。

焼き上がった完成品は愛されるべき至宝となるだろう。

その作品人形の表層を人は心に浮かべて。

ではその中身はどうであろうか。

人形器の中身は空洞でしかない。

しかし女は人形であれども人を理解する機構を持ち駆動する。

模倣することを覚えて自身で自身の機能を積み上げていく。

そんな自動人形人間へと変質感情を覚えたした女はそうして生まれてまた壊れるこ

とを繰り返し繰り返し行う。

故に人形の中身は不良品幾多の人生を詰め込んだ、とっておきのガラクタ人のなり損ないだ。

しかし人間は美しい人形ガラクタの見た目表層の感情だけを見て評価判断をする。

その真実を知ろうともしない人間たちは彼女に花を添えてゆく。

人形が更に美しく華々しく朽ちることのないままであるようにと。

そして人形はそれを受け入れる。

それが人形が人形である所以。

感情を理解し感情を模倣し感情を表す機構をもった自動人形の末。

しかしてその人形女の未来はいつたい何色に染まってゆくのか。

それは何時かのお楽しみ。

人形女を変える何かに出会うことがあったのならば。

夢を見る女はその人きつと、美しく花を開くことでしよう。

番外編

アングデルセン

真つ黒い夜に、白い影が浮かび上がる。

それに気が付けば波のように橙の火が広がっていく。

「これは……」

零れた声は空気を震わすことなく霧散する。

だからこそこれが夢であり記憶であることがはっきりと知覚することができた。

それは誰の夢か。

『×、それではな』

『はい。どうか、お元気で』

男の硬い声に白い影は声に笑みを乗せてふわりと袖を広げて男に背中を向ける。

男に背中を向けたことよって夢を見る己にはその顔が見ることができた。

『恨むのであれば、己が運命を恨め』

『……はい』

答えたその顔は穏やかな笑みだけが浮かぶ。

まるで喜びしか知らないとでもいうような笑みは、あまりにもこの黒い夜には不釣り合いだった。

だからこれは、間違いなく己のマスターとなった少女のものだと確信する。

『今日がその日なのですな、××』

ジジ、と耳障りな音がしたかと思えば少しだけ場面が変わり一人の女と少女が対面していた。

少女は先ほどと変わらない笑みで頷き、差し出された手にその小さな手を重ねた。

今のマスターよりもほんの少しだけ成長したような姿は、今よりもずっと感情の振りが少なく見える。

それが成長したからなのか、そうではないのかははつきりとは判らないが。

『あなたは恨まないのですか』

『……恨むことができればよかったです。私には少し、難しかったようです』

その瞳には怒りも憎しみも、ましてや悲しみの影もない。

それを見つめた女は僅かに困ったような顔をして重ねた手を離して「そうですか」と小さく頷く。

『あなたには、世話になりましたね。……最後の護衛を、お願いします』

『……ええ。お任せください、姫様』

『姫なんて……そんな柄ではないのですけどね』

やっと感情らしいものをみせた少女に、女は微笑みしずしずとその背後へと回り込んだ。

少女はその気配を感じ取って、長い黒髪を風に遊ばせながらまた笑みを浮かべた。

それはひどく美しく、そして人間性を失った人形のような伽藍洞なものだった。

だからこそ、己がマスターに感じた虚ろいだ中身のひとつを理解できた。

だが、ピースがまだ足りない。これだけではあそこまで感情を出すことはできないはずだ。

それを知りたいと思うのはきつと、己の中の何かを刺激するような何か、このマスターにはあつたからだろう。

その夢は召喚されてから三日目に見たものだった。

翌日も、そのまた翌日も、アンデルセンは夢を見る。

いつかの時代の、名も知れない女たち少女の生きた記憶の残滓を。

その身に願いを、喜びを、慈しみを、信頼を、心配を、親しみを、感謝を、期待を、希望を、欲望を、悲しみを、憎悪を、嫌悪を、怒りを、嘆きを、嫉妬を、罪悪感を、苦しみを、痛みを、呪いを、絶望を押し付けられ続けた女たち少女の夢を見た。

いつまでもいつまでも、繰り返し贅となる女^{少女}たちはしかし、怒りも憎しみも、絶望をも抱かなかつた。

まるで感情という機構を持っていない人形のように。まるで笑うことしか知らない無邪気な子供のように。

だから彼は、それを嘲笑った。

「愚かな女だ。そして、だからこそ俺が召喚されたのだろうよ」
己が恋した少女と似ているようで全く違うのに、それと同じものを持つマスターだからこそ。

少女と違うとしたらそれはいつか訪れる幸福のためではなく、ただ平穏な日常をこそ愛していたことだろう。普遍的な日常を。刻々と変わりゆく日常を。

いつか来たる己が身を差し出すその時まで、ひたすらに。

「ああ本当に、人間は醜いものだ」

少女たちに犠牲を敷くだけの醜い記録は否応にも己が恋した彼女に起きた悲劇を思い起こした。

だからこそアンデルセンは人間の醜さを罵る。己が信じてしまった過失をも含めて、須らく醜く、汚く、価値などない。人々の言う愛など存在さえもせず、無意味なものなのだ。

此度の夢の中の少女が、白く化粧されていくのを見つめる。

夢だからこそ、その魂に刻まれた記憶だからこそ、己には何もすることができやしない。

それは生前、少女の最期しか知ることの出来なかつた自分への報いか。

ああそれさえも、なんて無意味なことだろうか。

「くそ、このマスターは異質にも程がある。魔術にはそこまで詳しくはないが、明らかに常軌を逸する人格、記憶…魔術師というなら起源、か？ 聖杯戦争などに関わることがなければただの子供でいられた…いや、それはないか。どうせこの夢のように何かに巻き込まれ、何かに捧げられ、何かに飲み込まれるのだろう。それが、この女に架せられた運命というべきものなのだろうな。俺からすれば気に食わんことこの上ないが」

ふん、と鼻を鳴らして目の前の少女の頭を叩く。

現実では確かに触れることができるのに、今はただ空を搔くだけだ。

その無駄に微笑む横顔を叩きたいのに、それは叶わない。

「とにかく腹が立つ。彼女に似ているのに俺にも似ているマスターが兎角腹が立つ。何故抗わない。何故変わらない。何故お前は恨まない」

いいや判っていた。この女は善いも悪いも理解していると。そして人の感情を受け入れては模倣する、機械のような人形なのだ。

決して報われることのない死なのに恐怖も悲嘆もない、ただ無為でなければと願うだけの女なのだ。

目の前の少女が、くべられていく火を見つめている。

今よりも幼い肢体が火に巻かれ、火に焼かれ、火に炙られてゆく。

ああだのにその顔に浮かぶ、淡き微笑の何と美しいことか。

『例えこの生が意味のないものだとしても』

少女の唇が、言葉を形作る。

橙の光の中で、誰に聞かせるわけでもなく。

『わたしは、それでいい』

ただ、無為でなければと囁く声のなんと儂いことか。

その顔をじっと見つめ、彼はまた指を伸ばした。

焼け爛れていく皮膚に、白く細い手足に、色素の薄い髪に、触れられることはない。

『誰に知られなくとも、わたしは』

その続きはついで形になることなく崩れ去った。

まるで脆いガラス細工のように、乾ききった砂の城のように呆気なく。

そして、彼の意識は急速に遠のいてゆく。

夢から覚めるかのように、夢から追い出されるように、夢から逃がされるように。

ぱちりと瞬けば、薄暗い視界に見慣れつつある天井が見えた。

横たえさせていた体を起き上がらせて首を巡らせれば、己のマスクである少女がすやすやと健やかな寝息を立てて目を閉じている。聖杯戦争の最中だというのに、無防備に過ぎる姿は、だがだからこそ少女らしいと思った。

「フン、間抜け面だな」

眠っている少女に意味のない罵声を零して、ずれた掛布団を掛けなおす。

きつと少女が起きていれば珍しいだの何だの言うのが予想できたが、起きていなければ知ることもない。

暫くその寝顔を見つめ、今まで見てきた夢を思い起こす。

「……」

死に続ける記憶を持つ女は、何故狂わないのか。

それはただ、痛みではなく無為への畏れしかないからなのだろう。意味などなくとも、誰か何かひとつだけでも残っているものがあるのならそれでいいと願うからこそ、この女は狂えない。

もしかしたら、それこそ女に架せられた運命と呼ぶべきなのかもしれない。

「だが、お前はそれでも運命を呪わないのだろうか」

怒りも恐怖も模倣することしかできない人の皮を被ることしかできない人形の如き女には、さてどんな物語が似合うのだろうか。

バッドエンド。それはこの女には十分のはずだ。

ならば己が書くべきは。

「……いいや、まだ時間はある。ならばゆつくりと、水谷響という女を書くでしょう」

すでに戦いの火蓋は切られている。

時間はそう多くあるわけではないが、書き上げるには十分な余裕があるだろう。

筆が遅い方ではあるが、それなりにやる気は出てきた。このまま筆が乗れば、書けることだろう。

とは思ったものの翌日に乗りかけの筆を無理矢理取らされるとは

思わなかったのだが。

この鬼畜め、と罵りながら書き上げた予定の三割程度のそれをもう一度見直す。

うむ、完成前に改めて文章校正をしなければな。

だが、出だしさえ書けば後はすぐに書けることだろう。

珍しくやる気の出ている自分に聊か笑いが出てくるが、そうだな、彼女のこれから先の物語を綴った後に今まで見てきた記録を書くでしょう。

……無断で書くとなら何でも怒るか？ いや、マスターのことだ。

怒りはしないだろう。

眠る顔を見て、アンデルセンはふと笑みを零した。

彼女が変わるだけの土台を作るのも、一興だろう。

それを最後まで見届けてやることできないことだけは残念だが、それでも彼女の長い長い、世には残ることのなかった世界賛の犠牲者者の物語を垣間見えたのだからそれを召喚された報酬と思うことにする。

世界が彼女を犠牲と望むのならば、己くらいはこの少女の未来を願ってもいいはずだ。

だからそう。物語の締めくくりは、その未来に手向けたものにする
としようか。

セイバー陣営

衛宮切嗣は今日も夢を見る。

初めて恋をした人が笑う顔を、変わってしまった瞳を。孤島が地獄のような悲愴に満ちたことを。

厳しくも優しい唯一の肉親である父を自身の手で殺したその時を。

生きる術を戦う術を教えてくれた母のようにも思った女性を彼女の乗り込んだ飛行機もろとも殺したことを。

戦場での嘆きを、怒声を、死を見てきたことを。

彼は今日も浅い眠りの淵で夢を見る。

『ケリイはさ』

ああ、今日の夢も飛び切り最高で、最悪の。

『どんな大人になりたいの？』

己の無力を知る、ひどい夢だ。

サーヴァント・セイバーのマスターとして振る舞うアイリスフィールは戸惑っていた。

前日ランサー陣営の急襲によりボロボロになった城に、今日もサーヴァントが来たのである。襲い掛かってきたなら対処のしようがあるものの、あろうことか目の前のライダー……征服王イスカンダルはセイバーと飲み交わしに來ただけだという。

戸惑うのも無理はないことだったろう。ライダーのマスター本人も知らされていなかった様子であるし。

ひとまずライダーが室内ではないところに案内せよと言うので何かしら敵対行為をされてもある程度足止めすることも可能な中庭に案内し、セイバーとライダーは向かい合って中庭の中央に腰をおろす。

マスター二人は少し離れた位置でその様子を窺うことにした。

ところがこの二人だけならばまだよかったというのに、事もあろうかなんとアーチャーまでもが登場した。……その腕に娘と同じ年頃か少し年下に見える少女を抱いて。

「こ、子供……？」

眩き、アイリスフィールは己が動揺していることに気付く。

子供だからと、何だというのか。きつとアーチャーが少女趣味なだけだ。

少々古代の王に対して偏見を抱いたかもしれないが、そんなことは些細な事だろう。

「ええと、それでアーチャー？ その腕の娘は、一体どういうことだ？

まさか、拐かしたわけではあるまいな」

ライダーの言葉にそのマスターも小さく頷いている。アイリスフィールも両手を握りつつ内心同意している。

こんな時間に聖杯戦争に関係のない子供を連れてくるなんて、どうかしている。

嫌な胸騒ぎがするのきつと、この王たちが語らうと酒を片手に中庭に座しているからに違いない。

「これなる童子は、何、王たる私の姿を再認識させるために連れてきたまでよ。なあ響？ 貴様も私の威光を見たいであろう？」

「別に、そんなことひとつも言っていないし……王様がおうぼー、なんだもの」

響、というのが少女の名前だろう。日本人らしい名前だ。

そしてその声も、まだまだ幼く眠たいのか少しばかり舌足らずで、ああ。今頃イリヤスフィールはどうしているだろうか。

寂しく私たちの帰りを待っているのだろうか。まだかな。まだかな、と。

じわりと湧きあがるものを顔に出さないようにアイリスフィールは奥歯を噛みしめて、セイバーの背中を見つめた。

王三人の問答は平行したものだと感じられた。

それぞれがそれぞれの王の在り方、というのを抱いているのだから

それも当然の帰結だっただろう。

セイバーの王道を笑うアーチャーに、その膝の上に乗せられた少女が「うるさい」とその頬を叩いたことでアイリスフィールは目を瞠った。

彼のギルガメッシュ王に苦言したからではない。

いや、少しだけそれもあるかもしれないが。

幼いその手の甲に、赤い令呪が宿っていたことに目を奪われたからだ。

「令呪……？」

ライダーのマスターもそれを見咎めて、小さく呟いている。

だから目の錯覚などではないのだと、娘と同じ子供が聖杯戦争に参加しているのだとはつきりと認識する。

「……、っ……」

聖杯戦争なのだから、動揺しては駄目よ。

駄目だ、と波立つ心を宥めつつアイリスフィールは唇を噛んで変わりそうになる表情を抑え込んだ。

そしてこの場を囲うアサシンのサーヴァントが現れたことよって王達の酒宴は終わりを告げた。

カラン、とライダーの掲げた杯が地面へと転がり、アサシンは嘲笑う。

そうして展開するのはライダー、イスカンドルが宝具。アイオニオン・ヘタイロイ王の軍勢である。

強い熱風が吹きすさび、一瞬目を閉じたその間に辺りは広大な荒野と大砂漠が覆い、幾人もの戦士が雄々しく声を上げた。

しかし、だ。征服王の宝具もさることながら少女と英雄王の傍らに現れた少年も気にかかった。

霊体化していたということはサーヴァントで間違いはないはずなのだが、その見目は欠片として戦闘ができる様子は窺えない。

……いや、一目でも見ておらず情報のない残るサーヴァントといえどばキヤスターしかないなので、魔術師であるということ踏まえれば一見した戦闘能力の無さは当然のことなのかもしれない。その見目

が幼くなければ、アイリスフィールはここまで混乱しなかつただろう。

（こんな少年まで、英霊なの？ 一体どんな逸話を持っているのかしら……）

まったく予測の出来ないその姿に該当するものがないかと考えを巡らせてみるものの、まったくと言っていいほど思い浮かぶことはなかった。

どころか、少女のことがますます気にかかることになり、心が痛んだ。

（キリツグは、どう思うのかしら。こんな、幼い子がマスターだなんて）

イリヤスフィールと同じ年頃に見えるということは、実際はそれよりも少し年下の幼い子供だということだ。

夫である切嗣はどう判断して何を思うのだろうか。

……いいや、彼ならばきつと何か手を打つだろう。あの少女が死することのない方法で、きつと。

それは正しく、自己満足にすぎない願望でしかなかったけれど。

アイリスフィールはどこか遠く娘の面影を重ね、少女の生を願った。

全てが終わって自分のいない未来で娘と少女が友人になるのも素敵かもしれない、なんて空想をも思いながら。

戦車を呼び出しライダーとそのマスターは

多少居心地は悪そうな様子だが、安心したような顔で英雄王の胸に頭を預けて眠る少女を抱え直し、彼の王は幾つかキヤスターと会話をしたかと思えばその体を少女を抱える腕とは反対の腕に抱え、セイバーに視線を投げかけた。

「耳を傾けることはないぞ、セイバー。お前は正しい。己の信じる道を往くがいい。人の身に余る王道を背負い込み苦しみに足掻くその苦悩、その葛藤。慰みの音としては中々に上等だ。精々励めよ、騎士王とやら。クツ、ハハハハハ」

キヤスターが嫌そうに顔を顰めるが気にも留めず英雄王ギルガ

メツシユは空へと消えていった。

それを見届けたアイリスフィールはセイバーに氣遣わし気にその名を呼んだ。

「思い出したのです。アーサー王は人の気持ちが変わらないと言い残してかつてキャメロットを去った騎士がいたことを。……もしかしたら、あれが円卓に集まった騎士たちの誰もが抱いていた言葉なのかもしれません」

苦しく硬い表情のセイバーに、アイリスフィールは掛ける言葉を様々な想いと共に飲み込んだ。

B a d e n d

十話でもしライダー陣営が入ってきた時に結界が壊れたらパキン、と何かが砕け散る音が聞こえた気がした。

その音は錯覚なのだど理解していたけれど、硝子が地面に落ちて砕け散ったように呆気なく脆く、結界が破れたのだと私の全身を駆け巡っていた魔力が訴える。

ギルガメツシユとバーサーカーの戦闘が結界を砕いたことで、その場で力を行使していた私にその反動が押し寄せる。

もしも戦闘が終わっていたのなら自らの意思で結界への魔力供給を切って事なきを得たのになあ、と思考しながら自分の意思に関係なく体が地面に倒れたのを感じる。

「おい！ マスター！」

心配そうな顔をして私の顔を覗き込んできたアンデルセンに、私は返事を返そうとした。

けれど意思に反して私の喉はひゅうひゅうと風を切るような音しか出なくて眉をしかめる。

……いや、しかめようとした。

「お前……キャスターのマスター？ って、どうした!? お前、血がっ！」

どうしてだろうか。全身が焼けるように熱くて、痛くて、苦しい。

それに少しも力が入らない。眼球を動かすことさえままならず、私の視点はアンデルセンを捉えたままだ。

彼の物言いたげな、不機嫌で、心配そうな表情を見ているだけだけれど、不思議とそれが落ち着きました。

だから、ああ、私はこれから死ぬのだなと理解してどうにか乱れて千々になつていた精神を一纏めにして、切れかけた糸^{パス}を掴まえました。そして、私のキャスターへと、念話を繋げます。

『宝具、使ってもらえば良かったなあ』

『……今さらだな……』

『うん。私の判断が遅かった。これには反省。……、それは私の自己

責任だから……ねえアンデルセン。親愛なる私のキャスター。お願いだから、そんな顔しないで』

ライダーのマスターが必死になって私の傷を手当てしてくれている声と音を聞きながら、私は夕暮れの中の美しい蒼を見ながら笑いました。……いいえ、笑ったつもりだ。

『僅かな間だったけれど、あなたとの生活は、とつても、面白かったよ。あなたは文句ばかりだし口が悪いしツンデレだけど』

『……うるさい』

『私は、アンデルセンがいてくれて、良かったよ。うん、いつかまた巡り会うことがあったら、面白いね』

蒼の向こうに、きらびやかな金の光が見える。

そして、遠いはずなのにその赤い瞳と目があつて、そうして彼の王様の言いたいことを汲み取ります。

『楽にしてやろう』

彼は横暴で、優しい王様です。傍若無人でアンデルセンと私で遊ぶのが好きで、人を振り回してばかりですが……私なんか慈悲をくれるんですから。

『……お前は、馬鹿で愚かで……』

『うん？』

『……どうしようもないほど、死と痛みに好かれる奴だな』

『そうかも。世界にそうあれかし、と願われてるのかもね』

『冗談を言え。……だが、ああ。お前は』

金の波が、彼の背後で揺らめいた。

だから私は最後の力を右手に振り絞って、横に振ります。

ライダーのマスターの焦った声を聞きながら、アンデルセンとの最後の会話に耳を傾ける。

『俺のマスターだ』

最後の一瞬、ギルガメッシュのゲートオブバビロンから射出された槍がアンデルセンの頭を貫き、私の額を貫くまでのほんの刹那。

コンマの瞬間だったけれど、それでも私は感謝しました。

そうやって、言葉にしてくれたただ一人の人に。

痛みを思い、解放してくれた王様に。

私を助けようとしてくれた聖杯戦争で本来敵であるはずの存在に。

離れた場所で戦う夢の中で知り合った友人に。

異物である私を愛し慈しんでくれた家族に。

感謝を。

ギルガメツシユの魔力供給源のあれ（五次直前くらい）

視界は朧に、けれど意識はその眩い人を捉えて僅かに残る器官を駆動させます。

殆ど無意識的ではありませんが、精神も魔力不足のために半分以上休止させられているために致し方ないこと、でしょう。

今日はこうして思考できているだけまだマシ……なのででしょうか。

「くくっ、喜ぶがよい。聖杯戦争が再び起こるぞ」

上機嫌に何か、たぶんお酒だろうものを飲みながらギルガメツシユは嗤います。楽しそうに。愉しそうに。

恐らく頭に相当するだろう部分に負荷がかかった気がしました。自分の体なのにどこがどこなのか、さっぱり感覚がわからないのですが、そうだと思えばきつとそうなのでしよう。

「だから響。我は今までの貴様の献上を無駄にはすまい。これだけの魔力が満ちているならばエアも満足することであろう」

私の表面を撫でられているような感覚を覚えながら、ゆっくりと意識が拡散していくのを感じました。

結局王様が何を言っていたのか理解できないまま、機能停止している私は、また夢と現、いいやその狭間でもない何かに漂いながら息を続けます。

SN編 第一話

かの大災害から10年が経過した冬木の都市。

いまだにその爪痕を残した場所を復興させることも出来ず、その火災のあった一帯は公園になっています。

当然、私の実家があった場所もその内に含まれていますけれど。

そう。私、水谷響という一個人は家族を喪って10年が経つので

す。
私は母と父、姉の死を悼み寂しく思いましたが、人として通る道故に割りきってはいません。これを心無いと言う人もいることでしようけれども、そんなことは自覚しております。実際従兄弟には気味が悪いと嫌われてしまっていますから。

しかしそれは特にどうだっていい事実でしかありません。幾多もの方が亡くなってしまったのも悲しいことではありますが、やはり私としてはそれまででしかない感傷です。

何故今になってそんなことを言うのかって？

答えは簡単です。

聖杯戦争が、10年という短い周期をもって、この冬に再度始まると言われたからです。

ならばその話の主人公となった少年と、同じ境遇と言って差し支えない水谷響というものにどんな差があるかということとは言っておかねばならないからです。

私は彼のようなどうしても、どうしようもないその感傷を、感情を抱くことはできませんから。

他人の分の荷物を、私は背負うことはできません。理想を抱くことも強い願いを抱くことも、です。

私は少なくとも、痛くない死に方をするこゝろしか望みませんから。まあ痛くとも死んでしまう時は死んでしまうので、それはそれで受け入れますけれど。

「響、今日から学校か。……いや、昨日からだったか？」

一人で祖父母の家に住みはじめてもう八年が経ちます。

その間もこの声をかけてきた金色。英雄王ギルガメツシュと、彼の住みかでもある教会の神父の言峰綺礼がこの家に来るので、一人の時間がそう多いわけでもありませんでした。

お二人とも、何故か私の在り方に興味と面白さを感じているようです。すから。それで来るのでしょうかね。

まったく困った趣味の人たちです。

ギルガメツシュ何て特に、中学の半ばには……というのはあまり関係のない話になりますから割愛するのでしょうか？」

「そうですね。今日の晩御飯のリクエストですか？」

「今宵は酒によくあうものを出すがいい」

「わかりました。ギルガメツシュ、あんまり散らかさないでくださいよ？」

ふんと鼻で笑って手を振った彼は明らかに人の話を聞くつもりはないらしい。

まあ何度も言ってきましたから、聞き飽きたのかもしれませんが。というかたぶん、最初の頃はともかく今は聞き流していると断言できます。

まったく、困った王様です。

「それではいってきます」

どうせ王様には勝手に出入りされますが、戸締まりを確認して学校に向かいます。

私の横を同じ学校の生徒が足早に通りすぎるのを見ながら無心で足を動かして校門を抜けると、運動部の朝練の声が聞こえてきます。

私は部活には何も所属していませんので、少し微笑ましく思えますね。

「おはよう、水谷さん」

「うん。おはよう」

教室に入ってクラスメイトと挨拶をかわし、自分の席に座る。

しばらくすればチャイムが鳴り響き、担任の藤村大河が駆け込む。

先生はいつでも元気なので見ていて飽きないです。それに生徒をよく気にかけるいい先生だと思います。

今日も平穩で代わり映えのない授業を受け終われば帰宅するのみだ。

帰りがけに食材を買い足して家へと帰ると、王様は勝手知ったる様子で寛ぎ自分で買って置きっぱなしにしているゲーム機を操作していた。そんなことをしているということは新しくソフトを購入したのでしょうか。

新しい物が好きな王様らしいというものです。

そんな姿をキッチンから眺めつつ、晩御飯を作ります。

流石に一人の生活も長いですし、舌の肥えた王様がいるので腕前はそこそこのものと自負しています。

王様はあれがいいこれがいいと本を買ってきてはリクエストするので、それに応えるのも中々骨が折れた思い出です。

「今日は言峰さん、出かけているのですか？」

「うむ。故に貴様の料理はこの我が全て平らげてやろう」

出来た料理を並べていけばゲームを終わらせたギルガメッシュが機嫌よくつまみ食いをしている。

またかと呆れつつ、ご飯をよそって私も座ります。

彼のかけてくる言葉に返事をしながらの食事ではありませんが、慣れてしまったものです。

「それで？ 召喚する気はおきたのか、響」

食べ終わって箸を置いた途端の、突然の話題転換に私は思わずぴたりと動きをとめてしまいます。

……何を隠そう、数日前から私の左手にはあの時と同じく令呪が宿っていました。

王様はこれを見咎めて以降すっかりにやけ顔が張り付いているのです。

学校などではいろいろとばれると面倒ですので、礼装を作って隠して生活をしています。

「……何で私よりも乗り気なんですか、まったく。王様は私で遊ぶの

が大好きですね」

わざとらしく大きく息を吐き出してみせれば、ニヤリと赤い瞳が細められました。

この人もそうですが、どちらにしても言峰も動くのでしよう。なにせ楽しいことが好きな、人を掻き回すのが好きな方たちですから。その対象に私も入っているのは困ったところですよ。花の彼も同様ですよ。

私はそこまで面白い人間ではないと思うのですが、彼らからは何故かそんな扱いを受けるのです。本当に何故か。

「お前は憤怒も恐れも持たないが、中々に面白いぞ？ 時にかつて共に大地を駆けずり回った盟友を思い起こすほどにな。まああれよりは劣るが、人らしさはお前の方が強い」

「あなたの盟友といえば、エルキドゥでしたね。そのような評価をしていただけるのは光栄です、ギルガメッシュ」

「ふん、そこは人形というのかと怒るところであろう。まあ、貴様らしいがな」

「あら。それでは次はフリだけでも致しましょうか？」

「よいよい。見た目だけ真似るのはつまらんからな。どうせなら、もう少し違う方法を試してみるのも一興よな」

くつくつと笑うギルガメッシュですが、いままでも散々にからかわれてきています。正直やめてほしいですが、聞いてはくれません。

そんな彼も、しばらくすれば笑いもおさまるもので私の折った話に戻ってくる。

早く早くとせつつかれて溜め息が隠せないです。

これがずっと続くと疲れるもので、もうそろそろ折れてしまおうかと悩んでいたところですよ。

「……仕方ありませんね。王様の機嫌を損なっても後が大変なだけですし、そろそろ召喚するしましょう。まったく、仕方のない方ですね本当に」

更の上機嫌になっていく王様にやれやれと肩を竦めて、早速召喚の儀と相成りました。

まったくもって忙しい方です。でも変な人を召喚したいわけではないので、王様には居間で待機してもらいます。

……彼が触媒になるとどうなることか分かりませんからね。

さくつと記録の中から召喚の魔方陣を引っ張り出して、床に紙を散らばせる。

その上にその魔方陣を書き出して詠唱を開始します。

ピリピリとした痛みが令呪の宿る左手から発せれるが、声は途切れさせずに紡ぎ続ける。

詠唱が終わった途端にゴウツと部屋の中を強い風が巻く。

思わず目を閉じてその強風を耐え忍び、室内の気配がかわったのを肌で感じる。

そつと目を開いて、魔方陣を見ればそこにはひとつの仮面が浮かんでいました。

「……あ……あなたが、私のマスターですか?」

それは美しい肢体を持つ女性でした。

召喚の影響から点滅する照明に照らされた褐色の肌。顔の大半を白い髑髏の面で覆っていますが、手足はほっそりとしていて美しさをもっている。瑞々しい印象を持たせる彼女は、一見すれば少女のようにも感じられます。

瞳目しつつも名前を告げます。

すると彼女は触れられる距離に近づいてきて、その指先が伸ばされ私の頬に触れたかと思えば、あと一歩というその隙間はあっという間に詰められました。

「……?!」

唇の触れあう感触に目を見開いて、密着してくる彼女の肩を引き剥がそうと手を当てます。

しかし、曲がりなりにも相手はサーヴァントです。見た目に反して私なんかよりも力があり、ぴくりとも動かないです。

「……あなたが、私のマスター……ああ……なんて、なんてこと……私に触れて、私と唇を重ねて……まだ、生きている……ああ」

ほんの少し離された唇から、感極まったような、それでいて幸福に

打ち震えるような甘く囁く声が溢れた。

「私はハサン・サツバーハ……アサシンのサーヴァント。あなたの手となり足となる、あなたの暗殺者です……マスター」

陶醉しきった声音に、仮面の奥から感じる熱く焦がれたような視線を感じます。

マスターと呼ぶ声にも酷く熱にうかれたようなもので、囁く声は砂糖のように甘く脳を溶かすような蠱惑さで、女である私でもどきっとしてしまふものがありますね。

「えーと、ハサン？ その、召喚に応じてくれたのは嬉しいのだけど、そろそろ離れたりとか……しない？」

「……はい。それが主のご命令であれば」

ふ、と僅かに感じていた重みが離れて、視線で追っていた彼女、ハサンは床に足をついて頭を垂れた。

指示を待つような様子にすっかり困ってしまった私です。

「うん、と……触れたことに喜ぶってことは、ハサンは毒でも持つてるとか？」

「……はい。マスターの仰る通りに、私はこの身全てが毒を持っています。この指も、足も、唇も全て……ですがマスターは、私の毒に溺れていません。……私は、あなたのような主を求めていました。我が身は全て、あなた様の思うがままです」

どうやら彼女は愛が重いタイプの女の子のようです。いえ、何時だったかの記録にも、そんな方はいるのですけれど。ええ。

まあ兎に角、あまり王様を待たせるとうるさいことですし彼女を立ち上がらせて部屋を移動することにしました。

「遅いぞ、響」

居間に戻るなり開口一番がこれです。まったく、ギルガメッシュは本当に急かしいですよね。

「ごめんなさい、ギルガメッシュ。でも楽しみは時間をかけた方がいいこともあるでしょう？」

「ふん、まあな。それで、お前が此度召喚したのは……暗殺者か。あの童話作家ならば尚面白かったが、まあよかろう」

「はいはい。アンデルセンでなくて私はよかったですけど。……ごめんなさいね、ハサン。うちにはこの横暴で我が儘な王様が入り浸るのだけど、あまり気にしないでね」

「……わかりました」

ワインを飲みつつの言葉に私は苦笑を返して、構えかけたハサンに振り返ってそう言う。

彼女は僅かに不審そうな目をギルガメツシュに向けつつ、私の言葉に従ってその肢体の動きを緩急させた。

それを見て私は部屋に置いていた電気ポットのスイッチを入れてお茶を用意する。

どうせギルガメツシュはそのままワインを飲むでしょうから、私とハサンの分だけの用意です。

「あ、マスター……私に、そのような……」

彼女にお茶を差し出すと、慌てたように首を振られた。

恐らく、暗殺者という職をしているからには人から善意でお茶を出されるなんてこと滅多になかったのでしょうか。あなたに遠慮してぶりなのでしょう。

「気にしないで、ハサン。自分のを淹れるついでだし。その王様なんて人のことお構い無しだから」

「相変わらず減らず口を叩くな。響、貴様年々我に対して容赦なくなってきたはいないか」

「そんなの気のせいですよ、ギルガメツシュ。というか、あなたが受肉してから何年経っていると思っっているんですか。あなたに遠慮しても、あまり意味はないと常々思っってきましたから」

肩を竦めつつ何だかんだためていたらしいこころばらくの不満を言われるが私はそれを受け流す。

こういうやり取りは意外と珍しくはないです。王様がこんな姿を晒すのはたぶん、彼の盟友と近いものを感じているからなのでしょう。彼がそう言っていましたから、そう間違いではないと思います。

「さて、ギルガメツシュはおいておくとして。ハサン、あなたは何か聖杯にかける望みがあるのですか？ 私は特にないですけれど、一応聞

いておきたいと思ひまして。答えづらければ答えなくてもいいですよ」

「私は……いいえ。あなたに出会えただけで、いいのです。強いていふなれば、毒でしかないこの身を……くらいのもので、あなたが私のマスターであるならばそんな願ひ……」

「我をおいておくとは」とかなんとか文句を言う王様は放置してハサンと話をします。お互いの認識を擦り合わせるのは大事ですからね。

彼女は触れあうことのできる存在がいたならばそれで十分と思つているようです。

確かに触れれば毒によつて殺してしまうのなら、触れあうことができるのは大事ですよ。人の体温を感じると落ち着くものがあるのは私も知っていますから。

ならば、現界している間だけとはいえ、彼女に暖かさをわかるくらい私にもできるでしょう。何、外部からの毒とかそういうものの影響は元々効かないように設定していますし、バージョンが上がつて催眠をかけたとか呪われたりする魔術をかけられても効かないようになりました。

……流石に高位の魔術は防げませんけれどね。時と場合によるとは思いますが。

それに人の暖かさに飢えた少女ひとりが家に増えたところで、この家には私一人。伯父も伯母も最近は何月に一度か二度会う程度でしかありません。

王様とかが茶々を入れてくるよりは可愛い女の子の方が気楽というものですし。

だつて彼にはデリカシーというものがありませんからね。年頃の女の子の扱いには注意するべきだと思います。

私は観測世界と名前のつけられた前世の記録に近い人格ですからね。その辺はちゃんと気にするんです。……本当ですよ？

幾ら元が人形のように感情が欠落している部分があるとはいえ、そこから辺は大事なんです！

これから聖杯戦争が本格的に始まるまでは、今しばらくのんびりと学生生活に浸ろうと思います。

勿論、今まで同様令呪の隠蔽は継続しますとも。進んで敵対したいわけではありませんからね。

第二話

いまだ薄暗く太陽のあがりきららない中、起き上がった私は大きく欠伸を溢しつつ洗面所に立ちます。

鏡を見れば、ぼんやりとした顔が映っている。

「んっ、冷たい……」

お湯を出すために蛇口を捻り、流れ出る水の温度を確かめるために指を流水に浸す。

暫くは冷たいままだった流水が熱すぎずほどよく温かい温度になったのを確認して顔を洗います。

冷たかった指先もお湯で温まり、目も覚めました。

「おはようございませす、響様」

「おはよう、ハサン」

私の気配につられて起きてきたのだと思われるハサンには、祖母が使っていた部屋を貸しました。

サーヴァントに寝食は必要ないとは聞いているし知っていますが、それでも一緒に生活していく上で私が落ち着かないと思って渋るハサンを納得させたのですが、うん。召喚から三日と経てば慣れた様子です。

召喚した当日の夜は部屋の前や屋根の上で待機する、と言ったのを説き伏せてよかった。

「今日の学校帰りは服を買いに行くよ。折角なのだし、ハサンのための服を買いたい。君は美人だから、きつとなんでも似合うだろうから」

「そんな、私なんかには勿体無いです、マスター」

朝食の用意を進めながら昨日考えていた予定を伝えると、焦ったようにそう言われてしまいました。

ちらりと様子を窺うと、彼女は仮面の下に覗く顔を赤らめていたので照れているのが見てとれます。

ハサンの性質を考えると贈り物くらいはされてそんなものなんですけど、やっぱり想像していることが違うのでしょうか。……うー

ん、それは何時か見えるといいかな。

視線を手元に戻し、品目は少ないがこれで完成として朝御飯にしよ
うと火を止めて作ったものを皿に盛り付ける。

二人分のご飯をテーブルに並べて向かいあって座り「それとも」と
先程の続きを口にする。

「ハサンは命令された方が気が楽なのかな？」

「……私が、着飾ることを、ですか？」

「うん。どうせなら君と町で遊ぶのもいいかなって。どうかな？」

じつと仮面の奥の瞳を見つめると、彼女は考え込んだ。

しんと静まった空間に壁にかけた時計がチクタクと秒針を刻む音
がやけに大きく聞こえてくる。

十秒。二十秒。四十秒。五十九……一分。

「それでは、その……一着だけ……」

「ふふふ。ありがとう、ハサン」

結局たつぷり三分ほど悩んだ末にもじもじとしつつ頷いてくれた
ハサンがとても可愛らしくて、私は思わず笑ってしまいました。

そんな私に彼女は戸惑いながらも照れた様子で肩をすぼめて、小さ
く「いえ、はい……」と頷きました。

そんな様子にも笑みが浮かびますが、一先ずは少し冷めてしまった
朝食を食べて学校へ向かう準備を整えます。

のんびりとハサンと話をしつつ用意をしていると、向かうには丁度
いい時間だ。

私の家は新都なので、深山町にある高校には少し早めに出ておかな
いと間に合わないため、人の気配が多くない時間に家を出る。

『ハサン、放課後までだいぶ時間があるし、君は町を見て回る？』

『いいえ……響様のお供をさせていただきます』

『そっか。あんまり構えないと思うけど、それでもよかったら好きに
しててね』

弾んだ声で「はい」と返事をしたハサンに私はついつい笑ってしま
う。

ハサンが霊体化していなかったらきつと尻尾がはち切れんばかり

に振られている幻覚が見えそうだ。

何となくハサンは犬みたいで、とても可愛らしい。

「おはよう、水谷さん」

「うん。おはよう」

のんびりとした足取りで登校し、教室に入ってクラスメイトと挨拶をかわし、自分の席に座る。

ハサンはやや入るのに迷った挙げ句、教室の後ろの方……掃除用具入れの上に座り込んだようです。

霊体化しているので見えませんが、これでもマスターなので、大体の場所はわかります。でもその場所のチョイスはいかななものかと思うのですが。

何かを言おうかな、と思いもしましたがハサンがそれでいいのなら何も言うまいと考え直す。

暫くの間本を読んで過ごしているとチャイムが鳴り、いつものように藤村先生が駆け込んできた。

かと思えば何かに足を引っ掛けた様子でスッテーンと転がり、頭からぶつかったようだ。

「おおい、藤村先生？」

「うわ、鼻から血出てるじゃん」

「あー今鼻から見事にいったみたいだしねー」

「誰かティッシュ」

前の列の生徒が藤村先生の容態を確認しつつ誰が保健室に連れていくかと話をしているようです。

何分藤村先生って、こう……勢いよくくるので、勢いがよすぎてたまにこうなるんですね。困ったことに。

一月の内の半数はこうやって転んで気を失うので、皆この光景には慣れたものです。嫌な慣れですけどね。

「じゃーんけん」

「ぼん」

今日はじゃんけんで連れていく人を決めようで、負けた野球部所属の子が藤村先生を背中に乗せて保健室へと向かいました。

それを見送った後は、皆のんびりとそれぞれで話をしながら一限目の準備をします。

移動教室の他クラスの生徒が廊下を足早に歩いていく影を窓越しに見つつ、私も机の中から教科書とノートを出してから先程の本の続きを読むことにしました。

ハサンも先程の光景には驚いたようですが、二限目の英語でピンピンとした様子の藤村先生に今度は呆気にとられたようです。

藤村先生の回復力はすごいですからね。回復力というより、生命力と言った方がいいかもしれません。

『本当に元気のいい方ですね、フジムラというこの女性』

自分にはないものだと思直に感心しているらしいハサンが私の隣に立ちノートを覗き込んでいます。

それから廊下の方に出てみたりとしているので、苦笑半分にハサンに学校を見回るようにと伝えます。

少し悩んだハサンも危険はなかうと認め、学校の把握に行くとして行きました。

ハサンが敷地内すべてを隈無く見て回り把握したそうで、頼りになるサーヴァントだなと思いつながら、私は授業を受けました。

すべての授業を受け終われば、特に部活に所属もしていないので早く帰るだけです。

今日はハサンの服を言うと言ったので、そのまま新都のショッピングモールへと向かうことにします。

「うーん、どれが似合うだろう」

人避けの礼装をハサンに持たせて店員を遠ざけつつ、あれこれとある色とりどりの服を彼女にあてながら悩みます。

ハサンは似合うものがわからないから任せます、だなんて逃げの手を打ってきたので、かれこれ二時間ほど購入を迷ってモール内をさま迷っているのが現状。

白色もよく似合うし、とそこで家にワンピースがあったなあと思いつく。

ギルガメッシュに連れ回されて適当に色々あれこれと買い与えら

れた中のひとつに彼女にも合いそうなそれがあったはず。ただ、今はまだ寒いので上に羽織るものとか……ああ、あとセーターとか買おう。マフラーも欲しいかな。

コートは暗色がいいだろうか。曲がりなりにも暗殺者だし、あんまり目立ちすぎず溶け込めるように、と。

目の前のお店に目を止めて、それから先ほどまで回っていた幾つかのお店の商品を思い出して決めます。

「ちよつと買ってくるね。待ってて」

「は、はい」

一先ずは目についたセーターと同系色のマフラーを買い、それが入った紙袋を提げて別のお店へと向かい、ズボンとコート、それからスカートと買っていく。

ハサンがこれでは一着ではないとおろおろとするのを流しつつ、最後に試着室を借りて着替えてもらい、残るショートブーツを購入して買い物は終了した。

「うんうん。とつてもよく似合っていて可愛いよ、ハサン」

コートはまだ着てないので見た目はすっきりとしたものだけど、ラインが分かりやすい服装がこれまた美しい肢体を持つハサンにはとてもよく似合っていた。

見立てた本人が思わず見とれてしまうくらいに、とても。

素直な感想を伝えると、仮面をつけていない素の顔を一瞬で赤く染めて俯いてしまいました。

「そんなに照れなくてもいいのに。……それじゃあそろそろ外に出ようか。あ、でも先にコートを着ようね。そのままだと外じゃ寒いし」

「……はい」

照れて顔が赤いままのハサンにコートを渡す。

コートに腕を通し、ボタンを閉めるのを見届けて私は彼女に手を差し出します。

「さあ、行くこうか」

ハサンはじつとその手を見つめて、それからおずおずと手を重ねる。

お互いの少しひんやりした手が重なって、やがてほんのりと温かくなっていく。

その体温を感じながらハサンを連れていく場所は、新都の公園です。

「……………」

ハサンが疑問を浮かべるのも無理はないだろう。

何せこの場所はかつて十年前に起きた聖杯戦争の終息地。

新都の再興において開発されることなく今も残る朽ちた場所なのだから。

人がいないのを確認し、ハサンの手を引いて歩きながら私はかつての事を語る。

「ここにはね、昔私が暮らしていた家があったの。この公園でいえば端の方だと思うけど……………」

夢に見るかもしれないし、薄々感付いている部分もあるだろう。

それでもハサンには語っておくべきだろうと思っただからここへと連れてきたけれど、ああ。やめておけばよかっただろうか。

「前の聖杯戦争で聖杯がこの中心で降りたんだ。私はあくまで遠くから視て知っているだけ。それも、私がキャスターを喚んでいたから、分かったことなんだ」

「響様が、前回は参加を……………」

それでも、言っておくべき事柄だろうから、言葉は止めない。

例えこの場所に、怨念のようなものが残っていたり、何かの残滓があつたとしても、だ。

「うん。彼とは聖杯が降りる少し前に別れたのだけどね。ここは聖杯から溢れたモノによって大火災に見舞われたの。誰かの願いなのか、聖杯が選んだことなのか、はたまた他の何かによるものか……………詳しいことは私には判らないけれど、とにかく一面が焼け野原になって新都の町はこの通りってわけだ。まあ、私は動くこともままならずいたところをギルガメッシュに助けられたのだけだ」

足元から這い上がってくるような悪寒を振り払いながら、ハサンの手をぎゅっと握りしめる。

私の様子が不審なのか、小さく名前を呼ばれる。

少しだけここに入るのは失敗だったと後悔しながら振り返ると、静かだけれど澄んだ眼差しが私を射ぬいた。

一瞬どきりとしたものの、どうしてかその瞳にさざめいていた心が落ち着いたような気がする。

「ここにはよくないものがある気配があります。この場所に関連が強いマスターなら、尚更その影響があるのでしょうか。……魔術については詳しくありませんが、死の気配ならば私にも分かります」

「そ、つか。……うん、ハサンが言うならそうなんだろうね。ここは、本当によくない……」

実に十年振りにこの場所に足を踏み入れたけれど、思った通りだった。

殆ど無意識的にも避けるほど、この公園はそういうモノが逃げ場なくさまっている。

私には視えないけれど、何となく感じとることくらいはできる。……母や父、姉がその中にいなければいいな、なんて分かることないことを思いつつ、深呼吸します。

「でも、君は知って然るべきだと思ったんだ。私をマスター^主として認めてくれたからこそね。私の始まりはここに眠っているから」

私を愛し、慈しんでくれた家族の眠る場所でもあるから、知ってほしかったのか。

かつての聖杯戦争のことを知ってほしかったのか。

アンデルセンのことを思い出したかったのか。

あの頃の模倣品以下だった子供と別れるためか。

理由はわからないし、もしかしたら理由さえもないかもしれない。

それでも、私のサーヴァントであるアサシン^{ハサン}には言うべきだという考えが浮かんだからこそ、私は今日彼女をここに連れてきたのだ。

服を買い与えたのについてはただの趣味、ついでという事で納得してもらおうことにしましょう。

「マスターは、響様は、ご家族や……前のサーヴァントを愛していらっしやるのですね」

「……驚いた。そんなこと言われるとは思わなかったですね」

思いがけない言葉に本気で驚いてしまいました。

けれど、そう言われればそうだな。きつと。

「……愛しているか愛していないか、と聞かれるとたぶん愛していたと、思います。愛というのは形がなくて難しいですが。うん、まあ、親愛の情は抱いていましたよ」

曖昧な言い方にはなつてしまいましたが、仕方ないことです。

はつきりそれを愛だと断ずるには、私の機能は不足している。

「正直に言うと、私は人として少々不足している部分が多いです。だから、ハサンからしても変わっているな、と思うこともあるかもしれない。そして君は、かつての私のキャスターのように、私の記憶を見失ってしまうだろう。善いものも悪いものもあるだろうけれど」

「たとえば……例えばどんな記憶であろうと、私のマスターはあなたに間違いありません！ だから、どうか、そんな寂しそうな顔をしないでください……」

やや食い気味に言葉を遮ったハサンは、どんどん勢いをなくして萎れたように項垂れる。

ひどく気を使わせてしまったようで申し訳なく思いながら、自分の頬に手をあてる。

……寂しい顔をしていたのだろうか。自分の顔がどんな感情を見せているのか触ったところで判らない。

でもきつと、些細な変化も見逃さないアサシンが言うことなのだから、そうなのでしょね。

「うーん、なんだかごめんね。別にここに来なくても話せたことなのに」

「いえ、響様が謝られることではありません。それに私は……こうして服をいたただけて、あなたの隣を堂々と歩けただけでも十分満足しています。過去の事を話していただけたのも、マスターから更なる信頼を得られたからだと思いますから」

私の顔を見て微笑んだハサンに、私は「そっか」と返事をするに留めました。

どうしてこう、私のサーヴァントたちは嬉しい言葉をくれるのでしょうかね。

なんともくすぐったいものを感じながら「帰ろうか」と笑みを返せばハサンは花が綻ぶような笑みで頷いた。

彼女にとっても、そして私にとっても、この時間は泡沫の一時に過ぎないのでしよう。

けれどそれでも、確かに楽しいと思えるのならば、お互いにとってかけがえのない思い出にもなるのでしよう。例え結末がどうなるうとも。

第三話

多少歩く程度の距離はある数件先の距離にある教会に赴いていた私は小さく息を吐き出します。

人手が極端にないこの教会の手入れをする者は私くらいのものです。

この教会を任されている神父様もしないことはないのですが、男性故に細やかな部分には手をいれないものですから、自然とその役目を私が担うようになったのです。見ていられない、ともいえます。

「言峰さん、各お部屋は終わりましたよ。礼拝堂は大丈夫ですか？」

「ああ、勿論だとも」

ふ、と死んだように濁った黒い眼差しを見上げて、それから足を踏み入れた礼拝堂を一瞥する。

今日は珍しく、ギルガメツシユもないので問題ないようです。いつもはちよつかいを出す王様なので、珍しいともいえます。

まあ彼の王様のことですから、どうせ目の前の神父のワイナリーで真っ昼間からお酒を飲んでいるのでしょうけれど。

「それは良かったです。あなたはたまに、ギルガメツシユとの話に興じすぎて放棄してしまうので、心配していました」

「それを言われては耳が痛いな。響、君は中々口が上手くなったものだ」

「そうさせているのは王様と言峰さんですけどね。今日の晩御飯はいかがされますか？　こちらで作ってもいいですが」

立て掛けられた掃除道具を手にしながら問いかけると、いつもは頼むか、泰山の激辛麻婆豆腐と言い出す神父様なのですが今日は珍しく首を振りました。

「少し用事があるものでね。ギルガメツシユを連れて君の家で晩餐を迎えると良い」

「わかりました。お帰りの際に泰山でご飯を食べられるんですね？」

「ああ、そのつもりだ」

肯定した言峰の言葉に内心安堵します。……彼の好む麻婆豆腐は

人が食べられる辛いものの範囲を越える外道麻婆ですからね。

私もたまに被害にあうので持ち帰るといふ発言がなくてよかつたというものです。

第四次の聖杯戦争以降お世話になっている私にも、なによりギルガメッシュもその麻婆豆腐による被害は尋常ではありません。

年を経るごとにグレードアップをしていったその味は、今では筆舌に尽くしがたいほどに辛いを通り越して痛いです。

ハサンでさえ、その味は拒否したほどの劇物です。いや、臭いからして暗殺者的にはアウトだったみたいですが。

……たとえ持ち帰りをしても、明日と明後日は教会には来ませんから、被害に遭うのは王様だけです。

「そういえば、まだサーヴァントは召喚されていないのですか？ バースカーとランサー、それから私のアサシンでしたよね、現状は」

「いや、キャスターの召喚が確認された」

あつさりと教えてくれた言峰に、何か考えでもあるのだろうかと思いつつふむと頷く。

何はともあれ順調に揃ってきているようですね。

「そうなんです。残り三騎、ですか……もし何か問題がおきたならば教えていただけると嬉しいです」

「……そうだな。考えておくとしよう」

肩を竦めた言峰に、私は笑みを返して掃除道具を片付けるために礼拝堂を出る。

納屋の元あつた場所に戻して、最後に残したものはないか、地下も含めて教会を見て回ります。

幾らそこまでの規模ではないとはいえ、教会は大きめな造りですから少しばかり時間はかかります。そこでハサンにも反対の場所を見てもらいながら歩き、それが終わった頃には言峰も外出してしまいました。

最後にハサンと合流して英雄王が寛いでいるワイナリーの扉を開けます。

何時もの彼の選ぶ中ではセンスの悪くないラフな服装でグラスを

傾けている姿で出迎えられました。

「ご苦労であったな、響」

「はい。先程言峰さんから外出するのでギルガメツシュのご飯は任せたと言われましたから、それを飲み終わったら帰りますよ」

「ほう、そうであったか。それはよき知らせだ！ 今日親子丼とあったか、アレにするがよい！」

高級嗜好ではありませんが、たまに庶民的な味を求めてくる王様に「はいはい」と頷きながら、彼の転がした空のワインボトルを片付けます。

ご機嫌なままじつくりと残るワインを飲み干したギルガメツシュに片付けを急かさねながら教会を出て帰路につき家のドアを開けます。

勝手知ったるままに居間に置かれた彼が買ってきた大型テレビの前に座り込み、ゲームのコードを引き出しているのを横目に私は台所に立ちます。

ハサンはギルガメツシュのために彼女の毒を布の内と外で遮断する礼装として作った手袋をし、その手でお皿を出したりテーブルを拭いたりと材料を切る以外のお手伝いをしてくれます。

ハサンはサーヴァントですが、その中でもかなりいい子だと思います。マスター冥利につきるというものです。

「王様、出来ましたよ。ハサンも、並べるのは私がするから座っていいですからね」

「うむ」

「片付けは私がします、マスター」

普段とさして変わりはない光景に笑いながら熱々の丼とおかずを並べます。

ご機嫌よく熱々のご飯を食べる王様と、毎度の食事でひどく幸福な顔をするハサン。それに作った本人として、美味しそうな様子は嬉しい私です。

中途半端に投げ出されたゲームのBGMをバックにしながらの食事は不思議なものです。

さて、食べ終わったならばハサンが台所に立ち、後片付けをはじめます。

私は途中になっている読書をしようかと思っていたのですが、ギルガメッシュの隣に座らされて一緒にゲームに興じています。

アクション系のゲームは楽しいとは思いますが、目が疲れやすいのが難点ですよね。

「ふははははー！ どうだ、響。私の技量に恐れおののいたか？」

「はいはい、流石ギルガメッシュです。王様は強いですね」

ゲームも何回か変わり楽しそうな彼に領いて更に対戦と共闘を重ねれば満足した英雄王は「また来る」といいおいて我が家から去っていく。

それを確認したハサンは安堵の表情も顔に、お風呂のお湯が入ったと伝えてくれた。

……本当に、できた従者だと思う。本来は暗殺者なのだけど、馴れない家事をする姿はほほえましいし、可愛らしいと思います。

「ありがとう、ハサン。それじゃあお風呂、いただいてくるよ」

お礼を言われたことにはにかみ笑う姿を視界に収めて、部屋から着替えを持ってきてお風呂に入る。

肌寒い冬の夜に、熱いお湯はとても心地よく、じんわりと冷えた体に熱が染み渡っていく。

そつと瞼を閉じて暫くその温かさに浸っていると、ガラツと勢いよく扉を開けられた。片目を開けてそれを見ると、やはりというかギルガメッシュが立っていました。

「もう、また来たんですかギルガメッシュ」

「この我が共に入ってやるというのだ。もつと嬉しそうな顔をしてみせよ響」

「嬉しくはありませんから、仕方ありません」

湯船に躊躇も断りもなく入ったギルガメッシュに肩を竦めつつ、端の方で体を縮ませます。

よく私がお風呂に入っている最中に来るのも、慣れたものです。

一回帰ったのも私を油断させるためでしょう。最近は無理矢理一

緒に入らされるか来ないかのどちらかでしたし、久しぶりにされると慣れているとはいえ少し驚きます。からかわれるので顔には出しませんけど。

お風呂についてはともかくとして、ハサンにはあまりギルガメツシユに反抗するなど言っておりますので、渋々通しているのはよく見るようになりました。

勿論私に害を及ぼさないかとは目を光らせてはくれています。王様は簡単に人を殺す方ですから。だからこそ、ハサンには極力反抗はしないようにと言ったのです。

それにしたって、この王様は本当に遠慮というものがなくてとても困ってしまいます。誰かどうにかしてください。

なんてため息を堪えつつ、ギルガメツシユのちよっかいを掻い潜ってお風呂からあがります。

私がこの家で一人で過ごすようになってからよく乱入してくるの嫌な慣れかたをしているから仕方ない。

こうしてお風呂に乱入された後はいらない疲れが溜まるだけです。最近はハサンが頑張って家事をしているのを見ては癒されます。

「いい湯加減だったよ、ありがとう。ギルガメツシユの事は気に病まないでいいからね」

「いえ……はい。ギルガメツシユを止められはしませんでしたが、少しでもマスターのお役に立てたのなら嬉しいです」

気恥ずかしそうにはにかんだハサンに笑み崩れ、その頭を撫でる。犬のように撫でられて気持ちいいというように目を閉じて大人しくしているのがまた可愛らしいと思います。

そこへ空気を読むことなく割り込むのはギルガメツシユである。

「響、明日はパンケーキにしろ。中々に美味だった故に食べるのも吝かではない」

「わかりました、ギルガメツシユ。作りますから早く帰ってください。眠いし明日学校なので」

水気を含んでキラキラと照明に照らされる金髪につい目を細めてしまいます。

見慣れてはいますが、眩しいですね。

にしてもギルガメツシユの好みの食べ物が幅広すぎて困りますね。料理の腕を買ってくれるのは嬉しいですしリクエストしてくれるだけいいですけど、ジャンルが国を問わずされるのが本当に困る。

おかげで料理の腕が上がったのですけどね。

「それでは我は休むとしよう」

「はいはい。お休みなさい、王様」

上機嫌なまま背を向けて玄関を出ていくのを見送って、私はハサンに向き直りました。

「それじゃあもう寝ようか、ハサン」

「はい、マスター」

サーヴァントである彼女に睡眠は必要ないし、外の警戒をするべきであるとはわかっています。

それでも私は彼女に対して対等な家族、のような接し方をするようになりました。

なぜか、と問われてしまうと言葉を失ってしまいますが……恐らくは、彼女の願いを叶えたいと思ったから……でしょう。

人の温もりに触れていたいというあまりにも可愛らしい願いでしたから、私でもそれを叶えるに容易かったのです。

これが王様が今日から人間の裁定をする、なんて言い出したならば私には叶えられません。

私に備わった機能の及ぶ範囲の願いだからこそ、です。

私は万能でも全能でもない、ただの人間ですから。

手袋を外した手を掴んで、部屋に向かう。祖母の部屋では私の安否がすぐに確認できないと言ってきて結局は私の寝室で眠るようになったので、向かう先は同じだ。

横を歩くハサンの表情は何時ものように幸せそうで、それを見ると私も嬉しいと思います。

しかし近年は随分と水谷響という存在は魂に刻まれた性質が前面に出てきてしまっています。

それは決して悪いことではないですし、かつての聖杯戦争での

私のキャスターアンデルセンの宝具によって、今までの記録に比べれば格段に人間性が保てています。

だから私は、ハサンに対して家族という触れ合い方を選んだのかも知れない。

なくなった穴を埋めるように。傷口を塞ぐ瘡蓋のように。

「おやすみ、私のハサン」

「はい。おやすみなさいませ、響様」

ひとつのベッドに二人して寝そべり、就寝の挨拶を交わす。

そつと掴んできた指先はひやりとした冷たさで、私の熱が彼女を温めることを願いながら目を閉じた。

第四話

寒々とした空気にほう、と息を吐き出しながらも伯父の家のある深山町からの帰り道です。

学校の帰りから直接行ったので夜の道に相応しくない学生服ではありませんが、紺色のコートを着ているので寒いのは足下くらいですね。それでも吹き抜ける風はとても冷たくて仕方ありませんが。

「寒いけど、暫く雪は降りそうにないかな」

空を見上げると、星の光がポツリポツリと輝いているのが見えます。

人工の灯りが多いので見えづらくはありますがけれど、今日は午前中曇っていたのが嘘のように午後からは快晴でした。だから今日は月と星はよく見える。

今年に入って雪が降ったのは本当に片手で数えて足りるほどです。それは少し、寂しくありますね。

雪がしんと降り積もる静かな夜というのも好きなものですか
ら。

「ん……う？」

何かの視線を感じて思わず立ち止まり、ぐるりと周囲を見回します。

今まで何年も何回も通っていた道に特に違いはない。……ないはず、なのですが。

『ハサン、何か感じる？』

自身のサーヴァントにも違和感がないかと尋ねてみます。

そういった視線などは暗殺が本職な彼女ならば鋭いと思いましたから。

『はい、マスター。響様。……どうやらサーヴァントの気配が近くにあるようです。霊体化して気配を絶っている、というよりは、魔術で痕跡を隠しているような感じがしますので、恐らくはキャスターのクラスかと……』

『そっか。魔力が拡散して場所が捉えにくいつて意味でいいのかな』

『はい。その判断で、間違いはないかと……マスター』

気配に敏感な彼女を欺けるとしたならばそれは、あまりある魔力で攪乱することもできるだろうキャスターということだ。

三騎士クラスならば、そんなまどろっこしい手段はとらないでしょうし。通常ならばバーサーカーもそんな理性は残っていないはずです。

ライダーもクラスの性質上、高い場所からの奇襲ならばあるかもしれませんけど。

言峰からセイバー、アーチャー、ライダー以外が召喚されたと聞いていますしまず間違いないでしょう。

「……誰か、いるんですか？」

一般人の気配がないことをハサンに確認してもらい、声をかける。

答えてくれるかどうかはわからなかったけれど、どうやら応えてくれるらしかった。

「うわっ？」

頭上から答え代わりに光が弾け飛んでくる。

意外と近い距離からのそれに、ハサンが実体化して私の体を膝から掬い上げて庇う。

ぱちぱちと瞬いて先程立っていた場所を見ると、僅かに抉れたアスファルトが見えた。

その痕には何も残っていない。魔術による攻撃だ。

「……マスター、いかがいたしますか」

「そうだねえ……早く帰ってしましましょう」

このまま住宅街の狭間で戦闘にもつれ込むよりは、せめて新都に出る橋まで行った方がいい。

河の近くなら公園が、広い場所があるから、ということを念話で伝えればハサンはその細腕で私を抱き上げたまま走り出した。

さすがのサーヴァントの筋力ではあるが、少し無理をしてはいないでしょうか。

「アサシン」

「大丈夫です、マスター」

心配した私の声に彼女はこっくりと頷いて返し、更に追尾してくる光弾を避け続けながら確実に人の通りがない場所を選んで新都の方向へと向かっている。

でもそこかしこに魔術の痕跡が残っていることから、ひとつの憶測が浮かんでくる。

「……マスター、申し訳ありません。誘い込まれているようです」
囁くような声に、私は小さく「わかった」とだけ返して集中することにします。

ハサンに簡単な強化の魔術を施してから、光弾に向けて似たような量と密度の魔力の弾を打ち出して相殺する。

これで物的被害もかなり軽減されるはずです。言峰もこのくらいの処理は多目に見てくれるだろう。

もしかしたら嫌みのひとつは言われるかも知れないですけど。

「っ、中々できるようですのね」

どこからともなく聞こえてきた女性の声と進行方向に現れた骸骨の使い魔に、ハサンはピタリと足を止めて私をおろして周囲を警戒する。

マスターである私が側にいるから離れるに離れられないのでしよう。

「キャスターでよかったですかね？ すみません、まだ全てのサーヴァントが揃っていないですし、今はまだ私たちも戦うつもりはないのですが。それでもまだ続けますか？」

念話でこちらは敵意がないのを示すために武器は構えないように命令しつつ、姿の見えない女性に問いかける。

こんな状況ではありませんが、私は出来るだけ戦いたくはありません。戦いを厭う、というよりは戦いというのは私にとって予想外というよりも面倒事しかありません。

だから出来るだけ避けたい、と思うのです。

そうしてしばらくの沈黙をもってして、キャスターの返答が返ってきました。

「それでも、あなたの令呪とサーヴァントをいただきますわ」

背後で空間が揺らぎ、強大な魔力の圧力を感じる。

それと同時に、振り返りかけた私の胸にとすん、と軽い衝撃が走る。

「破戒^{ルビ}すべき^ル全ての符^{レイカ}」

その言葉が耳に入ってきた瞬間、魔術回路の接続に異常が発生しました。

令呪へと至る回路をまさぐられ、捉えられた端から変状し、別の方
向へと伸びてゆく。

それに対して私は殆ど無意識的に精神を肉体から切り出して操作
を開始します。

あくまでも精神をわけているだけ、つまりは並列思考をしている状
態というわけです。

令呪に繋がる線を三本の太い糸としたら、それを寄り合わせる細い
糸がすぎはぎに繋がれて体の外へと向かおうとしている。

それを切られていくそばからその細い糸を自分へと接続しなおし
ていきます。

細かな作業ではありませんが、精神の観測する時間をのばしています
ので集中していれば恐らく間に合うとは思いますが。…ええ、たぶん。

現実時間ですと、目の前に現れた黒いフード黒いローブをまとった
女性が短剣を私に突き刺したまま驚愕しています。

その女性との間にハサンが滑り込むように入ってきたので、彼女は
距離をとって私の様子を観察してきます。

その間にも精神側では自分と令呪の魔力ラインを解析し、それ^{宝具}の対
処を続けています。顔には出ないのですけどね。

ハサンの毒は平気でしたが、キャスターのように宝具という魔力の
塊を直接体内に押し込められたのでこうしたことになってしまっ
ているのです。

慣れないことなので精神は大慌てで大変ですがそれでも宝具の対
処ついでに、キャスターが距離をとった後、宝具による傷も早急に治
癒の魔術をあてて治しておきます。

「アサシン、追撃はしないでいいよ」

「マスター……、ですが」

「これは命令です。帰ったらうんと甘えてくれていいから」

黙して僅かに体の位置をずらしたハサンにお礼を言つて、改めてキヤスターを見ます。

その服装はいかにも魔術を使います、といいそうな重厚な雰囲気醸し出していて、顔を隠しているのも相まってかなりミステリアスです。

「私は勿論、アサシンも少なくとも聖杯戦争が始まるまで戦うつもりはありません。だからどうか、私たちのことは見逃してもらえませんか？ それに、この場もあなたの庭ではない様子ですし」

「だからといって、あなたを殺せないわけではなくてよ？ アサシンのマスター。あなた、随分と甘いお嬢さんのようね」

「うーん。まあ、そうですね。否定はしません。三騎士のクラスに比べたらアサシンの戦闘能力も高いわけではないですし、もっと使い魔を召喚されたら手を焼くのは確実です。ですが、あなたは宝具を早々に使ってしまったのですから、それはあまりおすすめはいたしませんけれど」

軽く肩を竦めてみせつつ、宝具を刺された部分に手をあてる。

治癒の魔術は効いていて傷は痕になることなく塞がったようです。良かった。

ただし体の内部では未だに宝具と精神のいたちごっこのような攻防が続いていますけれど。

私の方を警戒しながら地面を蹴ってふわりと飛び上がったキヤスターに、ハサンは殆ど無言で私を抱き上げます。

いつでも逃げ出せるようにと腰を低くしたハサンと、観察するように私たちを見下ろすキヤスターの間で静かに風が流れていく。

沈黙は重なり、どんどんと緊張感を増していきませんが、彼女は魔方阵を展開することもなく重々しく口を開きました。

「……あなたに少し、興味がわきました。アサシンのマスター。もしあなたが真に戦いをしないというのであれば、円蔵山にある柳洞寺にきなさいな。あなたのサーヴァントを現界させて、距離をとらせたう

えでという条件がのめるのならば、ですけれど」

「……わかりました。そうですね、次の休日、日曜日の夕方頃に伺わせ
ていただきます、キャスター」

「っ、マスター……！」

非難めいたハサンの声にその唇に手を当てることで制する。

そしてもう一度キャスターを見て意識しながら微笑みを形作りま
す。

別にハサンが頼りないと言っているわけではありません。

ですが、向こうが話をしてみたいと思ったのならば応えたいと私は
思います。

「でも次は、顔を見せてくださいね。話をするときは、顔を見て話した
いものですから」

「……考慮しておきましょう」

すうつと空に溶けるように消えていくキャスターを見送って、ほつ
と一息です。

使い魔も地面に溶けるように消え、周囲の魔力も落ち着いてやつと
警戒を解いたハサンは私を下ろしつつ、仮面に顔を隠していながらも
如何にも不満ですという様子をみせている。

「ごめんね、ハサン。……勝手に話を進める私のこと、嫌になった？」

「……マスターはズルい方ですね」

「そうかな？」

笑いながらも首を傾げて、手の中の買い物袋を確認する。

そうしてハサンの言葉を深く聞くことはなく、その手を握る。

別に、はぐらかす意図はありません。それでもハサンは、困った顔
で私を見つめて、そして諦めたように握った手に力を込めた。

「危ないと思ったら、勿論間に入りますからね……響様」

「うん。頼りにしてるよ、私のアサシン」

どこことなく不穏なものを匂わせる声音にあっさりと頷いてしまえ
ば、ハサンは息を詰まらせてしまいます。

そうして私を見て、仕方ないともいうように肩から力を抜きまし
た。

ええ、無駄に緊張しすぎてはよくありませんからね。

私は緊張感がなさすぎ、と言われたらまあそれもそうなのですが、生殺与奪を王様に握られてきたので今更、という感じもあります。

今までの記録上からして私という奴はこんなものですし。

第五話

固く唇を引き結んだハサンを連れて、私は石段に足を乗せていきま
す。

ここ、柳洞寺には来たことはありません。同級生で生徒会長を務め
る柳洞一成君がこのお寺の息子さんであることは知っていましたが、
それだけです。

まだ山門には距離があるのを足を止めて見上げ、はあと長い息を吐
き出す。

視界に入る空は夕焼けに染まって、赤さを増してきていた。

「響様、足がつかいのでしたら、私がお抱えしますが……」

「え？ ああ、大丈夫だよ。まだまだ長いなあと思ったただけだから」

心配そうなハサンの視線を受け止めて、私は笑みを返します。

彼女は尖った雰囲気のまま再び気配を遮断して私の歩みについで
くる。

それを繋がった糸から感じながら振り返ることはせず、止めていた
歩みを再開して次の段から次の段へと足を乗せていく。

ただ、一瞬だけ何か視界の隅を横切った気がして目だけを動かし
て辺りを確認してみましたが、何もないようです。目の錯覚だったの
か、もしくは何か動物でもいたのでしょうか。日暮れ時ですし。

ようやく山門まで到着して足を止めると、その奥で影が集まったか
と思えば、次の瞬間にはフードを外した状態のキャスターが立ってい
ました。

記録と違わぬ少し尖った耳にまっすぐに綺麗な薄い紫色の髪と瞳。

思わず見惚れてしまった私でしたが、彼女の目が細まったので気を
取り直します。

「ようこそ、アサシンのマスター」

「はい、先日ぶりですねキャスター。あ、お菓子をどうぞ。袋のまま
申し訳ないですが、それなりの個数入りを買っていますので。お茶請
けとしてどうぞマスターさんやお寺の方々とお寺の方々と食べてください」

「えっ？ え、ええ……どうも」

差し出した紙袋に一瞬呆気にとられたような顔をしたキャスターでしたが、気を取り直したのかこほん、とひとつ咳払いしてみせた。そしてついで私の背後を見て山門を指差す。

「アサシン、あなたは山門（そと）で見ていなさい」

「……マスター」

「大丈夫ですよ、アサシン。キャスターの言うとおりに良い子で見えてください」

霊体化をといいたハサンの、キャスターとはまた違った紫色の髪をよしよしと掻き撫でてあげるとうう、と小さく唸りながら「危ないときは令呪を」と念押ししてくる。

うんと頷いて手を離すと渋々といった体でこちらを見たまま後退し、山門を背にして暗器を構えた。

流星にこの状況で武器を下ろせとは私でも言えない。それを理解しているのかキャスターも軽く肩を竦めただけで否やとは唱えなかった。

自身の陣地であるし、マスターを思うのなら致し方なしという様子だ。

「姿が見えなくなるとアサシンが飛んできそうね」

「そうなるでしょうね。あの子は私をよく慕ってくれるものですか
ら」

「……へえ、そうなの」

どこか羨ましいとも、共感したともとれる声音で頷いたキャスターが、一瞬だけ優しく目を細めて私を見た。

それと同時に、僅かに漂っていた敵意が薄れる。勿論、決して無くなったわけではないのだけど。

「……あなたは本当に、変な子ね」

くすりと微笑した表情に嘲りの色は見られない。

だから私は苦笑して「そうですか？」と返す。

細めた目のまま頷いたキャスターは緩く頭を振って腕を組んだ。攻撃はしないという意思表示でもあるようです。

「あなた、本当に私が手を下さないと思っているのかしら？ だとし

「たらとても甘いわよ？」

微笑む私に複雑そうに表情を歪めたキャスターは首を捻る。

「何かあればその時はその時ですよ。アサシンもいざというときは助けてくれますし。それにキャスター。興味を持った対象をすぐに殺すのはつまらないでしょう？」

「……………まあ、それもそうだけれど」

「やれやれと言わんばかりに肩を竦め、彼女は垂れてきた横髪をばさりその後ろに流す。」

「……………それにしてもあれですね。キャスターの佇まいは気品に溢れています。顔立ちも本当に綺麗ですし、アンニュイな表情と服装から感じられるミステリアスさに気圧されてしまいそうです。」

「まあ、その在り方はお寺の雰囲気とはちぐはぐではありますが。」

「それで？ あなた、そんな体でよくアサシンと契約を保っているわね」

「ああ……………やはりあなたの陣地内だけあって、隠せませんか。……………とはいえ、私は一般的な魔術師でも呪術師でもありませんから。だからこうなのだ、としか言えませんね」

「じろりと私を睨みつけ、深い溜め息を吐き出して、キャスターは自分の頬に手を当てて何やら思考に耽る様子だ。」

「まだ私の体内ではキャスターの宝具による回線の接続の攻防は続いています。」

「だからこそその異常、というのでしょうか。先程も言ったように私自身一般的な魔術師でも呪術師でもないと自覚していますが、これが逸脱したものだと分かっています。」

「だけれど私も防衛本能というべきか、咄嗟とはいえ宝具の対応を始めてしまったので今手を抜いてしまうわけにもいかない。」

「ハサンに悪いな、という気持ちもありますし、契約を失ったら王様の颯感を買ってしまういそうですから。」

「このままそうならなければいいのですが。」

「多少隠蔽の術が使えるだけの消極的な娘と判断したのは、やはり間違っていたわね……………」

「またも溜め息を吐き出して小さな声で何事かを呟くキャスターですが、残念ながら聞き取れませんでした。」

「なんだろうと首を傾げますが、彼女は「何でもないわ」と首を振ってしまいました。」

「そういえばあなたの名前、まだ聞いていなかったわね」

「そうですね。私の名前は水谷響といいます」

「思い出したとばかりの言葉に一瞬迷ったものの正直に名乗ることにしました。」

「古くから名前は存在を定義し縛り付けるものとされているし、言葉には言霊が宿るものだけ……別に隠し立てることでもなし。」

「ここには生徒会長も葛木先生もいるのでその二人に聞けばわかることだし、何より彼女なら調べるのも容易でしょう。」

「ということであっさりと言えば逆に困ったような目で見られました。」

「キャスター、あなたは真名を名乗りますか？」

「……名乗って欲しいのかしら？」

「困ったような複雑な眼差しは変わらないものの、ニヤリと妖しく笑んだキャスターに私はすぐにいいえと首を振る。」

「あなたが名乗りたいとか私が呼んでもいいと思った時で構いません」

「あ、あなたねえ……」

「呆氣にとられたように口を開いたキャスターは言葉を続けることなく口を閉じて処置なしとばかりに首を振った。」

「……な、なんでですか？ 別に呆れるほどのことではなかったと思うのですが。」

「……メディアアよ。覚えておきなさい」

「へっ？ あ、はい。メディアアさん、ですね。……うん、あなたに合ったよい響きの名前だと思います」

「っ……さ、さっきからあなたって子は本当にもう！ なんなの?! 変というにも限度があつてよ!？」

「頬を赤らめながら頭を抱えて髪を振り乱したキャスターに、ハサン

から送られる視線が心なしかじつとりと湿度を持ったものになった気がします。

違います！ 浮気じゃないんです！ だからそのちよつと刺々しい目は止めましょう?!

なんて焦りで変な念話を送ってしまった私は振り返って両手を合わせ、ペコペコ頭を下げる。

……いや、何故そんなことをしたのかと聞かれたら反射的に、としか言えないのですが。

こほん。数度深呼吸して心を落ち着かせ、改めてキャスターと向かい合います。

彼女も落ち着いたのか少し乱れた髪を手櫛で直し、腕を組み直しました。

……興奮したからかまだ顔は赤めですがそれは突っ込まない方がいいのでしょね。

「ああもう、調子が狂う子ね……。いいでしょう。当面の間はあなたとは停戦とします。少なくとも聖杯戦争が始まるまでは、となりますが。……私も色々と事を急ぎすぎたと思っていましたし」

「いいんですか？ それはとても嬉しい言葉です。ありがとうございます、キャスター」

「……お礼を言われるほどのことではないわ」「いいえ、私の素直な気持ちですから。個人的には無駄に争うよりもゆっくりお茶でも飲める方が嬉しいですし」

ここにこしたままハサンを呼んでも構わないかと尋ねると、彼女は疲れたような顔をして頷いた。

そんなに調子を乱してしまったのだろうかと少しだけ申し訳なく思いつつ、ハサンを振り返って手招きする。

……いかにも不満です、という雰囲気ではありましたが近づいてきたハサンは私の背中にぺつとりひつついて片腕をお腹に回してきました。

すぐに連れて逃げられるように、という意図も感じられます。

「……あなたたちは仲がいいのね」

「そうですねえ……アサシンはとても可愛くて強いし、いい子ですよ。私の自慢です」

「当然のことです、キャスター。……停戦と言いなながらもマスターに手を下そうものなら覚悟をしてく下さい……」

その顔は見えませんが剣呑な声音からハサンは猫のように威嚇をしているのだろう。本当に可愛いことだ。

キャスターは苦笑して「覚えておくわ」と頷いて、右手を差し出してきました。

思わずその顔をじつと見つめてしまうと、彼女は苦笑を崩し、少し首を傾げました。

「よろしく、という意味よ。停戦の約束の締結と捉えてもらえれば結構ね」

「はい。よろしくお願いします、メディアさん」

「ええ……よろしく、ヒビキ」

ふんわりと浮かんだ微笑は肩の力が抜けていて、完全に敵意は見えない。

願ってもない展開ではありますが、果たして私のどこにそうしてもいいと思えるものがあつたのだろうか。

その疑問が顔に浮かんでいたのか、キャスターは呆れ半分といった様子で答えてくれました。

「あなたを構成する体組織は別ですが、あんまりにも無防備なんですよ。警戒すれども気負った様子も臆面もなく笑うものだから……それが敵前ですることか、という呆れ半分。残りはアサシンの献身と、あなたのそれがどうなっているのか気になって、かしら。毒気を抜かれてしまった、というのものもあるのかもしれないわね」

最後はやや溜め息交じりに付け足して、納得したかとばかりに私の目を見てきたので軽く頷きを返します。

要は私が変な子という一言につきるのでしよう。そこは否定のしようがないので気にしないでおきましょう。

「それは良かったです。ああ、流石にそろそろ帰らないと、明日の学校で居眠りしてしまいそうですね。……それでは、メディアさん、私た

ちはお暇します。近いうちにまた」

「……水谷か」

「伺いま、す？ ……アサシン、止まって」

突然背後からかけられた声は聞き覚えがあるものです。

その存在に気づいていたのか私から腕を離して臨戦態勢をとっていたハサンを止めて振り返ります。

「宗一郎様、お帰りなさいませ」

「ああ、ただいま帰った」

嬉しそうに声を弾ませたキャスターにぴくりとも表情は動かさな
いまま応じたその人、私の通う高校の教諭の一人、葛木先生は視線を
私に合わせたままだ。

夜の帳に覆われた薄暗い世界で月明かりに照らされた姿は、学校で
見慣れていた筈なのに幽鬼もかくやというほど静かさで、どこか不気
味な気配を感じさせました。

普段からどこか近寄りがたい雰囲気を持っていますが、夜になると
それが増しているように思えますね。だからといってどうこうなる
わけでもありませんけど。

「こんな時間に寺に何か用事か、水谷。それにキャスターと親しいよ
うな風情だが」

「あ、はい。キャスターには先日お世話になりました。その件でお話
にきました。……葛木先生は柳洞寺に住まわれているんですね」

「ああ」

なるほど、という納得と私の一人言のような言葉に頷いた葛木は私
の後ろにいるキャスターを見た。

それにやっと知らずのうちに強張った肩から力を抜いて、隣で険し
い様子のハサンの手を掴んで指を絡めとります。

「響様……」

「ごめんね、また後で言い訳するから」

「……はい」

握った手のひらから僅かに力が抜けたのを感じ、一先ずハサンが先
生にいきなり襲いかかってキャスターとの停戦が無効になるのはさ

けられたようです。

「葛木先生、キャスターに菓子折を預けていますので、お寺の皆様とどうぞ」

「そうか」

「はい。それではそろそろ帰ります。キャスター、また今度来ますね。葛木先生も、失礼します」

「いつでも歓迎するわ、ヒビキ」

「ああ、夜道は十分気をつけて帰るように」

「はい」

にこりと二人に笑みを送り、ハサンを引っ張るように山門まで歩いて一度振り返ると、キャスターが葛木の隣に寄り添うように立っていた。

私の視線に気づいた彼女は小さく手を振ってきたので、私も同じように手を振り返します。

長い階段をハサンと手を繋いだままおりていく最中、彼女はひとつ「響様はひどいです」と拗ねたように呟いたきり黙り込みました。

どう言おうか迷ったけれど、仮面を被ったままの顔を覗き見て今何かを言うのはやめることにした。

その代わり考えるのは、帰ったらハサンをどう甘やかそうか、ということです。

うんと構って甘やかして、それから一緒に寝る。

私がおしも戦うことになって敵を殺さなくてはならないとき、彼女にはアサンだからこそ、正面から戦わせるわけにはいかないと思っていることも伝えるべきですね。

トラウマというわけではありませんが、昔彼の征服王に蹴散らされるアサシンのサーヴァントを見て、やはり無為に死なせるわけにはいかないと感じていたのです。無為に死ぬのは、私も嫌いですし。

それに、最後にはできれば笑いながらお別れをしたいですから。アサンと別れたあの夜のように、ハサンとも笑顔で別れたいものです。

第六話

いつも通りの登り道を歩き、その前庭を過ぎて礼拝堂の扉を開く。日暮れ時の礼拝堂は薄暗く、ひとつとして明かりが点いていない。奥にいるのか、と長椅子の間を通りすぎて中庭の廊下に繋がる扉を開く。

「うん？」

中庭に一步出た瞬間、ハサンから突然背中を押され、たたらを踏む。そんな私の背後でキイインと甲高い金属音が響いた。

「おっと、暗殺者の割にやるな」

ハサンの殺気が膨らむ中、それをつつくような男の軽い声が忍び笑う。

数歩足を進めてやっと振り返ると、数メートル先に青い装束に身を包んだ男が佇んでいた。

紅い槍を肩に担ぎ、その槍と同じく紅い瞳を細めたものの、男の表情には些か精彩に欠け気だるそうだ。

青い髪を乱暴にがしがしと搔いたサーヴァント・ランサーとおぼしき彼は大きいため息を吐き出して、こつんと槍を地面に打ち付けて首にもたれさせ、殺気だつハサンと驚いている私に対して両手を上げてみせた。

「この場所は不可侵領域だと聞いていますが？ ランサー」

警戒に満ちたハサンの低い声に、ランサーはわかっていると神妙な顔で頷きました。

とりあえず分かったことはランサーがいきなり襲いかかってきてハサンが私を庇うために背中を押したということですね。

私はそれほど身体能力に優れているわけではないので、俊敏さに優れるランサーの攻撃など避けられるはずありません。

槍に刺されれば痛そうですね。射ぬかれなくてよかったです。ハサンには後でたっぷりお礼を言わねばなりませんね。

「マスターからの命令でね。これからアサシンのマスターがくるから一発打ち込んでやれ、ってな」

「ああ、そういう……ということとは、ランサーのマスターは言峰さんですか」

違和感のある言葉に、しかし場所を思い出してすぐに合点がいく。記憶を引つ張り出さずとも、言峰ならばそれくらいはすると分かります。

「ご明察」と軽く肩を竦めたランサーはもう攻撃するつもりも命令もないと付け加えました。

「アサシン、武器をしまつて」

「……はい」

警戒はしたまま私の言葉に従ったハサンは、それでもランサーから視線を外しません。

私はそれを止めませんし、ランサーも受け入れた様子で、しかしどこか面白いとでもいうような顔になりました。

「幾ら何でも、警戒が薄すぎるぜ？ お嬢ちゃん」

「最近よく言われる気がします。でもランサー、あなたは攻撃するつもりはないと言いましたし、それになんだかんだ王様が煩くなりそんなことは言峰さんもしないでしょうから」

「ふうん。いけすかねえ神父のことをえらく信頼しているんだな？」

じっくり検分するような眼をするランサーに、私はどうだろうかと首を捻る。

言峰を信頼しているのかと言われると……何だか違うような気がします。いえ、王様と組んで嫌がらせをしてくる時はこの人も何かやるだろうと違う意味では信じていますけど。

大人として頼りにしているかといえば伯父と伯母の方が頼りになりますし。

「王様に関することは信頼していますよ。頼りになるかならないかで言うると三六の割合ですけれど」

「……それは些か気になる物言いだな、響」

かつんかつんと聞こえていた石畳を歩く音が止まり、ねっとり絡みつくような声をかけられてしまった。

聞かれて困ることを言つたつもりはありませんが、泰山まで付き合

うことになるのは御免ですね。

「そうでしたか？ 気にさわったのならすみません。それで、ランサーがここにいるのはどういうことでしょうか？ 確か協会からのマスターが彼のマスターだと聞いた気がします」

「ふむ。それについては奥で話すとしよう。ここで立ち話をしてもいいが、風邪を引かれるのも困るからな」

「付いてきたまえ」と早々に身を翻した言峰に、私は小さくため息を吐きます。

多少なりと気遣ってくれるのはいいのですが、あの様子ではその内私の言葉を掘り返してくるでしょうね。そしてまた泰山で激辛の麻婆豆腐を食す羽目になると。……辛いものが苦手になったのは言峰のせいです。

ちらりとランサーを一瞥し、それからハサンを呼んで私は言峰の後を追う。

そんな私たちの後ろをランサーがゆっくりと付いてきます。ただ、足の長さの差から然程距離は開きません。

奥の方にある言峰の部屋の数個隣にある、質素ながら家具を詭えられている部屋に入り、促されるまま皮張りの椅子に腰掛ける。

私の背後にはハサンが立ち、向かい側には同じ椅子に言峰が座り、入り口には扉にもたれ掛かるように立つランサーがいます。

それぞれが落ち着いたのを確認した言峰はゆったりと足を組んで、にんまりと歪んだ笑みを私へと向けてきた。

「ランサーが私のサーヴァントになったのは、何、元のマスターを殺しただけの話だ」

「それは……ええと、とても反応に困る答えですね」

分かりきっていたとはいえ、臆面もなく言い切った言峰に思わず苦笑してしまいます。

言峰ならやりかねないし、実際に行動したのだからどうとも言えません。私に彼の行いを非難するだけの謂れはありませんし。

まあランサーからしてみればさぞ不満なことでしょうけども。マスターを殺した相手がマスターに成り代わるなんて。

「響。魔術の基礎を習っただけに過ぎない私と違い、君の魔力は潤沢だ」

「え、ええと……まさかとは思いますが言峰さん？」

「いや、私も悩んだのだがね」

不穏な言葉に、嫌な予感を抱きつつひきつる笑みで私は首を傾げます。

そんな私を見つつこれ見よがしに重たくため息を吐き出す言峰ですが、その目には明らかに私の反応を楽しむ色があります。

「私の魔力生成量では、ランサーの宝具を使うだけの魔力が賄えなくてね。そこで、だ。君を殺さないことを条件に、私の代わりに魔力を供給してもらえないだろうか」

思った通り。いや、思った以上の提案に私が何かを言うよりも先に口を開いたのはハサンだった。

「！ 貴様っ、我が主を何だと……！」

「ハサン、落ち着きなさい」

今にも言峰を殺してやらんとばかりに飛び出そうとしたハサンを諫める。

物言いたげな視線が向いたのは分かるが、それでも私は真っ直ぐ言峰を見返します。

そんな私の反応は予想していただろう言峰は、どちらかと言えばハサンの反応を楽しんでいるようだ。……趣味が悪いですよ、本当。

「流石にそれだけでは領けませんよ、言峰さん」

「ああ、そうだろうな。それで、君はどのような条件を求める？」

からかいの色を含めた問いかけに、私はさてどうしようかと考える。

別に殺すとか殺さないとかは今さらの話なのでいいのですが、特に考えて言ったわけではない。

どちらかと言えば諦めてくれないかなという淡い期待を込めていただけだ。

それに、未だに体内でキャスターの宝具と精神がせめぎあっているのが、どうなることかわからない。

「うーん……そうですね。もし魔力供給のラインが切れても、嫌味は言わないでくださいね？　あと私とアサシンに今日から少なくとも向こう一ヶ月は絶対に泰山の麻婆豆腐を食べさせないでください」
「な、何故だ!?　響、お前はあれだけ食べてあの麻婆豆腐の良さをまだ理解していないというのか……?!」

突っ込むところはそつちですか、この麻婆神父。

呆れて半目になってしまったが、麻婆豆腐の良さを力説しだした言峰を遮るように「それで？　どうしますか？」と強い語調で問いかける。

「……ふむ、そのくらいで受けてくれるのであればそれで手を打とうではないか。……本当に麻婆は食べないのか？」

「食べません！」

「むむう……そうか。では仕方あるまい。響の分として買っておいた麻婆はランサーに与えるか……」

つまらないと言いたそうな顔で呟く言峰に、ランサーは青い顔をしました。

その様子を見るに、すでにあの外道麻婆の被害に遭ったということでしょう。

というかそうだ。

「ギルガメツシユはどう言ったんですか？」

主語の抜けた問いかけだったが、それでも十年の付き合いのある言峰は察したらしくああと頷く。

「構わん、だそうだ。もし忘れることがあれば躰け直すだけだ、とも言っていたな」

「……相変わらずあの王様は人の事をペットみたい……」

言っている姿まで想像できてため息が止まらないですね。

きっと何時ものように意地の悪い顔して愉しそうに笑っていたことでしょう。

「はあ……まあいいです」

「そうか。ならば今日はこちらに泊まっていくといい」

「わかりました。それじゃあまずご飯を作りますね」

「ああ。ランサーには白米と麻婆豆腐だけ用意しておけ」

胡散臭い笑顔の言峰に呆れつつ、ランサーに同情を込めて視線を送ります。

彼は洗面を浮かべながらも、立ち上がった私と言峰に出入口を譲るように一歩横に動きました。

言峰はそれを見ることはなく通りすぎ、私はお礼と食堂に来ることを伝えて部屋を出る。

ハサンとランサーは数歩離れて私についてくるようです。

別にランサーは私のサーヴァントではないですけど、まあ好きにしてくれて構いません。ハサンもいますから。

「用意が済めば呼ぶように。私は部屋に戻る。ギルガメッシュも奴の部屋にいるはずだ。外に出るとも言っていなかった」

「わかりました」

自分の部屋に戻っていく言峰を見ることはせず、そのまま食堂へと向かう。

サーヴァント二人には適当に座って待ってもらおうように言いつつ、奥の厨房のドアを開く。

「ええと、ご飯は炊いてあるみたいだし……うーん、そうだな、私とハサンは牛丼にしよう」

今度焼き焼きを出そうと買っていたお肉があるのでそれを使用することにした。

王様が文句を言いそうな気がするが、私の家の方で色々食べているんだからそこら辺は放っておく。

ささっと二人分を丼に盛り付けて、男三人の分にも量は控えめにかけておく。

牛丼の盛り付けの前にあたため直した麻婆豆腐もお皿に盛り付けて一度食堂に顔を出す。

少し離れた位置に座りながらも話をしていたらしく二人の間に敵意は感じられない。ただ、なんだかハサンが落ち込んでいるような？

少しだけ己のサーヴァントのことを気にしつつハサンに向けた視線をランサーに戻します。

「ランサーにお願いがあるんですけど」

「ん？ 何だよ」

「言峰さんとギルガメッシュを呼んでくれませんか？ ……二人両方を呼ぶのが嫌ならばハサンにどちらか片方をお願いしますが」

露骨に嫌そうな顔をしたランサーでしたが、仕方ないかと肩を竦めて二人共声をかけてくると立ち上がり、背を向けた。

お願いしますと軽く頭を下げて、ハサンへと声をかける。

「運ぶのを手伝ってくださいいな、ハサン」

「……はい。あの、マスター」

頷いたハサンでしたが、何やら暗い面持ちで俯き、手のひらを握り込んでいます。

「………いえ、何でもありません。その、今日は何を作ったのですか？」

言い淀み、結局口をつぐむことを選んだハサンは首を振って微笑んだ。

私は深く追求しないことにして、笑みを返しながら牛丼だと答えながら器に乗せたおぼんを手渡す。

熱いから置くとときに気をつけるように伝えて、自分も残りを乗せて食堂に戻る。

当然一度では運びきれないので厨房と往復し、それぞれの分をテーブルに置いていく。

まず一番に来たのは言峰だった。そして並べられていく食膳を見て一言。

「響、ギルガメッシュを甘やかすな」

あれこれ凝ったものを幾つか作れと煩くなるのが面倒なだけで別に甘やかしてきたつもりはないのですが。

いえこの場合だと言峰は好き嫌いさせるな、というのではなく麻婆豆腐だけは食べないのを許さない、という意味でしょうけれど。

別に私も食べさせるのは構わないですよ。自分が食べないのなら。いえすぐ麻婆と言う言峰に呆れは隠せませんけど。

「ご飯を食べる前にそれですか。……いえまあはい、すぐに……つて

ハサン持つてくるの早くない?」

ハサンがさつと厨房に引つ込んだかと思えば麻婆豆腐をいれたお皿を持ってきてギルガメツシユの丼の横に並べる。

若干誇らしげな顔をするハサンに、言峰は満足そうに頷きます。なんですか、この空気。

「むっ、この臭いは……! ひ、響、我は腹が痛、っ肩を掴むでない! 言峰!」

言峰がおもむろに入り口前に立ったかと思えば扉を開けたギルガメツシユとランサーの肩を掴み笑う気配を見せました。

ギルガメツシユは漂つてくる臭いに内容を理解し踵を返そうとしたが失敗に終わったという訳ですね。

こういう時の言峰は妙に王様に強く出るんですよ。

「おおギルガメツシユ、待っていたぞ。さあこちらに座るがいい。ランサー、貴様はその辺に座るがいい。ああ何なら床に這いつくばってもいいのだぞ?」

「誰がんなことするか!」

逃がすものかとばかりに背中に回り込まれ扉を閉められたため、ギルガメツシユとランサーは渋々と席に座り、言峰は王様から一席離れた場所に座る。

私はお茶だけいれて配り、言峰の向かいに座る。ハサンは私の隣です。

一先ず皆が揃ったところで食べ始めますが、麻婆豆腐を食べるギルガメツシユとランサーの顔は赤から青へと忙しいものです。

汗をかきつつしかし平然とした面持ちで真っ赤な麻婆豆腐を食べる言峰を極力視界にはいれないようにしつつ、私も自分のご飯を食べ進めます。

「何故お前たちはコレがないのだ、可笑しいだろう」

「ランサーへの魔力供給をする代わり少なくとも一ヶ月はナシにしてもらったので可笑しくありません」

「な、なんだと?!」

憤慨してああだこうだと私と、主に言峰に文句をつけるギルガメツ

シユは何だかんだ言いつつも全て平らげてしまいます。

まあそれも一重に言峰が有無を言わさず食べさせてきた結果ではありませんが。

ランサーもややげつそりとした様子で麻婆豆腐を平らげ、口直しにするつもりだったのかお碗一杯分の小さめの牛丼に手をつけている。

「ごちそうさまでした、響様」

「はい、お粗末様です」

食器を洗うために私は厨房に戻り、ハサンには男三人の食べ終わった食器を回収してもらいます。

それも洗って食器を片付けて食堂に出ると、ランサーが食事していた席にそのまま座っていたことに気づきました。

「ランサー、待っていたんですか？」

「まあな。言峰の野郎から命令されたもんでね」

どこか詰まらなそうな顔で扉の方を一瞥したランサーは机に肘をつけてやる気のない顔で私の顔を見上げてきます。

「んで？ お前さんのやることは終わったのか？」

「はい。……言峰さんは待てという命令以外他に何か言っていましたか？」

頷きを返して問い返すと、彼は何とも煮え切らないといった様子で頭を掻いた。

その問いにちらりと視線をハサンに流しつつ、ランサーは「一応な」と眉を寄せつつも肯定します。

「まあ、やるなら一番奥の部屋を使えって言っていたが。……なあ、お前はほんとにそれでいいのか？」

どこことなく気遣うような色を見せる声に、私は困ってしまいます。

「うーん、いいのかわいのかで言えばよくはないですよ、勿論。私は所詮脆弱な人間ですし。……ただ、王様から了承が出ているなら仕方ありませんよ」

「あの金ぴかに、か……お前は自分ってえのがないわけだ」

遠慮もなにもない言葉に、私の顔は苦笑に歪みます。

ええ、自分がはつきりしていない、というのは多少なりと自覚はし

ています。

それでも、昔……この場合は水谷響という私以外に比べれば確立した我を持っています。

この私以外にも数回はそれはありませんでしたが、それはともかくとして流されやすいのと管理されることに然程抵抗がないもというのが問題点なのでしよう。

「私の生殺与奪を握っているのはギルガメッシュです。それこそ、十年前からずっと。災害の中私を見つけたのは彼で、私を助けたのも彼です。……それに、しなかつたらしなかつたであの王様うるさいですよ？」

「あー、成る程な。ま、それで納得してるんなら会ったばかりのオレから言うことはねえな」

肩を竦めたランサーは立ち上がり、私へと近づき一步離れたところで立ち止まり見下ろしてきます。

何だろうかとその顔を見上げて目が合えばにんまりと目元が笑みに歪むのが見えました。

「ま、仲良くしようや。ヒビキ……で良かったよな、お嬢ちゃんの名前」

「ええ。水谷響です、ランサー。どうぞよろしく」

「おお、よろしくな。……さて、そろそろ行くとするか。ああそれから、アサシンは近くの部屋で好きに寛いでいいってよ。アイツも趣味悪いよなあ」

ぼやくランサーは残りの一步を詰めて私の体をひよいと抱き上げて片腕に収められ、慌ててその肩に腕を回す。

びっくりして心臓がばくばくいってます。はー、本当に驚いた。

「お。お前、いい肉付きしてんな」

……セクハラだー！

そう思ったのと同時にからんからんと何かが床に打ち付ける音がしました。

下を向けば見慣れたハサンの暗器が。そして小さな舌打ち。

「怖いお嬢ちゃんだな、アサシン」

「……例え言峰や英雄王がどう言おうと我が主への行き過ぎた発言には徹底抗戦しますので、そのつもりでいてくださいランサー」

ぎろりという擬音が合いそうな程剣呑な眼でランサーを睨み付けたハサンは私に拗ねた顔を一瞬だけ見せて霊体化してしまいました。

ランサーが肩を震わせながら笑うのでその振動が直に伝わってきて大変居心地が悪いです。

「くくっ、アサシンはからかい甲斐がありそうだな」

「……あまり私のアサシンをいじめないでくださいね？」

「おー、まあぼちぼちにな。さて、じゃあ部屋行くか」

私の言葉を聞き流しつつ鼻歌を歌わんばかりの明るい声音のランサーに、思わず苦笑が浮かびます。

なんというか、彼はさっぱりしていますね。あまり接したことのないタイプですが、ランサーと敵対しない限りは仲良くできそうだと感じました。

第七話

とある教師に教材の運搬を願われ、腕の中に何冊もの本を抱えながらどうにか階段をあがると見知った同級生の姿がありました。

「間桐君？」

放課後で人が少ないとはいえあまりに不審な様子に思わず立ち止まって声をかけます。

すると何かを覗き見るように廊下の向こうを見ていた彼はびくんと肩をはねさせ、勢いよく振り返ってきました。

「な、なんだ、水谷か。驚かせるんじゃないよ」

「ごめんね。どうしたの？　ここ、一年の階だよ。……あ、妹さんがいるものね。なるほど」

「はあ?!　何一人で納得してるんだよ！　僕は別に、桜のことなんかを気にしてる訳じゃない!　……というかお前こそ、衛宮の真似でもしてるのか?　そんな大荷物持って」

動揺したのを隠すためかウェーブがかった髪を気障つたらしい仕事で掻き上げて、笑みを浮かべて見せた同級生、間桐慎二君に私は苦笑する。

実は彼とは中学の頃から異性の中では比較的良く話をする間柄なのです。勿論、彼の取り巻きほどではないですけど。

言う必要のないことだと思えますが補足しておくと、かつての災害で私の通っていた学校もなくなっていて、伯父の家を迎えられた後から深山町の方にある小学校に通いました。

その後は以前言ったとおり一方的ではありますが、あまりに従兄弟と険悪な関係となってしまったので新都側の、今住んでいる教会近くにある祖父母の家で暮らすことになったのです。

そして通っている小学校が深山町だったのでそのままそちらの中学に進み、この穂群原学園に進学し、今に至ります。

なので彼の口にした衛宮君もまた、拾った人に違いがあっても同じような流れでしょう。いえ、本当は別に新都にある高校でも私はよかったですけどね。

とにかくその関係もあつて新都の災害にあつた可哀想な子供として扱われ、色々あつて衛宮に庇われたりして彼とはただの同級生以上、友達未満のなんとも言えない繋がりを持っています。

そして何かと私を気にかける衛宮と、とある時期からその友人となつた間桐で話をするようになった、という経緯があります。

それでも友達とは言い切れないのは、話をすることはあつても個人的に遊びに行つたりだとか家にお邪魔するだとか、そも学校外では会うこともないためです。

「衛宮君の真似というわけではないのだけど……たまたま先生に頼まれてしまつてね。流石に先生からお願いされては、断れないじゃない？」

逸れかかつた思考を現在に巻き戻し、肩を上下させてどうしようもなかつたのだとアピールして見せる。

「ふーん」とやや流すように、興味ないというようにちらりと私の腕の中にあるそれを見た間桐は、数歩の距離を大股で近づいてきたかと思えば乱暴な動作で持つていた本の三分の二程を奪い取つてしまう。

思わず瞬きを繰り返していると、少しだけ不機嫌な面持ちで「何だよ？」と言われた。

何つて、どちらかと言えば私の方がどうかしたのかと聞きたいのですけど。

「……ううん。ありがとう、間桐君。これ、資料室までなんだ」

それでも、彼のことです。

何だかんだ付き合いいいので、今日は気が向いたということなのでしょう。

流石に本を何冊も腕に抱えていると疲れたため、彼の行為はとて有り難いものです。

「ゲツ、こつから正反対じゃん。お前ついてない奴だな、相変わらず」
呆れ半分に溜め息を吐いた間桐に、私は「そうかもね」と返して笑います。

先生に教材の運搬を頼まれたのが私じゃなくて衛宮だったら、たぶん彼は手伝わず後ろを付いていきながら文句を言っていたでしょう

ね。

いや……こここのところ彼は少し荒れている様子だったので怒って別の方向へと向かってしまうかもしれないが。

「そういえばさあ、こないだ……」

彼の取り巻きのような華やいだものではないけれど、私と間桐は男女のそれよりどちらかと言うならば男同士ののような雰囲気です。合って歩きながらとりとめのない話をします。

私が聞き手に回ってばかりではあるものの、お喋りが好きな方である間桐は気にせず話を続けている。

たまに口を挟むように反対のことを口にすれば「分かってないな」と馬鹿にしたように言われたりもしますが、別に私は気にしないので概ね間桐との会話に不和は生じません。

ただ、ひとつ問題があるとするならば私の背後を霊体化してついでくるハサンがこいつは嫌いと言っていることぐらいですかね。

問題らしい問題でもないですが。そこは個人間の相性ですし。

「はあ、誰かさんのせいで無駄な労働をして疲れたな」

「本当にありがとね、間桐君。そんなこと言いながらも手伝ってくれた君へのお礼に百円あげるから帰りにジュースでも買いなよ」

「フン、要らないよ、そんなもの。水谷に奢られるほど、僕が貧乏なわけないだろ」

「そう？　まあそう言うのなら今度のバレンタインデー、追加で一つ増やすことで手を打とうか」

「はいはい。なら今年は量産クッキーなんて手抜きはやめろよ。あ、タルトでもいいよ」

「じゃあチョコチップ入りのパウンドケーキにしておくね」

「また一個だけ辛子入りとかするのはやめろよ、お前」

「だからあれは事故なんだって」

教材を置きながらそんなやり取りをしながら、資料室を出る。

資料室の扉に鍵を差し込むと、くるりと背を向けて間桐は一人先に歩き出す。

私はその隣に急ぐことなく「また明日ね」と声をかけるだけに留め

ると、片手をひらりと振り返されました。

暫くの沈黙。そして人の気配が途絶えた頃合い。

ハサンが気配は遮断したまま霊体化をわざわざ解いて言います。

「アレ、殺してもいいですか」

「ダメ。私のために怒ってくれるハサンはいい子だけど、彼のあれは最早性分だからねえ、聞き流してくれたらいいんだよ。あ、別に嫌いなら嫌いなままで構わないけど」

私や衛宮や、それから他のことをよく小馬鹿にする発言を繰り返す間桐ですので、私のことでハサンが怒っているのは明白です。

何だか家以外ではハサンを拗ねさせてばかりの気がしますが、それでもダメなものはダメです。

「よしよし。それでも我慢して私の言うことを聞いてくれるハサンは本当にいい子だよ」

紫色の髪に手を伸ばして撫でると唇を尖らせて拗ねられました。本当に可愛い子です。

「ふふふ、いい子ーいい子ー」

「うう……面白がっていませんか、響様」

ずっと撫でてしていると照れと嬉しさからか頬を赤くしたハサンでしたが、もっとしてほしいとばかりに片膝について頭を傾けてきました。

本当に可愛くて仕方ない子ですね。

「今日の晩御飯はハサンの好きなものにするとうしましょう。何が好き？」

「あなたが作るものならば、何でも好きです」

嬉しいことを言ってくれるのでお礼にその頭を抱えるように抱き締めます。

「響様……」

不機嫌などなかったかのように幸せだと言わんばかりのほわつとした蕩けた声で名前を呼んできたハサンは、ゆっくり私の背中に手を回してきゆうつと優しく締め付けてくる。

私は片手をそのまま肩に回し、もう片方の手で犬にするように頭を

わしゃわしゃと撫で回す。

紫の髪が乱れてあつちへこつちへと跳ねるけれど、そんなもの後で直せばいいことです。

しかし、あまり長く霊体化を解いたままだと、いらぬ問題が起きてしまいそうですね。

少しばかり惜しい気もしますが両手を離してその髪を手櫛で整えてやり、「ハサン」と名前を呼ぶ。

上目に私を見上げたハサンは少しだけ口ごもり、小さな声で要望を口にした。

「……グラタンが、食べたいです」

「うんうん。了解しました」

私の了承と共に腕から力を抜いたハサンが唇に笑みをのせて霊体化する。

これは王様に気分ではなかったとか文句を言われようとも作るしかありませんね。

何、王様とて美味しければ文句は言わないのですから、黙らせてしまえばいいのです。もう昔みたいに文句は言わせませんとも。

そう考えるとなんだか面白く思えてきて、早く鍵を職員室に返しに行こうと資料室を後にする。その前に職員室に行く前に教室に寄って鞆を持ち、階段を上る手間を省きます。

それから職員室の先生に声をかけて鍵を返却し終われば、後は素直に帰るだけ。

運動部の部活の邪魔にならないようにグラウンドの周りを大回りに、けれど道の真ん中に出すぎて走り込みの邪魔にはならないように歩きつつ、何気なく周囲を眺める。

すると、弓道場の方で赤い色が見えました。

歩みは止めずに眺めると、それが二年生の中でも優等生と有名な遠坂凛だとはつきりと認識できます。

遠坂さんは赤色の物を身につけているのをよく見かけるので、赤といえは……と思ったのですが思った通りですね。いえ、それが何だと言われてもそれまでなんですけど。

ああでも、間桐はなにかと遠坂について言っていたし、彼にとつて目立つ存在というのは気に食わないのでしようね、恐らくは。

遠坂からも視線を外して、校門の方を向けば丁度よくグラウンドの外周を走る野球部が来たので端に寄ります。

走り込みはグラウンドの外周か、校舎周りかのどちらかが使われていますが、タイミングによつて二つの部がかち合つて人数が多くなつたりします。運動部の人は凄いなあと感心してしまいますよね。私は運動が苦手ですし。

「ふっ、くしゅん！」

鼻がむずむずとし、堪えきれなくしゃみをしてしまう。

今日は生憎の曇り空で、寒さが足から体の芯まで染み込んできます。

ずず、と鼻水をすすりつつ、風邪を引いてしまったかもしれないな、とぼんやりと考える。

『早く帰りましょう、響様。今日は特に冷え込んでますから』

『うん、そうだねえ』

明日は起きたら体温を計りましょうか。もしも風邪を引いていたら周りにも迷惑でしようし。

それに風邪を引くと王様が文句を言いながら家に居座るから、よくありません。

「ああでも……もうなくなつてた気がするし、マカロニを買わないとね」

ついでに他の買う物を考えながら、校門を出て坂道をくだります。

それに、そうだ。日曜日にキャスターと会えるか使い魔を送ろう。彼女とはもつと、話をしてみたいと思います。

お互い聖杯戦争が本格的に始まっていけないとはいえ、目立つべきではありませんが。それでも、彼女と話せば得られるものがある気がしますから。……戦わないという約束も、後一週間程のものですからね。

それならばどれだけだけ時間がかかっても問題ないように日曜日に予定を組み込むのが一番です。

第八話

ぴびぴ、と鳴る電子音に脇に挿していた体温計を抜き取ります。

「風邪、引きましたね……」

温度は37.4度を示しています。

完全に風邪を引いてしまいましたね。

幸いにして症状はちよつとした悪寒と熱だけなので、今日休めば明日には治るでしょう。

それでも先にご飯だけは作っておこうと熱で気だるい体を引きずりながら居間へ向かう。

「おはようございます。響、様……？ 顔が赤いですね。……それに熱いです。風邪を召されましたか？」

「うん、そうみたい」

心配そうに顔を曇らせたハサンが体温を確かめるために額に当たった手を下ろして、どうしようと慌てています。

それに苦笑して大丈夫だと言いつつ、私は台所に立ち、ハサンの朝食と自分には胃に優しく卵を加えた雑炊を作ります。

二人で卓についてさあ食べようか、というタイミングで勢いよく玄関が開く音がしました。

「響、今日の朝は何を……む？」

間をおかずしてバーンとドアを開いたギルガメッシュでしたが、嫌そうな顔をするハサンとまたかと思う私を視界に収めるなり怪訝そうに眉を寄せて大股に近づいてきました。

そして、私の顔を上に向かせてじろじろと眺め回し、ふんと鼻を鳴らされる。

「風邪か。おい、そこな暗殺者。貴様に我の食す物を用意する榮譽を与える」

「は……」

突然の言葉にハサンが驚いた声をするのも聞き流し、私を犬猫の子供に親がするようにつかみあげて何時かの幼い日のように腕の中に抱くと、ギルガメッシュはそのまま居間を出ようとしています。

「あ、ハサン、王様のご飯お願い。トーストとサラダでいいから、後で私の分と一緒に部屋に持ってきて」

「は、はい」

慌ててハサンに命じて、ギルガメッシュの顔をちろりと見上げます。

風邪を引いた時期が悪いのでしょうか。普段のからかってくる様子は見られず、どこか不機嫌そうです。

小さく「トーストか……」と呟いたそれは聞き流すことにしますが。子供じやあるまいし、好き嫌いしないでもらいたいものです。いや、たぶん一昨日手を抜いて出したからだと思うけど。

手抜きは嫌だなんてほんと王様は王様だよね。

「あれはどこにあつたか……」

部屋のドアを開け、ベッドに投げ入れるように雑に体を置かれて私は死に体です。今ので、ちよつと気持ち悪くなってしまいました。

唸りつつも恨みがましくギルガメッシュを見上げると、宝物庫の中をあれでもないこれでもないと言いつつ探っているようだった。

その様子に文句は飲み込んで、体勢を整えることにします。

ああ、そうだ。後でハサンには氷嚢を作ってもらおう。

それと彼女には悪いけど、昼と夜もご飯を用意してもらおう。簡単な物は作れるとは思いますが、もしできずとも念話で作り方を教えれば何とかなるでしょう。

「これだな」

金の空間に片腕を入れていたギルガメッシュが、その空間から腕を引き抜く。

その手の中にはいつぞや見たことがある毛皮のマントを持っていました。

ずいっと目の前に出されたそれを受け取って体にかけて、その上に毛布と掛け布団をかける。

足を潜り込ませて位置を調整しているとベッドの横に椅子を引っ張ってきて座ったギルガメッシュはまったく呆れたように呟いた。

「脆弱に過ぎるな、貴様は」

「う……すみません」

謝りつつ様子を探るが、先程の不機嫌さはやや薄れているようでした。

何故だろうかと疑問に思いつつ黙っていると、じろりと睨むように見られてしまいました。

「お食事をお持ちしました」

キイトドアを開いたハサンに再び不機嫌な顔をしたギルガメツシユは腕を組んでハサンが食事の用意を終わらせるまで黙っているようだ。

前にも何度か風邪を引いたことはあるがこんなことは殆どなかったのに、一体どうしたのだろうかこの王様は。

「ありがとう、ハサン。後でいいから氷嚢も作ってくれないかな？」

先にご飯を食べてからでいいから。どうせ私も食べないとだし」

「わかりました。……、……英雄王、あまり我が主に無理をさせないでください」

「フン」

非難するような目線をギルガメツシユに送ったハサンは不安だと言わんばかりに眉を寄せつつも私を見る。

私はひとつ安心させるように頷いて、何はともあれ食事をするように念話してレンゲを手に取ります。

心配の色は拭えなかったもののギルガメツシユが追い払うように手を振ったのでハサンは渋々と部屋を出ていく。

念話で問題があれば必ず呼んでほしいというのに返事をしながらレンゲを口に運びます。

うん、何時もの自分の料理に変わりはない。

「お前は何故このタイミングで風邪を引くというのか」

成る程、やはり時期が悪くて不機嫌になってしまったらしい。

確かに聖杯戦争を始めると定められた日から数えて一週間程前にこれじゃあ心配になるのも無理はないでしょう。

それが王様、というところが少しだけ不思議で可笑しいですが。

「聖杯戦争の真最中に風邪を引いてないだけ、いいと思います」

「……それもそうだな。もしそのようなことになれば我も考えを改めねばならないところであった」

「それって私に不利な方向で？」

「さて、どうであろうか。もしかしたらそうであるかもしれぬし、そうでないかもしれぬ。全ては貴様の態度次第よ」

くつくつと愉しそうに喉を鳴らすギルガメツシュに、私は苦笑してしまいます。

私が多少なりと文句をつけつつも受け入れることを見越しているだけに、質が悪い。

「王様、私が寝たら言峰さんに風邪のことを伝えてくださいね。学校への連絡、お任せします、って」

「ふん、そのような些事は暗殺者に任せればよい」

笑うギルガメツシュは最後の一口を飲み込んで、肘掛けにもたれるように頬杖をつけて私の食事を見てきます。

そう見られては食べにくいのですが、どうせ言っても聞いてくれないでしょうし。

口を閉じたのを見て私も食事に徹することにして殆ど無心で手と口を動かす。

食べ終わり、腕を伸ばして机の上に食器を置いてしまいます。

頭を枕に預けてマントと掛け布団を引き上げると、熱があるからか少し前まで寝ていたはずなのに眠気が襲ってきました。

「そのまま眠ってしまえ」

「……ん……はい……」

瞼を覆うように、額に手を置かれて目を閉じる。

暫くして目を開けば、見慣れた白い空間にいた。足元は花の魔術師による手入れを何時かにされて見事に彩り豊かな花々が私の立つ場所を中心に数メートル広がつている。

ぼんやりとそれを眺めていると、今は時間が合わず繋がりにくいソラウと夢を繋げられたので少しだけ話をしました。

聖杯戦争が始まると知っていてまた巻き込まれないかなど心配されましたが、彼女に知られては余計な心労をかけてしまおうと思

い何も言わないことにしました。

彼女の子供はまだ幼いので、私に氣をとられるのもよくないでしょうから。

風邪を引いた状態で引き留められないと早めに夢を切ることにはなりましたが、それでも話したのは久しぶりだったので話をできて良かったと思います。

やはり、友人が元気な姿を見せてくれるのは嬉しいことだと思えますから。

だから私は、彼女を、彼女が……。

ぞくり、と夢の中だというのに悪寒が体に走る。

じわじわと近づいてくるような何かの気配があることに、私は気がついた。

花の魔術師の気配なんかではない。

これはもつと異質で歪で、私とは相容れないモノだ。

「っ、あ」

どろり、と何かが私を侵食していた。

機能の末端部分から気づかない内に、私の中に入り込んでいたそれは、細く鋭くしかし針の穴に通る糸のように壁に這う蔓のように私の世界に絡みついていった。

「いつ、こんな……」

気づけなかったのは己の失態か。

あまりに小さく細いそれが賢しかったのか。

『……け……え』

すぐに私を切り離してそれとこの意識を隔離するように接続先の設定を余白部分に押し込める。

白い空間で操作をし、余白部分に押し込めたそれをキューブ状に圧縮して更にその上にもう一層重ねてそれを観察します。

……どうやらもうそれ以上は動けないようですね。うねうねとキューブの中を出口を探して蠢く様子に知らず詰めていた息を吐き

出します。

風邪を引いて一気に抵抗力が下がってしまったのでしよう。キャスターの宝具対応が終わらないこともあって、それが力を増してやつとのことで気づくだなんて。

その情報を探ってみるものもそれ末端みたいな物のようで、繋がりも切ったため詳細は分からなかった。

「いや、でも……まさか、ね？ まだ始まってさえないのだから、そんな訳ないでしょう」

何となく思い浮かんだ考えに首を振ってその雑念を払い飛ばして、セキュリティのチェックを入れます。

キャスターの宝具を食い止める手は止められませんが、アレに蝕まれるのも御免です。

……ああ、もしかしたらそちらに掛かりきりになっていたから風邪とかへの免疫力が少し下がっていたのかもしれないね。

流石にそれは困るので対処する幅を少し広くして、下がっていた免疫力の修正をする。……とりあえずこれでもう大丈夫でしょう。

アレに汚染された末端部もキューブのひとつ外側の層に入れて、一息つきます。

「……ん、重い……？」

意識を覚醒させて閉じていた目を開き、体にかかる重みに手を動かして確認します。

首を締めるかのように腕。足と足の間。横を見れば金色。

「……重たい」

状況を確認できたことでもう一度呟きます。

動いた拍子にとき、と額に置かれていた氷囊がずれて枕に落ちてしまいました。

それを片手で直してぼんやりと天井を見上げていると「おい」と小さく呼ばれて顔を横に倒します。

私の顔を数秒見たかと思えば、赤く鋭い眼差しをゆっくりと細め唇を笑みに歪めたギルガメッシュがくつと喉を震わせて囁く。

「大分回復したようだな？」

「……まあ、はい」

曖昧に頷くと首にかかる負荷が増えました。息が詰まって苦しいです。

「お、さま……重い……」

ペしペしと腕を叩くと少しだけ呆れた顔で力を緩め、半ば髪を引つ張るように頭を撫でられます。

あまりなことに痛い涙の滲む目で睨むと頬をつねられる。

「にやにすりゆ、つで、ひゆ、かつ！」

「くくく……よい顔だ。その調子でもっと囀るがいい」

「うっ、ううう……」

これ以上何かを言っても無駄なのは分かっているので唸るだけに留めて唇を引き結ぶ。

「フン、まあよい。まだ熱は引いてはおらぬようだし、今暫く眠れ」

パツと指を離れたギルガメツシュがまたもやずり落ちた氷嚢を私の米神に押し付けてきました。

先程まで寝ていたのにまだ寝ろと言われては少し困ってしまいました。

「……誰かのせいで眠気飛びました」

「ほう？ 疲れたならばよく眠れるな？」

「遠慮します。……から大人しく寝ることにしますよ」

ちよつと言えばすぐ意地の悪いことをしようとするのだから、困った王様だ。

短くため息をついてギルガメツシュから顔をそらして天井へと向ける。

氷嚢の位置だけ調整して目を閉じるとギルガメツシュの腕が動くのを感じます。

その腕は私のお腹の上に落ち着いて、同時に肩にチクチクとした小さな痛みがしました。これは髪が刺さっている感触です。痛い。

たぶんそのまま私を抱えて寝るつもりなのでしょう。

少しだけ暑くて鬱陶しくはありますが、人肌を感じながら目を閉じているとなかったはずの眠気が膨らんできました。多少の痛みが霞

むくらいには。

本当に、不思議なこと、だと思えます。でも、とても……温かいのです。

第九話

昨日一日寝たことで風邪も治り、キャスターと会うという予定も問題なく行えそうです。

結局殆ど寝た状態だったのでハサンには心配をかけてしまいました。が、顔色が戻っていることに安心してくれたようで良かったです。心配をかけさせたいわけではありませんからね。

柳洞寺のある円蔵山の麓まで着き、足を止めて山の上を見上げます。

……やはりお寺の山門まで遠いですね。

「……私がキャスターを呼んできます。マスターは少し休憩してください」

先日は伯父の家に立ち寄りたりしていたのですが、今日は殆ど休むことなく直接こちらまで歩いてきたので少しばかり息があがってしまいました。

学校に殆ど毎日通つていようと、疲れるものは疲れるのです。体力をつけたいとは思いますが、つかないものはつかないので仕方ありませんね。

疲れた顔を隠せない私に見かねたハサンが出した提案に、頼むと頷いて私は階段の一番下の段にハンカチを敷いてそこに腰かけます。

はあ、と冬の空気に白く煙る息を吐き出しながら寒さにかじかむ手を擦り合わせる。

そうしながらもぼんやりと澄みわたる冬空を見上げてぐす、と鼻をすすする。

「はああ……」

手のひらに息を吐き出して僅かな暖をとって指を組み、肘を膝につけてじつと二人が下りてくるのを待ちます。

びゅう、と吹き抜ける風が背中に垂れたマフラーの端を巻き上げる。

自分の髪まで広がったかと思えば風は吹き止んで、服装の乱れだけが残ってしまいます。

小さくため息をついて、乱れて頬にかかる髪を払い手櫛で簡単に整えているとふと視線を感じました。

「？」

ぐるりと見回してみても人っ子ひとりいない。

はて、と首を傾げて周辺を調べてみても何の影もない。

気のせい、ですかね。：あまり過敏になりすぎても疲れるだけですし、明確な敵意以外は気にしないことにしましょう。

浮かしかけた腰を落ち着けて再び空を眺めることにします。

暫くそうしていると、話し声が聞こえてきたので立ち上がってハンカチを畳んで鞆に仕舞って振り返ります。

私が見立てた服を纏ったハサンと、その隣に現代風の装いのキャスターがなにやら談笑しつつ石段を下りてきていました。

ハサンには何度か私が学業に勤しむ間に街を回ってもらっていました。その中で二度程キャスターに会ったそうで、距離はとりつつも和やかに話せる程度には仲良くなったそうです。

「お待ちせしました、マスター」

「待たせてごめんなさいね、響。それに買い物に付き合わせることになっ」

美しい顔を困ったように曇らせたキャスターに、私は首を振ります。

「いいえ、気にしていませんから、大丈夫です。：：：キャスター、その上着男物ですね。もしかして、葛木先生の物ですか？」

少しだけからかいの色を乗せつつ話を変えると、彼女は可愛らしくも頬を薄く染めて「ええ」と袖を引っ張りながら肯定した。

嬉しそうな雰囲気から、かなり葛木のことを好いているのが窺い知れます。

「その、自分には着れない物だからとくださって：：：変じゃないかしら？」

そわそわとした様子が、何となくハサンに被ってしまい、私は堪えきれず笑ってしまいました。

そんな考えに気づかないサーヴァント二人は揃って私の顔を見つ

め、そこに否定の色がないのを認めてほっとしたようです。本当に、存外仲良くなりましたね。

「ふふふ、仲睦まじいようで何よりです。さ、それじゃあ行きましようか」

今日はゆつくりと町を回ろうという話になっています。

私にとっては今更だし、ハサンも一通りは覚えていきます。キャスターもある程度地形などは把握しているそうですが、それでも仕掛けをする場所を新しく見繕いたいとのこと。

それを私たちと共に、というのは可笑しい話でしょうけれど……まあ半分は違う理由ですからね。

深山町でも人の通りが多い商店街を人避けの術をかけた状態で行き、住宅街の中に作られた小さな公園で休んだりしつつ何てことない学校でのあれこれについて語ります。

葛木の話がせがまれたので主に私だけが話しているようなものですが、キャスターはそれでも楽しそうに相槌を打っています。

ハサンもそんなキャスターの様子に微笑しているだけです。

葛木ネタも尽きれば次は彼女も知っているお寺の息子である柳洞について話をします。それも終わればまた他の話題へと転じていく。

話の間に印をつけたりとしていき、ある程度深山町を見て回ったかな、ということでも新都に移動することに。

バスに乗り込み、一番後ろの座席に座ります。

「本当に、車というものは便利よね」

そわそわとして落ち着かない様子で外の景色やバスの内装を確認するキャスターに私は頷きます。

「確かに、歩くよりも早いし、小型の車でも二人以上は乗せられますからねえ。遠くに行くにも便利ですしたくさん物も乗せられるし、文明の利器ですよ」

「そうね。錬金術から分かれた技術、という認識でしたが。人の発展は本当に目覚ましいわ。……それでも、変わらないものもあるけれど……」

少しばかり憂いを帯びた表情を浮かべたキャスターが視線を膝に

落とす。

隣のハサンもそれに同意するように小さく頷いて、そつと肩に頭を預けるように甘えてきました。

私にはそれを否定することはできませんから、沈黙を返します。

お互いの間に流れる深い沈黙に、暇を潰すようにハサンの頭を撫でればすりすり、と頭が動かされる。

「……ふふ。本当に、あなたたちは仲がいいのね」

「ありがとうございます」

素直にお礼を言えば、キャスターは私たちを見てくすりと微笑む。とても優しいそれに、私もまた笑みを返します。

それからもぼつりぼつりと会話を交わし、新都駅で下車してシヨツピングモールのヴェルデに向かいます。

手近なテナントに入るとキャスターが服を手に取りながらハサンと、私を見比べて首を傾げる。

「響はどんな服が好きなのかしら？ アサシンは揃いの部分があると嬉しいと言っていたし、二人に合うものを探すのもいいかもしれないけれど」

「キャ、キャスター！ それは言わないでほしいと……！」

「あら、そうだったかしら。ごめんなさいね、アサシン」

慌てるハサンにキャスターがくすくすと笑う。

釣られるように私も笑ってしまえば、ハサンは落ち着かない様子を見せ、しまいには拗ねたように顔を背けてしまいました。

思わずキャスターと顔を見合わせてしまいました。彼女は緩く首を振って微笑みを浮かべる。

ふ、と思い至った私は一瞬だけキャスターに目配せしてハサンの腕を引く。

「随分キャスターと仲良くなっていたんですね、アサシン。マスターちよつと寂しいなあ？」

「うっ?!」

「そうかしら。私はアサシンとも仲良くしたいけれど、あなたとも仲良くしたいと思っいてよ？ 響はとても可愛らしい顔立ちをして

いますから、きつとどんな服も似合うわ。これとかどう?」

「そうですねえ、これはきつと可愛い私のアサシンによく似合うかもしれないねえ?」

「そうかもしれないわね。ねえアサシン? あなたのマスターがどうかと言っているのだし、試着してみましようよ」

ハサンをからかうようにやり取りすれば、見る間に耳まで赤く染め上げたハサンは口をへの字に曲げてキャスターが手に取ったそれを受け取って試着室に急ぎました。

その後ろ姿を見送って、残された私たちはくすくすと笑ってしまいます。

「本当に、可愛らしいこと」

「私もそう思います」

キャスターはにこりと笑い、他の服へと手を伸ばした。

私もそれを横目に、なんとはなしに服に手をかける。

「……ねえ響」

「はい?」

眩くような呼び掛けに私はキャスターに顔を向けるけれど、彼女は視線をこちらには寄越さずに服を見つめている。

「私はあなたたちのこと、気に入ってしまっただの。……だから、もし問題が起こりそうならば言ってくれて構わないわ」

思わぬ言葉に手にした服を取り落としかけたものの、ハンガーラックにかけなおす。

キャスターの言葉は、とても嬉しいものです。だから私は笑みを浮かべてお礼を言います。

「ありがとうございます、メディアさん。もし何かあってあなたにか頼めなさそうであれば、その時はお願いします」

「ええ。あなたにその気があるのなら、何時でも言っただけいい」
やっと向けられた柔らかく細められた眼に、頷いて私から手を伸ばします。

ぱちりと手を見て瞬くものだから、もう片方の手で頬を搔いて「ええ」と言葉を迷う。

「お約束の証に。停戦を約束し、アサシンに手を出さないでくれたこと、それに今日もこうして会ってくださったあなたを、私は信じています。だから……」

目を見開いたキャスターは、やがて困ったという顔をして唇を引き結んだ。

けれどすぐに仕方ないとばかりに肩を竦め、伸ばした手に手を重ねて微笑笑を浮かべる。

「本当に変わった、困った子なこと。でも、そうね。その信頼には、できる限り応えたいと思うわ」

優しい目をするものだから私の方が困ってしまいますが、もう一度お礼を伝えて手をほどきます。

「さて」と気を取り直したように一着手に取ったキャスターがここにことしつっそれを手渡してくる。

思わず苦笑してしまったところで、ハサンが試着室のカーテンを開く音がしました。

「おや？ とてもよく似合ってるよ、アサシン」
「ええ、とても可愛らしいわね」

二人してあれこれとワインレッド色のワンピースに身を包んだハサンを褒めて褒めて褒めまくると、どんどんと俯いていつてしまう。

その反応がまた可愛くて笑ってしまうのだけど、私に渡された服を見て早く試着してみましようと思着室に背中を押されてしまいました。

キャスターは楽しそうに笑って、他の服を見ていると背中を向けてしまいます。まあ、一緒にというのは無理な話ですしね。

試着室のカーテンを閉める前にハサンの顔を下から覗くように見ていると、嬉しそうにはにかんでいました。

視線が絡み合って更に頬を染め、照れ隠しのように「見ないでください」と蚊の鳴くような声でカーテンをさっと閉められてしまい、ついつい笑ってしまう。

照れ屋なハサンが、とても可愛くて……もし普通の女友達というのがいたらこんな感じなのかな、とも思います。

残念なことに私にはこういうことをできる友達、というものは出来ませんでしたから。だからハサンが来てからというもの、実は新鮮なことばかりです。

出来ればもつとこの時間を続けていきたい、と思いますが……聖杯戦争が始まるまでもう日がありません。

だから、私は残り少ない平穏を出来うる限り続けていきたいと、そう思っています。

第十話

学校から帰宅した私を出迎えたのは青い槍兵でした。

その少し後ろに立つハサンは仮面をしているので表情は見えませんが、疲れたような雰囲気醸し出しています。

思わずハサンとランサーを見比べて、最終的にランサーに視線を向けて首を傾げる。

「ただいま帰りました。……ランサー、アサシンに何かしましたか？」
「何にもしてねえよ。言われた通り街を回ってただけだ」

「な？」と親しげにハサンに笑いかけるランサーでしたが、彼女の視線はじとりとしたものです。

……本当に何もしてないんですね？

ハサンにも尋ねると一応との曖昧な返答が返ってきましたが、何もないならよしとすることにします。

「それで、今日も戻らないんですか、ランサー」
問題があれば都度言ってくればいいんです。そこら辺の遠慮はしないでくれていいんですよ、ハサン。

念話でそう伝えつつも居間に移動してハサンの淹れたお茶をいただき、テレビ前のソファに寝転がったランサーに尋ねます。

彼は寛いだ様子でテレビの電源を入れてチャンネルを切り替えつつ答える。

「教会にいても言峰の野郎に雑用させられるだけだからな。それよりはこつちで綺麗どころにいる方が何万倍もいいだろう」

「私としてはマスターに近寄らないで欲しいのですが」
「はいはい」

刺々しいハサンの言葉を受け流し、ランサーはクイズ番組でチャンネルを止めて、大きく欠伸をしました。

私は飲み終わった湯飲みを洗い、その番組の音声を聞きながら晩御飯を作ります。

今日は風が強くて寒かったし、鍋物にすることにします。
豆腐と野菜を一口大に切っていく、白菜は気持ち多めに。

ハサンに頼んで机にカセットコンロと土鍋を用意してもらい火をかけて煮だつたところに具材を入れて蓋をして更に煮ます。

火の加減はハサンに任せることにして副菜の方の用意にとりかかります。とはいえ水気をきつたほうれん草をおひたしにし、伯母にもらった揚げ物を器に移しかえるくらいのものですが。

どうせその内ギルガメツシユも来るだろうと合わせて四人分のご飯をよそい、鍋を取り分ける器を机に置いていきます。

「今日は鍋か」

「はい。よそいますから、もう少し待つてくださいね、ギルガメツシユ」

台所と往復して用意する間に来たギルガメツシユは何時もの定位置に座ります。

その隣に椅子の距離を離してランサーが座りました。

土鍋の蓋を開けて王様の分を取り分けてから手を合わせ食事の文句を口にします。

自分の分はハサンが嬉々として取り分けてくれたのでお礼をいしつつ白菜を咀嚼。

……うん、味が染み込んであつたかくて美味しいです。やはり冬は鍋物ですね。

あ、でもおでんも捨てがたいです。この日曜日あたりはおでんにしましょうかね。

「旨い。これで酒でもあれば最高なんだがなあ」

「それは何よりです。私は未成年なのでお酒は買えません、隣の王様に頼んでみてはいかがですか？」

ランサーの言葉につい笑ってしまいがら言えば、見るからに嫌そうな顔をされます。

ギルガメツシユも嫌そうな顔をしていました。まあ予想した通りの反応です。

二人とも性格的な相性が悪いようなので仕方ないことですよね。

「フン、貴様のような狗に飲ませる酒などないわ」

「テメエ、これ以上狗と侮辱するなら殺すぞ」

「はっ、ほぎけ。貴様ではこの我に勝つことなど出来ぬわ」

剣呑な空気になる男二人ですが、どちらともなく視線を外し無言で箸を進めます。

話を振った私が悪かったのかもしれませんが、まあ家で暴れられなければ何でもいいです。

この二人の仲を取り持つなんて、私には不可能ですし。

「響様、取り分けます」

「あ、うん。ありがとう」

ハサンは目の前の男二人には目もくれず楽しそうに私に甲斐甲斐しく世話をしてくれるので、これがまた更に何でもいいかと思わせるのです。

本当にいい子ですよ、ハサン。いえ、決して現実逃避ではありませんよ？

「ああ、今日もやってますね、ニュース。ああでも、やり始めた頃比べてキャスターも大分加減しているようで」

ニュースに番組が切り替わったテレビから聞こえてきた音声に、話題出しとして口にします。

私と彼女は停戦していますが、そうした行為には関与しません。お互いの行動をとやかく言うのはどうかと思いますし。

ちなみにハサンとランサーは交代するように夜の街に出ているのですが、そこら辺はやぶ蛇とばかりに遠目に見るに留めているらしいです。

ランサーは言峰からそう言われているようですし。ハサンは自分が手を出す話でもないという判断と私の考えからです。

「フン、魔女というには随分と生温い手よな。だが、利用は出来そう
だ」

「また言峰の野郎と企み事か？ テメエらは人の嫌がることは嬉々としてやりやがるな、ホント」

呆れたようなランサーの言葉に、ギルガメッシュは片目を顰める。それからすぐに何かを思いついたようにニヤリと笑いました。

あくどい顔だしこれには関わりたくないなあ思いつつも目を逸ら

すようにテレビの方を見ることにします。

「ほう？　まずは貴様を使い潰してやっても我は構わんぞ。∴。そうだな、例えば響の守をするのはどうだ。それだけでは貴様にはそこまです損はないだろうが、言峰の命令も含めれば負荷になろうて」

ギルガメツシユから零れた提案に、半分テレビに向いていた意識が一瞬で奪われてしまいました。

それは私だけではなく、言われた本人であるランサーも私のサーヴァントであるハサンも同様だ。

「……はア？　どういう風の吹き回しだ、おい。……どつちかってえと、オレが響に近づくのを厭っているのはアサシンだけじゃなく、テムエもだと思ってたが」

訝しげな視線に、しかしギルガメツシユは答えることなく庫からお酒を取り出した。

一瞬私に向いた視線から掩れろと言っているのがわかったので、一緒に取り出された金色の杯にお酒を注ぎます。

「うむ。響、他に何か酒の肴になるものを持て」

「え、ええ？　いいですが……少し時間かかりますよ？」

「それくらい構わん」

「わかりました」

ギルガメツシユからの無茶振りには慣れていますが、今日は何だか変な感じです。

台所に立って少し振り返ってみますが、音量を下げて何かを話しているようで結局何故なのかはわかりません。

まあそんなこともあるかなともやついた考えを首を振って追い払い、冷蔵庫を開けて作るものを考えます。

出来るだけ簡単に作れるものを思い浮かべつつ、余っている物や弁当用に残してある材料を翌日に差し支えない程度に取り出して調理にかかると。

三十分ほどかかりましたがテーブルに戻り、ギルガメツシユとランサーの前につまみを置いて、自分は残っているご飯を消化します。

すっかり冷めてしまいましたでしたが、不味くはありません。自分の作る

慣れた味なので特別美味しいとも思うことはないですけどね。

「私が調理している間何やら話し込んでいたようでしたが、何かありましたか？」

ギルガメッシュはいつも通りの様子ですが、ランサーは不機嫌な雰囲気です。テレビを見ていますし、ハサンなんて酷い顔色をしています。「ハサン、王様に変なことを言われたんですか？ 顔色が真っ青ですよ？」

「……あ、……いいえ……なんでもありません。何も、言われていません、から」

青ざめた顔のまま首を振ったハサンはガタツと立ち上がり「お皿を片付けます」と言って食べ終わって空になったお皿を抱えて台所へと逃げてしまいました。

これは絶対目の前の王様が何か言ったのだらうと視線を送るとフンと鼻を鳴らされる。

「お前の案ずることではない。それよりも戻ったのならば酌をせよ」「ですが……」

心配になってハサンへと顔を向ける。

カチャカチャと食器の擦れる音とザアザアと流れる水の音がする中に立つその背中は、元々細い彼女を頼りなく見せた。

何を言われてあんな顔を浮かべたのだろうか。

「響」

ぼんやりと見つめていると、ギルガメッシュから普段聞くことのない低く強い声で呼びかけられる。

その声は大きくはないはずなのに思わずびくりと体が硬直してしまいました。

そろそろと彼へと視線を戻すと、赤い瞳が無感動に私を見下ろしていた。

その眼に見られると、どうしてか喉が渇いていくような錯覚さえ覚える。

「……わかりました。でも、今後はあまりあの子をいじめないでくださいね」

「フン。それは貴様の活躍次第だな」

ニヤリと細められた眼差しに、強張った体から力を抜きます。

ギルガメツシユのあの瞳は、あまり得意ではありません。

知らずの内に詰めていた息を吐き出して、椅子を移動させてからお酌をすることにします。

「ああそうだ。喜べ響。お前に少しばかり、やってもらうことが出来たぞ」

「はい？ 何ですか、藪から棒に。というか今日は何時もより……なんというか、唐突すぎませんか？」

怪訝に思い、積み重なった疑念は鼻で笑い飛ばされてしまいます。どうにもこの王様は私の問い掛けに答えるつもりはないようです。

けれどその愉しそうな顔に反して低く威圧感さえ感じる声音で囁いたギルガメツシユは、私の顔を見て更に嗤う。

「精々足掻くがよい、響。我は貴様の死を許さぬことを、ゆめ忘れるでない」

言葉に困った私は、思わず視線をさ迷わせてしまいます。

そうしてかち合ったランサーの、ギルガメツシユとはまた違う紅の瞳がぱちりと閉じられました。要はウイנקというやつですね。

反応に困ったので机に視線を落とすけれど、ギルガメツシユがとんと机を叩きます。

「そら、まだ足りぬぞ。注ぎ足せ」

「……はあ。かしこまりました、王様」

普段とは異なる王様の様子に、けれど考えるだけ無駄だと思い直すことにします。

深く考えたところで、彼と私では全く異なる眼で物事を捉えているのだから解るはずもないことです。

ため息ひとつで疑問を払い飛ばして、望まれるがまま取り出されたお酒を注ぎます。

……ところで、私のご飯が進まないのですがそんなこと考えてくれる、わけないですよね。

とりあえず次と言われるまで話をふられても聞き役に徹しましょ

う。

なに、残り少ないのですからすぐに食べ終わりますよ。だから頬を引っ張らないでください。子供じゃないんですから。

第十一話

カランカラン、と空き缶がぶつかり合う音がする。

自分の手で入れたそのことは視界から外して、持っていた財布からお金を取り出し自動販売機に小銭を投入していく。

ぽちり、と選んだのはホットのお茶で、ガコンと落ちたそれを取り出せば寒さに震える体に暖をもたらしした。

「あれ、水谷？」

冷えた頬にあてていればふと名前を呼ばれ、振り返れば小学生の頃からの見慣れた顔がそこにはあった。

「ああ」と小さく吐息のように溢しつつ、彼の名前を口にする。

「衛宮君。珍しく購買？」

赤銅色の髪を気まぐずい様子でくしやりと掻いた衛宮は、曖昧に頷いて視線をさ迷わせた。

何かを言おうと迷っている様子に、さてどうしたものかとこちらも迷ってしまう。

話さないのならばこのまま立ち去るだけ、なのだけれど。

「水谷が購買なのも珍しいな。……あー、と。その、もしよかったら、一緒に食べないか？」

「……へえ、衛宮君からのお誘いなんて珍しいね？」

心底から驚いているように瞬けば、衛宮は困ったという顔を浮かべる。

それから自信なく駄目だったか、と言われて緩く首を振る。

「ううん、別に……悪いとは言っていないし、一緒に食べるのは構わないよ。約束した相手もいないからね。……じゃあ先にあそこの空いたところに座ってるから、買っておいでよ」

購買の近くに備えられた幾つかの椅子の中の空いた一角を指差すと、衛宮は頷いてまだ人の多い購買の窓口へと向かった。

それを最後まで見ることはなく場所を取るために椅子に座り、もう一人分の席に持っていたパンの袋を置く。

ぼんやりと他に机を囲って座り、わいわいと談笑する先輩あるいは

同級生、後輩を眺めつつ蓋を開けたお茶を飲む。

暫くそうして待っていると、息を切らせ少し急いだ足音がしたためにそちらを見やる。

「悪い、待たせた」

自販機の前に立つ生徒の間を潜り抜けて衛宮は片手を上げた。

それにいやと首を振り、隣に置いていたメロンパンの袋をとり封をあけて一口頬張る。

「えっと、水谷？ あー……何か今日は何時も以上に覇気がないけど大丈夫か？」

「ん？ ごくん。特に何も無いよ。単純に昨日夜更かししちゃって寝不足気味なだけだし」

首を捻りつつそう答えると、「そうか」と頷いた。

それからまた話題を探すように衛宮はカレーパンを食べつつも視線をさ迷わせる。

誘われた側とはいえ此方も何かを話すべきだろうか、と考えながらもお茶に口をつける。

「……そうだ。昨日、新都の公園の方にいたか？ 遠目だったから、違ったらすまん」

振られた話題に、一呼吸おいて口に含んだお茶を嚥下する。

それから、横にあるその顔を一瞥して最後の一口を頬張る。

「まあ、数分だけね。衛宮君昨日バイトだったんだね、お疲れ様」

「いや、バイトは何時も通りトラブルなんてなかったし、たいしたことしていないから疲れてはいないぞ？」

「そっか……相変わらずだねえ衛宮君ってば。ま、無理はしないでね」
ん、ああ。無理はしてないから平気だよ」

呆れた目には気がついていないのか、衛宮は「それに」と口に含んだパンを飲み下して続ける。

「どっちかと言えばお前の方が無理してると思うけど」

「……えー、そうかなあ？ そんなことないと思うけど」

「どうだか。またあの人に嫌がらせされてないか？」

「ううん、別に。嫌われてるのは昔からだし、気にするほどのことでも

ないよ」

従姉妹の話を持ち出され、困った顔をしてしまう。

確かに一方的に嫌われ、一時期はいじめと呼ばれるような行為までされはした。

しかし今は多少落ち着いて会えば嫌みを言われるくらいのものだ。いや、確かに周囲の目、特に伯父夫婦の目に入らないときはその限りではないけれど。

考える様子を見て眉をひそめた衛宮はどうなんだと眼で訴えかけてくる。

相変わらず変に押しの強い彼に、少し呆れが浮かんだ。

「前も言ったでしょ？ 私のことには気にしなくていいの。私のことをそんなに気にしていると、間桐君の妹さんに拗ねられるよ？ ……」というかそれじゃあ、私の方が嫌われちゃいそうだけど」

「？ 何でそこで桜が出てくるんだ？」

転換した話題に対し、きよとんとする衛宮に今度は隠しきれない呆れをため息と共に吐き出す。

この男は些か周囲からの視線や好意、悪意といった感情に疎いとはわかっていたのだが。

「……いや、気づかないままでいいのかもね。ま、今の言葉は気にしないでいいよ。ただの戯れ言ってことにしといて」

「そう、か？ 何か腑に落ちないけど、まあわかった」

何もわかってないよね、それ。

という心の声は飲み込んで、「そうそう」と頷く。

「そういうえば生徒会長とお昼にしなくてよかったの？ 普段は生徒会室で食べてるじゃない」

「今日はごっちの気分だったからな。……それに、お前だっていつもは教室で弁当だろ」

「あはは、まあそうかもね。ま、私の場合、今日は少し寝坊したからってだけなんだけど」

くすくすと笑う様子に唇を緩め、衛宮は残り僅かなカレーパンをはむはむと食べる。

自分は食べ終わってしまったためそれを眺めるようにしつつ、既に冷めてしまったお茶を一気に飲み干す。

「んっ、ごちそうさま。それじゃ、私は図書室に行くから」

「ああ、それじゃあまた教室でな」

片手をあげると、同じように返されてしまったが特に気にすることはなくそのまま衛宮から背を向ける。

購買を出るついでにお茶の空はゴミ箱に捨てておく。

数人の生徒とすれ違いながら階段をあがり、まっすぐに図書室に向かう。

ガラリ、と扉をスライドして室内に入り後ろ手に扉を閉める。

図書室の利用者はまばらで、数人が思い思いの席に座って本を読んでいた。

それらを一瞥し、本棚に足を向ける。

「んー……」

さてどれを読もうかと本の背表紙を流し見る。

まだ見ていない本はたくさんあるが、そうだな。

今日は、と本を抜き取ってそのまま立ち読みをする。

位置的にギリギリに見える時計を気にしつつ、本を読み進めていきそろそろ教室に戻るべきかと思った時である。

『響様』

ハサンの声が耳に届き、その体に纏う魔力がまっすぐ自分の元へとやってくる。

人がいるため霊体化したままの彼女はそれでも背後で膝をついた。

「わかったの？」

小さく、けれど短い声で尋ねれば、ハサンは「はい」と平淡な声で応じる。

『学校に張られたこの結界の支点は幾つか見つけましたが、小さな物を含めると全て見つけたとは言いがたいです』

『そっか。ありがとう。それからお疲れ様、ハサン』

『いえ、響様のお役に立てて嬉しいです』

嬉しそうに声を弾ませたハサンだが、すぐにその雰囲気は一転し暗

く低い声で続ける。

『……ですが、この結界は無作為で、何より我が主の身を害するもの。早期の対処が望ましいです。ついてはキャスターに協力を願うのはいかがでしょうか』

『あー……そうだねえ』

出された提案に、うんと頭を捻りながら本をぱらりとめくる。

確かに魔術師のクラスのサーヴァントたるキャスターに頼めば事は簡単に収まるだろう。

しかし、幾ら停戦の約束をされていて協力することも認めてくれているとはいえ、結界を壊してしまえばどうなるだろう。

壊してしまったら先日の殺人事件が今度は範囲を広げることになるだろう。そうなればキャスターのしている新都での昏倒事件よりも事が大きくなることは間違いない。

召喚されたサーヴァントの中でこんな結界を張るのは消去法からしてライダーのクラスのサーヴァントのはず。

ライダーともなれば機動力が高いだろうし、何よりこんな趣味の悪い結界を作れるという時点で一般人を屠るに躊躇いはないだろう。

そこまで考えて、しかし首を横に振る。

『……いや、キャスターには言わないでもいいでしょう。彼女も自分のマスターである葛木先生の危険にはそれ相応の対応をとるでしょうから』

『マスター』

『あはは、私は私でどうにかできるよ。一応一通りの基礎魔術には触れてるし』

そういう問題ではない。

そんな声が聞こえてきそうだったが気のせいと思い過ぎすことにする。

どうにかならなければその時はその時に対応すればよいだけだ。

「さて、この本を借りて教室に戻りましょうかね」

誰にともなく呟いて、本を持たない片手をすつと横に払う。

その指先でハサンの頭をくすぐるように撫で、受付のカウンターへ

と向かう。

貸し出しの手続きを終わらせて図書室を出ると、中にいたハサンが慌てたように背中を追いかけてきた。

それについくすりと笑ってしまえば、念話にて「笑わないでください」と抗議されてしまった。

「あつれー、水谷さん、ご機嫌ねー?」

「藤村先生」

次の授業の担当である藤村の姿に思ったより時間がなかったか、と思いつつ「そうですか?」と首を傾げる。

彼女は何時もの朗らかな笑顔のままうんうんと頷いて隣に並んで階段を上がる。

「何だかいつもより楽しそうだったからいいことあったのかしら?」
水谷さんがそこまで表情崩してるなんて珍しいなーって」

「藤村先生は本当に生徒のことを見ていますよねえ」

「そう言われると、照れちゃうわ」と笑った藤村は機嫌よさげに鼻歌を歌う。

「あ、予鈴なっちゃったわね」

「そうですね。まあ今回は急がなくても間に合いますよ、先生。また今朝みたいに倒れても困りますからね」

「? 誰か倒れてたかな? おつかしいわね、ちゃんと朝出席確認した時は皆起きてたと思っただけだ」

「アハハ、そうですねー」

自分が今朝も見事に転んで気を失ったことなど忘れている様子に、笑って流しつつ教室の扉を開ける。

藤村がギリギリに来ないのは珍しいという顔をそれぞれ浮かべつつ、各自いそいそと自分の席へと着席する。

そうして教卓に藤村が教材を置いた時、タイミングよくチャイムの音が響き渡った。

「きりーっ」

チャイムの音が収まり、日直のかけ声で全員が起立し、「れー」という声にばらばらと頭を下げる。

そうしてがたがたと音を立てながら着席する。

「よーし、それじゃあ昨日の続きからいくわよー」

出席者の確認をした藤村が、チョークで黒板に文字を書いていく。そうして午後の授業は、先週よりもゆっくりと穏やかに始まった。一昨日深山町の方で事件があったために本日も早く下校するように、という言葉にて最後は締め括られ、放課後を迎える。

今日はこの後伯父夫婦の家に行く予定があるために早く帰るといえば帰るし、帰らないといえれば帰らないというものではあるが、そんなことは教師陣には関係のないことだ。

いや、事件に巻き込まれたら学校でも問題として上げられるのだろうが。

それでも、事件には少なくない関係性があるために今更でもある。聖杯戦争がはじまってしまっ、いや、はじまってしまったのだから。吹き抜ける風にマフラーを口元まで引き上げて、くすりと響は笑った。

第十二話

伯父夫婦の帰りが遅くなったこともあり何時もより遅い時間に夕食をとったのだが、従姉妹に呼び止められそして今時刻は11時を示している。

最後に嫌悪に満ちる眼で睨み付け、彼女は背を向けて自身の部屋へと戻っていく。

彼女が自身のことを嫌っている理由もわかつてはいるがやつとことで解放されて、さて帰ろうかのため息を吐き出す。

居間を通り過ぎて玄関に向かえば、伯母に慌てたように呼び止められた。

「響ちゃん、最近は何事なんだから泊まっていきなさいな」

「……いえ、すみません……伯父さんと伯母さんにはご心配をおかけしますが……」

従姉妹との不和はわかっているだろうけれど、拗れに拗れていることなど伯母が知る由もない。

だから彼女は従姉妹がどうこう、などとは決して口にする事などなくひたすらに自身の身を案じる。

それを嬉しくは思いつながらも、響は何時ものように首を横に振る。

しかし最近の事件と過去通り魔に遭った経験の話があるために今日は特に強く引き留められた。

「でも……」

「本当に、ありがとうございます。でも、明日はあちらで友人と遊ぶと話していて、できれば早くから用意したいものですから」

長い攻防の末にそう言えば、伯母は押し黙りじつと顔を覗き込んでくる。

それに安心させるようににこりと笑って見せれば、長い沈黙の末に大きなため息がこぼれ落ちた。

「まったく、あなたは変わらないのね。いえ、あなたもあの子もかしら……?」

あの子とは従姉妹のことを指しているのだろう。ちらりと部屋が

あるだろう方角を一瞥し、またもやため息が零れている。

そしてもう一度顔を合わせ、彼女は苦笑いを浮かべた。

「それなら、もうこれ以上引き留めてはダメね。今日くらいは、と思っただけけど……気を付けて帰るのよ、響ちゃん。危ないと思っただらすぐ逃げることに。家に近いのならあの神父さんのところに逃げ込むのよ？」 家はあなた一人なのだから逆に危ないわ」

真剣な顔を促す伯母に「はい」と大きく頷いて聞き入れる。彼女は言峰とは数度しか顔を合わせていないが、伯父も崇める神は違えどもいい人だと認めているために信頼はおけるだろうと認識しているらしい。

言峰の性格、というか趣味は悪いものの、基本的には善き神父として振る舞っているためどういった顔を知っているかというのが問題なだけだろう。

「それじゃあ、また来ます。お邪魔しました、伯母さん。お休みなさい」

「ええ……またいつでも帰ってきてね、響ちゃん。お休みなさい」

伯母に向けてにこりと微笑み、玄関を開ける。

玄関から一歩出て振り返り、扉を閉めるその最後まで伯母はとても悲しそうな顔で響を見送っていた。

それに良心が痛まないでもないが、従姉妹のことを考えればこれが最善だ。

くるりと伯父夫婦の家から背を向けて、夜の狭間へと足を進める。

じやり、と時折砂を踏みながら慣れた道を行く。

今はハサンに先に帰ってもらい、家のことをお願いしているため、本当の意味で一人だ。

心細さは特に感じてはいないが、少しだけ話し相手が欲しくなってきた。

そんなことを思いつつ、けれどハサンは呼び出すことなく冬木大橋を渡り、新都の中心に続く大きな道から家屋と屋根の低いテナントや会社などが点在する道へと入る。

今日は月明かりが眩しいくらい、明るい夜だ。そう思いながら夜空

を見上げ、思った。

「ん……う？」

そうして、視線を戻した先。

冴えた月空の下で響は銀色の少女に出会った。

「っ」

かちりと視線が絡みあい、ばちりと何か報せるような信号が体に走る。

そうして路上に立つ少女の正体にすぐに気がつく。

これはマスターが見ていることを報せる、令呪からのサインだ。

自分がそれを感じている、ということとはつまり。

「あれ？　あなた、マスターなの？」

相手にもそれが伝わっている、ということだ。

振り返った少女は闇夜に不釣り合いなほど幼く、その姿は月の光に照らされ白くぽっかりと浮き上がっていた。

「君は……君も、聖杯戦争のマスターですね？」

少女の純粹な無垢な愛らしい顔に騙されてはならない。

だってこれは聖杯戦争で、聖杯戦争とはつまり、人と人が争うということなのだから。

「ええそうよ。あなた、あまり強そうには見えないけど……そうね。

私、今退屈してたから、準備運動の相手にしてあげる」

少女はきよとりとした愛らしい顔で頷いて、その顔を嗜虐の色に染めた。

そうしてにこり、と愛らしく幼さの滲む笑顔を浮かべてスカートの手端を掴まんで膝を軽く折った。

赤い瞳と銀色の髪が妖しくまるでカーテンコールを照らすような電灯の光に照らされ、その身に纏う紫の衣装は品があり礼を見せて見せるその姿は、少女といえどもまさに淑女というに相応しい美しさを孕んでいた。

「ひとまず礼儀として名乗ってあげる。私はイリヤスフィール・フォーン・アインツベルン。アインツベルンって、あなたには分かるのかしら？」

馬鹿にした様子などなく、彼女は首を傾げる。

それに固唾を飲み込んで、答えようと口を開く。

「ああ、いえ、何も言わなくていいわ。だってお姉ちゃんは、準備運動ついでに死んじゃうんだから」

にこりとした笑みには悪意など欠片もなく、ただ事実のみを口にす
る。

そうして響のことなど気につけず、少女はそれと呼ぶ。

「来なさい、バーサーカー。大事な食事の前の運動よ」

それはまさに絶望だ、という直感が走り抜ける。

自分や、まして少女よりも大きな巨躯を持つバーサーカーと呼ばれたそのサーヴァントの威容も威圧も、自身のサーヴァントであるハサンでは相手にもならない。

諸ともその巖のような腕がもつ大きな岩とも剣ともつかぬそれに
両断されるのが関の山だろう。

ならばどうする。どうやって。

「それじゃあお姉ちゃん——」

「少し待って、くれない？ 提案したいのだけど」

淡い希望などあるわけではない。

だけれどその痛みによって死にたいとも思えない。

故に響は一か八かイリヤスフィールに提案という名の待ったをか
ける。

そして少女は、予想外だったのか目を丸くして言葉を止めた。

「……いいわよ、言ってみなさい」

どうせ何があってもどこをどうとつても非力そのもののような女
に何か出来るわけがない。

そう踏んだイリヤはフツと笑って先を促す。

「その食事までに、鬼ごっこをしない？ 運動になるかならないかは
わからないけれど。私もあっさり死ぬのはごめんだもの」

「ふうん？ 自信があるの？」

「さあ、どうだろう」

試すような視線に試すような口振りで返して見せる。

すると彼女は数秒目を伏せ、それから「いいわよ」と挑発するような眼差しを向けて応じてみせた。

「すぐに追いかけたらつまらないわね。二十秒だけ待ってあげるわ、……。ねえ、あなたの名前を聞いてあげる。どうせすぐ殺して忘れちゃうけど、面白いことを言ってくれたから一回くらい呼んであげるわ」

「それはありがたいね。私は水谷響。君に馴染みがあるように言うなら、響・水谷という順の方が分かりやすかったかな？」

少しの延命にホツとしつつ、内心の焦りなどおくびに出さず微笑む。

それにイリヤはぴくりと眉を動かしたものの、特に何かを言うつもりはないらしい。

「そう。それじゃあ今度こそ始めるわよ。ヒビキ、精々無意味に無価値に無様に逃げ惑って私を楽しませてね？ あなたはお兄ちゃんを殺す前の余興前菜なんだから」

イリヤスフィールは無邪気に笑う。

その笑顔は天使か悪魔か。

いや、自分にとっては死の宣告なのだろう。

膝をついたバーサーカーがその片腕にイリヤスフィールを抱えて乗せるのを尻目に、響は走り出す。

魔術回路を起動させ、足へ強化を施して体にかかる重力を軽減させる。

肉体にかかる負荷も順に強化していくが、こんな小手先の技でどうにかできる相手と思っているわけでは決してない。

路地の間を潜り抜け細い道を走りながら、響は迷っていた。

ハサンをここで呼ぶのかどうか。

呼ばなければ死ぬと分かっている、それでも何故か迷いが捨てきれなかった。

かといって死にたいわけでもない。

だけど、どうやってこの場面を切り抜ける？

「ねえ、どうしてサーヴァントを呼ばないの？ 呼ばないと死んじや

うよ? ……バースーカー」

鈴を転がすような少女の音が狭い路地に反響する。

そして背後で、大きく何かを振りかぶる気配を感じた。

ガツゴオツ

「っあ?!」

何かを砕くような音に、振り返ることなんて出来ない。

ただ、直感のままに真横に飛んで、それを回避する。

ごろり、と無様にも地面に転がってしまいがら、どうにか腕に強化を回して更に足に力を込め完全に倒れてしまうのを回避し、ちらりとそれを見る。

「っやば?!」

先程まで走っていたラインは地面がまるで大地が引き裂かれたような有り様だった。

それに気をとられたのが命運か、更に後方のバースーカーが立つだろう位置を見たときにはすでに遅かった。

バースーカーの黒い巨体などなく、忽然とその姿を消していた。

……いや、そんなことはない。そんなはずはない。

だってあの少女が、敵を見逃す意味などないのだから。

「あ」

何も考えず探すために上を見たその眼は捉える。

空に跳躍し、大きく振りかぶられた大きな岩の大剣。それは、全てを壊してしまいそうな猛々しい風を纏っているようで。

死ぬかも、と思うには遅すぎた。

「」

ならば苦しみなく死ねることを願うしか自分には出来ない。

そう、瞼を閉じる。

自分をよく慕ってくれたハサンに申し訳ないな、それに王様はどう言うのだろうか、と考えて。

けれど、諦めかけた耳に体に、想像とは違った衝撃が走った。

「っ、な……え?」

思わず目を見開いた響は、すぐにその正体を知る。

その名を呼ぼうとした次の瞬間、ドゴオオンと大きな衝撃と土煙が飛びかい、視界を塞いだ。

それらどちらの武器によるものか、すぐさまその粉塵はゴアツと吹きすさんだ風によってその煙は晴れる。

「やっと呼び出したのね？ そうじゃなくちやつまらないわ。ふふふ」

戦闘に場違いなまでの明るく楽しげな声がイリヤスフィールから零れる。

そうして響は、すぐそばにある彼を呼んだ。

「ランサー……ありがとうございます」

緊張でからからに渴いた喉から絞り出した言葉に、青い槍兵は「おおよ」と軽い調子で答えてみせる。

あまりにそれが普段通りのもので、響は一命をとりとめた安堵から僅かに体の力を抜く。

しかし、警戒は勿論忘れはしない。ランサーとてそれは変わりなく、バーサーカーを窺っていた。

「どうしてここに？」

「お前さんを探してた。よく生きていたな」

「たまたまです」

「逃げる先は」

「教会に」

短く互いの状況をやりとりし、目的を確認する。

響は不安定に抱えられた体を邪魔にならないよう位置を気にしながら首に腕を回し、更に体の重力を軽くする。

そしてランサーに供給する魔力を無理矢理増やしつつ強化を施してみせる。

急激な魔力の消費にすぎずきとじだした頭を抱えてしまいたかったが、そんな真似はせずにイリヤスフィールとバーサーカーの様子を確認する。

「やっちやえ、バーサーカー。ヒビキもそいつも、ぐちやぐちやにしてやりなさいー！」

少女の顔が愉しげに歪む。

そして、ランサーの腕に力が籠ったと感じた瞬間には既に景色は変わっていた。

第十三話

ぐんぐんと移り変わっていく景色の背後で時々破壊音が轟く。

響を抱えたランサーは真つ直ぐに教会の方角へと向かわず、バーサーカーの巨躯が僅かでも動きにくい場所をと狭い路地を中心に走っていた。

それでもその動きが鈍るのは狙った通りの、いやそれ以下のほんの僅かのみで、前を向いたままランサーは舌打ちする。

「あのでかい図体で、よくもまあこんな道を走れるもんだな」

ぼやくような言葉に、響は小さく頷いた。

幾ら魔力ラインを形成していてもランサーのマスターは言峰だ。

彼による魔力の制限で彼の能力値は下がっているらしい。今は緊急措置として彼の集中を切らさないように気を付けつつも指先を首に触れる皮膚接触によって魔力を供給し、魔力ラインへも普段以上の魔力を流して無理矢理魔力量を増やしているため、ほんの少し能力が上昇している。

だが、それも微々たるものだ。

何より響の元に来る直前に二度の戦いを行ったランサーは決して万全とは言い難い。

詳しい事情は聞いていなくとも、宝具を使用した際の魔力消費を繋がつた魔力ラインから知覚しており、言うなれば今行っている魔力供給量では普段の力より少し強いといえるかいえないか程度の効果しかない。

ランサーの宝具はそこまで多くの魔力量を消費しないと本人が語っていたが、それでも起動にはある程度魔力を使用する。

加えて、言峰からの命令により初見であるバーサーカーに対し、全力を以てして相手取ることができない。

そのハンデは、この窮地を脱するにはいささか苦しい。

ビュンツ

「おっとー」

気合いを込めた声と共にガコツという鈍い音がする。

ひゅん、と視界の隅で赤い線が動いたので槍を振り抜いたのだろうと察する。

そして先程の音は飛来した石を叩き落とした音なのだ、と地面に跳ねすぐに見えなくなった石を見てぞつとした。

あれが当たれば確実にただではすまなかつただろう。部位欠損はごめん被りたい。

「ありやあお前を抱えたまま相手取るのはどうやったって無理だわ。次に顔を突き合わせたら命令は無効とはいえ、なっ！」

「……アインツベルンといえば聖杯戦争の御三家らしいですね。普通の魔術師より優れた術者を選びすぎているのでしよう」

「ああ。敏捷が売りのランサークラスだつてのになあ」

やれやれ、というようなため息交じりの言葉に、苦笑が零れる。

そうしながらもじつと後方から追いかけてくるのを観察しサーヴァントの情報を分析してみるが、幸運以外のステータスが軒並みAランクという脅威の数値が判明した。

そして何よりバーサーカーというクラスは狂化により更にブーストがかかっていると聞いている。

ということは実質的な数値は見た目以上ということだ。

「上から来ます」

「あいよー」

グシャ、という音と共に距離のあるその体が沈みこみ、一気に消えた。

地面に残っているのは力強い足踏みにより抉れたアスファルトだけ。

しかしそんなことなど気に止めてはいられないためすぐに視線を滑らせる。

その巨体が隠れるような場所などないため、その行方は前か上か、その二択のみだ。

そして前ではないというならば、結論はひとつで、黒い点が天に存在していた。

「もちつと飛ばすぞー！ 強化頼むー！」

どこを、だなんて聞き返すことはなくその脚部へと更なる強化を施す。

そして直ぐ様腕に力をこめて、来る風圧に備えて彼に回した腕に力を込める。

そんな些細な力など取るにたらないとばかりに淀むことなくランサーは加速した。

ドガアアアアン

激しい破壊音と、飛散するアスファルトや土煙が二人の背中を追いかける。

けれどそれ自体は届くことはない。

しかし、そんなことは些末なこと。

「突進してき……っ！」

視界に飛び込むように接近してくる巨体に叫びかけた響の声は、最後まで言い終わることはなかった。

「いつ、う」

ランサーが急な方向転換をし、その勢いの衝撃が殺されることなく体に伝わり舌を嚙んでしまったためだ。

少し切れてしまったのか口内には血の味が滲んでいる。

それでも視線をバーサーカーへと向けると飛び込んできた勢いを殺しきれず、直線のライン上を少しいったところで着地していた。

勿論、直ぐに立て直してランサーと響が逃げる方向へと走り出しているけれど。

「うふふ、すばしっこい鼠ね？　でも、そうでなくちや狩りのしがないわ！」

その肩に乗せられた少女の愉しげな声に、バーサーカーは答えるような咆哮を上げた。

そうして気力と体力を削りながらも、もうすぐで教会に繋がる坂へと出る。

その坂道を一直線に行くか、はたまたその斜面を利用して作られた墓地の間に行くか。

ランサーのその思考は一瞬だった。

ぐつと腰を落とし、膝を曲げて足に力を溜めて強く地面を蹴りつける。

柵を飛び越えて草木を植えられた墓地の敷地に着地し、止まることはなくまた駆け出す。

数秒と違わずバーサーカーも墓地へと飛び込むが、その勢いのまま大剣を地面に叩きつけることによる衝撃波を起こした。

それはランサーたちに迫ったが寸でのところでかわしてみせ、飛び散る石礫を朱槍が弾く。

そして走りながらの攻防をかわしつつも次第に増えていく墓という障害物の間を縫うように走る。その勢いは緩まることはない。

しかしバーサーカーも決して離れることなく、どころかここにいたって距離を詰めてきてさえいた。

「ああクソッ」

小さく悪態づきながらバーサーカーへと振り返るように横へと跳躍する。

その時、胴体に薙ぐような一閃が走る。

その一閃は、振り返る際に体を捻ったことにより辛うじて腕を掠めるだけに留まった。

だがそれによって響の体を抱える力が緩む。

「ち、つくしよ……!」

力を込めようと意識したその刹那、巨体が地面に沈み込む。

ランサーの足はまだ、地面についていない。

「!!!」

空気を震わす咆哮と共に地面を削り抉り切り上げるように大剣が振り抜かれる。

ランサーは朱槍で防ごうと右手を動かし、そして。

「ひ——」

ガゴオオオオオオオン

鬼事の中でも一番の轟音が轟く。

石剣が地面から離れたことにより舞いあげられた粉塵が辺りを立ち込め、視界の不良を呼び込んでいた。

そうなることを予想して目を閉じ、口を手で塞いでいたイリヤス
フィールはけほつと指の隙間から入り込んだそれを払うように軽く
咳をし、薄目を開けた。

どて、どてどて……どちやつ

「あれ？ ……やつちやつた。もう、これじゃあ失敗としか言えない
わね」

土煙が晴れてももうランサーの駆ける音はしない。

バーサーカーは主の嘆息と命令によって動きを止め、沈黙した。

何故か？

何故ならそれは、彼女らが定めたゴール地点への到達を果たしたか
らに他ならない。

「チイツ」

よろりと暗い影が僅かな明かりを溢す教会を背に立ち上がる。

カンツと右手の朱槍を地面に打ち付けたその片腕には、寸前まで抱
いていた体はない。

「ランサー？ 貴様……」

「おう、セイバーか。テメエに今用はねえ。すっこんでろ」

教会の門の端に立っていた黄色い雨合羽を着た金髪の少女が、教会
の門を境に睨み合う巨軀と青い槍兵を見比べ手に持つ何かを構える。

しかしランサーは少女、いいや。サーヴァントの一、セイバーに一
瞥もくれず槍を放つ構えを見せた。

「万が一いつにその隠した武器を向けたら貴様を先に殺す」

剣呑な表情の彼の言わんとしていることは、事情を知らないセイ
バーにも読み取れた。

ランサーはこの巨体のサーヴァントとの交戦にマスターを直接的
に巻き込んでしまい、その左手とマスターの左足を犠牲にこの教会の
敷地へと戦いの衝撃で飛ばされたのだろう、とそう予測がつく。

セイバーはすぐに判断を下した。

「ここは不可侵領域と聞いている。故に貴様のマスターがその領域に
入っている限り、私は一切手を出せはしない」
「フン」

鼻を鳴らし、ランサーは教会の敷地から外へと歩きながら槍へと魔力を迸らせる。

そうして一步踏み出し、魔力で満ち輝く朱槍を構えバーサーカーを見据えた。

「ふうん？　ここで宝具を使うのね……まあ私のバーサーカーには無意味に終わるでしょうけど」

くすり、と巨体の足元でイリヤスフィールは嘲笑う。くるならきなさいと自信満々に胸を張る少女に、その宝具を避けるよう命令をする素振りは見られなかった。

何か考えがあるのか、それとも何か死に対して効力のある何かを持っているのか。

いいや、それでも自分のやることは変わらないかと一瞬の思考を切り替え、魔力を込めた槍を投擲しようとしたランサーはしかし振り返って舌打ちをした。

その視線の先には、三人の人物が教会から出てきていたからだ。

「ほう、今宵は珍しい客人ばかりだな」

そうごちて顔に笑みを浮かべて見せたのは、この冬木教会にて神父を務め、何より聖杯戦争の監督役を預かる男。言峰綺礼である。

その後ろを歩いてきた内の片方は赤いコートを身に纏う、聖杯戦争においては御三家とされる遠坂家の少女は遠坂凜。

そして、状況を認め思わず倒れる少女へと駆けつけた少年は衛宮士郎。

「み、水谷!?　どうして、いや、何で、足が……っ?!」

倒れる少女のうつ伏せの体を仰向けにし、その正体に衛宮は動揺した。

それを一步引いたところで立ち止まり見下ろした言峰がふむ、と僅かに頷く。

「チツ……」

向けられた視線たちに再び小さく舌打ちしたランサーはバーサーカーたちから背を向け、少し離れた場所に落ちた自分の左手を拾いあげて傷口に宛がい霊体化する。

その治療が叶うのかは分かることはない。しかし、

マスターであろう少女が倒れ伏し、気を失っていることと見るからに戦闘を行ったのだろう痕からして魔力不足により実体を保つに困難だったのだろうと、遠坂凜は落ち着いた視点で状況を観察した。

そして、遠坂の視線は自然と教会の門の前に立つ銀色の少女と、その傍らの異形がごとき巨体のサーヴァントへと向く。

一方のイリヤスフィールはその視線を受けても至ってつまらないという表情でじつと倒れた遊び相手と、それに声をかける少年を見つめた。

「凜、彼女の足を取ってくれ」

緊迫し張り詰めていく空気の中、それを打破したのは言峰だった。

自然、集まる視線を受け止めながら彼は衛宮の肩を「退け」と押しつけて片膝をつく。

「ふむ……まだ息はあるな」

鼓動の有無を確認した言峰は物言いたげな顔をした凜から、赤く濡れた細い足を受け取る。

そうして傷口と傷口を合わせ、何かを確認する神父に衛宮は思わずと言ったように問いかけた。

「治る、のか……？」

「さてな。……それよりも衛宮士郎、こちらに構ってばかりいては彼女が不服そうなのだが、いいのかね？　こんなことをする者を放っておいても」

呆然と治療を施そうとする言峰を見ていた衛宮は、そこでやっと気がついたとばかりに銀色の少女へと視線を向けた。

イリヤスフィールは不機嫌な様子でいたがやつとのことで目が合い、にこりと天使のような愛らしい笑みを浮かべた。

それに僅かに毒気を抜かれ、しかし問い詰めねばといった様子で衛宮は顔を強ばらせ、その小さな天使へと歩みを寄せた。

「ば、馬鹿士郎……！」

あまりに無防備に近づく衛宮に、遠坂は手を伸ばし制止の声をかけるものの、それは少し遅かったようだ。

教会の敷地から一步出た衛宮の背後で白い少女から伸ばされた魔

力の糸が教会の門を絡めとり、高い音を立てて閉ざされる。

「もう、待たせすぎよ、お兄ちゃん。レディを待たせるだなんて、まったくなっていないわ」

「あいつを……水谷を殺そうとしたのは、お前か？」

「わかっていることを聞くだなんて無駄だと思うな。でも、その通りよ。本当はお兄ちゃんに会う前に遊び終わる予定だったけど……：こ
うなったなら仕方ないから、ヒビキのことはまた今度殺すわ」

遠坂の声も遠く、少女の顔が冷徹な悪魔のごとき冷えた笑みに目が奪われる。

そうして彼女は、つい先程も倒れた少女に向けた様にスカート先端をつまみ上げ、淑女の礼を披露してみせる。

「わたしはイリヤスフィール・フォン・アインツベルン。……それじゃあ、お兄ちゃん、いくよ？」

そうして少女は可愛らしくも残酷に、歌うように背後の異形へと命令をくだす。

「やつちやえ、バーサーカー」

そうして衛宮士郎は、二度、いや三度目のサーヴァント戦の渦中へと投げ出された。

それを守るはセイバーのサーヴァント。

バーサーカーの暴風のような攻め手に圧されるセイバーに協力するように魔術を放つは遠坂凜。更には彼女に付き従う赤い外套を纏う男が実体化し、遠距離から矢の霰を降らせる。

止まることないバーサーカーに、戦いを眺めるイリヤスフィールは冷たく終わりを宣言した。

そうして聖杯戦争始まりの夜に再び、高らかに剣戟の音が響き渡った。

第十四話

教会前の墓地で戦闘を行うセイバーとバーサーカーの立てる音を細めた目で一瞥し、冬木教会の神父は眼前の少女の途切れた足の断面同士を引っ付ける。

そうして何事かを呟きながら手を動かす。

「あ、っ、う……あ、あぁッ」

意識はなくとも痛みから体が悲鳴を絞り出す。

苦悶に歪む顔に、しかしそれを止める気はないのか言峰の唇はまだ動きを止めない。

いや、むしろその目には愉快だと言わんばかりの色が浮かんでい
る。

「……ふむ。一先ずの処置はよからう。さて」

一頻りこの場ですべきことは終わったと疲れを押し出すような息を吐き出し、言峰は響の背中と足に手を差し入れて立ち上がる。

彼女の途切れたはずの左足は、まだ僅かに肉の色を見せながらもぷらりと揺れて、しかし落ちることはなかった。

それにひとつ頷き、言峰は踵を返して教会の入り口へと向かう。

そうしてその扉を閉めきる前に、いまだ音を立てる墓場の方を見て唇を弓形の笑みで彩った。

バタン、と大きな音を立てて閉めきった扉から離れ、長椅子の間を通り抜けて礼拝堂から更に奥。

中庭も横切って部屋の集まりの中の一室へと行き、腕の中に収めていた少女の体をベッドへと横たえさせる。

そして片ひざについてそのまま出来る限りの肉と肉、神経と神経を結び、後は本人でどうにかできるだろうところまでの治療を施す。

「ご苦労であったな、言峰」

治療を終えてごきりと肩を鳴らした言峰に、そんな声かけられた。
た。

見れば開けたままだった部屋の入り口にギルガメッシュが立っており、大股にベッドへと近づいてくる。

「これを放つては、お前の機嫌を損ねてしまうからな」

立ち上がり、ベッドの脇から一歩横に動いた言峰は肩を竦める。

そしてその金髪の下表情を見やり、背を向けた。

「言峰、お前から見てどうであった？」

浅くベッドに腰かけ、気を失った時よりは落ち着いた呼吸を繰り返している響の足へと触れながらギルガメツシユは問う。

ぐり、とまだ繋がりがきつていない傷を開き、肉を抉るのを見てため息を吐きつつ言峰は遠坂と衛宮のやり取りを思い返す。

「……お前が狙おうとしたことは半分ぐらい当たったのではないか？」

あの様子では凜は確実に勘違いしたはずだが」

「そうか。少し私の予定からずれてしまったようだが、雑種どもが勘違いしたのならまあよしとしよう」

小さく押し殺された呻き声にくつり、と喉を鳴らしたギルガメツシユがついと赤い目を動かす。

「私の物を守りきった褒美に、千切れた手をつけてやるがよい」

その言葉に、実体化したランサーは顔をしかめて舌打ちをした。

言峰はポタポタと血を滴らせるその左手を見てふむ、と頷き治療の魔術を施す。

見かけは繋がったようだが、それでも指先はピクリとしか動かないようにランサーは自身の左手を見下ろして苛立たしげに眉をひそめた。

「後の治療は響が目覚めてからだ。生憎と私には傷を治すことはできても、彼女のように完全に繋ぐことは出来ないからな」

「そうかよ」

「ああそうだと。ではランサー、治ったところで早く行け。恐らくアサシンはここを離れぬだろうからな」

表情を無にし、数秒黙って言峰を見たランサーだったが「へえへえ」と気乗りしない様な返事を返して肩を竦めるとすぐ霊体化した。

それと入れ違うように実体化したアサシンに、言峰はくつと笑いながら部屋を出ていく。

それを一切視界にいれることなくハサンは椅子を引き、ベッドから

……ギルガメツシユから離れた位置に置くと静かにそこに座る。

アサシンのその様子に鼻を鳴らしたギルガメツシユは足にかけていた手を離し、指先にべったりと付着した血を舐めとった。

「響に来るな、とでも言われたか」

「……………」

「ふん、そう拗ねるなよ暗殺者。貴様の献身が悪いわけではないが、コレにはそれを必要とする気概がないだけだ。……いやしかし、貴様が先日コレを『普通』と称したことが間違いとよくわかったのではないか?」

ニヤニヤと笑う英雄王に、ハサンは込み上げてくるものを堪えながら唇を強く噛む。

しかしその瞳だけは雄弁にその感情を物語っていた。

怒りの色に震える眼は、ギルガメツシユを見据えている。

見つめ合う目は十数秒経っても逸らされることはなく、ギルガメツシユは面白いと言わんばかりに嗤い声をあげた。

「はっ、その献身に免じてこの我を睨むなどという無礼を見逃してやろう。くくくっ、まあ精々励めよ」

響の顔を一瞥したギルガメツシユは立ち上がり、宝物庫に腕を入れる。

金色の波紋が波打ち、ずるりと出されたそれはマントのようだった。

ふわり、と宙から落ちるようにその手を離れたマントは響の体の上に被さり、その口元を毛皮が隠す。

「響が起きたならば報せよ。この様子ではすぐに起きんだろうからな」

「……………わかりました」

大きく欠伸をしたギルガメツシユは頷くハサンなど目に留めず、そのまま部屋を出ていった。

その足音が遠ざかるのを聞き届けて、ハサンは静かに椅子をベッドに近づける。

そうして、マントからはみ出ている手をゆっくり握りしめて、きつ

く目蓋を閉じた。

世界が、時を止めたような陰鬱な静けさに満ちる。

ハサンは目覚めのない指先を祈るように額に押し当てて唇を噛み締めた。

「……響様……何故、なのですか……？ どうして……」

そのままピクリとも動かないままに何十分、何時間と経った末に絞り出した声は酷く切なさど、憤りのようなものを孕みながら虚しくも静寂の中に消えていった。

はっ、と溜め込んだ息をやつとのことのでついた衛宮士郎は、それから咳き込んで口の中の違和感を吐き出した。

バーサーカーとの戦闘は、遠坂のサーヴァントであるアーチャーの放った矢によつて戦いが終わった。

……いや、終わったのではなく見逃されたのだ。あの白い少女の気まぐれによつて。

巨人は鈴をならしたような声にに応じて姿を消してその主たる少女も、アーチャーの放った一矢によつて炎を燻らせた墓地の向こうに消えていった。

「マスター、窮地を救ってもらったのは感謝します。ですが、そろそろ離してもらえませんか」

炎を睨んでいた士郎は、セイバーの言葉にはつとして銀の甲冑を纏う少女から手を放す。

そうして立ち上がろうとしたものの、立ち眩んだように尻餅をついてしまった。

それも無理からぬことで、アーチャーの一矢からセイバーを連れ出そうとし、結果庇うような形になったがために背中に飛び散った瓦礫の破片が幾つか突き刺さっていたのである。

それによる痛みと出血に、体が異常を訴えるような頭痛が士郎を襲っていた。

その様子に気づき背中に刺さる破片を確認したセイバーは一言断り、躊躇なくその破片を引き抜く。

乱れかけた息を整えようとする士郎の背を見ていたセイバーは、感心と安堵に胸を撫で下ろした。

如何なる術か、その背中にできた傷口が見る間に塞がっていつていたからの安堵だ。

その言葉を聞き、しかし士郎はそんな魔術を会得していないぞと驚き口を開こうとする。

「衛宮君、無事？」

そこへ遠坂が駆け寄り、声をかけてきた。それに手をあげて応えた士郎に、彼女は僅かに安心した様子を見せてこの場を離れようと提案する。

それに頷いて歩き出した遠坂を追いかけようと立ち上がり、歩き出そうとした士郎の意識はそこで途絶えた。

「マスター!？」

慌ててその体を支えようとしたセイバーだが、既に彼の意識はない。

意識のない人間は重く、彼女の体に倒れかかるように崩れた。

「……気を失ったみたいね」

セイバーの声に振り返った遠坂が近づき、ぐったりとした衛宮の顔を見て呟く。

ぐつと足に力を入れて自身のマスターの体を立ち上がらせたセイバーだが、少しバランスを崩してたたらを踏む。

「ふう……ここまで乗り掛かった船だし、手伝うわ、セイバー」

「……ありがとうございます」

セイバーは思わずといったように自分とは反対側の衛宮の腕をその肩に回した遠坂をじっと見つめ、それから礼を言う。

遠坂はそれに対して首を振り、気にしないでと微笑した。

「代わりと言ってはなんだけど、あなたの所感を聞いてもいいかしら

？」

「……何についてでしょうか。答えられそうな範囲であればお答えします」

本来ならば既に敵として対峙してもいい相手であるが、セイバーは衛宮に手を貸してくれた分は答えてもいいといった様子だ。

彼女の善い人柄にやはり自身で最優たるセイバーを引きたかつたと惜しみながら、遠坂は知りたいたいことを頭に思い浮かべる。

「そうね……バースーカーも気にかかるころではあるけれど、とりあえずランサーについて、かしら。私も一度戦ったけど、どうにも気にさわるから」

「ふむ。ランサー……ですか」

てつきり先ほどの狂戦士についてかと思っていたのだが、想像とは違う遠坂の言葉にセイバーは考えこむ。

夜の闇の中、ずりずりと何かを引きずるような音と二人分の足音を響かせること数分。

やつとのこととでセイバーはその考えを口にした。

「戦ったのならばアーチャーも同じ所感を抱いた、とは思うのですが……どうにも本気になりきっていなかったように思えます。本気を出すに制限されているような……いえ、戦闘自体は手を抜いていたとは思いませんが。それにしたって引き際が鮮やかに思えました」

「屋敷の近くで感じた魔力からして、ランサーが宝具を使ったのよね？それで、真名を看破しただろうセイバーを仕留められずに撤退したってわけか」

なるほどと頷く遠坂に、しかしセイバーは否定する。

「彼は宝具を使って尚生存した私を確認するなり引いていきました。どうにもそのような指示を受けたそうですが……マスターが教会にきた、ということとはリタイアの可能性も否めません」

「そうね。肝心のマスターがあれば、参加を放棄して助命を乞うために教会にきたのかはわからないけど」

「……あの教会の監督役が傷を癒したのは何故でしょう。意思の疎通がままならぬ相手に、まして聖杯戦争の関係者ならば肩入れをしては

ならぬのではないですか」

それには遠坂も同感なのか小さく首肯して唸り声をあげる。見た限りでは確かに令呪も存在していなかった。それに、魔術師という気配でもなく、今まで自分が行っていた探知にも引つ掛かっていなかっただけに、彼女が本当にマスターなのかというのも怪しい。

いや、この肩を貸している相手が魔術師であると知ったのもつい数時間前のことではあるのだが。

令呪も見えない部分に宿っているかもしれないし。

それに、イリヤスフィールと名乗った少女の口振りからしてもマスターであるのに間違いはないはずだ。

衛宮と同様にこの冬木の地に隠れ潜んでいた歴史の浅い魔術師の家の者、と考える方が妥当であろう。

「……あの似非神父なら、教会に訪れたからには意思を確認せねばなるまい。なんて言うつもりかもしれないわ。バーサーカーと戦闘になって、たまたま教会に転げこんだ、って可能性もあるけど」

「確かに、その可能性もあります」

頷いたセイバーに、遠坂はもうひとつ浮かんだ可能性を口にする。

「もし彼女に魔術の適正が低かったならば、本気を出すに制限されている様子だった、というのも頷けるわ。明らかに魔術師というには纏った魔力が薄すぎるもの」

「……その情報を私に伝えてもよかったですか?」

疑るような声音に、遠坂は忍び笑う。

確かに、明日には敵対するだろう相手に無償で情報を与えるのは愚かに等しい行為だ。

「私としては、情報を渡した上で潰しあってくれの方が助かるもの。それに、あなたからも情報をもらってるわけだし」

「……そうですか」

納得したという声音のセイバーは、ふむと頷く。

勝つ上で弱いものから落とす、というのも確かに一つの手だ。

たとえばマスターが弱くとも、ランサーは強力な相手だ。あの槍さばきは、例え現界において力を制限されていたとしても冴え渡ってい

た。

それに加えてあの必中の槍ゲイ・ボルクを受けた傷は表面はともかくとして、深部は今も痛みを訴えかけてきている。我慢ならない痛みではないためそれは今おいておくとするが。

もう一度あの槍を解放されたとしたならば、どうなるだろう。

真名を看破し、その槍の力を知った上で考えてみるが、あの槍は因果逆転の力を持っているからして、確実に避けられると断言をするとは出来ない。

次に相対した時には倒す、とは思うものの必中の槍ゲイ・ボルクの対策、対応は考えねばならないだろう。次も己の直感だけで凌げるほど、あの槍兵英雄は甘くはない。

「ま、ランサーのマスターについては憶測の域を越えないし、このくらいにしておきましょうか。彼女、確か衛宮君と同じクラスだった気がするし。まったく知らない私より、もしかしたら衛宮君が情報を持っているかもしれないから、起きたら聞くことにするわ。……あ、その情報についてはセイバーの服を用意する、というのを前貸にするっていうのはどう？ 霊体化できないのなら必要になるでしょ？」

「どうかしら？」と尋ねる遠坂に、セイバーは戸惑う。

確かにマスターがもしも日中に外出しようとしたならばサーヴァントとしてはその身を守らねばならないし、入り用になるかもしれない。

この武装した状態ではいらぬ争いを生む可能性があるのも、確かなことだ。

余程のマスターでなければ無防備に外出するという真似などはないとも思うが。

悩むセイバーは、遠坂の「どうせ自分に合わずに着ない服を出すから」とどこか恨みがましい声に促されて受け入れることにした。

アーチャーに取りに行かせる、という敵対心は今はないというアピールが受け入れる一押しにもなっている。

続けて遠坂の「別れたらそこから敵だ」というきつぱりとした言葉を聞いて、正々堂々としたやりとりのの方が好ましいと感じるセイバー

は遠坂凜という少女の人柄は好ましいと思った。

かといってマスターを鞍替えする、などというつもりはないため、その思いは胸の内に留めるに収まったが。

この衛宮邸までのほんの僅かな時間だけといえども、一切手を出さないと言葉と態度で示して見せる少女にセイバーもまた誠意で返した結果でもある。

情報のやり取りを終えた二人は無言でひたすらに衛宮邸へと向けて歩みを進めた。

幾ら相手を好ましく思ったところで互いに別れて次に出会ったのならば敵同士なのだ、という決意にも似た考えは秘めたままに。

第十五話

衛宮士郎は目を開き、見慣れた天井をぼんやりと眺める。

その頭に浮かぶのは、先程まで見ていた夢についてだ。

まるで剣の樹海のような光景と、それを燃やし尽くすかのような紅蓮の業火。

浅い呼吸で生きている誰かの姿が、自分へと腕を伸ばしてきて。

そこまで夢を思い出したところで、昨夜の戦闘を思い出して勢いよく跳ね起きる。

外は明るく、大分日がのぼっている。ということは、もう昼も間近というところだ。

半日近く眠っていたのか、と思いながらも士郎は自室を出て居間へと向かった。

「おはよう。勝手にあがらせてもらってるわ、衛宮君」

セイバーはいるだろうか、と月光に照らされた金色の髪の少女の姿を思いながら襖を開けたところ、知った姿と声が目と耳に飛び込んできた。

「なっ、え……!?!」

座布団に落ち着き払って座っているのは遠坂凜だ。

その落ち着き様は、逆に家主である自分の方が客なのではと思ってしまうようなほどだ。

なんと言ったものかと悩み、とりあえずと座った士郎は、ひとつ深呼吸をする。

「ええと、遠坂？ お前どうして家に居るん……でしようか？」

ぎろり、と音が出そうなほどの目付きに思わず敬語になってしましながら士郎が尋ねる。

遠坂はじつくりと窺うような顔を見つめて、嘆息した。

「誰かさんが気を失ったから運ぶ手伝いをしてただけよ。勿論、そのまま帰ってしまうのも吝かではなかったわけだけど、その前に情報をもたらっておきたくてそのままこの家で休ませてもらったのよ」

「そ、そうか。世話をかけたみたいだな、悪い。……でも、情報って？」

思わず謝ってしまった土郎だったが、すぐに困惑した様子で首を傾げる。

それを見てまさか忘れたのではないだろうな、と胡乱な目をしつつも遠坂は仕方なさげに答える。

「ランサーのマスターについてよ。水谷さんって、確かあなたのクラスメイトでしょう?」

「水谷って……まあ、確かにそう、だけど……でも、あいつがランサーのマスターって、何を根拠に……」

思いがけないことを聞いたと困惑する土郎に、彼女は眉を寄せた。

あの時の状況を鑑みれば、倒れていた彼女がランサーのマスターだという予測を立てるのは簡単だろうに。

「状況証拠よ。ランサーがはつきり言ったわけではないにしろ、セイバーに対して彼女に手を出すなど言ったららしいの。つまりそれって、ランサーにとっては失うと困る相手ってことだわ。バーサーカーのマスター、イリヤスフィールが次は殺す、って言ったということは、彼女が殺す対象である……つまり、サーヴァントのマスターだっていうことはわかるでしょ?」

ピツと指を立てながら示された二つの理由に、土郎は小さく唸る。

あの時、確かにイリヤスフィールと名乗った白い少女がそう言っていた気がする。

ただ、目の前で人が……まして、何年という付き合いのある見知った存在が死にかかっていたという事実から、頭に血がのぼっていたのか、それとも直後の戦闘の後に気絶したからか会話が頭に残っていない。

だからこそ、水谷響という少女がランサーのマスターであるという遠坂の言葉が遠く思える。

「……ま、別にあなたが信じようが信じまいが、私は一向に構わないけどね。でもね、衛宮君。そんなんじゃないつか足元を掬われるわよ?」

厳しいようで、しかし確かに土郎のことを気にかけるような遠坂の言葉に、彼は思わず瞬きながらその顔を見つめた。

気まぐれに視線をそらした遠坂だがそれも一瞬で、「何よ」と不機嫌

そうに睨み返してくる。

なんとなくそれに安心してしまいながら、士郎は首を振った。

「いや……ありがとう、遠坂」

「ちよつと！ 何でそこで礼の言葉が出てくるのよ」

驚いた遠坂は、うんうんと何事か納得したように頷く姿を鋭い眼差しで睨み付ける。

「え？ だってお前、そこまで俺を気にかけてくれる必要なんてほんとはないだろ。なら、その内容はともかくとして礼を言うのは当たり前のことだ」

あまりに真つ直ぐ、一切曇りなく言い切った士郎に、今度は大きなため息がこぼれ落ちた。

頭を押さえて緩く首を振り、処置なしと言わんばかりに彼女は呆れたように顔を手で押さえてじとりとした視線を送る。

それから考えを払うように首を振って、気分を変えるようにお茶を飲み込む。

「……まあいいわ。で、さっきの続き。水谷さんって、どういう人なの？ 私、同じクラスになったことはないから、あなたの方が詳しいはずよ」

「情報ってつまり、水谷についてか……。いや、でも俺が知ってることは少ないぞ」

それでも構わない、と頷かれて士郎は水谷響という同級生の姿を頭に思い描いた。

「水谷とはもう何年も同じクラスになってきたけど……あいつ、人と進んで関わろうとはしないんだ」

思い出せば、もう随分と長い付き合いになる。

十年前に起きた大火災。衛宮士郎と同じくあの地獄のような光景から生き残った少女こそが、水谷響だ。

自分の養父である衛宮切嗣の元に身を寄せてから暫く、やつこのことで落ち着いて深山町にある学校に通いだして数ヶ月後に彼女もまた同じく学校に通うようになった。

その時は別々のクラスだったものの、響の話を教職の人間から漏れ

聞いたことで、いてもたってもいられずに隣のクラスの彼女を窺い見たのが始まりだったか。

じつと椅子に座ってぼんやりと壁にかかった時計を眺める姿には、覇気がなかった。それどころか、等身大の人形がそこに置かれているだけのような無機質ささえ感じて、士郎は知らずの内に固唾を飲み込んで話しかけにいこうかと迷った。

けれど、何を言うつもりだったのかまったく思い浮かばず、その日はただ遠く見るだけに止まった。

明くる日も明くる日も、隣の教室を通りかかるたびにその姿を確認したが、次の授業が体育である時以外、彼女が変わるのを見ることはなかった。

それから関わるようになったのは何時だっただろうか。

……確か、学年が変わった頃……自分と彼女が小学校の四年生となり、同じクラスになった時。

何がきっかけなのかはわからないけれど、彼女は所謂いじめというものを受けていた。

それは主にひとつ上の上級生……それも彼女の従姉妹によるものだった。

教師たちに気づかれぬようにと綱を張られたその行為に気づけたのは、たぶんその姿を気にしていたからなのだろう。

従姉妹の両親に引き取られたのだという彼女の面倒を従姉妹が見ている、ということは教師には伝わっていただろうからこそ、その後ろについて歩く彼女を不審に思うことはなかった。

士郎も最初はそうなんだな、と軽く捉えていた。それというのも彼女の顔色が少しも変わらなかったからだ。

ひと学年上の存在は、自分たちの学年からしたら少し遠慮してしまうもので、ましていつも大人しく物静かな存在だった響を引っ張り出して同級生が一人か二人混じっていても殆どを上級生で囲まれてしまえばなんとなく話しかけ難かったのだ。

だから士郎がその事実を知ったのもたまたま通りかかったからだった。

それを庇った士郎に、彼女は不思議そうに瞬きながら「助けてくれてありがとう？」と首を傾げた。

何故助けたのだと問われることもなく、その時はそれで終わった。けれど彼女に対するいじめはなくなることはなく、彼女の従姉妹が卒業するまで続いた。

士郎は視界に入ったそれを助け、庇い、守ろうとしたけれど、決してその矛先が彼に向くことはなかった。

それに疑問を覚えないわけではなかったが、何故、と問いかけられる相手はいなかった。

言えるのは、彼女の従姉妹は異常に彼女のことを嫌悪していること。彼女はそれをさも当然のことだと受け入れていること。

彼女が、それで幸せなのだと感じていることを。

「……たぶん、あいつは誰がどう思っているとか、どうしているとか、あんまり気にしてないから。人に興味が無い、というか……何て言うのかな。自分に対する悪意に無頓着な奴なんだ」

「ふうん。……それ、誰かさんにそっくりね」

「？ 何か言ったか？」

「……いいえ、別に何も。で？ 続きはあるんでしょう？」

思わずといた眩きが零れたが、考えをまとめていて聞き取れなかった士郎が聞き返す。

それを呆れたような目のまま首を振った遠坂は、話の続きを促した。

少し納得がいけないという顔をしつつも、士郎はわかったと頷いてもう一度彼女の顔を脳裏に浮かべる。

そんな人への関心が薄い彼女と親しくなったのも、一重に士郎が気にかけて話しかけていたからだ。

最初こそ言葉少なで控えめに笑うだけだったが、年を経るにつれて彼女本来のものらしい、気軽な物言いへと変化していった。

彼女らしい、と言い切るにはまだ自分とは距離があるけれど、それでも彼女が軽々と冗談を口にする姿は自分と、それから中学の頃に友人になった間桐慎二の前でくらいしかみられない。

人に関心が薄いとはいっても、クラスの中でも浮いた存在だというわけでもなく、彼女は話しかけられれば話すし、話しかけられなければゆっくりと本を読んでいたりと図書室にいたり……学校生活に普通に溶け込んでいる。

友人、というには少し距離があつて、かといつてただの同級生だ、というには距離が少し近い。

「……ランサーは宝具を使って相手が生きてたら退くように言われたらしい。水谷がそういう指示を出した、っていうのが信じられないんだ」

「それは何を根拠に言ってるの？」

「水谷は、他人の意思を尊重するやつなんだ。ランサーは戦うのを楽しんでるみたいだったし、きつとそのまま戦いを続けてもいいとさえ思っていた……と思う。これは憶測だけどな。……だから、水谷がその戦いたいって意思を尊重しないっていうのが信じられない。勿論、あいつ自身は良識があるし、根っこがいい奴だから戦いを推奨してると思いたくもないけどさ……」

それでも、彼女ならばきつとランサーの戦いが楽しいというのを否定するとは思えない。

人の言うことを素直に受け入れるあいつだからこそ、例え良識があつてもそうするだろうと、士郎には確信があつた。

たとえそれがただの想像だとしても、士郎はそうだと信じている。「でも、水谷がマスターじゃないって証拠もない。俺としてはあいつがマスターだったとしても、好んで戦おうとしてないんじゃないかっと思う……思いたい。あいつが簡単に人を殺すとは思えないから」「……そう。わかったわ。ありがとう衛宮君。情報料はセイバーに渡してあるから」

きつぱりと言い切った士郎に、冷ややかな表情でひとつ頷いた遠坂は立ち上がり、障子へと手をかける。

「それじゃあね。今度会ったら敵同士だから、その時は覚悟しなさい」
セイバーに？　ときよとんとする士郎に、彼女は答えはせず、けれどふと顔だけ振り返って冷たく突き放すような口調でそう言つて

去っていった。

何なんだ、と口の中で疑問を転がした士郎は、それがひどく馬鹿馬鹿しいことだと我に返る。

そうだ。遠坂はセイバーの攻撃を止めて助けた、という借りを返すだけだと言峰のところまで案内してくれたのだ。

だから自分をここまで助けてくれたのはその延長で、どこるか彼女がそこまでする義理はなかった。

情報料だ、つて言ったところで自身がたいした情報を持っているわけがないともわかっていただろう。

「……遠坂って、いい奴なんだな」

何となく思ったことを呟いて、士郎は頷いた。

そうして昨夜のことを順繰りに思い返していき、最後に倒れ伏す彼女の姿を脳裏に浮かべる。

昨日は取り乱したが、水谷のあの怪我はそう簡単に治るとは思えない。ということはたぶん、あの教会にいるんだ、とは思う。

あんな怪我だし、頭から血が出ていたつてことは脳震盪が起きている可能性もある。

……あの神父だって仮にも聖職者だ。余程の畜生でもない限り、そのまま放り出したりなんてしないだろう。

病院に送り届けているという可能性もある。……ただ、何にしても安静は絶対だ。

だからきつと今も教会にいるものと考える。

「水谷、大丈夫かな……教会に行つて様子を見るのもありかもしれない。……つと、そうだ！ セイバー！」

そこまで考えてやっと己をマスターと呼んだ金髪の少女へと思考が行き着く。

そうして自分も立ち上がり、閉められた障子を開けて居間を出る。

衛宮士郎は漠然とした小さな違和感を気のせいだと切り捨てて、後ろ手でぴしやりと居間の障子を閉めた。

第十六話

屋敷中を探し回り、けれど見つからなかった少女の姿に士郎は頭を捻った。

さて、他に探していないところはあっただろうか。

「そういえば、まだ道場は見てなかったな」

ふと目に留まった建物を見てそう呟き、頭を掻く。

探したつもりはあくまでつもりだった、と言うわけだ。

どうしてその場所を除外していたのかと自分に呆れてしまいながら、急ぎ足で道場へと向かう。

そして静まりかえった道場に、探していた少女はいた。

あの時夜の月光に照らされていた金砂の髪が、穏やかに道場へ差し込む冬の陽射しに同化している。

凜と背筋を伸ばしているのに、どこまでいってもその姿は自然そのもので、ついつい見惚れてしまい、彼はつかの間かける言葉を失っていた。

あの甲冑姿ではなく、清楚な印象を与える白いシャツに彼女によく似合う深い青のスカートを纏っているのは遠坂凜の言っていた情報料によるものか。

「――」
その空間だけ切り取られたかのような美しい景色に言葉が見つからない中、先にその静寂を切ったのはセイバーだった。

閉じていた瞼を押し開き、士郎の姿を確認した彼女は立ち上がり「目が覚めたのですね、シロウ」と落ち着いた声音で口を開いた。

「ああ。ついさっき目が覚めた。セイバーはここで何を？」

「体を休めていました。リンと違い、私にはシロウの手当ては出来ませんから、今はせめて自身を万全にしておこうかと思ひまして。具合も悪くないようで安心しました」

まつすぐに視線を合わせてくるセイバーに、先程まで話していた遠坂とはまた違う緊張を覚える。

緊張に体を固くしているとどうかしたのかと一歩近づかれ、彼は慌

てて戸惑っているだけだからと数歩後ずさる。

不思議そうな様子で首を傾げたセイバーだが、深く問いかけることはせず昨夜のことについて話があると切り出した。

「いいけど、なんだよ話って」

「ですから昨夜の件です。シロウは私のマスターでしょう。その貴方があのような行動をしては困ります。戦闘は私の領分なのですから、マスターは後方支援に徹してください」

厳しい表情をする彼女に、ぱちりとひとつ瞬いた士郎だがむっとしたように反論する。

「アレは仕方ないだろう。セイバーが体を張ってたんなら、せめてあれくらいしないと協力関係なんて言えないじゃないか。相棒が危なかったんだから、手を出すのは当然だろう」

思いもしなかった言葉に目を丸くしたセイバーは、まさかサーヴァントのことをまともに知らないままそこまで心を許していたのかと驚く。

しかし士郎は何度も助けてくれたし、握手もしたのだから当然だろうと返す。

思っても見なかった返答に彼女はいいよいよもって呆然としてしまう。

そんな反応をされてしまうとつい不安になってしまい、契約とはそういうことではないのかと問いかける。

「いえ……サーヴァントとして、シロウの言葉は喜ばしい。それにあの時止めてもらわなければあの威力でしたから、私も大なり小なり傷を負っていたでしょう。……方法こそ巧くはありませんでしたが、シロウの指示は的確でした」

その言葉に安堵の息を溢したが、セイバーは咎めるようにそれでも今後そういった行動は控えるようにと言う。

確かにアレは軽率だったなど反省した士郎は、どうしたら巧くいかは判らないものの考えなしに飛び出すのは止めようと自戒する。

「いい返事です、マスター」

その返答に満足したのか、それともその様子が可笑しかったのか、

僅かに微笑んだセイバーにどきりとする。

しかし今は聞くべきことがある、と慌てて頭を振り払い、話を戻そうとする。

「改めて訊くけど、お前の事はセイバーって呼んでいいの？」

「はい。サーヴァントとして契約を交わした以上、私はシロウの剣です。その命に従い、敵を討ち、貴方を守る」

きっぱりと言いきった彼女に迷いはない。

そこには疑問を挟む余地はない。しかし、士郎には偶然呼び出した自分で彼女はいいのか、とも思う。

そう問えばセイバーは勿論と頷いた。

「……分かった。それじゃ俺はお前のマスターでいいんだな、セイバー」

「ええ。ですがシロウ、私のマスターに敗北は許さない。貴方に勝算がなければ私が作る。可能である全ての手段を用いて、貴方には聖杯を手に入れて貰います」

決然とした表情で言い切るセイバーに、士郎は思わず待ったの声をあげる。

彼女も聖杯を欲しているのかと目を丸くする様子に、セイバーからは当然だと頷きが返る。

聖杯に触れられるのは同じ霊格を持つサーヴァントだけなのだから、サーヴァントを介しマスターは聖杯を手に入れることができ、その見返りとしてサーヴァントは望みを叶える。

サーヴァントとマスターはそういった関係なのだと言明するセイバーに、士郎は質問を重ねることにした。

質問の中で騎士としての誓いに則った手段で勝つのだという彼女は、聖杯戦争への理解が浅い士郎に丁寧に説明をしてくれた。

サーヴァントの役割クラス。それにおける戦いの多様性。それぞれの持つ宝具という英雄シンの武具ポル。

そして、宝具解放のための鍵となる英雄の真名について。

宝具とは、正体を明かすかわりに避けきれぬ必殺の一撃を放つもの。

英雄と武具はセットだからこそ、それは切り札であり、それが不発に終われば即ち自らの欠点をさらけ出す事になる。

納得した士郎は、では目の前の騎士の宝具はあの見えざる剣かと問いかける。

「……そうですね。ですが、あれはまだ正体を明かしていません。今の状態で私の真名を知るサーヴァントはいないでしょう。……シロウ。その件についてお願いがあります」

「え？　お願いって、どんな？」

「私の真名の事です。本来、サーヴァントはマスターにのみ真名を明かし、今後の対策を練ります。ですがシロウは魔術師として未熟です。優れた魔術師ならば、シロウの思考を読む事も可能でしょう。ですから」

一瞬気まずそうに目を伏せたセイバーに、首を傾げてしまう。

しかしすぐに語られたその願いに、すぐに合点がたって成る程と頷いて見せる。

「そうだな、確かにその通りだ。催眠とか暗示とか、いないと思うけど他のマスターに魔眼持ちがいたらベラベラ秘密を喋りかねないし。

——よし、そうしよう。セイバーの『宝具』の使いどころはセイバー自身の判断に任せる」

自分自身の未熟を自覚しているからこそ、彼女の言葉には納得がいった。

だからこそ頷いたのだが、言われた本人はそんなにあっさりと決めるのかと驚いた。

あっさりではないと苦笑を返してしまいが、確かにすぐに頷いたのだからそう思われるかとも気がつく。

けど、一瞬だろうと自分なりに悩んだのだ、これでも。

「なあセイバー。マスターやサーヴァントって何か目印はないのか？」

これからについて考える前に、一般人とそうでないものを区別する術がないことに気がついた。

遠坂が魔術師であったことにも気がつかなかったのだから、彼女に

半人前とバカにされても仕方ないことだったな、とついつい肩を落としてしまう。

聖杯戦争について殆ど何も知らない自分より、セイバーとして召喚された彼女ならばそんな事も多少なりと知っていることがあるのではないかとその顔を見るが、首を振られた。

「いいえ。残念ながら、明確な判断方法はありません。ただ、近くにいるのならサーヴァントはサーヴァントの気配を察知できます。それが実体化しているのなら尚更です。サーヴァントはそれ自体が強力な魔力ですから。シロウもバーサーカーの気配は感じ取れたでしょう?」

「う……、それはそうだけだな」

がつくりと項垂れてしまうと、何かを思い出したのか数秒の沈黙の後に「ですが」とセイバーが声を発す。

それに何だろうか顔を見ると、何かを思い出すように眉間にしわを寄せた顔が目に入った。

「マスターがマスターを見ると多少なりそのサインが送られる……と聞いたことがあります。シロウにも感じ取れるのかはわかりませんが……、敵意のある視線を辿れば自ずとわかることもあるでしょう」「……そうか。まあ、俺なりに気をつけてみる」

参考になるかどうかはともかくとして、聖杯戦争についても理解が進んだ。

この知識量と己の技量では先は思いやられるが、それでもこの騎士と一緒にならば、間違うことはないだろうと確信がある。

だから頑張っていこう、と士郎は自分を鼓舞するように拳を握りしめた。

説明は以上で終わりだと言うセイバーにひとつ礼の言葉を口にする。

時間を確認して「昼にしようか」と言いかけた士郎だが、ふっと疑問が浮かび上がり言葉を途切れさせた。

「シロウ? まだ何かありましたか?」

大したことでもないし、聞かなくてもいいかとすぐに思い直したも

の、聞くことがあるのならば言ってくださいというようにセイバーが問いかける。

「あー……いや……大したことじゃないんだけど……」

「気にかかることがあるのであれば遠慮なくどうぞ、シロウ」

真名については先程の話で終わっていると思いつつ首を傾げたセイバーは視線をさ迷わせるマスターの顔をじつと見つめる。

彼女のあまりにも真つ直ぐ射抜くような視線は鋭く、些細な違いも見逃してはくれないだろうとも思える。

その視線に堪えかねた士郎は観念することにして疑問を口にすることにした。

「マスターにサインが送られる、って話だけど……聞いたことがあるっていうのはその、前に召喚されたことがあるっていうのが関係あるのか？」

その言葉に驚いたのか、セイバーの表情は僅かに固まり瞳が揺れる。

先ほどまでとは違う様子に、聞いてはいけないことだったのだろうか
と不安になる。

言いたくないなら言わなくてもいいと言ったが、「いえ……」とセイバーは言い淀んで黙り込む。

「……………」
それから彼女は少し迷うように目を伏せる。

しかし何かを決めたのか「はい」と頷いて、迷いを断つように彼女は視線をあげた。

「私は前回の聖杯戦争でアインツベルンのサーヴァントとして召喚されました。ですから、少しだけそうした情報を得ていたまでです」

「アインツベルン……って……、確かあのイリヤ……とかいう子の……？」

「……………」

昨夜会ったバーサーカーのマスターが名乗った名前に思わず問い返せば、セイバーは難しそうな顔で士郎を見据える。

「セイバー？」

戸惑った士郎が首を傾げてしまうと、彼女は表情を崩さず「何も聞かされていないのですね」と呟く。

えっと聞き返されたが気に留めず、何事か思案するようにセイバーは目蓋を閉じる。

「……これも何かの因縁なのでしょう。シロウ。もしアインツベルンについて知りたいのなら、もう一度教会に赴くべきです。あの神父ならばシロウの疑問にも、それこそマスターについても、これから取るべき道にも示唆を与えてくれる筈ですから」

「教会……？ 教会って昨日の教会か？」

再び視線をあげた彼女の言葉に思いがけないことを聞いたとばかりに士郎は瞬く。

昨夜会った教会の神父、言峰綺礼のことを思い出すが、会いたくないという気持ちが強い。

その気持ちが顔に出て渋面を浮かべる彼に、セイバーはその気持ちはわかると頷く。

「私とて同感です。出来ることなら、私もあの神父には関わりたくない」

その言葉に、士郎はますます驚いて目を丸くする。

昨夜彼女と神父が顔を見たのはほんの一分にも満たない時間だったはずだ。

そんな短い時間の間に苦手意識を持つとは、彼女の性格も相まって思っても見なかった。

思わず何故かと問いかけてみると、一瞬言葉を詰まらせたセイバーはしかしきつぱりとその答えを口にした。

「彼は前回の聖杯戦争に参加した人物です。切嗣はあの神父を最後まで重視していた」

「——え？」

簡素とも言える言葉数。

それなのにそこには士郎にとって想定していなかった名前があった。

「セイ、バー。なんでお前が、切嗣の名前を」

「私が切嗣のサーヴァントだった、と言ったのです。衛宮切嗣はマスターの一人でした。その中でも彼はアインツベルンのマスターとして参加しており、私はそんな彼のサーヴァントとして聖杯戦争に挑み、最後まで勝ち残りました。その中で衛宮切嗣はあの神父を最大の敵として捉えています」

淡々とした口調で語られる内容に、士郎は目眩でも起きたように頭を押さえる。

その脳裏には十年前に起こった火災地獄の光景と、自分を見つけて泣きそうに顔を歪めた切嗣の影が泡のように弾けて消えていく。

「——嘘だ。そんな事あるもんか。それならどうして言峰は黙ってたんだ。どうして切嗣オヤジは、俺に何も言わなかったんだ」

「それは私の知るところではありません。切嗣が何を考えていたかなど、私には最後まで判らなかつた。ですがあの神父が黙っていたというのなら、恐らくそれはシロウが訊かなかつたからなのでしょう。シロウ自身が問うのならば、きっと真実を語るはずです」

セイバーは自分が語ることは終わったというように口を閉ざし、じつと彼の目を見据える。

衛宮切嗣の真実が知りたければ、自らの意志で教会に向かえと碧の瞳は告げていた。

数秒か。それとも数分かという沈黙が落ちる。

士郎はぐるぐると自分の中に渦巻く複雑な感情に惑い、戸惑う。

いつの間にかきつく握りしめた手は血が滲んでしまいそうなほど手のひらに爪が食い込んでいる。

けれどそんな痛みに気づかないほど彼は深く悩む。

やがて決心をつけたのか顔をあげた士郎はゆっくりと手のひらから力を抜いて「昼からは教会に行く」と告げた。

言い訳のように、加えて昨夜の彼女の容態も気にかかると言えばセイバーはやや複雑そうな面持ちで「私からもひとつ聞きたいことがある」と口にした。

「いいけど、何かセイバーの気になる事なんてあつたか？」

「その昨夜の彼女についてです、シロウ。彼女は……いえ、彼女のフル

ネームを先に聞いてもいいですか？」

「え？ あ、ああ……あいつは水谷響、っていうんだが……」

困惑も露にセイバーの問いかけに首を傾げながら答えると、彼女は「やはり」と眉を寄せた。

何がやはりなのかと怪訝になる士郎に、その返事は思ったよりも簡単に返ってくる。

「ヒビキ、という少女の名前には聞き覚えがあります。私の知るヒビキという少女は前回のマスターの一人でした。昨夜私ははつきりと顔を見ていないので断定はできませんが、もしも彼女がそのヒビキという少女で間違いなかったとしたら、彼女は腕のよい術者です」

「ですからシロウ。警戒は怠らないください。どちらにせよランサーのマスターであることに違いはありませんし、あの神父の考えも読めません。だからこそ警戒だけは必ずして欲しい。いざという時は令呪を以てでも私を呼ぶように」

ぐらぐらと支えなく揺れていたものに更に金槌でも落とされたような衝撃。

数秒の間呼吸を忘れていた士郎は、そんな幻痛を覚えながら「いいですね」と強い語調で訊ねる声にゆっくりと力なく頷く。

この少しの話の中でどれほどの衝撃が襲ってきたのかわからないほど、彼にとってセイバーの口にする情報はとてつもない威力を持っていた。

それは彼女の話題運びが決して悪いからではない。

ただ少し、知らないことが多すぎた。

たったひとつ。それだけが原因だ。

彼にとつては無知こそが罪であり、罰でもあったのかもしれない。けれど知ってしまったからには、もう止まらない。

ゼンマイを巻かれた歯車は、ゼンマイが元に戻るまで止まらないのだから。

第十七話

新都へ向かうバスに二人は乗り込み、駅に向かう途中にある停留場で下車する。

そこからは歩きながら向かい、昨日の夜に訪れた教会に再び足を踏み入れる。

しかし、セイバーは教会に入ることに忌避しているようで、門付近で待っていると言った。

「言峰、いるか?」

礼拝堂を開けてしんと静まり返った空間に居心地悪く感じながら声をあげる。

しかし返事は返ってくることはなく、礼拝堂は静寂に満ちる。

「……………」

勝手に奥に行ってもいいのだろうかと思いついて迷い扉を見ながら逡巡するが、どうにも躊躇いが足を縫い付け動けずにいた。

暫く扉を見つめていた土郎だったが、何やら足音が聞こえてきた気がしてハツと息を飲み込む。

ギイイ、と軋む音を立てて開かれた扉から足音をさせていた誰かが出てくる。

「——ッ?」

それは、神父ではなかった。

息を飲むほど整った人とは思えないほどの美貌。染めたようには見えない派手な金色の髪。鋭く尖った赤い瞳を持つ男。

その肉体はあの赤い弓兵や青い槍兵ほどとはいわないまでも、同様に鍛えられたものであると感じ取れた。

「何だ、言峰に用事か? であれば、あやつは奥にいる。入っても問題はなからう」

「…………あ、ああ…………あり、がとう…………」

コツコツと音を鳴らしながら歩み寄る金色の美丈夫に気圧されながら頷けば、その端正な顔つきに愉しそうな笑みが浮かぶ。

それが何故だか恐ろしくなって、土郎の足が咄嗟に後退る。

この男は危険だ、見るな、離れろと警鐘を鳴らすように心臓の鼓動は忙しく、喉の水分はからからに渴く。

コツン。コツン。と一歩一歩の足音がやけに耳に付きながら、震えそうな体を強張らせ、その動きを見守った。

そうして、目の前まできた男はふんと鼻を鳴らし、カツと土郎の真横に足を踏み出した。

「貴様、女難の相が出ているぞ」

「えっ?」

すれ違いざまに呟かれた言葉に土郎は何のことだと横を過ぎた男を振り返るが、彼はそのまま礼拝堂から出ていった。

扉が閉まった後もその姿がそこにいるかのように呆然と見ていたが、よくわからない言葉の意味を考えるよりもすることがあると自分に言い聞かせるように首を振って一歩足を動かす。

未だ逸る鼓動を宥めながら、土郎は大きく深呼吸して礼拝堂の奥を目指した。

扉をくぐり、中庭に入ったものの人の気配はない。

奥というのはどこを指すのだろうかと迷いながら、礼拝堂の反対側を目指して足を進める。

大きな二枚扉の前まできたが、その扉は鍵がかけられており、開かない。

はあ、と息を吐き出してどうしようかと思案しようとした矢先。

廊下の先で微かな物音が聞こえてきた。

「……あつちか?」

ここまで人気がないのなら、この教会にいるのはあの神父か水谷だけなのだろう。

……いいや、もしかしたらランサーもいるのかもしれないが。それでも、今何の視線も何も感じないということは、いないはずだ。

自然と緊張し、強張る体を動かして音が聞こえた方へ足音を殺しながら歩く。

「いッ?!」

「ここか、と扉の前に立ち止まりかけたところ、勢いよく開いた扉が顔にぶつかる。」

ゴツという鈍い音をたて、すぐにじんとした痛みを訴える鼻頭と額に思わず俯いて小さく唸りをあげてしまう。

そして、聞こえてきた「扉の閉まる音と微かに笑う気配にキツと睨み付けるように顔をあげる。」

「すまないな、そんなところに人がいるとは気づかなかった」

嘘をつけ、と言いたくなるのを飲み込んで、士郎は「そうかよ」と吐き捨てるように返す。

部屋から出てきた言峰はそんな彼の顔を見下ろして「それで」と促した。

「どういった用件だ。よもや昨日の今日でリタイヤと言いにきたのか？」

「違う」

返事などわかりきっているだろうに、底意地悪く問いかけてくる言峰に思わず眉を寄せてしまいがら首を振る。

「……水谷の様子、を聞きたくてきた。アイツの容態はどうなんだ、言峰」

余計なご託を並べられる前にと用向きを言えば、ふむと言峰は黙りこくる。

それにもしや相当危ういのだろうかと不安を覚えてしまうが、目の前の男に気づかれたくないと押し隠す。

「傷自体は完治といっても差し支えはない。ただ、相当消耗していたのか今のところ起きる気配はないな」

「そ、そうか……よかった」

心底から安堵したといわん表情で息をついた彼に、言峰は目を細めて考える素振りを見せた。

けれど士郎は安心からか張っていた緊張を緩ませ、しかしその気の緩みからか夜に見た息も絶え絶えな赤く塗れた姿と朝の夢に見た赤い炎に照らされた光景が脳裏に浮かんで慌てて首を振って吹き飛ばそうとしていて、それには気づいていない。

「では、彼女の顔を見ていくといい。そんなに気になっていたのなら顔を見ればもう少し安心できるだろう」

だからか言峰のその言葉に、反応が遅れてしまった。

「えっ……そ、れは」

「彼女のことを気になるのだろうか？　ならばそれは晴らすべき懸念ではないのか、衛宮士郎」

感情の読めない顔で見下ろされ、得も言われぬ後ろめたさを覚えて一歩だけ足が後退する。

怖じ気づく必要も悪く思うこともないはずなのに、晴らすべき懸念という言葉にどうしてか反応をってしまった。

その理由を考えるよりも前にふと笑みを浮かべて見せた神父が肩を叩き、横を通り過ぎる。

「彼女はこの部屋に寝かせている。私は礼拝堂にいるから、用があるのならば帰り際に言うといい」

「ではな」とからかうような響きを持たせた声を背に浴びせ、言峰は士郎のきた道へと消えていった。

完全に足音が聞こえなくなり、息を吐き出した士郎は僅かに震える指を握り込んでその扉へと視線を向けた。

「……水谷なら、大丈夫だ……」

自分に言い聞かせるような呟きを溢し、そつとドアノブを掴む。

何故かうるさい音を立てる心臓を無視して、ゆっくりと扉を引く。

「……………」

ドツドツと早鐘を打つ心臓とは反対に、室内は無機質な静けさに満ちていた。

礼拝堂で感じた荘厳な静寂と反して、生きているものがあることの方が不自然なほどの痛い沈黙。

建てられた年数を訴えるような僅かに薄汚れた印象を抱かされる白い部屋。生活のための用品を殆ど排された中であって生きているのは、この部屋に足を踏み入れた自分と。

「水、谷」

白いベッドに横たえられた彼女だけだ。

ベッドの脇に置かれた椅子は先程まで言峰が使用していたのだろう。壁際に置かれたそれはベッドの反対に同じく置かれた机と対になるものか。

「……………」

自分と彼女以外誰もいないはずの部屋を、けれど何かを警戒するようにつつくりと進んだ士郎は、白い枕に頭を埋めるその顔を見て息を呑んだ。

死んでいるのかと錯覚してしまいそうなほど青白く、しかし人形のような硬質さを感じるほどの無で彩られた顔。

瞼は閉じられているはずなのに、そこにいつか見た虚ろな眼を見出だして咄嗟に言葉は出てこなかった。

あまりに無を感じさせる顔にまさか、という焦りに駆られて布団を剥いで膝をつき、耳をその顔に近づけ胸の動きと呼吸の音を確認する。

「……………はあ……………良かった……………」

そんな心配など杞憂で、彼女の胸は浅く上下を繰り返し、呼吸もしつかりとしていた。

振り返れば何を焦っていたのか、と言峰の言葉を反芻しながら自身への呆れをため息にして追い出したところで、はたと我に返る。

「あ、う……………っ!？」

おいてけぼりになっていた心音が駆け巡るように鼓膜を叩き、一気に上り詰めた体温が冬の空気に冷やされる。

言葉を詰まらせかちんこちに固まった士郎の視線は、彼女の柔らかな肢体へ釘付けになっていた。

シャツの隙間から覗く首筋と寝苦しくないようにという配慮か、少しだけ開かれたシャツの隙間から見えるレースの布地。そこまで認識したところで、慌てて視線を引き剥がし、天井を仰ぎ見る。

これは決して故意ではなく呼吸を確認するために云々と言いつつ、そのようなものをぶつぶつと呟きだした士郎は、リフレインされる映像に頭をかきむしる。

だからこそ、眼下で動きを見せた彼女に気づかなかった。

「っあ?!」

首に熱が触れ、押されるような感覚に驚く間もなく視界が白く染まる。

そうして唇に、柔らかい感触が触れた。

思考が停止する。

何も考えられない中に、優しい花の香りのような匂いが鼻孔を擦る。

何が起きているのだろうか。

「……ん、う……」

「っ!」

僅かに感触の遠退いた唇に、あたたかい吐息が掠め、やっとのことで我に返る。

今、自分は、寝惚けた学友と――。

「……だ、……いな……ん……、あ……」

「み、ずた――」

ぼんやりと薄目を開く彼女は、明らかに自分を映してなどいない。声をかけて起こそうと咄嗟に思ったのか、その名前を呼びかけた士郎だが、それは不自然に途切れてしまう。

「?!」

視界には閉じられた瞼と、長い睫毛。それから程よく手入れされているらしい柳眉。目にかかるほどの前髪に、白い肌が映る。

唇には、再び柔らかい感触。口腔には開いた隙間から入り込んだ生暖かいものが、まさぐるように絡みついてきていた。

予測さえしていなかった事態に、士郎の思考は今度こそ完全にショートしてしまった。

目を見開いたまま硬直し、されるがままになっていたが、それも長くは続かない。

力尽きたようにぼすつと浮かせた上半身をベッドに沈みこませ、暫

くしない内にすうすうと寝息がたてられたからだ。

感じていた感触から解放された士郎だが、直ぐに意識が戻った……ということはなく、数分ほど口を半開きにしたまま茫然自失していた。

「なっ……に、が……」

唇に手を当てたかと思えばまた数分動きを止めていた士郎が、ぎこちなく瞬きを繰り返す。

どのくらい目を見開いていたのか、乾いて瞬きの度痛みを感じる眼が先程のことが夢ではないと訴えるようで、士郎は慌てて後退りし背中を壁にぶつけた。

（なんっ……俺、今、水谷、と……キ、スし……——ッ！）

かあつと全身火だるまになったかのように熱く、赤く染まる。

頭を抱えて壁を支えにずると蹲ってしまいながら、状況の確認を脳内で繰り返す。

自分はただ、彼女の容態が心配で、教会にきた。言峰があまりに不穏な言葉を残して行くものだから、不安になって本当に息をしているのか確認をした。

それで、それから……大変申し訳ないことに、その、下着……が見えて、とそれを思い出して呻き声がこぼれる。

違う。確かにそうだったけど故意じゃないし、それにすぐに目を逸らした。

目を逸らして、次に会うとき謝らねばとか考えていたところを、彼女の意識が少し戻ったのだろう。

何かと、誰かと勘違いして、その——キス、をしてしまったのだ。

一度にして二回行われた全く方向性の違ったその動きを思い出し、士郎の顔はこれでもかというくらい赤く染まる。

「っ、くそ……！ 俺の馬鹿……馬鹿野郎……相手は、友人だぞ、水谷なんだぞ……」

言い聞かせるように呟くが、まるで自分の首を締めるように息苦しくなる。

確かに、彼女は本当に友人と呼んでいいのかわからなかったが、そ

れでも庇護するべき対象だと思っていた。

「同じ地獄から生還し普通の生活を送る彼女に少しでも多くの幸せが訪れればいいと、そう考えてもいた。

だから彼女は女性という対象ではなくて、ただ自分が守るべき、一番に義務を果たすべき相手だと思っていた。筈なのに。

がらがらと何かが音を立てて崩れていくような錯覚がした。

第十八話

立て直せない思考のまま、少しでも彼女から遠ざかるように立ち上がり、ふらふらと部屋を出た士郎はそのままの足取りで礼拝堂へと向かった。

「ふむ、——？」

何やら言峰が呟いたようだが、そんなことに士郎は気がつかなかった。いや、気が付く余裕がなかったと言えるだろう。

こびりついた映像を振り払うように何度か頭を振った彼は、呻くように小さな声で問うべきことを口にした。

「言峰、あんたには切嗣のことで聞きたいことがある。どうして衛宮切嗣がマスターで、前回の聖杯戦争で戦ってたって事を黙っていた」「そちらか……よかろう。だが、衛宮切嗣が前回のマスターであった事と、今回のマスターに衛宮士郎が選ばれた事は無関係だと思うが」昨夜訪れた時に何も語らなかつたことを悪びれた様子もなく、むしろ愉しそうな眼で衛宮士郎を見下ろす男に、彼は睨むようにその顔を見上げた。

無関係のはずがない。切嗣の息子として、弟子として育った己がマスターになったからには意味があるのではないかと。

先程までの光景を振り払うように強く、強く拳を握りしめる士郎の様子に、神父は薄笑いを浮かべる。

「それは、本当なのか？ アンタは俺に偶然マスターになったって言っただろ。そんな説明より切嗣の事を言えば、俺はアンタの思い通り戦うと決めた筈だ。それを、どうして口にしなかつた」

「本来、いかに魔術師であろうと聖杯を知らぬ者に令呪は宿らぬという。遠坂や間桐の一族でなかつたマスターの遺伝による継承など知らぬし、そもそもお前は切嗣の息子ではあるまい。それに、何の用意もなく何の覚悟もなかつた人間がマスターに選ばれる事は稀なのだ」
「……それじゃあ、本当に切嗣の事は関係ないんだな？ 俺がマスターになつたのは偶然で、あの時切嗣が俺を助けたのも、ただの……」

純粹な善意で、死のうとした子供を助けただけなのか。

そう、最後まで言葉にできない士郎を眺めながら、言峰は「さてな」と否定も肯定もすることはなかった。

「聖杯の思惑となれば、私には計り知れん。衛宮士郎がマスターに選ばれた事は偶然と切り捨てたいところだが、少なからず因果を感じる。聖杯を求め純粋な願いに聖杯が応えたにも関わらず、その聖杯を否定し破壊した衛宮切嗣の息子に贖罪を求めているのやもしれん」

「聖杯を——破壊、した……？」

目を見開き、呆然と言葉を繰り返す少年に、頷いた神父は「お前は、お前を拾う以前の切嗣を知らないのだったか」と呟く。

そうして、密かにとつておいた好物を堪能するように唇を吊り上げ、不吉な笑みを浮かべた。

「いいだろう。無駄な話だが、衛宮切嗣の正体を教えてやる」

そうして言峰が語ったのは、魔術師殺しであつた衛宮切嗣の所業と聖杯戦争参加においてアインツベルンから迎えられた事。

そうして、前回の聖杯戦争で客観的に知る限りの衛宮切嗣の行動を淡々と並べ立てる。

幸か不幸か死者はいたかないかというくらい軽微なもの、彼の男は無関係な人間も巻き込む行いをしたし、相手の弱みを利用しようともしたらしい、と。

最後には幼い子供を手にかけてしようとしたようだが、幸いその子供については他に問題が起きたがために難を逃れたそうだ。

「——その子供は、もしかして……」

士郎の脳裏に、道場で話していたセイバーの難しい顔が浮かぶ。

それから、先程の出来事がフラッシュバックしてくらりと目の前が眩むような錯覚を覚えた。

「お前の想像の通り、彼女——水谷響という少女は前回の聖杯戦争においてキャスターのマスターとして参加をしていた。殆ど戦い自体には顔を出してはいなかったが……それでも、その事実是不変の真実だ」

淡々とした語り口調の言峰は、目の前で言葉を失う姿を見下ろしながらも気にせず話を続けた。

正直なところを言えば、神父の語る事はどこか遠い事のように思え、実感を伴わない。

続け様に語られるアインツベルンの話では、一千年という気が遠くなるような年月を聖杯という物の完成を成就させるためだけに執心したというのだから、尚更だ。

けれど、その一千年の歴史を向こうに回して切嗣が己の願いを張り通したのだというのなら。

衛宮士郎は切嗣の息子として、自分の信じる道を行かなければと拳を握りしめた。

もしも治療の必要があつてどうしようもないなら見返りは必要だが手を貸してやろうと言う言峰に、「死んでもお前の世話になるもんか」と士郎は体ごと目をそらす。

歩き出そうと浮かせた足を、けれどどうしたことか進めることなく戻して顔だけ振り返って神父を見る。

「……水谷には、どんな見返りを求めるんだ？」

「ふむ？ ……それ相応の対価を求めるつもりではあるが、お前には関係のない話だろう。それとも、彼女——水谷響という少女にお前は懸想でもしていたか」

その何て事ない世間話のような気軽さを持った言葉にぽかんと口が開き、鳩が豆鉄砲を食ったような顔が浮かぶ。

全く理解できないとばかりのその様子に、言峰は肩を竦めてくつりとひとつ喉を鳴らして笑う。

「どうやら、要らぬ世話とやらだったようだな。なにぶん、私には理解の及ばぬ事柄故な、興味本位だったのだが……違うのならば気にするな。なに、対価を取るのに命を脅かす真似などはしないから安心するがいい」

「……」

「それら、帰るのではなかったのか？ 私もお前にずっとかかざらつているほど暇な訳ではないのだが。……それとも、見送りが必要だったか？」

からかうような笑みを浮かべた言峰に、士郎はやつとの事で瞬いてはつと息を吐き出す。

「……必要ない」

「そうか。それは何よりだ」

唇を引き結んだ士郎は言峰を睨むように見上げ、それからふんと顔を背けて歩き出す。

しかしその脳内では先程までの言葉が反芻されていて、ぐるぐるごちやごちやと思考が掻き乱されて混乱を極めていた。

そこへ彼女の姿までもが浮かんできていて、ふらふらとした足取りも自覚なく、彼は礼拝堂の扉に手をかけた。

扉の向こうに消えてゆく少年の背中を神父は、唇に弧を描き目を細めながら最後まで見ていた。

「……シロウ？　顔色が悪いですが、あの神父に何かされましたか？」

礼拝堂を出たことに気がついたセイバーが駆け寄ってきて、その顔色に眉を寄せ真剣な眼差しで士郎を見つめた。

「それならどうして私を呼ばなかったのです。危険が迫った時は呼んでほしいと言ったではないですか」

答えられずにいると、彼女はずいど迫ってきて体に異状はないかなどと矢継ぎ早に問いかけてくるものだから、士郎はふと頬を緩めてしまふ。

それに気がついたセイバーがキツと臍を吊り上げて「シロウ！」と怒るように腰に手を当てたのも相まって、渦巻いて混沌としていた思考がすっと落ち着く。

「悪い、セイバー。別段異状はないから安心してくれ。……その、ちよつと混乱していただけだ」

「混乱？」

「あ、ああ……」

ずずいと更に訝しげな眼差しが近づいて、思わず一步後退しながら士郎は困った顔を浮かべた。

言うのは憚られる……しかし、真面目に心配をしてくれていると思

われるセイバーに誤魔化すというのも気が引ける。

「……セイバーは……前回の戦いで、水谷に……あ。水谷も、前回マスターだったらしいんだが……とにかく、見たことがあるんだろ？」

「——やはり、あの時の少女でしたか……。ええ。直接の会話を交わした事はありませんが、彼女の顔と名は覚えがあります」

思うところがあるのか、複雑な顔で頷いたセイバーはそれだと士郎に話の続きを促した。

「あ、いや……水谷はまだ意識が戻ってなくて話はできてないんだけど……。その、セイバー。前回のあいつは、どんなだったんだ？」

「敵のマスターを相手に話をしようなどと悠長な……と言いたいところですが……」

前のめり気味な体勢から一步離れてふむと腕を組んだセイバーは、己がマスターの顔を見た。

彼の顔にはどことなく困惑のようなものがある。

ヒビキという少女に関して何かあったのか、彼の神父に何かよからぬ事を言われたのか。

その表情から内容を読み取る事などできないが、それでも確信を持って何かはあったと言える。

問いかけるべきか、と悩みけれどもいやと首を振る。

この様子では自分で理解していなさそうだと直感が告げている。

ならば問いかけるだけ無駄だろう。

「……彼女について私も知り得ている事は少ないのですが……ここから離れながら話しましょうか、シロウ」

「ああ……頼む」

このまま教会の前で話し込む事ではないだろうと頷いた士郎は、くると背を向けたセイバーの横に並ぶ。

彼女はそれを認め、いつでも襲撃されてもいいように周囲の気配に注意を怠る事なく目を光らせつつ、少し重たく感じる口を開く。

「彼女は前回、キャスターのマスターというのは、言いましたね。初めて彼女の存在が知れたのは、私を含め他の二騎のサーヴァントが集まった場でした。……正確に言うならとある一騎が私たちの拠点に

乗り込んできて酒を持ち寄ってきて、それに誘われていた一騎が彼女を連れてきたのですが」

は、とぼかんと口を開く士郎に、セイバーは苦々しく当時の事を思い返しつつもマスターの反応に無理はないと頷く。

幼い子供を酒宴に連れて来るなど普通ならばあり得ない。

まさか童子趣味なのかと神経を疑いもしたものだ。……いや、あの時の疑いは晴れていないが。

それはともかく。

「彼女と彼はそれなりに親しかった……。なのでしょうね。さほど嫌悪した様子も怖がった様子もなく、笑い声がうるさいと訴えて抗議していました。その手首に宿る令呪がよく見えて、やっと彼女がマスターと知れたわけです。彼女と共にキャスターが連れられていたのは気配でわかっていましたが、なんというか……。貧弱そうな気配だったので……。一応見逃していたのですが。いえ、実際彼自身戦闘能力のない子供のような姿でしたけど」

ぱちくりと瞬く士郎に、セイバーは神妙な顔を浮かべる。

セイバーの直感的にキャスターの気配は少女を連れてきた男と比べて到底敵になどならないと判断していた。

実際霊体化を解いたキャスターは戦闘に向いているとは到底言えない体つきで、もし戦闘することになれば少女の事も含めどうにも仕掛けるのは躊躇われていただろう。……。無論、仕掛けられればそれ相応に相手取っていただろうが。

「ヒビキという名だけ、そこで知れたというわけです。その後顔を見たのは一度きりで、私には彼女がどうなったのか知る事はありませんでしたが……。その一度で、彼女の力量の一部は多少なれどわかったつもりです。シロウ、彼女はあなたよりも力のある魔術師だ。リンと比べてどうかはわかりませんが、シロウに暗示をかけるくらいならば造作もないでしょうね」

セイバーが目撃した響の魔術。

それは川と現世の眼を隔てる結界ではあったが、それでも規模と内部で行われた戦闘で破れなかった事を思えばその力量は推し測れる。

流れた時間を考えれば当時よりも更に力がついてる事だろう。マスターがその事を理解して、近づかなければいいのだが……。

「そう、なのか……」

深く沈みこむ声音に、セイバーは眉を寄せる。

この様子では、些か不安に過ぎるな、と。

「シロウ。彼女は敵のマスターだ。あなたがどう思おうと勝手だが、彼女とも戦わねばならないことは胸に刻んでおいてほしい」

それに、彼女は覚えているかわからないが、もしかしたら過去のその邂逅で己が真名を彼女は知っている可能性がある。

低く呟くような声でそう言った彼女に、士郎はドキリとした心臓を押さえつけた。

うつむきかけた顔をあげて彼女の顔を見れば、過去を想起してか苦々しきの濃い険しい顔で士郎を見ていた。

これ以上近づかない方がいいと言っているのが何となくわかって、けれど咄嗟に言葉は出てこない。

「……努力、する」

絞り出した返答は、ひどく曖昧なものだ。

それでもセイバーは肯定と受け取ったのか、それでいいとでも言うように頷く。

そうして二人は今後どのように動くかについて話ながら帰路を歩いた。

夜になってから町を見回るということに決めたものの、しかし彼にはすっかりと失念している事があった。

なんだったかな、と家についてもついぞ思い出さなかった士郎に襲いかかるははたして怒声か冷たい沈黙か。

教会での出来事を反芻しては頭を振りかぶる士郎は、後になって悔いた。

思い出しておけば、あんなにも居心地の悪い夕食にならなかつたらうにと。

第十九話

学校へと登校した遠坂凜は校舎を睨み付けて僅かに唇を噛んだ。
「結界が強化されてる……」

たった一日学校へと足を運ばなかっただけ。
それだけの間に、この学校を覆い、中のものを喰らうという意味を込められた結界の力が強まっていた。

土曜日に自身の手でその結界の支点たる呪刻を一時凌ぎとはいえ無力化したのに、元通りどころか更に強化されているという事実には、それでも情報は得られたと遠坂は思い直す。

水谷響がマスターだと分かったのは土曜日……いや、日曜日の深夜。

パツと見ただけの怪我の状態ではあるが、あれは幾ら言峰が治癒の魔術を使ったところで暫くは起きられないだろう。

ということとは、だ。昨日彼女は動いていない。……はずだ。

衛宮士郎の考えを仮定しても、これで彼女が少なくともキャスターのマスターではないとわかる。

何故ならばこんな大それた結界……いや、もはやこれは神殿だと言っても差し支えないだろう。

こんな神殿を作ることができるのは魔術師のクラスであるキャスターくらいのものだ。

少なくとも三騎士や暗殺者のサーヴァントには出来る芸当ではないはず。

そして、今判明しているだけのマスターは衛宮士郎、イリヤスフィール、水谷響、そして遠坂凜の四名。

衛宮はセイバー。イリヤスフィールはバーサーカー。遠坂凜がアーチャー。

そしてこの結界がキャスターのものだと仮定するならば残るサーヴァントはランサー、ライダー、アサシンとなる。

「でも、キャスターの仕業ではない」

昨日ずっと調べていたことだが、キャスターのサーヴァントは柳洞

寺にいと判っている。

新都でのガス漏れ昏睡事故は、全て人々の精気を吸いとり、それを柳洞寺に流している。

そして、調査する遠坂を骨で作られた使い魔が邪魔をしてきた。ライダーのサーヴァントが使い魔を寄越す、というのも考え難かったため、それはキャスターによるものと仮定した上で柳洞寺にアーチャーを偵察させた。

結果、柳洞寺の敷地に足を踏み入れようとしたところ、空間を置換されていて、階段をのぼろうとしては階段をのぼる前に戻される、という報告を受けた。

山の周囲は一步も踏み入れられない結界が張られている。

かといって完全に塞いでは山が死んでしまうため出入口となる山門は閉ざしておらず、その階段の置換の法則さえ破ればキャスターに相對することができるとのことだ。

そんな芸当が出来るのがキャスター以外にいたならば驚きである。だから柳洞寺にいるサーヴァントはキャスターで決まりだ。

もうひとつ。この結界は柳洞寺に魔力が流れておらず、この学校の敷地で完結しているのもそう推測する理由でもある。

「だから残るはライダー……もしくは、アサシン……つてことになるわね」

とはいえ、アサシンのサーヴァントは名前の指す通り、暗殺者のクラスだ。

こんな派手で目立つ結界を張るだなんて到底考えられない。

だからこの結界は、ライダーのものだ……と仮定する。少なくとも新都の件と違い、吸いとした力の先が明確でないからこちらとこちらとはまったくの別件で、この推測に間違いはないはずだ。

となれば水谷がランサー……少ない可能性だろうが、もしくはアサシンのマスターということ仮定できる。

そこまで考えると、この学校には四人のマスターがいることになる。

その四人目を、自分は探さなければならない。

こんな、おぞましく趣味の悪い結界を張る奴ははっ倒して死ぬほど後悔させてやらなければ。

魔術師は魔術を隠匿するもの。こんな堂々と見つかってもいいとばかりの結界など、魔術師の風上にもおけない。冬木の管理者としても見過ごすわけにはいかないとも思う。

「とりあえずそれとなく調査しつつ、もう一回呪刻潰しをしていくか」
そう放課後の予定を立てつつ、ぐるりと校舎の周りを一周した凜はため息を吐き出して教室へと向かった。

そして廊下で、とんでもなく腹立たしい事態にかち合った。

「よっ」

軽い調子で片手をあげて挨拶、のようなものをしてきたのは衛宮士郎だった。

「遠坂？　なんだよ、顔になんかついてるのか？」

反応を示さない凜に、思い違いも甚だしく、衛宮は制服の袖で頬を拭う。

あまりの事に頭に血が上ったが、凜はそれを飲み込んでフンと顔を背けると、自分の教室へと戻った。

迂闊にも一人になったら、あいつを絶対叩く、とやや物騒なことを考えながら凜は常より荒々しい動作で自分の席についた。

その目は剣呑に輝いていて、普段から近寄りがたい彼女を、更に近寄りがたくさせたというのは言うに及ばぬことだろう。

そんな彼女に話しかけられる勇者は余程の馬鹿か阿呆か考えなしか、はたまた神経が図太いのか。

さて、触らぬ神に祟りなし、ともいうことわざもあるのだし、ここは彼女に関わらないことが吉であろう。

握った指先がピクリと動いたことで、ハサンは顔をあげた。

長い睫毛が震え、ゆつくりとその瞼が押し上げられる。

隠れていた目が開き、ぼんやりと天井を見ていたのも束の間。

数度の瞬きで覚醒した響は強く握られた己の手に視線を投げた。

「おはよう、ハサン。……私、どれくらい眠ってたのかな？ 完全に意識が落ちていたみたいで、ちよつと感覚がないんですよね」

困ったように微笑んでみせると、嗚咽を飲み込んだハサンはくしやりと顔を歪めて口を開く。

「本日は3日の、午前9時過ぎです。我が主」

「……丸一日寝てた、ってことですか」

ため息混じりに呟き、体を起こした途端に自分の体に走った違和感に顔を歪める。

ずきりと鈍く痛みを訴える左足と、血の色に滲む布団に自分の体の状態がわかってしまえばため息は止まらない。

「途中から意識なかったし、ランサーには悪いことをしましたね……つあいたた……ハサン、他に何かありましたか？」

「…私は待機を命じられたため家にいましたが、ランサーの左手は主の左足同様に切断されたようです。どちらとも言峰による治療が施されました。お加減はいかがでしょうか」

なるほど、と頷いて足を折り曲げて膝をあげようとする。

しかし、左足はぴくりと反応をただけで動く気配がない。

響は十年前のことを思い出してしまいがら、足と足の神経を接続し、不足した部分は魔力で補い、抉られたような痕とひきつれたような傷口を修復する。

たちまちに傷ひとつない足が取り戻され、もう一度足が曲がるか確かめれば痛みもなく通常通りの動きを見せる。

「ん、よし。これで動かせますね」

よしと息をついた響がベッドから足をおろす。

立ち上がりかけた主をハサンは慌てて止め、がたと立ち上がった。

そして彼女は、その足に額をつけんばかりの距離で膝をつく。

「響様……私に、あなたを助けるな、などという命令を、もう下さない

で、ください……。私、わたし……。あなたがいなければダメです……。ダメ、なんです。……。あなたを、失いたくない」

涙さえ浮かべるような声音で、ハサンは訴える。

それを受けた響は柔らかく笑みを浮かべた。

そうして手を伸ばして、紫の頭髪を優しく撫でる。

「……、そろそろ、英雄王に響様の目覚めを報せに行きます。どうか、本日はゆっくりとお休みください」

触れる温もりを堪能するように一度俯き、心を落ち着かせたハサンはすくつと立ち上がって霊体化した。

消えたその姿を見送って、彼女は足に力を込めて立ち上がる。

「あっ……。と」

がくりと揺らいだ視界に、どうにか足を踏ん張らせて倒れることは回避する。

たった一日眠っていただけなのに情けない、と自身の貧弱さ加減についついため息をついてしまう。

「……こんな調子では次は逃げられませんか」

バーサーカーから命からがら逃げ延びられたことは幸運だったと思いつつ、左足を撫でる。

気を失っていたために怪我の程度は不明だが、致命傷まではいかずともかなりの重傷を負ったのだろう。

でなければ普通の魔術師より上手な治癒の術を扱える言峰が、治療できないはずがない。いや、彼の男のことだから苦しむ顔が見たくてあえて完全な治療を施さなかった可能性もあるが。

「起きたか」

「あ。はい。おはようございます、ギルガメッシュ」

「遅いわたわけめ。もっと早く起きぬから麻婆を食べるはめになったのだぞ」

ノックも遠慮もなく部屋に入ってきたギルガメッシュは不機嫌な面持ちも露に、大股で近づいてきたかと思えばどすんとベッドへ腰かけた。

困った顔を浮かべつつ、その顔を見た響は「そう言われましても」と

溢す。

「フン。……それで？ 体はどうだ」

「あなたがそんな明確に心配してくださいるなんて、明日は雨ですかね。いえ、まあ動くのに支障はありません。流石に激しい動きは……少ないとも今日は難しいですね」

苦笑しつつ、椅子に座るのをじつくりと見つめていたギルガメツシユは、口を開こうとしてそれから何かに気がついたように目を細めた。

「響、貴様……、……ふむ？」

「？ 何ですか、王様。私の顔なんてみても、一日や二日で変わりませんよ」

あまりにも無言でまじまじと見られて、響は戸惑ったように首を傾げる。

しかしギルガメツシユは言う気を無くしたのか、一度口を閉じてふと小さく息を吐き出した。

「……いや。貴様の気にするようなことではない。だが今日一日休むことを許す。明日はそうだな、ピザにするがよい」

「えっ……あ、ハイ」

ギルガメツシユからの思わぬ言葉に面食らってしまったながら、響は頷く。

そうしてピザを作る材料がはたしてあっただろうか、と冷蔵庫の中身を思い出しながらうんと唸る。

そうして悩む彼女を見ていたギルガメツシユが更に何かを言おうとした時。

部屋の入り口からキィとドアを開く音とカツと金属が床を打つような高い音がわざとらしく鳴りながら入ってきた。

「お。起きてんじゃねえか」

「ランサー」

顔だけ振り返った響の顔を見て、ランサーは一瞬安堵したような顔をした後からりとした笑顔を浮かべた。

「チツ、雑兵風情が我の話の邪魔をしおって……」

一気に機嫌が転落したギルガメッシュは不機嫌な顔をしたままベッドに寝転がり、肘枕をしながら鋭い眼差しでランサーを睨み付けてもう一度舌打ちする。

そんな王様の様子に苦笑を浮かべてしまいながら、響は自分を助けてくれた槍兵を見上げた。

「おはようございます、ランサー。危ういところを助けていただいてありがとうございます」

「はよーさん。言峰からの命令もあるが、戦えない女をみすみす見捨てられるかよ。……しかし、ちいとばかり采配をミスってお前の足が切られたのは俺の不覚だった。すまん」

「いいえ。バーサーカー相手にあなたは私を抱えながらよく戦ってくださいました。感謝こそすれども、謝罪されることはありません」

ありがとうございますと頭を下げる響に、彼は少し困ったように眉を寄せて「いや」と首を振った。

「ところで、あなたの治療は必要ですか？ 見たところ左手に力が入らない様子ですが……」

話をそらすようにそう問いかけた響は、だらりと垂れ下がり力が入っていない指先を見る。

腕全体には筋肉の動きがあるのに、手首から先は先程からまったく動いていなかったのが傍目からでもわかったからだ。

その言葉にひとつ頷いたランサーは大きいため息を吐き出して愚痴るように言峰に一通りの治療はしてもらっていると告げる。

「だが、神経の接続が細かすぎるからお前に任せろ、だだよ。まったく、他人事にも程があるだろあの野郎」

「なるほど、言峰さんらしい」

近づき左腕を差し出してきたランサーに、治療を施す響は苦笑した。

きっとあの神父ならば完全に治せただろうに、わざと弱らせるために途中で止めたのだろう。

ランサーが敗れてしまえば困るのは彼ではないのか、とは思うもののきつと言峰は憎らしい笑顔で「情けないぞランサー」と槍兵を詰る

くらいはしそうなものだ。それに、ベッドでつまらなげに酒を飲み始めた金色の王がいる限りは特に焦ることもあるまい。

「はい。これで繫げられたと思います。動くかどうか、しっかり確認してくださいね」

「おー……」

手首を包むように触れていた両手を離し、微笑んでランサーを見上げる。

調子を確認するように数度手首を動かし、捻り、手のひらを握ったり開いたりとした彼は感心したように「ほお」と呟く。

「お前さん、魔術は並以下だって卑下してたが、ここまでできれば十分じゃねえか」

「……言峰さんほど治癒魔術は得意ではありませんから。それに、基礎的な魔術しか扱えないしその精度も甘いものですから、卑下しているわけでもありませんよ」

「そうかねえ」と首を傾げながら礼を言ったランサーは、微笑む顔を見下ろして仕方なさげに肩を竦める。

それから不機嫌さを増していく金ぴかを見やり、呆れたような顔を浮かべた。

「それじゃあ俺は行かなきゃならんが……ギルガメツシユ。テメエがどう考えてんのかは知らんが、病み上がりの女に手をあげるような真似はすんなよ」

「……フン」

鼻を鳴らす彼に、ランサーはやれやれとひとつ肩を竦めて響の頭をぐしやぐしやと搔き撫でた。

きよとんとした顔を浮かべて自身を見上げてきた彼女に「また後でな」とランサーが霊体化して気配を消す。

一体何故頭を撫でられたのだらうと困惑しながらそれを見送った響は、とりあえず乱れた髪を手櫛で直して王様へと視線を戻した。

しかし、ギルガメツシユは不機嫌な面持ちのまま無言で響の顔を睨むように見るのみだ。

「響」

深い沈黙の後の呼び声は、短く。

けれど何かを命令するような強い声音だ。

なんの事かという顔をした響は、それから苦笑を浮かべて彼の王に従順に応えるのだった。

第二十話

朝だ、と目が覚める。

ぱちりと瞼を開けば、自室の見慣れた天井が視界に入った。

「ん、うふあ……う？」

寝惚けたような声がすぐ近くで聞こえて、そちらへと顔を向ければとろりと微睡みに揺れる紫の瞳と視線が交わる。

すりすり甘いように肩口に頭をこすりつけ、幸せだというような笑む彼女は共寝して主人に甘える小動物のようだ。

随分と馴染んだ光景ではあったが、微笑ましくてついつい唇を緩めてしまう。

「んん……んん……あ……、おはよう、ごさいます、ひびきさま」

ハサンに抱きしめられている片腕はそのままに、空いている方の手を伸ばしてその頭を撫で梳けば、彼女の顔には更に蕩けたような笑みが浮かぶ。

可愛いなと思いつつも「おはよう、ハサン」と返した響は上半身を起こし、まだ鳴っていない目覚まし時計のスイッチを切った。

「ふあ……」

溢れてしまう欠伸を噛み殺して立ち上がれば、すっかり覚醒しきつたハサンも起きて寝乱れた布団を直し始めた。

そんな事はしなくてもいいのには思うものの好きなようにさせ、響は顔を洗いに洗面所に向かう。

冬の凍えるような冷たい水からぬるま湯へと変わったのを見計らい、顔を洗えば少し体を動かしたのも相まって眠気が吹き飛ぶ。

タオルで顔を拭いても鏡を見ると、血色がいいとは言いがたい己の顔が映っていた。血が足りてないのかもしれない。

貧血に向いた献立を浮かべながら、響はパツと手早く身支度を整えて台所に立った。

朝食とお弁当のおかずを作り、そわそわと落ち着きなく手伝える事はないかと様子を窺ってくるハサンへと微笑み、盛り付けを頼む。

途端にぱあっと顔を輝かせたハサンは一度手袋を引っ張ってから

お皿と菜箸をとって響の背後でせかせかと動く。

その気配を感じながら、昨日作りおいていた品も詰め込んで、お弁当の箱に蓋を。

更にそれを布で包んで手提げの小さな鞆に入れて学校の鞆の隣に並べて置く。

「ありがとう、ハサン。それじゃあ食べようか」

盛り付け終わった皿をテーブルに並べたハサンに響がそう言えば、彼女は「はい」とはにかんで椅子を引いた。

お礼を言いつつその席へと座った響に、彼女も向かい側の席へと座る。

そうして主従揃ってご飯を食べながらも、ハサンは学校の鞆を見て少しだけ顔を曇らせた。

「どうかしましたか？ ハサン」

その様子に不思議そうに首を傾げたマスターに、その表情は更に暗くなる。

「……本当に、学校へ行くのですか？ ランサーの話では二人……いえ、結界を張っているサーヴァントも含めて三人の敵対するマスターがいることになりますが」

行ってほしくないと叫びたげな様子に、しかし響は首を振ってやりわりと拒否を示す。

半ば予想していた反応に、しょんぼりと肩を落としたハサンはもそりと卵焼きを口に運んだ。

美味しい。悄気かえった顔に少しだけ明るさが戻る。

「大丈夫ですよ。今日はハサンが付いてきてくれるんですから、尚更ね。帰りの時間にはランサーも合流させてくれる、という話にもなりましたし。キャスターもまだ敵対するつもりはないようですから」

「……そう、ですが……」

「心配してくれてありがとう。——頼りにしてるよ、ハサン」

「……うむむむ……響様は狡いです」

拗ねたように唇を尖らせる暗殺者らしからぬ表情をした暗殺者は、微笑みを返されて思わず視線を逸らす。何となく自分が我が儘を

言ってしまったように感じて、恥じてしまったのだ。

その様子に微かな笑い声まで溢す主をちらりと窺い見て、ハサンはつられたように少しだけ笑ってしまった。

ハサンは主が——響は、自分の事を理解してくれていると、そう思う。

それに求めるものを聖杯を使わずに与えてくれる主は、得難い存在だ。

同じ空間で同じ物を食べて温かな体温をわけあうように触れられて。

そして、主の力もあるとはいえ、買い物まで共に行う事が出来た。他人とぶつかっても何事もなくて、ああこの人と共にあれば、普通でいられるのだと強く感じた。

だから、という訳では勿論ない。けれどハサンは、この人の為に在りたいと何度となく考える。

きつとそれさえ、彼女には言葉にせずとも伝わってしまったかもしれないけれど。

「……さて、それではそろそろ出ましようか。あまり遅く出ると遅刻してしまいますし」

ふと時計を確認し、響は食べ終わって空になった食器を重ねて流し台へと運ぶ。

それに追従したハサンはそのまま響が玄関を出る前に霊体化をした。

「はあ……今日は少し冷えますね……」

朝の冷えきった空気に吐き出した言葉が白く流れていく。

背後で心配したように大丈夫かと問いかけてくるハサンに、白く霜を纏った道草を踏み締めながら顔を振り向かせて響は微笑む。

「そうやって心配してくれるから、平気だよ」

どこか悪戯っぽいその笑みに、ハサンはやっぱり敵わないと肩を落とす。

でもこんな人だからこそ、この人のために尽くしたいと思ってしまふ。それは決して、悪いことではないだろう。

『あ……響様、段差にはお気をつけ下さい』

「うん？ ああ、ありがとう」

すつと再び前を見た響は、つい二日ほど前に片足を切断されたとは思えない程しつかりとした足取りで歩いていく。

柔らかい横顔を斜め後ろから眺めながら、強く拳を握りしめ頑張ろうとハサンは誰知らず頷いた。

そうしていつもの長い道行きを歩ききった響を迎えたのは、如何にも機嫌がいいですといった様子の間桐慎二だった。

偶然昇降口の前で顔を合わせた二人は和やかに挨拶を交わして他の生徒と同じように靴を脱ぐ。

「水谷、お前昨日休みだったらしいけど何かあったわけ？」

「うん、ちよつとね。その感じだと間桐君こそ、昨日は休んだんだね。何か良いことでもあった？」

「フフ……まあね」

ニヤニヤと笑って頷いた間桐は、しかし何か気づいたようにフツと表情を無くした。

「——水谷、お前……」

驚いたように目を見開き、靴箱から取り出しかけていた上靴を手から落としてしまった事も気に留めず、彼はじつとただ一点を見つめた。

その視線の先には、同じように上靴を取り出しかけていた響の左手首がある。

そして、その手首から手の甲に向かって伸びる赤い痣が。

「？ なに、どうかし……」

どうかしたのか、と問いかけた響だったがその言葉は間桐の行動によつて遮られた。

ぐつと引つ張られた左手からぽろりと上靴が落ちて、床に跳ねる。

「ええと……間桐君？」

困ったように落ちた上靴と左手を掴む間桐とを交互に見て、響が首を傾げる。

背後で殺してやりましょうかと低く尋ねてくるアサシンにも困ってしまう。

『……ああ、なるほど。ハサン、授業が始まったら家に戻ってもらってもいいかな?』

『は、はい。それは、問題ありませんが……』

はて、何故こうなったのだろうかと考えて彼女はすぐに問題に気づいた。

持ってきていたと思った礼装を忘れている。

『令呪を隠す礼装を忘れてしまっていたようで……たぶん洗面所に置きっぱなしになってると思うので、頼みます』

『はい。響様……どうしても、殺しちやダメですか?』

『ふふ、可愛く言ってもだめ』

間髪いれずに引き受けたハサンのねだり声に可愛いなあと、緊迫した空気に似つかわしくないのんびりとした思考をした響は掴まれる左手はそのままに腰を屈めて右手で上靴を引き寄せた。

踵を踏んでしまうのを右手でそのまま直してからやつと間桐の方を見れば……何やら彼は呆れたような、胡乱げな眼差しでこちらを見ているではないか。

何でそんな顔をされるんだろうか、と自分のとった行動について省みず更に首を傾げた響に、彼は隠さずため息を吐き出した。

それもかなり深いため息を。

「お前、魔術師だったのか」

周囲を憚った小さな眩きを溢す間桐に、しかし彼女はあっさりと首を振って否定した。

「私は多少関わりがあるだけだよ。ああ……そういえば、間桐君のことはそうなんだっけ。随分前に聞いた事があったよ」

記憶を引っ張り出して納得したというように何度か頷くその様子に、先程までの機嫌のよさが嘘のように不機嫌さを隠さず眉間に皺を寄せた間桐は、不意に何かに思い至ったように「そうだ」とあくどい笑みを見せた。

「水谷。お前を友人と見込んで、話がある。でも、そうだな……昼休

み、弓道場に来いよ。そこで話をしようじゃないか」

「あ、うん、わかった。……いやでも、弓道場って、いいの?」

「フン、いいんだよ別に。僕は副部長だからね」

それは関係ないような、と自信ありげな間桐に突っ込む事も出来ず「そうなんだ」と彼女は流されるまま曖昧に頷いた。その頭には罨かもしれない等という思考はない。

むしろ、それにしても相変わらず彼の機嫌の上下は中々激しい。

あの金色の王様程コロコロと変わる訳ではないが、それでも響は彼のそういうところが嫌いではなかった。王様が近くに居る影響も勿論あるだろうが。

とそのような暢気な思考をしている。

「じゃあ昼はよろしく頼むよ、水谷」

にんまりと笑って、掴んだままの手首を離れた慎二に彼女はうんと素直に頷いて、やはり殺そうと提案してくる暗殺者に苦笑を浮かべた。

上靴を履く彼に「先に行くね」と告げてその横を過ぎ、念話を通じて彼の態度にぷりぷりと憤るハサンを彼女は宥める。

自分のために怒ってくれるのは、やはり嬉しいとは思うものの、自分を友人と呼んでくれる存在を害されるのは少し困ってしまう。

ハサンもそれは承知しているのか、一通りの問題点をあげ連ねたら後はすっかりと黙り込んで教室へ入って学友と挨拶を交わす主の姿を少し離れて見つめた。

ノートを借りて「ありがとう」と微笑んだ響は自分の席へとついて、ハサンの立つ場所を見るなり浅く頷いた。

念話をせずとも先程願われた事を行うようにという指示だろう事が伝わる。

教室を見渡し、僅かな間逡巡したハサンはすぐに戻る事と何か少しでも問題があれば令呪を用いて欲しいと残して契約者としての繋がりで辛うじて感じていた気配さえも消して学校を後にした。

響は気配の消えた場所を一瞥し、ノートを机へと広げてひとつつ頷く。

とりあえず今日も授業があるものは先に写してしまわなければ、ノートを借りた相手にもとても悪い。

くると指先でペンを回して文字を写し出した彼女は、聖杯戦争等という争いの気配等欠片も感じないほどにゆるやかで、穏やかで。

柔らかな雰囲気をつたえ、日常という中へと溶け込んでいた。

第二十一話

昼までの休憩時間の殆どをお手洗いに行く以外、ノートを書き写す事に費やしていた響はノートを返してほっと肩から力を抜いた。

そうしてすぐに始まった四限目の授業も変わらず真面目に受け、お昼だと一気に騒がしくなった教室から早々に離れた彼女は朝、友人である間桐慎二に言われた通りに弓道場へと向かった。

間桐はまだ来ていないのか人の気配はない。

暇を潰すようにあまり晴れているとは言えない空を見上げて小さく息を吐き出す。

天候のせいかわ少し肌寒く、これならもう少し遅くくれば良かったかもしれないなどと思い耽つていれば名前を呼ばれたのでそちらを向く。

「お待たせ、水谷」

片手を上げながらこちらへと歩いてくる間桐は親しくしているものから見ればにやついた。他の者から見たならばやけに爽やかな笑みを浮かべていると思えただろう。

響は特に気にした様子もなくうんと頷いてはいるが。

「ほら、入りなよ」

カチリと鍵を回して弓道場の扉を開けた間桐に、彼女は少し躊躇いながらも続いた。

足を踏み入れてつい物珍しさに屋内を見回してしまうと、彼は呆れたように「面白いものなんてないと思うけど?」と鼻を鳴らす。

「初めて入ったものだから、つい気になっちゃって。さて、話があるんだっけ。……ご飯食べながらでもいいかな?」

「ああ。僕もお腹空いたからね」

靴を脱いで畳の上に腰をおろし、向かい合うように弁当を広げた二人はすぐに話す様子はなくご飯を口に運んだ。

そうしてふと響のお弁当を見た間桐は箸を下ろしながら、ぽつりと呟く。

「……おひたし」

「うん？ ……半分でいいかな。蓋使うね」

「ああ」

彼の言葉に欲しいのかな？ と気づいた響がひよいと自分の分を引いてアルミホイルの包みを裏返された弁当の蓋に乗せる。

そつぽを向きながらもごもごとお礼を言われ、彼女は思わずといった様子で笑い声を零す。

そこには嘲りという意味はなく、あくまで微笑ましいとでもいうような柔らかいものが籠っていた。

笑われた事に間桐は慌ててわざとらしく咳払いをし、どことなく引きつったものながら笑みを浮かべて「水谷」と猫撫で声で名前を呼ぶ。それに用件に入るのかと察した彼女が居住まいを正した事で、ちよつとだけ彼の笑みに自然なものが混じった……気がするのだが、響は特に気にした様子はない。

「お前さあ、それ……令呪があるって事は持つてるんだろう？」

「？ 持つてるって……ああ、サーヴァントの事？ それなら、居るよ。とても優しく可愛いんだ」

少し刺が混じる尖った声音に、しかし彼女はにこにこ嫌味なく微笑む。

その様子に鼻白んでしまった間桐だったがそれでも魔導の家の生まれという自負を胸にして「そりやあいいね」と大仰に頷いた。

「実はね、話つてのはその事についてなんだ」

「その話？」

「ああ。聖杯戦争について、さ」

ニヤリと笑った間桐が、片手をあげる。

するとその背後に一人の女が現れた。

響から見れば座っている事もあり大きく感じるすらりとした長身。身に纏う黒い衣装はメリハリのある体つきを強調するように張り付いている。

だらりと力なくさがっている手には得物らしいものはなく、交戦の意思はないことを示しているのだろうか。

思わぬ人物の登場に彼女を見上げた響は、その顔を、正確にはその

両眼を覆う眼帯に瞬いた。

その視線に軽く首を傾げた彼女の長い髪がその動きに合わせて地を這う蛇のように揺れ動く。

「……」

しかし彼女は閉じた口を開く事はなく、すぐにその顔を元の位置へと戻す。

それを見つめる響の表情を驚きと取って、間桐はやや満足げに笑みを浮かべた。

「ふふ……実は、僕もマスターの一人なんだ。気がつかなかったかい？」

ニヤリと意地悪い笑みとなっている間桐に視線を戻した響は、うんと小さく頷いて小さく息を吐く。

「まさか間桐君がマスターとは思ってなくて吃驚してるよ。……でも、良かったの？ 私に教えても」

心底困惑したように首を傾げた彼女に、彼はふんと鼻で笑う。

人によつては見下しているように聞こえるだろうそれは、しかし彼女には嬉しそうに聞こえていた。そう捉えるのは彼女だけかもしれないが。

「僕は間桐の血を継ぐものとして巻き込まれただけさ。本当は戦いたくなんてないんだよ。友人である水谷とは特に、ね」

意味深げに眼を細め、彼はじっくりと響の反応を窺い見る。

しかしその視線に気づいていないのか困った顔をして尚も首を傾げる様子に、やや肩透かしを食らったような気分になってしまう。

普通、もう少し反応があつてしかるべきではないか。

微かに機嫌を降下させてしまいなから、更に続けるべく口を開く。

「——だからそこで、だ。僕とお前、二人で協力して戦わないかい？」

「え？ えつと、間桐君……それ、本気？」

今度こそ完全に驚いた顔をした響に、間桐は満足してにつこりと笑みを浮かべて頷く。

そうだ。そういう反応が欲しかったのだと。

「ああ、勿論。協力して戦うって言っても、寝首をかくつもりなんてな

いよ？　ただ、同じ学校にこれ以上僕を殺しに来るかもしれない相手がいるって事が怖くてね。水谷が協力してくれるって言うなら少しは安心できるってもんだろ？」

「あ、うん。……えっと、それはつまり……？」

「ハア……わかってたけど、割と察しが悪いよね、水谷って」

分かっていない様子でぱちくりと瞬く様子には思わず脱力してしまふ。

残念なものを見るような眼で彼女を見てしまいなながらも、それでも間桐は自信を持って片手を差し出した。

「つまり、学校には他にもマスターがいるって事さ。誰がついていうのも、僕は知ってる。だから、それを教えてやるからさ——僕と協力しなよ、水谷」

言葉だけはやけに強く、しかしどこか緊張の濃い強張った顔になった彼に、響はうーんと唸った。

背後のハサンは反対なのかやめた方がいいと訴えてきている。

だが、戦うのを好んでいない響としては受け入れてもいいかな、とやや乗り気ではいた。

それでも悩むのは、これを飲んでしまうとまた何かを言われてしまふんだらうなあという金色の王様を浮かべてしまふからだ。

キャスターとの停戦の際も何故勝手に話を進めているのだと言われたものだ。

あれとはまた状況が違ってはいるが……さて、そうだな。

「うーん……うん。まあ、いいですよ」

考え込んだ割にはひどくあつさりと言き、響は手を差し出し返す。そうしてにこりと微笑んで、ぎゅうつとその手を握りしめた。

「……………本気でいいわけ？」

しかしそこまでできて逆に戸惑ったのは間桐の方であった。

確かに彼女なら頷くだらうという打算はあったものの、もっとう、深刻に悩むべきではないか？

さつきも唸ってはいたが、深刻と言える程ではなく、どちらかと言えばどちらのお菓子を買うべきだらうという……いや、このたとえば

分かりにくいな。

そう、たとえるなら気分を変えるために何時もの道じゃなくて近道をするかどうか迷う程度のものというか。

「え、だって間桐君、私を友人と認めてくれてるんでしょ？　なら、いいよ。それに君は——あ、いや、うん。……でも一緒に戦おうって言うのは少し難しいかもしれないのは先に謝っておくね。私のサーヴァントは直接的な交戦は苦手だから。それでもよければ、停戦協定って事でよろしくね」

優しくそう言った彼女は、あつさりと手を離してまた箸を手に取り、

食事を再開した彼女のあまりにもいつも通りな様子に、何で僕の方が心配しなくちゃいけないんだと脳内の自分と争っていた間桐は乱暴に自身の頭を搔く。

それが伝わる事なくのほほんと「あ、これも食べる？　結構自信あるんだ」などと言って弁当の蓋に遠慮なくひじきの煮物を置いてくるのは何だ。別に気にしないけど、それ食べてたじゃないか。

零れるからって自分の白飯に崩してから銀紙ごとこつちに渡してくるなよ。いや食べるけど。

「……美味い……」

「そっか。間桐君、結構味に拘りあるから、良かった」

何だか中学の頃を思い出すな、と足りない一人も思い出した間桐はむすりとした顔をして無言になる。

そんな彼の変化には慣れたもので、響は気にする事なく、なんののかんと彼と手を切るべきだと訴えかけてくるハサンに対応していた。どこことなく立たされたままの彼のサーヴァントの方が居心地悪そうだ。というよりも暇そうである。

「う……あー、そうだ、水谷。僕のサーヴァントを見せたんだから、お前のサーヴァントも見せろよ。情報交換はフェアに行くもんだろ？」

「えっ……まあ今ちよつとご機嫌斜めさんなだけ……アサシン」

苦笑して頷いた響が手招くと、ハサンは霊体化を解く。

仮面を被ったままながら如何にも機嫌が悪いというオーラを

する暗殺者に、間桐は驚き身を竦めた。

「っ、な、なんだよ、コイツ」

微かに浴びせられる殺気は流石の暗殺者といったもので、蒼白になっていく顔を隠せない間桐に響は困ったように首を振る。

「ごめんね、間桐君。私のアサシン、かなり心配性で。……霊体化してて、アサシン。明日は炊き込みご飯にするから。具沢山にするよ?」

「……ご飯に釣られるわけではありませんからね、マスター」

それなりに長く共にいるからこそわかる拗ねた声音を残し霊体化したハサンにありがとうと微笑んで間桐へと向き直す。

初めて受けた殺気にまだふるふる震える彼は最早ご飯どころではないだろう。

それに少し申し訳ないなど己の行動に少しばかり反省し、響は努めて明るく「そう言えば」と手をうった。

「他のマスターって誰の事なの? 私の知ってる人なら避けようがあるんだけど……」

「……ハッ、それなら、安心だね。……他の奴ってのは、衛宮と遠坂の事だよ。遠坂くらいなら、間桐を少なからず聞いてたお前なら知ってるんじゃないかい?」

響の声に我に返った間桐は青い顔のまま鼻を鳴らす。

明らかにアサシンに対して怯えてしまっているのはわかったが、それを指摘して心配の言葉をかければ彼は怒るだろう。

そう判断した響はそれに関しては何も触れることはせず、成る程と数度頷いた。

「そういえば、そうでしたね。間桐君が割と遠坂さんの話をするから、つい忘れてました」

「っはあ? 僕がいつ、お前の前で遠坂の事を話したって言うんだよ」

「……あ、無自覚だったの……? そっか……いや、それなら気のせいって事にしとくよ」

すっかりと自分の話した事など忘れた様子に、苦笑を浮かべた響はひとつ首を振る。

忘れていたとしても大した問題にはならない。話していた内容も、

まあまた順位が上だったやら何やらという愚痴のようなものだし。

「……それにしても、衛宮君もマスターなのかあ。同じクラスに三人もマスターがいるなんて、偶然にしても凄いよね」

さつきと話を切り替えた彼女に、間桐は物言いたげな顔をしたが突っ込むのを止めたのか「そうだね」と軽く同意した。

「衛宮君とも遠坂さんとも、できれば戦いたくはないかなあ」

「……人が好い衛宮なら、戦わないってのは受け入れてくれるんじゃないか？ 僕は一応、提案してみるつもりだけど」

重たいため息を吐き出す響を見かねたのか、少々人の悪い笑みで間桐はフォロー……のようなものをする。

しかし彼女は小さく唸るだけで、肯定の言葉は返さない。

衛宮同様に人が好い彼女が戦いに消極的なのは理解できるが、何をここまで悩む事があるのだろうか。

協力を申し込んだ自分を棚に上げているつもりのない彼は小さく首を傾げた。

「……いや、私は様子見って事でいいかな。敢えて言う必要は私にはないし」

「ふうん？ ……意外とやる気あるんだ、水谷」

「ん、やる気というか、なんというか。さつきも言ったけど、アサシンは直接戦うのが苦手だからね。私の知ってる情報の中で知らないのはアーチャーとセイバーだから、できるだけ顔を合わせたくないだ」

困ったように曖昧に笑む響が言外にその二騎以外の情報は少なからず知っていると云うその言葉に、間桐は大きく目を見開く。

まさか、そこまで情報を得ているとは想像だにしていなかった。

アサシンというサーヴァントだからこそ、情報戦には長けているってわけか？

「へえ……ついだし、その知ってる情報ってのを教えてくれよ」

「あ、うん。いいよ……って言いたいところだけど、お昼休憩も時間なくなってきたし、また改めてでもいいかな？ 具体的には今日の放課後はちよつと無理だから、明日にでも」

これは幸先がいいとばかりにずいっと顔を寄せて頼んできた間桐だが、時計を見た響は「ごめんねと両手を合わせる。」

間桐としては緊張感を持ったつもりだったのだが、これにはやや白けてしまう。

なんとすべきか、こういう緊張感の薄いところからしくはある。だが、協力関係を結んだとはいえ、すわ情報戦をするつもりか少しばかり疑ってしまった自分の緊張を返せ。

そんな喉元まで出かかった言葉を飲み込んで、同じく時計を見た間桐は確かにギリギリだなと頷く。

昼以降サボってもいいが、結構真面目な水谷を説得するのはよっぽどがない限り大変だ。

今日のところは諦めて、また明日にするとしよう。

僕は柔軟な対応ができるからね、と誰にアピールするわけでもなく心の中で呟いて、彼は「ならこの続きはまた明日にするとしようか」とニヤリと笑う。

それに安心したように頷きを返し、響はまだ三分の一ほど残る白米を箸で取り上げた。

ただ思い出したようにひとつ。

「何かあっても、学校の結界はできるだけ使わない方がいいよ」

そうならどうするのか想像もつかないから、と。

不安を抱かせるような忠告を、柔らかな微笑みを向けながら友人へと贈った。

第二十二話

藤村の元気のいい「また明日〜！」という言葉で迎えた放課後。てきぱきと帰る用意を済ませた響は自分に向く視線に頓着することなく教室を出た。

同じように帰宅するために廊下を行く生徒たちに交じり、靴を履き替えてざわざわとした話し声をぼんやりと聞き流しながら校門を潜る。

それだけでも人の話し声は遠退き、更に坂道を下っていけば声は疎らになっていく。

時折交じるエンジン音に道の端に避けては通りすぎてゆく車にまた少し道の真ん中に寄ってしまいながら、彼女は上の空といった様子で歩いていった。

慣れた道であるとはいえ、上の空すぎるのではないだろうかと心配したハサンは少しだけ悩み、声をかける。

「……いえ。何でもありませんよ、ハサン。心配してくれてありがとう」

しかし彼女は首を振るだけで、その胸の内を明かす事はない。

それが気にかからないといえば嘘にはなるが、それでも主なりに何か思う事があるだろうと考えたハサンは「何かあれば、すぐにでも言ってください」と言う他になかった。

それにしつかりと頷いて微笑み響はもう一度お礼を言った。

帰りついででの買い物を終えて商店街から離れたところで丁度よくランサーと合流し、ライダー陣営と少しばかり協力する事になったと伝えれば彼女らしいと大笑し、やや乱雑にその頭をぐしゃりと撫で回して肩を叩く。

ハサンから送られる視線が冷たいのはわかっているが、何時もの事のため彼が気にする事はない。

響も困った顔はしつつも深く気にはしていないのか「まったくランサーは」と呟いて乱れた髪を直すだけだ。

その足取りはのんびりと緩やかなままで、聖杯戦争のただ中であつ

てこの穏やかさはやはり彼女らしい。

ランサーは苦笑するように目を細め、それから肩を竦めた。

戦争に生き急ぐよりかはよっぽど彼女には似合いだな、と。

何事もなく帰宅し、何時ものようにギルガメッシュも交じって四人は夕飯を食べる。

そして響の予想通り「我に断りもなくまた話を進めおつて」と文句をつけられはしたものの、思った以上のお咎めもなくそれどころかキャスターよりは面白そうだしいいんじゃないかと肯定的だ。

これまたどういう心境の変化か掴めず響は首を傾げ、アサシンとランサーは訝しげに金色の王を見やった。

「フン、精々上手く使い潰してやればよい」

「ええ……？ いえ、流石に友人に対してそれは……ちよつと……」

王様らしい言葉だと苦笑しやんわりと拒否を示す彼女に、さして機嫌を損ねる事なくギルガメッシュは酒を一息に呷る。

そして出された杯に、響が酒を注ぎ直す。

なみなみと注がれて杯の中でたぷんと揺れる酒はまるで血のように赤い。

しかしその色は赤い瞳を持つ金色の王によく似合っていた。

「お前が手を打たぬのであれば、凡庸な小物程度、すぐに負けるだろうな。ならばお前がするべき事が何か……分からぬ程愚かではあるまい？」

確かに間桐の家は零落していると言峰は言っていたし、間桐本人も認めているような様子だったと思い返す。

ちらりと確認したライダーのステータスもそれほど脅威を感じるものではなかった。

ステータスの面だけで語るならばアサシンにやや分があるだろうか。

無論、バーサーカーに比べれば双方共に木っ端も良いところだが。

「王様がそこまで言うのでしたら……そうですね。少し、頑張ってます」

困ったように微笑んで、彼女は真っ直ぐに赤い瞳を見返す。

そこに確かな意思を見出だしたのか、ギルガメッシュは満足そうに頷いた。

——そんな昨夜を振り返り、さてこの場合はどうするべきなのだろうかと悩む。

目の前には苛々としつつも微かな焦燥を隠せていない間桐慎二の姿がある。

しかし彼はこちらに気づいていないのか、階段の先を睨み付けるばかりだ。

「おはよう、間桐君。大丈夫？ 顔色悪いけど」

顔色が悪いというよりは機嫌が悪いと言った方が正しいかもしれない。

そう思いつつ、自分に振り向く間桐ににこりと笑みを向けて響は首を傾げた。

「……水谷？ ……——あ、そっか……そうだった」

その姿を認めた彼は数度瞬きを繰り返し、それからひきつれた笑みを浮かべた。

そうして片手を伸ばし、「なあ」と彼女の肩を掴む。

「今日は学校なんかサボってさ、作戦会議でもしようぜ。戦闘に協力しろ、までは言わないからさあ、一緒に作戦を考えてくれよ。水谷」
ギリツと痛い程力の籠るその手はまるでさがるかのように、響は微かに目を見開く。

しかしその驚いたような顔も一瞬の事で、直ぐにくすりと笑みが浮かんだ。

そうして彼女は優しく肩を掴む手に己の手のひらを重ね、真っ直ぐに間桐を見据えると。

「いいよ。友人だもの、ね」

そう言って頷いた。

あまりにも悩みなく直ぐに返ってきた返事に、ひくりと唇を震わせて間桐はさっと俯いてしまう。

思わぬ反応に驚いた響がどうかしたのか問うよりも前に彼は顔を

上げ、少しだけ落ち着いた様子で「助かるよ」と手を離す。

その声は震えている気がしたけれど、それは指摘するべきではないかと判断した響は緩く首を振った。

何があつたかを問うのも、今は止めておこう。その方がきつと、彼も嬉しいだろう。

少しだけ気難しい友人に、彼女は鞆を持ち直して柔らかく微笑んだ。

「じゃあ、どこで話をする？」

「……家に来いよ。お前の家はあれだろ」

「あ、うん。気にしてくれてありがとう。……なら、間桐君のお家にお邪魔させてもらうね」

彼の言わんとしていることを理解して、響はニコニコと笑う。

新都の祖父母の家を使用しているのは、基本的には身内の他には知ることではない。

だからこそ、従姉妹との関係性を知っている彼は少しだけ気遣いを見せたのだろう。

いいや、もしかしたら魔導の家に生まれた者としての判断、かもしれないけれど。

でも、気にしたという事実が変わりはない。

「フン。それじゃ、行こうか」

「うん。……お昼はどうする？ 間桐君がよければ作るけど」

「ん、なら水谷に任せるよ。僕らのする話は外で出来るもんじゃないしね」

調子を取り戻したのかふつと得意気に笑って、間桐はそれなら何を作ろうかと思案しだした彼女の背を押して行こうと促す。

そうして「それもそうだね」と苦笑した響が顔を逸らして先に階段を下りていくのを見て、少しだけ胸を撫で下ろした。

その表情に安心したような、どことなく泣き出してしまっようなものが浮かんだが、それも一瞬。

直ぐに何時もの彼らしい嫌に自信のありそうな笑みを浮かべて、後を追うように歩きだす。

霊体化しながらも終始黙して二人の様子を見ていたハサンの仮面の下は複雑な表情だったが、特別何かを主に伝える事はなく視線を周囲へと巡らせた。

主に少しでも脅威が無きように、と。

そうして間桐邸に向かいながら、間桐から遠坂と衛宮が結託したという話を聞いて「そうなんだ」と彼女は驚いた顔を見せていた。

しかし、間桐のように協力とまではいかないまでも、キャスターと停戦の約束を継続している響にはそれがいいことだと思いい直してふんふんと頷く。

彼女自身に限った戦況を見るとランサーもついているため、三つ巴もいいところか。

「……それで？　昨日の続きだけど、お前の知ってる事ってなんだよ」
間桐慎二の自室に着くなり彼はベッドに鞆を放り投げてから座り、響は勉強机から椅子を拝借して座ったところで話が切り出される。

一瞬何の事だっけ、と首を傾げかけたものの昨日の己の発言を思い返し、彼女は曖昧にうんと微笑んで頬を掻く。

「んー……簡単に言うと、ライダー、それからアーチャーとセイバー以外とは一度戦闘になったことがある、ってところかな。三度遇って、三度とも見逃されているけどね」

その内の一人は言峰と響の関係上完全に手を結んでいる状態だ。とある二人の意思によって簡単に覆りはするが、基本的にはそれは変わらない事だ。

けれどそれは間桐との関係に関わりのないことのため、話すことはない。

情報を出さないという訳では勿論ないため彼についても勿論多少なりとも戦闘について話すつもりではいるが。

「まず、間桐君。ライダーのステータスでは、勝ち抜くのはかなり難しいだろうと思うって事は言っておくね」

「……何を根拠にそんな事が言えるんだよ。やりようによっては勝てる事もあるだろ？」

きつぱりと断言され、間桐はきりりと眉を吊り上げて怒りを抑えたような口調で問いただす。

響は少し困った顔で宥めるように曖昧に頷いて、言おうと決めていた事を更に続けた。

「私の知る限り、ランサーの機動は高い上に継続的な戦闘に強いようですし、キャスターは複雑な工程を数段飛ばしに行うまさに魔女といえる技量を持っていました。バーサーカーには私のアサシンと間桐君のライダーで組んで戦ったとしても、きつとすぐに負けてしまうでしょうね。……バーサーカーは狂化している事もあって、飛び抜けて強い存在ですから」

やや渋い顔を浮かべ「戦闘になったのに生き延びられたのは幸運でした」と数日前の事を思い返ししながら、彼女は淡々と語る。

間桐からの戦ったのかという問いをかけられれば、ひどく他人事のような調子で彼女は「少し死にかけましたが、逃げに徹して何とかなりました」と頷く。

思わずどんな風にと間桐が訪ねれば、彼女は淡々と起きた事象の顛末を語る。

その瞳は凧いだもので、死にかけたと言う割にはそう見えない。死というものを恐れているようにも、決して。

それに気づいた間桐は背筋に駆けたぞわりと産毛立つような感覚がして小さく体を震わせた。

水谷響
こいつは死というものが怖くないというのだろうか？

「ですから、間桐君」

それにこいつはこんな喋り方を自分に対してしていただろうかと疑問に思う。

敬語を使うことに違和感があるわけではない。教職員や年上、親しくない奴らにそうなるのは知っている。

だが、自分に対してその喋り方をしていたのははじめの頃だけだったはずだ。

だからという訳ではないのだが、何かが違くと違和感を覚えているのは間違いない。

「あ、ああ……なんだよ」

離れているのに覗きこむように見つめてくる瞳に反応が遅れる。思わずたじろいでしまい、しかしそれを誤魔化すために間桐は問い返す。

「私があなたに協力できる事はそう多くありません。ですから、あなたが望むのなら——あなたが望む力を与えましょう」

その言葉に、とうとう動揺を隠す事は出来なかった。

響の言葉の意味は聞くだけでは測りかねるものではあったが、間桐には何故かその意味がわかる気がした。

だからこそ、彼は息を詰めてまじまじと友人の顔を見つめる。

「……………」

しかし響はそれ以上に言うべき事はないと閉口し、にこにここと微笑みを浮かべて返事を待つつもりのようにうだ。

何が出来るのだと問いかけるべきだろう。

けれど、と悩む間桐は言葉を探す。

「——力が……」

だから、迷いに迷って、彼は思ったままに口を開いた。

自分の唇から溢れる言葉の意味を、深く考える事はなく。

「力が、欲しい。僕は……」

僕にだって、出来るとい^{戦える}う証明をしたい。

自分に何一つ期待などしていない祖父に。

自分に無いものを持っている癖に何もしようとしない義妹に。

自分が望んだものを持っていた友人たちに。

使えない、何の価値もない人間ではない。

——そう、証明したかった。

「魔術師に……ッけど、だけど僕は……魔術師じゃ、ない……！　魔導の家に生まれているのに……！　なのに、くそッ！　くそ……全部、全部あいつが……くそ、くそお……う、うう……」

幾ら望んだところで、それは手に入る事はないと既に知っていた。

だからこれは、ただの弱音だ。

それを彼女に晒すのに抵抗がなかったわけではない。

けれどどうしてだか自然と溢れた願本音いは、ずっと燻音っていた心の痛
みなのだろう。

瞼を閉じてそれを聞き届けた響は、頭を抱えて何かを振り払うよう
に大きく頭を振る彼に手を伸ばす。

第二十三話

ふと頭に触れた感触に、間桐慎二はハッと大きく目を見開き、顔を上げる。

そうして視界に映った先の表情があまりにも優しいものだから、違う意味でも驚いて束の間呼吸さえも忘れてしまう。

「な、なんだよ……お前も、……お前まで下らない同情でも、するつもりなのか……？」

あまりにも自分に向けられた事のない眼差しだからか、絞り出した言葉も自覚がないままに自然とその声も震えて、ツンと鼻の奥が熱くなった気がした。

尚も頭を撫でる手つきは労るような優しさで、胸の奥から何かがこみ上げてくるような気がして、けれどそれを無視して手を振り上げる。

「そんな、そんな安っぽい同情なんて、僕は……！」

要らないと振り払うように腕を振ろうとした。

けれどどうしてだかそれが出来なくて、力なく手を下ろす。

「畜生お……」と崩れ落ちるように項垂れた間桐はグツと唇を噛んで、何度となく首を振る。

その合間に意味もなくベッドの縁を叩きだした姿は、悲哀さえ漂わせていた。

「間桐君」

それを見守って、響はようやく重い口を開く。

ゆっくりりと、言い聞かせるような柔らかな声で。ただ穏やかに歌うように。

「それでは、あなたに少しだけ戦う力を授けましょう。けれどそれは、その道は、決して優しくはありません。どれだけ努力しようとも流れる時の中で喪われたものには届く事はなく、戦い続けるには痛みを耐えなければなりません。……うん。だから特別に、この聖杯戦争においてのみ、という事にしましょう。それから後の事は、あなた自身が戦いを通して選ぶべき事柄です」

間桐は大きく目を見開き、彼女を見つめた。
顔を上げた拍子にその手は離れてしまったけれど、そんなものも気にも留まらない。

彼女は一体、何を言っているのか。

「なに、を、……」

わからない。わかる。いや、やはりわからない。

力とは、何だ。戦う力。永続的な痛み……いいやまさか、そんなもののワケがない。

聖杯戦争は、魔術師同士の戦いなのだから。

なら……まさか。

——まさか。

「ええ。つまるところ、ですね。間桐君を、魔術師にしてさしあげます」

そんな、夢のような話が本当にあるのだろうか。

幾ら望んでも望んでも、決して手に入らない、手に入れることのない願いが叶うなんて。

到底、信じられない。信じる事ができるわけがない。

「私には切欠を与える事しか出来ません。だから間桐君、重ねて問いましよう。あなたは本当に、力が欲しいのですか？」

けれど、間桐は響の人柄を知っている。

誤魔化す事はあれども、彼女は嘘をつく事のない人間だ、と。

出来る事も出来ない事もきっぱりと言い切りもする。

だからこそ、今の言葉は嘘偽りなく出来るのだという確信があった。

静まり返った室内で、ごくりと唾を飲み込んだ音だけがやけに耳に残る。

「——っ、……僕は……僕は、力が欲しい……！　お願いだ、水谷！

僕に魔術師として戦える力をくれッ！」

葛藤はあった。だがそれを上回る渴望が、胸を焦がす。

だから胸の内に渦巻く悩みや疑惑、困惑を消し去るように強く、強く声を張り上げる。

こんなのは自分のする事ではないと思いつながら、それでも間桐慎二は己の渴望を彼女に願う。

その姿がどれだけ惨めで、憐れで、情けないとしても。この願いが、叶うのならば。

「——わかりました。たぶんきつと、間桐君が思うよりも痛いと思うけれど……頑張つてね。君が耐えている間に腕によりをかけてご飯の用意をするから」

しっかりと頷いた響は、おどけるように肩を竦めて見慣れた、温かみのある笑顔で手を差し出す。

それは、契約の形なのだろう。

自分が共闘をもちかけた時のように。

「ハッ、僕を誰だと思ってるんだ、水谷。それくらいどうってことないさ」

その手を掴んで、間桐は強気に笑ってみせる。

背筋を流れる冷や汗にも、心の隅の不安にも負けないよう、口角をつり上げて。

何時ものように自分らしく。

「頼むよ、水谷」

「うん。……それじゃあ、そのまま目を瞑ってね」

そうして彼は、言われるがままに瞼を閉じた。

何をするのかという好奇心がなかった訳でもないけれど、それは無視して汗の滲む手を強く握る。

その力は少し痛かったが、未知への恐怖なのだから仕方ない事だろう。

薄く苦笑した響は、集中するためにも瞼を閉じて自身の中の白い空間へと意識を向けた。

目の前に広がる情報の羅列へと手を伸ばして、間桐慎二の情報を一番前へと引っ張りだす。

重なるように幾つか広がった画面には繋がりのない単語や数字、記号が複雑に組み合っており、一見ただけでは規則性のない文章が並んでいるようにしか見えない。

響はそれを暫く眺めると、おもむろに画面へと指を滑らせて文章の中から文字の羅列を抜き出しては空中に留め、また別の文字を抜き出しては空中へと同じように留めていく。

抜き出す文字について悩む素振りなどなくそれを幾度か繰り返し、ふと手を下ろした時には多くの字と記号が頭上でふわりふわりと漂っていた。

彼女は一度その字たちを見て頷き、手早く手元へと纏めるとパズルをするようにひとつの画面へと並べ出す。

他の画面同様になんの規則性もない文章にもならない文字列だが、その手は淀みなく動き続け、やがて空に浮く文字はひとつも残らず空白の埋められた画面へと収まった。

文字を埋め終えた画面をじっくりと何度か確認した響はうんと頷いて笑みを零す。

会心の出来栄えだ、というような明るさを滲ませた笑顔だがそれを見る者などいるわけもなく。

どことなく無邪気さを伴ったその笑顔のまま、彼女はゆつくりと画面の線と線を繋ぎ合わせて間桐慎二の情報の中へとそれを接続した。

はたしてその行為は、彼女の想定した通り直ぐにでも効果が現れているようだった。

「ガッ、あ、ああアッ?!」

耳をつんざくような叫びに瞼を開けば、びくんと激しく痙攣する間桐が視界へと飛び込む。

しかし響は、何も言うことはなくするりと手を離してベッドへと崩れ落ちていく彼を見つめた。

「うあ、あぎ……っい、イタイ……イタイイタイいた、い……ッ！
く、そつ……クソクソ、クソオオア……！ あ、ああ、あ、ああ――

――
痛みに悶え苦しみ、陸に揚げられた魚のように体を跳ねさせながらベッドで転げ回る様は、人によっては滑稽にも思えるだろう。

必死の形相で虚空を睨み、絶叫に喉を枯らしながら唾を撒き散らす姿を、それでも彼女は笑いはしない。

ただ静かに、己の為した結果を見守るだけだ。

「…………大丈夫そうですね」

そうして時間にして一時間経った程か。

間桐は未だ激しい痛みには呻き声をあげていた。

同時に、その意識は混濁しているのか、彼女の呟いた言葉に反応を示す事はない。

けれど響は、それを見ながら問題ないと判断して安心したように微笑む。

「ライダー、いますか?」

そうして彼のサーヴァントであるライダーに声をかける。

その声に長身の美女が部屋の隅にゆらりと現れて小さく首を傾げた。

その眼は隠れたままだが、一瞬間桐を見たことから本当に大丈夫なのかと雰囲気でも聞いて来ているのを響は察する。

「もう無理だと言わなかったから、大丈夫ですよ」

「……………」

「でも暫くはこのままだと思うので、正気を取り戻すまでにご飯の用意をしようかと思うのですが……、その、申し訳ないけれど案内してもらってもいいでしょうか?」

黙り込んだままのライダーに少しずつ困った顔になりつつ、響は彼女を上目に見やる。

しかしなおもライダーは沈黙を貫き、見上げてくる目を見下ろす。

一分ほど静かに眼帯越しに見つめあう彼女たちを他所に、間桐から溢れる呻き声だけが室内へと響く。

また更に一分、と経ったところで、ようやくライダーの唇が薄らと開く。

「あなたは何故、シンジに協力を?」

おもむろに問いかけられたその言葉は、マスターに対する感情が見えない程に淡々としたものだ。

それを受けた響は寸の間きよとりと目を丸くしてから「ええと」と困ったように眉尻を下げた。

「友人だと言ってくれたから、以上に理由はないですね……」

うーんと首を捻りながらの答えに、ライダーは相槌もなくその姿を見つめる。

もう少し突っ込んだ事が聞きたいのだろうかと考えた響は少し間を置いて続ける事にした。

素直に答える必要などないのはわかっている。けれど、彼女は間桐のサーヴァントであり、普通の人間でもない。

人間ではないからという理由でもないが、それでも彼女は誰にでも言いふらす様な雰囲気がないから構わないだろうというのが響の考えだ。

誰かしらには怒られてしまいそうだけど、と内心苦笑して思わず頬を掻く。

「恥ずかしながら私には友人が少なくても、面と向かって友人と言ってくれたのは、間桐君が初めてだったものだから。それに、相手がどんな悪人だろうと善人だろうと、少なからず誠意を持って伝えてくれたのなら、それに応えないわけにはいかない……私はそう決めていますから」

そう言っただけに、少女の姿に、ライダーは微かに身に纏う冷ややかな雰囲気揺らぐ。

その言葉をどう受け止めたのかはわからない。

驚いたのか、呆れたのか、はたまた好感を抱いたのか、悪感を抱いたのか。

「……付いてきて下さい」

それでもそう言って背を向けたライダーからは少なくとも嫌悪の色は見られないなど感じた響は、反応の薄い騎兵に怒りを見せるハサンを宥めながら少しだけ軽い足取りでその背を追いかけるように部屋の外へと足を踏み出す。

念のために部屋を出る前に間桐に声をかけ、扉を閉じて響は自分を待っていてくれるライダーにお礼を言って間桐家のリビングへと向かう。

その間も沈黙が二人、と霊体化したままのハサンの間に落ちていた

けれど、響は気にならなかった。

短いやり取りをただけだがライダーは寡黙な女性だと感じていたし、自分の事を心配して警戒してくれるアサシンがいる事で肩の力を抜いているくらいだ。

ハサンは主のその信頼が嬉しい気持ちと危ない目に遭ってしまっているのではないかという不安を胸に抱いているのだが……少なくともこの場においてはその様子が消える事はない。

「んー……、あれですね……案内してもらって置いてではあるのですが、人様の家の食材を勝手に使うのは気が引けますね……」

「……問題はないかと思いますが」

「あはは、間桐君もそう言いそうです。……ううん。急いでいたとはいえ、商店街に寄ってから来た方が良かったかなあ……」

台所へと案内された響だが、綺麗に丁寧に使用されているからか気後れしたように呟く。

それから一度時間を確認して腕を組むと暫く悩んで、買い物に出る。こようという結論を弾き出す。

「間桐君は暫く起きないと思うし、少し買い物に行ってきますね。アサシン、残ってもらってもいいかな？ 念のため起きたら伝えてほしいし……、だめ……？」

「……………」

パツと振り返った響に、返事は返らない。

ライダーはアサシンの気配を感じる位置を一瞥し、僅かに首を傾げる。

この魔術師はどこまで本気なのだろうかといわんばかりの視線のような気がするが、響が気がつく様子はない。

「……わかり、ました」

霊体化を解いて陽炎のように現れた女暗殺者は不満の色も露に首を縦に振った。

髑髏の面で表情は隠れているが、纏う雰囲気だけは隠すつもりがないらしい。

「ありがとう。頼りにしていますよ、アサシン」

「はい……」

不承不承といった様子で返事を返すアサシンに、彼女は仕方のない子だといわんばかりの生暖かい眼差しを細めてくすりと笑んだ。

そうして無防備に、ライダーの視線も気にせず己の暗殺者へと近づきおもむろに細い腕を伸ばし。

「いつも心配させる事はかりで、ごめんね」

微笑みかけながら優しくアサシンの頭を撫でた。

ずるい人だ、と思われるとわかった上でこれなのだから本当に人が悪い。何度となくそう思う。

少しだけ唇を尖らせた己のサーヴァントに笑って、さてと彼女はライダーへと顔を向ける。

「そういう事ですので、間桐君と私のアサシンの事をお願いしますね。ライダー。問題を起こすような子ではないので大丈夫だとは思いますが……いざという時は止めてくださって構いませんので」

「……呆れた人ですね、貴女は」

多少なりと彼女の人がわかってきたのか、ライダーはくすりと呆れを滲ませた笑みを口元に浮かべる。

それを了承ととった響は改めて「お願いします」とライダーに向けて微笑み、ハサンにも同じようにもう一度頼むのだった。

第二十四話

お昼ご飯の材料を入れた袋を手に下げた響は、ふっと感じた気配に足を止めた。

「あ」と上がった声はどちらのものであったか。

かちりと視線を合わせた相手は雪の如く白い少女だった。

「……イリヤスフィールさん」

「久しぶりね、ヒビキ。……久しぶり、という程でもないか」

思わず困った顔を浮かべた響に対し、イリヤスフィールはにっこりと愛らしい笑顔を向ける。

その表情にはあの夜のような嗜虐的な色はない。

「そう、ですね。お久しぶりです」

「ふふふ。優しいのね、あなた。そういうのは嫌いじゃないわ」

少なくとも直ぐに戦闘しようという気配がないことに安堵した様子に、さも可笑しいものを見たようにくすくすと笑い声が返る。

それに苦笑しつつ響は周りを確認して首を傾げた。

「……ここで戦いますか？ 一応、人の目はありませんが」

自分は戦うつもりはないと自然体で以て伝える姿に、イリヤスフィールはじつとその顔を見上げてやれやれだというように肩を竦めた。

殺そうとしてきた相手に対するものとは思えない態度に対し、呆れを含んだ表情さえ浮かんでいる。

「まだお昼だから、しないわ。聖杯戦争は夜にするのが決まりだもの」

「それもそうですね。失礼な事を言いました、すみません」

「……別に、謝る必要はないわ、ヒビキ。わたしはアインツベルンのマスターとして相応に振る舞っているだけよ」

そう言った彼女はどこかつまらなそうな顔で首を振る。

それから小さく息を吐き出したものの、響の顔を見上げるなりにつこりと笑みを浮かべて「それに」と続けた。

「わたしね、バーサーカーから逃げ切れたあなたを評価する事にしたのよ」

くるりとその場で回って楽しげに笑う少女に、思わず呆気に取られてしまう。

響自身、自分が聖杯戦争においてややのんびりしている自覚もあり、真つ当な魔術師だろうアインツベルンに認められるというのはひどく驚く事だった。

変わっているというのはよく聞くため、他の人にそう言われたのならきつと彼女は何時ものように微笑んだ事だろう。

「ええと、……ありがとうございます？ ……あの、イリヤスフィールさんはどうしてこんなところ？ ……って聞いてもいいのかな……」

だからか反応に困って、そんな言葉を返した。

その返しは予想しておらず、イリヤスフィールは子供らしい大きな目をパチリと瞬き「うーん」と口元に指を添えて返事を躊躇った。

別に誰かに言っただけで自分が困るような事をしてるつもりはない。

それに、聞かれたのならちゃんと答えるのは人間としても、淑女としても正しい事だろう。

「散歩、というところよ。……待ち人は来そうにないし」

最後はぼそりと呟くように言ったイリヤスフィールの眼はどことなく子供が拗ねるような色を見せている。

それに気付いた響は意外という程ではないが、少しだけ不思議に思う。

子供らしい無邪気さと、魔術師としての冷徹さ。

矛盾しているようで、けれど他を切り捨てた自己の本質のみを映すそれが紙一重になっていて。

どうして魔術師というのはそうなるのだろうか。

魔術師というには外れた存在の響には、きつと理解する事は出来ないのだろう。

それは、彼女が何かを望む存在ではない故か。

はたまたま彼女が――。

「……それから、そうね。わたしの事はイリヤって呼んでもいいわよ。対等な、叩き潰すべき敵として認めたあなたなら、許せるもの」

「え。あ、はい……？　イリヤ……ちゃん？」

「……ちゃん？」

ふんと胸を張ったイリヤスフィールの思わぬ発言に響は慌てた。だからついぼろりと見た目に即した呼び方に改めてしまったのだが、イリヤスフィール……イリヤはぽかんと口を開けてしまう。

「あ、ごめんなさい。嫌ならイリヤさんと呼ばせてもらうけれど」

それを拒絶と取ってか、彼女はわたたと今のは無しだと言うように手を振って苦笑する。

けれどイリヤとしてはその呼び方が懐かしい色を持っていたから驚いただけで、嫌な気持ちも湧いてはいなかった。

それに目の前の女からはどこか、母に似た何かを感じるようだったから。

「……ん、さっきのでいいわ。ちよつとびっくりしてしまっただけだし……」

ほんの少し泣きそうな悲しみを湛えた笑顔で首を振って、イリヤはふと何かに気が付いたように目を丸くする。

「ヒビキ、あなた……何か変なモノに憑かれてる？」

「えっ？」

少女が響の背後を指さして首を傾げる。

それに慌てた彼女が振り返ってみる。

しかしそこには人の姿も、車の音も、風の音さえもなく。

ただ静かな、冬の街だけが佇んでいた。

「……からかわないですよ、イリヤちゃん。びっくりしちゃった……」

「別に、からかっているつもりはないけど……。まあ、いいわ。喰い殺さなくてもわたしとしては構わないし」

「そ、そんなに変なモノが憑いてるの……？　誰も言ってくれないし、なんだろう……まさかお母さんたち、の訳もないだろうしなあ……？」

わたたと落ち着かない様子で背後や足元を気にする姿は傍目から見ていると可笑しい。

つい笑ってしまったイリヤは少しだけ晴れやかな表情を浮かべて、

響へと呼びかけた。

「変な人ね、あなた」

「……何というか、今を見て言われた事に複雑な気持ちになるね……」

「ふふふ、そう？ わたしとしては、褒めてるつもりなんだけど」

「んん……じゃあ褒め言葉としてありがたく受け取るとしましょうか」

存外な評価に苦笑を返し、気にすることを止めた響に彼女は尚もくすくすと笑う。

それを嫌だと思っていない様子の響は暫くその笑みを見つめて苦笑いのまま肩を竦める。

「親子なのか、似てるなあ」

そうして思わずというようにぽつりと呟いたその言葉の裏で、彼女は十年前の事を思い返した。

記録を呼び起こせばそれは昨日の事にも等しい記憶。

夜の中にあつて白く綺麗な女性と、この幼い姿の少女は驚く程似通っている。

前髪の分け目など細かいところは勿論違っているが、その顔立ちも本質も、親子に等しい連なりが想像できる姿だ。

そうなればかつてあの金色の王様に振り回された数日とキャスター、アンデルセンと過ごした日々までも浮かんでくる。

何より、親子という関係からは亡くなった両親と姉の記憶が、胸の内ですくすく声をあげていた。

「……似てる？ 誰に？」

「ん。ああ……十年前のセイバーのマスターに……ってダメですね、怒られる未来しか想像が付きません」

言ってからしまったというような顔をしたが、もう遅い。

流星にハサンが拗ねるネタをこれ以上増やすのも、王様に「お前はまた」と呆れられるのもありありと目に浮かぶ。

怒られると言っても軽度だろうが、それでも好き好んで怒られたいというわけではない。

いつも結果としてそうなるだけだ、と言えばきつとランサー辺りに「そういうところじゃねえか？」などという言葉をかけられるだろう。口は災いのもと。ちよつとだけ反省した響だが、恐らくきつと改善される事はない。

「わたしと、どこが似ているの？」

「ねえ」と上がった声に視線を落とすと、イリヤスフィールは疑り深い眼差しでそう問いかけた。

それに対し、響はやってしまったものはまあ仕方ないと思い直してうんと考えた。

「……イリヤちゃんをそのまま大きくしたような、凄く綺麗な人だったかな。あの時は私が幼かったから、というのもあるだろうけれど、敵対していた相手に対して心配そうな目を向けてくれたのが印象的で、すごく記憶に残ってるよ」

「ええと、あとは……凛々しく振る舞われていたと思う。私は終始戦うことなんてなかったけど、戦闘していたところなんて使い魔越しに見た程度だし……それに直接お話しする機会なんてなかったのだけどね」

苦笑して、それからイリヤの顔を見て驚いたように瞬く。

白い少女は、泣いていた。

いいや、本当に涙を流しているわけではない。

あくまでも表情は驚いた顔をしている。

けれど、その瞳はどうしようもなく揺らいでいたから。

「イリヤちゃん？」

今度こそ失敗してしまっただろうかと思いつながら響は腰を屈めて視線の高さを合わせる。

望洋とそれを見つめていたイリヤスフィールは、ぎゅうつとスカート裾を握りしめて泣き笑いにも似た笑みをその幼い顔に浮かべた。

「……なんでも、ないわ。でも……ありがとう、ヒビキ。お母様の事を、教えてくれて」

イリヤからしたら、母は今もなお近くに感じられる存在だ。

アインツベルンのホムンクルス^{マター}として、母から生まれた子として、小聖杯となるべくして調整をされてきたのだからそれは当然で。

けれど、いやだからこそ、母の存在の痕跡は自分に残されているだけだった。

「ねえ…ひとつ、聞くけど…」

「うん？ ……どうぞ」

そこに寂しさが無いといったら嘘になる。

今となつては帰つて来ないのも当然だとわかっている、長く、長く二人の帰りを待った日々は消えるわけもなく。

幼い頃の朧な記憶は、瘡蓋のように心に張り付いていた。

だから、だろうか。

目の前の女に母と近いものを感じて泣きたくなつてしまったのは。

自分の名前を呼ぶその声に、飲み干したはずの感情が腹の底を蠢くのは。

「…エミヤ。エミヤキリツグは、知ってる？」

それでも母は、確かにまだ自分とつながっている。

だからイリヤはその感情から目をそらして、もう一人の待ち人について尋ねた。

イリヤスフィールがここにいるのは聖杯戦争のためだ。

けれど、アインツベルンではないただのイリヤが求めるのは、父の遺したものを知りたいだけだ。

「…うーん、知らない……かなあ」

十年前の聖杯戦争にも関与したらしい目の前の彼女が知らないというのなら。

きっと父は、そういう立ち回りを選んだのだろう。

おじいさまはアインツベルンの中からキリツグの事を全部消してしまつたから、わからない。

けれどイリヤは、知っている。

キリツグはズルが得意だもん。

だから、うん。

……本当に、ズルばかり。

「でも、エミヤ、ね……衛宮君なら、同じ名字だし知ってるかも？ 衛宮君は養子入りしたそうだし。……でも、もう亡くなられているし、確証はないけど」

「……そう。……うん、やっぱり、お兄ちゃんを待つしかないのかあ」
キリツグのバカ。バカバカ。

心の中で呟いて、いつの間にか詰めていた息を大きく吐き出す。

思わぬ角度からの情報に驚いていたのも、これでリセットだ。

どちらにせよ、互いにこれ以上話すことなどないだろう。

違うな。話しても無駄な情報が増えるだけだ。

だからここが区切りとしては丁度いい。

「ヒビキ、本当にありがとう。あなたのお蔭で、退屈がしのげたわ。だから」

次の夜に会ったとき、全力でもって返してあげる。

聖杯戦争を生き残ったあなたに相応しく。

わたしにとって、最大の敵として。

それが自分に出来る最高の返礼だと胸を張る少女に、響はきよとんと目を丸くする。

けれど、それはこの上なく最大級の敬意なのだとすぐに気づく。

魔術師として、敵対者として、先日の遊びなどというものはなく真

正面から戦おうという約束だ。

「私なんか、すぐに捻り潰されそうなものだけど……、わかった。貴女の評価に恥じないよう努力するよ。……握手でもする？」

「ふふ、そうね。折角だし、しておきましょうか」

苦笑いに近い笑みを浮かべた響に、イリヤは悪戯っぽく笑い返す。

そうして二人は、どちらともなく差し出した手を重ねた。

「ツ……一応、忠告しておくけど。あんまりそれ、放っておかない方がいいわよ」

「ええ……う？ そ、そんなに言うほどなの……ちよつとこわいなあ。

あ、忠告はありがとう」

すぐに手を離してじとりと響の背後を睨み付けて、息を吐く。

イリヤの目に見えたのは数秒で、彼女に憑いているらしき黒い影のようなものの正体はわからない。

本人はのほほんと気長な様子なのが可笑しいくらいなのだが、それ以上は unnecessary 干渉になるため、口を閉ざす。

響もその事はなんとなくでも察しているのか、深く追及することはなく荷物を持ち直して「それじゃあ」と微笑んだ。

「またね、イリヤちゃん」

「ええ。またね、ヒビキ」

互いの笑みを最後に、二人は背を向けて歩き出す。

次に会うのは、来るべき夜だろう。

それが何時になるのかも、どんな状況かもわからないが。

それでもその時は来るだろうと、確信にも似た予感があった。

少し戻るのが遅くなってしまうな、と空を見上げた響は感じた予感に「頑張らないとなあ」と呟く。

その顔はやはりどこまでも緊張感の欠けるものだったが、残念ながらそれを指摘できる者はここには誰一人いない。

——二人の立っていた場所に蟠るように残っていた影が、のんびりとした足取りを追いかけられるように伸びて消えていった。

第二十五話

やっこのことで坂を登りきり、間桐家の門前へと着いた響は深々と息を吐き出す。

学校もそうなのだが、坂道というのは歩き慣れていても疲れるものは疲れるものだ。

「——ライダー……貴女が出迎えてくださるなんて思ってたんですけどね」

呼吸を整えるために大きく息を吸って顔を上げた先に見えた姿に、思わず驚いてしまうのもまた仕方のない事だろう。

その様子を見つつも無言で門を開いたライダーは、微かに唇を緩めて小さく頷いた。

「シンジも目を覚ましませんし、暇なものですから。……それに……チャイム、でしたか？ あれを押す手間も省けたと思います」

「ああ……なるほど。それはありがとうございます」

ライダーの言い分に納得を見せ、彼女はにこりとして礼を言った。それに対し呆れを滲ませた雰囲気で沈黙を返し、ライダーは再び門を閉じてから玄関を開ける。

響が申し訳なさそうな顔をしているのには気づいていないのか、気づかない振りをしているのか。

「お邪魔します」

二度目と言えど律儀にそう言って、玄関に入った響は靴を脱いで少々慎重な足取りで進む。

ライダーはふっと小さく息を溢し、カチリと玄関の扉に鍵をかけて。

そうしてその背を追いかけて、ゆっくりと長い足を進めた。

彼女のマスターは、目覚める気配をまだ見せていない。

そのまま特に話すこともなくキッチンへと戻ってきた二人は、食材を前にして何とはなしに顔を見合わせた。

「……………」

「ええと……暇であれば、手伝いをお願いしても構いませんか？ ア

サシンには間桐君をそのまま見ていてもらうので……あ、勿論手出しはさせませんけれども」

気まずく思ったようにライダーを窺い、提案をひとつ。

それでも沈黙する彼女に、響はまあいいかと思うことにして髪を纏める事にした。

そうして手を洗い、野菜を洗っているときライダーはおずおずとした様子で「ヒビキ」と小さく呼んだ。

「はい？　どうかしましたか」

「……いえ、私には料理ができません。ですから、簡単な事であれば……」

言外に手伝うと言ってくる彼女に響は数度瞬いてにっこりと頷く。それならばと包丁を渡して自分が皮を剥いた物を切ってもらう事にした。

横から切り方を伝えながらもその手は慣れたようになってきぱきと淀みなく動いていて、ライダーは少しだけ感心する。慣れている、とはこの事だろうと。

それから二人は必要以上の会話をすることはなく、黙々と調理を続けた。

そうしてできあがった料理をお盆に持ち、響は慎二の部屋へと戻る。

お盆を机に置きながら様子を窺ってみるもの……まだ彼は、目が覚めていないようだ。

しかし、その呼吸は彼女が出る前よりも随分と落ち着いたものになっっている。

「うん、これなら起こしても平気そう。……間桐君。間桐君ー？」

僅かな間瞑目し、彼の容態を把握した響はゆさゆさとその体を揺らして名前を呼ぶ。

呼び声も何度目かで「う……」と唸りながら瞼を震わせた間桐慎二は、眉間にシワを寄せて身動いだ。

そうしても繰り返される声に、彼はパツと目を開けたと思うと勢いよく体を跳ね起きさせて。

——ゴツ

「つゝ!?」

「いッ……ッ!」

激しく額と頭をぶつけ合った。

片や頭を、片や涙目で額を押さええて悶絶しだした二人に、ライダーは沈黙を。

アサシンは握りしめる拳をプルプルと震わせながら状況を見守った。

「いたた……はあ、痛かった。……おはよう、間桐君。頭を除いた体の調子はどう?」

「う……ぐ……っ、まあ……ちよつとだるい、かな」

ひとつ首を振った響が、痛みが無かったかのようにあつけからんと口を開く。

コイツの頭は石頭かと文句のひとつでも言おうと睨むものの、その空気を察知したのか一方から飛んできた殺気に間桐は怯み、曖昧に頷いてサツと視線を逸らした。

響にはその態度がアサシンが原因とは理解している、のだが諫める事もなくここにこと「それは良かった」と頷くのみだ。

「特に問題がなさそうなら、食べながらいいんだけど私がしたことの説明と注意をさせてもらうね」

「……ああ」

痛みによるものか、殺気を浴びた事によるものか、ひどく重いため息のような返答だ。

しかしその程度の事では響の笑みは崩れない。

事前の説明不足を詫びるつもりもないような様子である。

尤も、それを深く聞こうとしなかった点では間桐も悪かったのであるが。

「それじゃあまず最初に、君が魔導を継げなかった主な原因からですが」

「ッ!!」

——だがその切り口は間桐慎二にとっては、心の柔い部分に触れる

話だ。

思わず顔をしかめた間桐だが、耳を塞ぐような真似はしない。

そんな事は言わないでいいとも、決して言いはしない。

願ったのは自分自身だと、無意識は理解しているのだから。

「最初に、間桐君には魔術師に必要な魔術回路がない、と判断できました」

その言葉に、ぎりつと強く握りこぶしが出来る。

……彼女の言うそれは知っている。そんなことは、とうに知っている。

知ってはいるが、それはあくまで紙面での情報だ。祖父には「お前は何の役にも立たぬ」と魔術のまの字もなく見捨てられてしまった。

「魔術回路というのは肉体に魔力を巡らせる上でなくてはならないポンプです。魔術回路がない状態というのは、幾つかパターンがあります。ひとつ、ポンプとなる器官がそもそも備わっていない。ひとつ、時代を遡った先に魔術師だった者がいるが、代数を重ねてなくなった状態。ひとつ、数代、あるいは直近の代で魔術回路の数が減ってなくなった状態」

「……それなら僕は、一番最後というわけだ」

だからこそ、響がこうして自分のために話している事実に対して彼が強い負の感情を抱く事はないようだった。

それこそ普段の友人としての間桐慎二ならば「馬鹿にしてるだろう」と言いそうな場面であっても、素直に頷いている。

それに柔らかく目を細め、響はうんうんと頷きを返す。

「うん、そうだね。さて、ここでちよつとだけ話は変えて。魔力というのは、呼び方を変えれば誰にでも宿っているものです。魂や精気などもそういった物ですし、魔術師なら空気中のマナを取り込んでる越し、自身に合った魔力を精製しています」

「精製ってつまりは……魔術師自身も、魔力を作ってる、んだろ？」

「そうなりますね。どこかの過程でマナを用いているものでしょうから、認識の有無はあるかもしれませんが。——ただ少し、そこに

はコツというのがありますが」

「コツ？」

気になる単語に思わず目を瞬かせ、先をせがむように間桐は無意識に上半身を傾ける。

それにくすりと笑んだ響は、しかし悪戯っぽい表情で勿体ぶるかのように一度首を振った。

「先程の魔力回路の話に戻しますが、体を巡るポンプの数というのは限られたものです。一人一人血管の位置が微妙に異なっているようにね。だからこそそれを増やすために魔術師として正当に、偏屈に、魔術師というものの高みに至ろうとする方たちはその目標故に、何代何百年と時間をかけて血族を魔力で満ち溢れた存在を作ろうとしている……というと、わかりやすいですかね？」

「……………要は、あれだろ。子供から子供に、地味に一本ずつ増やしてらってわけか」

「うん、そうですそうです。間桐君は本当に頭がいいですよね。……ええと、それで、そうした方と反対に間桐の家は衰退の一途を辿った……つまり、ピークから少しずつ少しずつ減っていったわけですね」

おもむろに上げた五本の指を親指から順番に折り曲げられる。

そうして閉じた手をパツと開き、ひらりと振って膝へとおろした彼女に神妙な表情が浮かぶ。

「ということ为先程の話と繋がるのですが、魔術回路というポンプは数が少ないだけ体を満たす魔力が少ないという事です。今の間桐君は、それに当たることになります。そうした場合は別の容器に移して保管し、必要時に使用できる状態にしておくのが一番です。戦う手札としても」

「ふ……………フンツ、そんなの水谷に言われなくたって知ってるさ。僕だって魔導の家に生まれたんだからね」

「ん？ うん、一応認識のすり合わせはしておきたかったから、つまらなかつたらごめんなさい」

「……………別に、謝らりたいわけじゃない。…………で、続きがあるだろ」

妙なところで見栄を張る間桐に、ぱちくりと瞬いてこてんと首が傾

げて。

よく分からないといったように素直に謝罪する響に、彼はうつとたじろぐ。

普段なら怒るか嘲笑うところなのだが、どうにも今日の彼女には調子が狂わせられる。

「うん、うん。そうだね。……つまり間桐君は、魔術回路が途絶えたのも近い代と見えたので調べさせてもらいました。すると、魔術回路のなりそこないの器官があつたんです。……けれどそれはいくら繋げようとしても、ポンプ自体の長さが足りないから使えない状態でした。感覚的な話ではありますが、回路は体一本分の長さがないと巡らないですからね」

「……………」

思わず黙り込んでしまった間桐は悪くないだろう。

魔導の家にあつては出来損ないの間桐慎二に、その言葉は決して喜ばしいものではない。

ないからこそ蔑ろにされ、残骸があるからこそこうして体を弄くられて、どうして喜べようものか。

たとえそれを、自分が望んだとしても。

「——ですが先程言った通り、誰しもが魔力を持っています。魔術回路がないからには殆ど留まる事はなく流れていくだけですが、どうしてそれが出来ると思えますか？」

「……そりゃ、ふつーに考えるなら……代わりになるのがあるんじゃないのか？」

苦い表情になるのを見て、わざとらしく明るい声音で彼女は問いかける。

その気遣いは少し気に障るが、毒を吐くほどではないと首を振って答えてみる。

「流石間桐君。正解ですよ。……魔術回路は魔術師の血管です。普通の人間は血管が流れているわけですが、そのそばに流れていると言えれば認識がしやすいでしょうか。そして、人間には他に筋肉や神経などが通ってますね？」

それに安心したように彼女は微笑んで深く頷いた。
パチパチと小さく拍手までしてきている。

「ああ。……ま、まさか……?!」

しかし彼女の安堵とは対照的に間桐の顔からさあつと血の気が引いていく。

「はい。」想像した通り、間桐君の魔術回路の不足分は筋肉や神経の一部が補っています」

「っ！」

驚きに固まってしまふ彼を、誰も嘲笑えはしないだろう。

自分の想像の埒外を突きつけられて驚かない人は少ないはずだ。

「元から無いものを作り出すような力は私にはありません。だから、元々ある形から出来るだけ綺麗に繋げて、極力痛みも抑えられるように努力しました。それでも使用する部分の問題から、痛みが生じるのは無くせません。それこそ、痛覚を無くさない限りは」

「……じゃあ」

「しかし痛覚は、人間としても魔術師としても必要な物です。痛覚は痛みだけでなく触覚や嗅覚、聴覚にも影響が出ますから」

「う……」

その言い方では具体的にどういう事が起こるのかははっきりと読み取れない。

だが、何を対価に力を得たのかは見えてきていた。

顔面蒼白となる間桐に、彼女は出来るだけ安心させるように「痛覚は残していますから安心してください」と苦笑した。

「省いた話ですが、魔術師が代々受け継ぐ魔術刻印というものはご存知ですか?」

「は、……あ、当たり前だろ、そんなの」

「ん、ですよね。では機能の説明を省きますが、魔術刻印はつまり外付けの魔術回路、つまりはタンクという事です。歴代の歴史の証でもあるそれは、結局のところ他人の肉体の一部。他人の肉体ということは、無理に臓器移植や皮膚移植を行うようなものです。なので魔導を受け継ぐ方は、移植した力を拒絶はできません。……まあ私にはわか

らないので推定ではありませんが」

強がるように腕を組んでふんと顔をそらし、間桐はグツと指に力を込める。

仄かに痛みの籠る眼差しは、体に押し寄せる痛みからか。

響にはそれは理解わからない。

「……では、まったく体に合わないものをほぼ一主体につけなければならぬ魔術師に、何が起きると思いますか？」

「え……いや、そりや……拒絶反応だろ」

「はい、そういう事です。……ここまで話に付き合ってくれた間桐君ならもうわかってしまったのでしようけれど、つまるところ痛みというのは生きる上で必要経費です。だからこそ私は出来る限り痛みを避けて生きていたいと思っっていますよ」

「ああ……だからお前って……」

マイペースなのかという言葉を飲み込んで、がっくりと項垂れる。

知ってはいたが、ここまでくると呆れが更に強くなるばかりだ。

そのおかげである意味助かっているのかもしれないが。

「？……という事で総括と注意になりますよ。間桐君の魔術回路は一部を筋肉と神経で代用しているのです、緊急時の使用は気をつけてください。少しずつ体に慣らしていく方針でいこうと考えているのですが……間桐君はそれでいいかな？ 私が不満なら聖杯戦争は終わってからになっていいなら、伝を頼ってみるよ」

「……………」

キョトンとした顔をして首を傾げた響は、気にする事ではなさそうかと呆れた表情を見て話を締めくくる。

「ご飯冷めちゃったね」と謝って箸を手に取った彼女に、間桐は深く。

とても深くて長い、特大のため息を吐き出して、そつと笑った。

ほんの少し、嬉しい事でもあった子供のよう。

第二十六話

こんなヤツだしマイペースなのも承知の上だろうとひとつ頷いて、間桐もまた箸を手に取った。

もう一人の友人に負けず劣らずな味のそれらを年頃の少年はアツサリと平らげてしまったが十分に足りたようだ。

満足げに息を吐いた間桐の顔色は明るくなっている。

今は痛みの波も引いているのだろう。

それはいいことだと、響は遅れて完食しながら胸を撫で下ろした。

「……それで？ さっき言ってたコツってどんな事なんだよ」

食器を机の脇に置いて、間桐は問いかける。

黙って食事の手を進める合間に先程の話を噛み砕き、それでも気になっていた事だったのだが。

問われた当人は一瞬なんの事かと目を丸くして首を傾げた。

「うん？ ううん……ああ！ うん、はい。……忘れてたわけじゃないですよ？」

「いやそれ忘れてたって言ってるも同然だからな?!」

沈黙したのに笑顔で誤魔化されるわけがない。

相変わらず変なところで下手に誤魔化すやつだなと半目になりつつ、これ見よがしにため息をひとつ。

部屋の隅に控えて霊体化しているハサンもこれには微妙な顔だ。

「そんな事ないんだけど……まあいいでしょう。とはいえコツなんて大したものではありませんよ？ ただ水と油をイメージするだけですから」

「……………」

「その辺のイメージは人によりけり、ではありますが。常にわけて瓶詰めにするように留める、あるいは別のものに保存する。そういう意識をするだけで多少の備えはできますよ」

にこにこなんて事ないように言っているが、魔術師に成り立ての人間にはイメージしやすいようだしづらい。

もつと他にはないのかよでも言うようにじとりと見れば、少しだ

け彼女は狼狽えて何かダメだったのだろうかと首を捻る。

「うーん……？」

「……いや、なんとなくわかるんだけどさ」

何が悪かったのかと思案する様子に、ひとつ嘆息して間桐は腕を組んでトン、と自分の腕を叩く。

「魔力を使うのはどうするんだ。それがわからなくちゃ戦えないだろ？ ——お前が願いを叶えさせたんだから、責任持って教えろよ」

そっぽを向いて、しかし素直に願い出た間桐。

彼の願いを叶えたその時は響の放つ雰囲気は呑まれていたけれど、今度は違う。

響には彼自身の奥底に燻っていた望みを暴いてしまったのを間違いだなんて思えないが、それでも前を見てくれているのはいいことだ。

彼女はそう思って「そうだね」と緩く頷いた。

「間桐君、あの机の上の物を持ってみて」

「じゃあ」と響が指差したのは、ひとつの小瓶だった。

作った意味も意図も彼女には何一つわかる事はないが、それでもそれに何かの意味があるのは見てとれた。

間桐にとっては棄てることができるのできないそれに、意義などなかったけれど。

「――」

立ち上がり、ごくりと唾を飲み込んだ間桐が、躊躇いがちに手を伸ばす。

そろりと割れ物を扱うように手に取ったそれを掌に握り込んで。

そして――。

「……クソ……ッ、……ダメ、なのか……」

開かれた手の上には、何も変わらない小瓶の姿だけがあった。

顔を歪めて自身の手を睨み付ける後ろ姿には、悲哀が滲んでいる。

しかしさもありなんと苦笑した響が彼の名前を読んで数秒目を閉じると。

「いつ……た、……あ？」

何だと言おうとした間桐の全身に静電気のような小さな電流が走った。

思わず瞬いたその直後に、小瓶に淡い変化が起きた。

「み、水谷……！」

思わず振り返ったその手の中には、仄かな光を明滅させる液体が揺れている。

気色ばむ声を抑えきれない間桐の瞳には、子供みたいに純粋な輝きが満ちていた。

「上手くいつているみたいで良かった。間桐君、先程あなたの体に魔力が流れる感覚があったと思います。魔力というよりも、電気に近いのを想像してもらえれば分かりやすいでしょうか？」

「——ああ。これは……」

「なんとなくでもわかってきたようですし、その感覚で自分の中で想定するスイッチを切り替えられるようになるのを、今日の目標にしましょう。スイッチの入れっぱなしはあなたの体には負担が大きいのでオススメはしませんけれど」

確かな自信とやる気に、少女は微笑んで。

そして——。

……そして、間桐慎二はめくるめく修行の時に追われる事になるのだった。

魔術師になったその日は無理はさせられないからとそれで終わったのだが。

その翌日からは二人して学校を休み、午前中の内から間桐家にて修行をしようという話になっていた。

部屋には響の他にサーヴァント二体が控える中で行われている。

その内容は至ってシンプルに魔術に慣れる事だ。

体内を巡る魔力を認識する。

一言で纏めれば簡単ではあるが、駆け出しのひよっこには中々難題だ。

一日目と二日目はずっと魔力を流すスイッチを彼の中に規定するために、気が遠くなるほど……実際のところ何度か気を失いながら体

を痛め付けていた。

痛め付けるとは言っても静電気を意図的に起こされたり、アサシンの殺気を浴びせられたり、肉体負荷の高い運動をさせられたりといった事だ。

そのどれもに適應していくあたり、彼のポテンシャルは高いといえる。

だがそれでも、一朝一夕に事が進むことはなかった。

「いっつ……いっつ！」

そうして三日目。

空が夕暮れの色に染まった頃の事だ。

間桐が己だけの力で握りしめた小瓶に光を宿すことが出来たのは。

「！ つみ、見ろよ水谷！ はは、ははは……！ 僕はやってやったぞっ！」

思いの外早くに身につけたものだと感心しながら領きを返して、響は微笑む。

体に馴染みのない力を手に入れて、それでも彼は努力した事がわかってからこそ。

手放して誉めちぎり、最初の一步としてはかなり大きなものだと言えば、その言葉は間桐の自尊心と充足感を満たしていく。

「それじゃあその調子で、次は強化の魔術を習得しましょうか。……戦うのはそれからでも、決して遅くはないでしょう」

しかし魔術の初歩も初歩。入り口に手が届いた程度の間桐の道程は果てしなく長い。

そんな彼が今戦うためには、たったひとつを得る。それだけでもきつと生きる術を得ることは出来るから。

たとえ彼が最後の最後に選択を誤ってしまうような人だとしても、響は何度だって同じ結論に行き着くだろう。

「きつとそれだって、痛くて堪らないでしょうけれど……ここまで耐え凌いだ君は、本当に強い人だ。だから私は、君を応援しているよ」

だって彼女は、誰かが生きようとしているのが好きだから。

もがき苦しみ、強い痛みを苛まれようと、必死に足掻く人が、好き。

生と死を割りきりながらもそれでも生きようとする人も好き。
どうしようもない袋小路の中でそれでも諦めきれない、そんな人も好き。

生とは、飽くなき人間が生まれ出その時から発生するのだから。

だからこそ、彼女の持つカタチは――。

「ふ、フーン！ 僕が強いのは、当然さっ」

腕を組んでピイツとそっぽを向く間桐の顔には、強がりと照れが窺い見える。

それににこにここと笑って、彼女は次のステップを提示していく。

間桐は自分なら出来ると自信を持ちながらしかし中々ままならない現実には、その日は早々に「あーもう！ くそっ！」と吠えたてた。

「焦りは禁物だよ、間桐君。ほら、休憩休憩」

「……」

その言葉にむすつとしつつ、間桐はベッドに寝転がり椅子に座る響を睨んだ。

ずっと座っているのに変わらない顔色が、少し気に入らない。

あまりの出来なさにイライラしているから、というのも理由だろうが。

「なあ、何でお前は魔術を覚えたんだよ。家族がそうだったんじゃないなら、そんな事しなくてもよかつたじゃないか」

他にも、溢れ聞く話がイライラを加速させている気がする。

だって彼女は、自分が望んでいたものを持っていたのだから。

だから、その羨望が時折顔を覗かせるのを止めることは出来ないだろう。

「……それは、ええ。そうですね。……でも私は、殺されかけて、けれど生き長らえてしまったから。だから、生きなくちゃと思うんです。それが私の家族が、サーヴアンター^{キャスター}が、あの時の私に望んだ事なので」
「だから、手段として覚えたって、そう言いたいのかよ」

「間桐君には少し悪いなとは思いますが、概ねは。……まあそれに、教えてくれる先生がとても丁寧だった、というのもあります。聖杯戦争ではとんと素人だった私を気にかけてくれたから、だから私は彼が大

変そうだったのをお手伝いする対価とただけですよ」

それはつまるところ、他人のためではないのか？

ふっとそう思った間桐は、彼女の顔を見つめる。

この数日で痛いほど感じた事ではあるのだが、衛宮は衛宮で、水谷は水谷で別ベクトルに頭が可笑しい。

いや知ってたけどさ、と心中で呟きつつ肩を竦めて首を振る。馬鹿につける薬はない。

「まあ、いい。……って、何だよ！ 桜！ そう何回もノックしなくても聞こえてる！」

「あつ。……ごめんなさい、兄さん。それからこんばんは、水谷先輩」

「はい。こんばんは、間桐さん」

コンコン、コンコンと響くノックに怒るような声を上げた間桐。

それを返答ととったのか、彼の妹である間桐桜が控え目に顔を覗かせた。

おずおずと挨拶してきた彼女に、響は笑顔で返してどうぞと先を促す。

「晩御飯が出来たので、声をかけたんです。兄さんも水谷先輩も、そろそろお腹が空いてませんか？」

すると彼女は期待を込めたような眼差しで二人を見た。

それに対して響の笑顔は変わらず、間桐——勿論慎二の方だが——は隠すことなく嫌そうな顔を浮かべたが。

「はあ？ 別に、腹なんて空いてな——」

「うん、お腹がペコペコです。間桐君も、今日は一段と頑張ってたからお腹も減ってるだろうから、早く行こ」

「いや何でお前が返事をし——」

「昨日も一昨日も水谷先輩がお料理してくれたので、今日は私も腕によりをかけたんです。兄さんと衛宮先輩の言ってた通り凄く美味しくくて、だから負けないぞう！ と気持ちを込めてみました」

「ふふ、私なんて大したことはないですよ。でも、舌の肥えた二人にそう言われていると知って、悪い気はしないかな。…衛宮君からは間桐^貴さん^女には遠からず追い抜かされそうだななんて聞いてますよ」

くすくすと笑い合う女二人（霊体化している二人も合わせたら四人）に、男一人が敵うわけもなく。

言葉を挟む余地もなく、流されるままにリビングへと連れられていく。憐れ、可哀想な僕間桐。……とは誰も言ってはくれないので慎二は心の中で呟いたのだった。

食事も響が何時もアサシンと摂ることが多いとの事で、アサシンとライダーまでも実体化しているのではなおのこと居心地が悪い。

しかも全員が全員多弁ではないので沈黙が刺さること。

だが無理に食べないでいると響から心配されて「食べさせてあげましょうか？」とか言われるし、普段は喋らないアサシンからは正論で嫌みを言われる事になるし、妹にはちよつと悲しげな顔をされ——いや、妹の事なんてどうでもいいけど、と思いつつもそもそと食を進める。

本日の主役はロールキャベツである。冬の定番だ。美味しい！

ちなみにライダーは殆どの場合無言である。

「キャベツ巻くの上手いですね、間桐さん。私は苦手で……いえ、それで何かは言われないんだけど、それでもちよつと悔しくって、何時も気を付けようとは思っただけど……」

「ふふ、ありがとうございます、先輩。でも私も、今日はたまたま上手くいっただけです。気を付けても葉っぱが破れちゃうことって、ありますよね」

「そうそう。衛宮君なら綺麗に巻いちやいそうだけど」

「あ、それわかります。衛宮先輩、結構こだわる人だから」

「本当、真面目な人だものね。友人としてはあの真面目さが時々心配にもなりますが。……間桐君は間桐君で、ねじくれ曲がつてるから心配なんだけどね」

「……ねじくれ曲がつてるとは何だよ、ねじくれ曲がつてるとは」

二人の会話の勢いに負けて、そのツツコミも力がない。

普段妹には高圧的な態度をとりがちな慎二でも、友人と妹が結託してしまえば太刀打ちできないのである。

きつと衛宮になら、何でも言えただろうけれど。せめてもう一人男

がいれば……いや、間桐家では叶わぬ願いだが。

しょんぼりと萎びれた間桐慎二は、美味しいのに違くないロール
キャベツに舌鼓を打つのであった。

閑話休題

いつも通りになりつつある、間桐への魔術講座を終えて家に帰った響はギルガメツシユと話をし、

ハサンは街へと踊り出ていつていた。

ランサーも本日は言峰の命令で街のどこかで適当にぶらついてい
る事だろう。

だからこそ、ギルガメツシユは響を見てフンと鼻を鳴らす。

「随分と機嫌がいいみたいだな、響」

「え？ ……いきなりなんですか、王様。私は別に変わりありませんよ」

「それはそうだろうが……はあ。まあ、よい」

いつも通りの反応に呆れのため息を吐き出して、ギルガメツシユは
ごろりとソファへ横になった。

垂れ流したままのテレビが、これまたいつも通りの退屈さで。

彼は顔をしかめて一眠りする体勢を整えだした。

響はその姿をいつも通りと捉えて、王様の言葉に止めていた手を動
かし出す。

鼻歌を歌っているのは、無自覚だろうか。

その声を聞きながら、ギルガメツシユは浅い微睡みに身を委ねた。

机を拭いて水回りまで片付けている響は、その事に気がついてくす
りと笑みを浮かべ。

「――仕方のない人」

そう小さく呟いて、水を止めた。

「……」

水の滴る手をタオルで拭いて、リビングを出た響はその手に毛布を
持って戻ってくる。

それから毛布をうたた寝をするギルガメツシユへとかけて、片付け
を再開した。

「あれ？ 昨日買ってきた花がもう枯れてる……朝は綺麗に咲いてい
たのに」

そしてふと、窓辺に飾っていた花が萎れているのが目に留まった。ぼんやりとそれを眺める響の手には拭きかけのお皿があつて――。

「あつ……」

気づけば、その手から滑って落ちてゆく。

そうしてガシャンと激しい音を立てて白い陶器が砕け、床へと散らばった。

「……何をしているのだ貴様は」

その音に顔をしかめ、ギルガメツシュが起き上がり文句を飛ばす。

しかしそれに返答は返る事はなく、怪訝に思い振り返った赤い瞳が見開かれる。

視線の先に、あつたのは。

「――そうか。それが望みか」

響の体に纏わりつくモノの姿。

「……我の物に手を出されるのは些か業腹ではあるのだが……まあ、よかろう。長きに渡る無聊もこれで終いだ」

眩くその顔は懽然としたものだが鼻を鳴らせばその色は掻き消え、もう一度体を横たえた。

そうしてもう一度うたた寝を再開したギルガメツシュに、しかし響は少しも反応しない。

だがやがて動き出した彼女はひとつ首を傾げて、それから落とした皿に気がつくのと困った表情でため息をつく。

その横顔には少しも陰りなどない。

直前の自身の行動を疑問に思う様子さえなく手早く破片を片付けてゆく彼女に、その背後で揺蕩うモノはぐにゆりと体を歪ませて影に融けるように消えて。

――けれど、何も起こらなかった。

明らかな形でまだ何も動いてはいないのだ。

しかし確かに、変化は冬木市のそこかしこで起きている。

人々は気づいていなくても、少しずつ。

ほんの少しずつ、形を持ちはじめている。

その変化に気づいている者はいない。

だが、街を見渡す一人のサーヴァントがふむ、と何かを見つけたように声を溢した。

朱い槍を手にこきりと肩をならした槍兵は精悍な顔立ちに獰猛な笑みを浮かべ、カンツと槍を打ちならす。

「あの気配はセイバーに、キャスターか。山籠りの魔女が出張ってくるって事は、マスターでも見つけた、ってところか……——つと、きやがったな」

軽い調子で家々の屋根を跳び伝い、移動を始めたランサー。

しかし、その足は直ぐに止まりある方角を見て——夜空に浮かぶ点のようななにかを、槍で弾く。

カツと地面に刺さった物が消えていくのを視界の端にし、ランサーはそれが飛来した方向へと身を捻り、走り出す。

なおも飛んでくる矢を殆ど避ける事もせずに進むその顔には、僅かに喜色が隠れていた。

少しずつ場所を、攻撃の頻度を変えながら移動を重ねたサーヴァント二騎が相対するは。

「手荒い呼び出しもいとこだな、アーチャー？」

「ぬかせ。気配を振り撒いていたのは貴様の方だろう、ランサー」

雪風の吹きはじめた、冬木大橋の袂だった。

双方共に、踏み出すのは一瞬。

まずは一合と鳴り響いた音は二度。

しかし僅かに残る剣戟の余韻は、激しい攻防の前にたち消えた。

「——こんなところで油を売ってていいのか？ セイバーとキャスターがいる方にテメエのマスターがいると踏んでるが」

「……フン、ブラフのつもりかは知らんが、あれは私に関わりのない戦いだ。そも、どちらが脱落しようが——」

激しい音を、金属を打ちならす火花を散らしながら、二人の応酬は続く。

「互いに好都合、つて——なア!!」

アーチャーの手から、白と黒の双剣が弾き飛ぶ。

すかさず突き出される朱槍を、しかし焦ることなく再び握った双剣で受け止め、後退る程の威力を利用して距離が空いた。しかし直ぐに剣と槍での応酬は再開する。

——そんな彼らを、冬木の街並みは静かに見守っている。

この場とは違う、セイバーとキャスターの争いをも。

市内から少し離れた位置に居城を持つアインツベルンの少女もまた、その争いを微かに感じ取っていた。

窓に手をつきながらじつと暗い森の向こうを見つめる姿に「お嬢様？」と声がかかる。

その声に振り返らず、彼女は先程小さく呟いた言葉を繰り返す。

「やっぱり、可笑しいわ。声も気配も遠いだなんて」

鏡のように窓に映る難しい顔に、その背後のメイド二人は主人に倣うように暗い窓の先を見る。

けれど、主人のように何かを感じ取る事は出来なかった。

「でも、まだわかる。これはキャスターとセイバー。それにランサーとアーチャーだわ。………見えない、けど、うん……アーチャーは深手を負ったのかしら？ 気配がかなり弱い……キャスターは……また穴蔵に戻ったのね」

ぐっと眉を寄せて不確かなものをひとつずつ形にするように口にしてみれば、しつくりとくる。

どうしようもない違和感はあるものの、それに間違いはない。

そう自分を納得させて、さてではこの違和感の出所はどこだろうかといりヤスフィールは盤上を睨み付けた。

それは目の前にはない。

けれど、彼女の前には、彼女の傍には確かにいた。

——いいや、いたはず。

なのに。

「……なん、で……？」

「焦燥が、幼い胸を焦がす。
あるべきものが、無い。
無くなってしまっている。」

「……完全に無くなってはいないが、それでも残り香程度の淡い繋が
りだけ。」

「それさえもズルズルと引き摺られるように遠く、別のものに移動し
ていつている。」

「このままではいけない。」

「どうにか、しなければ。」

「——セラ、リズ、明日からは私も前へ出るわ。車を用意しておきな
さい」

「振り返った少女の瞳は虚空を睨む。」

「そこに確かな敵を見ているように、力強い眼差しで。」

「かしこまりました」と頷くセラと、「わかった」と鷹揚に頷いたり
ズという二人のメイドを背に、彼女は己が信じる最強のサーヴァント
と共に戦場へと向かうのだった。」

第二十七話

にこにことした笑顔で朝の挨拶をしてきた響に、間桐慎二はぎこちない笑みで「おはよ、水谷」と答える。

霊体化しているはずなのに、彼女の背後から凄まじい圧を感じる気がするが、気のせいだろうか。

……いや、きつと気のせいに違いない。

それに——と考えかけたところで首を振って、慎二はここ数日お馴染みになったように自身の部屋へ彼女らを招き入れる。

そうして今日も今日とて魔術講座を受けながら、傍らで実践して。馴染みきつたようにアサシンを残して響がリビングへと向かって昼食の用意をする。

細い糸を針一本分程度に伸ばした魔力をやつとの事で紙に通し、けれど直ぐに霧散したのを感じた慎二はため息を吐き出した。

「……………」

そうして、もう一度集中しようとして、部屋に残されたアサシン……がいるらしい場所をチラリと見て首を振る。

集中が一度切れてしまったからかもう一度という気にはなれず、思考も彼方へと飛んでいく。

耳にこびりつくように残る、声の記憶へと。

「…………マトウシンジ。何を休んでいるのですか。我が主に教えを授かりながらも手を休めるとは…………主が許しても、私は許しませんよ」

しかしそれは、監視してくるアサシンに遮られる。

嫌そうな顔をした慎二は、ここで文句を言おうものなら暗器が飛んでくるのを身をもって体験しているため大人しくわかっていると頷いて手元に視線を落とす。

そうしてまた集中し出したのを見て、アサシンは仮面の下で眉を寄せていた。

慎二の様子は特別変わっている、というわけでもない。

始めたての時に比べれば寧ろ愚痴は減ったし無意味に怒る事も少なくなってきた。

響がご飯を作るために席を外している間も至極真面目にしているし、多少脅しても響に泣きつく（アサシン視点においては）事もなくなった。

だが、どうにも胸がざわつく。

苛立ちにも似たソレに、どうしても落ち着かない。

（響様……）

不安というにも違う感覚に、つい念話を送ってみるが。

……集中しているのか、その反応はない。

それ自体はよくある事ではある。

けれど今日だけは、今この時だけは、主の無言が気になる。

もう一度呼び掛けてみるが、やはり何の言葉も返ってこない。

納得いかない気持ちを抱きながら暫く待つべきかと黙して、再び慎二の監視を行います。

——だから、というべきか。

その言葉はとても唐突で。

何かが起こっているのだと察するには、遅すぎた。

『令呪をもって命じます。ハサン、間桐君を傷つけないでいてね』

聞こえてきた声は淡々と、しかし常の穏やかさを宿していた。

弾かれるように顔を上げて殺気立ったアサシンは、自身の身を縛り付けるような強制力に呻きながらも目の前間桐慎二の男へと鋭く問いかけた。

「マトウシンジ、貴様は何を知っている」

「は……？ な、なんだよ、急に……」

「響様が、貴様を傷つけるなど命じられた。あの人は何の理由もなく、そのような事を命じる事はない。……そして、貴様は朝から集中が乱れている。つまり——何らかの要因くらいは、浮かんでいるのではないですか？」

振り返った慎二の顔色は蒼白に染め上がっていく。

それは、答えのようなものだのアサシンは確信して更に怒気を膨らませた。

「ほ、僕は……」

真正面からそれを受けて、けれど迷う様子にアサシンの苛立ちは増

していく。

この男はやはり嫌いだ。主の手を煩わせているばかりか、主への害を見て見ぬふりをしたのだから。

出来ることなら、今からでも殺してしまいたい。

そう思いつつ、彼女は部屋のドアへと向かい——絞り出すような声に足を止めた。

「お爺様だ……お爺様、が……でも、僕は、知らない……知らない、けど」

地下、という呟いた時には既にその姿は扉の向こうへと消えていた。

呆然とそれを見送った慎二は俯いて、唇を噛む。

その耳元で呟れた笑い声が、響く。

これは昨日の、記憶。

祖父の嗤う言葉。

『ここまで孫の面倒を見てもろうたのだ、礼をするとしようかの』
決して何をするとも、どんなものかも言わなかったけれど。

でも、慎二は祖父が恐ろしい人だとわかっていたから。思っているから。知っているから。

だから、きつとそうだと思う。

間桐家の深淵——その真実が脈打つ場所へ。

彼女^{水谷響}という人を、招いたのだろうと。

「僕は……僕、は……あ、う……うう……僕は……」

喘ぐような掠れた声で、意味のない言葉を繰り返す。

カタカタと震えだしたその姿を見るものも居ない。

間桐慎二はただただ俯いて、掌を握りしめて力なく机を叩いた。

——一方のアサシンは響の気配をたどり、屋敷の奥。

間桐家の修練場に前に足を止めた。

「……あなた方兄妹は、我が主を謀ったのですか、マトウサクラ」

そこに立つ少女の向こうにある扉を確認しつつ、アサシンは怒りを押し殺した低い声で唸る。

所在なく暗い顔で俯いていた桜は、ただ黙してその怒りを受け止めた。

アサシンから微かな毒さえ滲み出る気配に、その視線を遮るようにライダーが実体化して桜とアサシンの間に立ちはだかる。

「……そうではないと、貴女はわかっているでしょう。アサシン」

「そうして庇う、という事は——やはりマスターはマトウシンジではない、というわけですか」

「……………」

「沈黙は肯定と見ます。……いえ、私にはそれはどうだっていい。我が主が、その扉の先にいるな?」

ピリリとした空気が張り詰めていく。

仮面と眼帯に隠れて見えないはずの視線に火花さえ散っているような錯覚さえ覚えるほどだ。

いつ弾けても可笑しくない空気。

しかしそれ以上膨らむことなく霧散した。

どちらともなく一步引き下がったからだ。

「……どうぞ。サクラを傷つけないのなら、通ればいい」

「……………そうですか」

噛み合う視線だけは逸らさずに二人はその言葉を交わして距離を置く。

ライダーは桜を守るように肩を支えて扉から離れ、アサシンは迷いなく扉へと手をかけて。

そうして彼女は、見た。

「響様……!?!」

深い空間に蠢く蟲。

大や小と様々な形を、大きさを持つそれらを。

夥しい蟲の山が底にある光景を。

繋がる主との糸から、その山の下に響主がいることがわかる。

一気に顔色を変えたアサシンが、大きく一步を踏み出そうとした瞬間——。

「く、お……! オオオオ——?!」

横から、上から、あるいは下から、苦悶する叫びが反響した。微かな気配に反応し、アサシンが暗器を声に向かって飛ばす。命中したのか、階段の中程にポトリと塊が落ちて何度か痙攣したようにひくひく、びくびくと黒い色が動く。

その正体を気にすることなくアサシンは身に付けていた礼装を外して、腰を落として一息に主の下へと跳躍する。

殺意を毒に変え。

不安を毒に変え。

苛立ちを毒に変えて。

礼装の下に隠していた毒を娘の形としたモノは、主を汚す蟲へと毒を振り撒く。

そこに理性はある。

けれど秩序はない。

そこに殺意はある。

けれど殺意はない。

アサシンのサーヴァントはただ、主を助けたい。

その想いだけを手に、何かを潰しながら飛び込む。

気味の悪い蟲に触れる事など厭わず、唇を引き結びながらも真っ直ぐに。

足の下で蠢く蟲を踏み潰し、山の端から蟲を引き剥がし、毒の効きづらい蟲に惜しみ無い毒を全身から発し、主の名を心中で繰り返しながら手を伸ばす。

主はこんな場所で死んでいい人ではない。

こんな虫けらなぞが汚していい人ではない。

こんな事で傷ついていいわけがない。

こんな、こんな、こんなものに――！

「ふうふう」

奪われてなるものかと伸ばした手に、声が響く。

小さな鈴を転がしたような、天井から落ちてきた水滴のような、戯れに耳を撫でるような、微かな笑い声が。

「ふうふう」

指先に、温かいものが当たる。
刹那ハサンの脳裏に短いビジョンが浮かんだ。

第二十八話

その視点は、水谷響主のものに違いなかった。料理を作る見慣れたハサンに比べて丸い指先。

淀みない動きを見せるその手が、ふっと止まると。

瞬きの如き一瞬で場面は切り替わり、一人の老人の顔が映る。

杖について腰を曲げる翁の姿。

その表情に悪意に似た笑みが浮かび、廊下だった背景が薄暗い灰色の、何もいない 修練場地へと変わった。

『それはできません』

どういった会話をしていたのかはわからないが、響の声がした。

しかしその言葉を完全に拾い上げるより早く、黒に視界が埋まってい

く。ざざざ、と耳障りで目障りなもの。

それは山のように主に折り重なっていた蟲だろう。

おぞましい、と常人ならば思う事だ。

けれどもそのビジョンはまるで映画のワンシーンを再生しているように嫌悪の念も感じず。

『可哀想な方ですね』

ただ、憐れみの声だけが過った。

「響、様……い」

額に落ちるかのように仮面に当たったものを払い、手に触れている肩らしい部分を搔き抱くように引きよせながら、彼女は声を上げる。

あまりの醜悪さに自然と狭めていた視界を、思い切り押し開いて、強く叫ぶ。

「響様っ!!」

そうして、暗殺者は主の表情を捉えた。

何時もと変わらぬ寝顔にも思える穏やかな笑みを。

開かれた眼差しの、揺るぎのない柔らかさを。

それはあまりにも、変わらない。

変わらなさすぎる、ものだった。

「……………」

だからか以前、金色の王に言われた事を、ふと思い出す。もしも。

もしもの話ではあると、歪曲な前置きの末。

あの王にしてはやけに静かで、平淡な声音で囁くように。

『アレが人に、人形にさえ成れぬものになれば』

赤い眼を冷たく突き刺すように細めながら。

『アレのサーヴァントである貴様が——殺せ』

そう、英雄王ギルガメツシユは告げたのだ。

その真意を、ハサンが知ることはない。

けれど彼の王は自分の所有物の行方を簡単に他人に譲るような人物ではない事はわかっている。

それなのに響の死をハサン・サツバーハに委ねたということは、何か意味があるのだろうか。

人への思いやりなどでは決してないはずだ。

響のためでも、ハサンのためでも、まして人間のためでもない。

あくまであの王が主体の、命令のようなものだったろう。

だが。しかし。

「響様……………」

幾ら響が、主自身がギルガメツシユの所有物なのだと認めているのだとしても。

ハサンがその言葉に、従う必要なんてない。

まして、マスター^主を殺すなどと。

従えるはずが、ないのに。

「……………来てしまうのは想定内でしたが……………いけませんね。アサシン、私から離れて地下^{こち}を出ていてください。礼装^{れいさう}をつけ直すのを忘れてはなりませんよ」

目の前にいるものの違和感に、固睡を飲む。

ただそこに立って、彼女は微笑んでいる。

それだけだけれど、何かが、ずれている。

「間桐君と妹さんには、先にご飯を食べていてと伝えてください。勿論貴女も食べていてもらって構いませんから」

「響、様……我が主、ですが……」

「ふふ、心配しなくても大丈夫ですよ。ここを終わらせたら私もすぐに行きますから」

では、響ではないのかと言われればそうではない。

まだ、そうではない。

だからこそ留めようと口を開いたハサンだが、苦笑がその顔に浮かんだ事で言葉に詰まる。

その笑みは、自分の知るままだ。

故に、まだ大丈夫ではないかと。

そう思えてくる。思えて、しまう。

「……何を、なさるおつもりですか」

「何を、ですか？ 何をと言われると難しいけれど……」

絞り出すように問いかけられた言葉に、彼女はきよとりと目を丸くした。

それから少し考える様子の後に、ひとつ頷く仕草を見せて。

「――罪過は追いつかねばなりませんから」

たおやかな笑みで、告げた。

その言葉が紡ぎ終わった時、地下に嗄れた絶叫が響き渡った。

何故。何が、どうして。違う。

儂は、死にたくないただ失えないだけで――。

そんな声が、足元や天井や壁というあらゆる場所から、聞こえる。声の全てが同じもので、重なる耳障りなそれは蟲の羽音と大差ない。

深い関心はない眼差しをハサンへと向けた響は、自身を掴む毒の滲んだ手を優しくほどこいてさあと呼ぶ。

「命令ととっても構いません。だから、はやく……ね？」

そっと腕を押すように突き放された事で、自然とその足が動き出す。

ハサンの意思には、関係なく。

それが響の成した事であることは明白だった。

焦るハサンの声に、しかしその眼は向くことはないまま扉に遮られて見えなくなってしまう。

自身の手で扉を閉めさせられたハサンが慌てたようにもう一度扉を開こうとするが。

どうにも、空間がずれているような、そんな妙な手応えで扉は開かない。

人よりも強いはずのサーヴァントの手で叩いても、微かな音さえしなかった。

そんなアサシンに、扉の近くで未だじつと佇んでいた桜が声をかける。

「アサシンさん……水谷先輩、は……」

青白い顔で呟くような惑う声音を向けてきた彼女に、アサシンはギリリと強く拳を握った。

怒りを向けてしまうのは簡単だけれど、暗殺者であるからこそその怒りは表面上から消し去り……しかし消しきれない震えた声で返す。

「……貴女は何をもって、我が主に害をなした」

冷たく、殺意が密かに込められたその問いに、間桐桜はざわざわとした違和感を覚える胸を押さえながら血色の悪い唇を震わせた。

ハサンが出た音を聞き届けて、響は何かを持ち上げるように片手を上げる。

するとピタリと声が止み、次いで天井から雨の如く黒い塊たちが落ちてゆく。

ひゆるりひゆるりと、風を切って。

あるいは床で悶え苦しむように殻を震わせて波打って。

けれどそれは、それらは、形を保てなくなったように捻れて、振れて、崩れて、消えてゆく。

悲鳴もなく、怨嗟もなく、疑問もなく。

最初からここには何もなかったように。

そうして広く、重く、沈むような静寂だけが残った。

一秒。

十秒。

一分。

十分。

いいや、もしかしたら一時間が経とうとしているだろうか。

それどころか、一日、二日か？

「……………あ、……………お、……………」

そんな思考を途切れ途切れに浮かべながら、地下に在るものがひとつ、動き出す。

おおよそ人と呼ぶにはおぞましい姿をしたものだ。

人の骨格を無理矢理継ぎ接ぎしたように皮膚のあちこちには骨が突き出し、あるいは剥き出しにしている肉体。

肌は老衰しきったようにカサカサに乾いた木乃伊の如き肉体。

背中や足、あるいは手には蟲と思しきものを生やした肉体。

呻く声は最早言葉を紡ぐ事さえも難しいかのように枯れきつていて。

生きた人間と呼ぶには、それはあまりにも。

「ふふ。本当に、可哀想なお姿ですね」

憐れなものだろう。

「己が生命のために蟲の身となり人を貪り、魂を汚した結果こそが形となつているのです。……………ですが、情報を繋ぎ合わせた結果まだ生きてらっしゃることは、とても素晴らしい事だとも思います」

何かを、言っている。

そう捉えた思考が、肌を震わせた。

言葉の意味を捉えるには、程遠いけれど。

「あなたがそこまで生を望む事は理解しました。けれどその魂では既に半年……………いえ、数ヶ月も保たないのでしよう。故に私を喰らいたかったのでしょうか、本当に申し訳ありません。この身が叶えられる願いの数は——」

虚な眼に、見知らぬ女の顔が映る。

その気配がどこか懐かしいような。
その姿がどこか空恐ろしいような。
それはどこか、人ではないような。

「既に満ちているのです」

唄うような声が、やけに明瞭に響く。

穏やかさと冷淡さを共存させる声が。

声におされたように、何かを言わねばならぬとかさかさに乾いてひび割れた唇が開く。

誰かを、何かを、思いつき出さねばならぬと、焦りが生まれていた。

悪寒にも似たぞわりとした焦りの感覚に、肉体が塗りつぶされていく。

「な……ぜ……だ……」

そうして溢れた言葉は、正しく伝わったのだろうか。

いいや、そもそも何に対する疑問だろうか？

千々に千切れていく思考の中で、間桐臓硯であったものと思う。

何かを、違えたのか。

しかし何を。

儂はただ、死にたくなくて。

何故だ。

何故、何故……儂は、私は、何のために。

「……だから生を願った貴方にしてあげられるのは、これだけになります」

どうしてこんなにも、生きようとしたのか。

その答えを差し出すように、朧な思考領域に白い、雪のような白磁の指が開く。

白い白い、雪の花のような、形が。

盲いた眼に映るそれは、幻なのかもしれない。

ああ、しかし。それでも。

「……………」

その幻は、きつと。

きつと、かつての理想と今までの罪禍。

己の中に積もった夢、なのだろう。

「ですが、結局のところこれらは私の身勝手な行いに過ぎません。貴方の深い場所に眠っていた記憶を取り戻した今、何を選択するのかは貴方次第ですけれど……どうか、よき夢を」

いつの間にか近づいてきた柔らかな笑みを浮かべる女が黒い何かを手にしていた。

その黒いものがとぷり、と水面に投げ込まれた石のように骨の浮いた胸元に沈む。

痛みは、ない。

どころか違和感のひとつもなく、その手は抜き取られた。

だがその瞬間、どこか遠くに感じていた何かが、明確に肉体へ宿ったのだと理解した。

欠けたパズルを、嵌め込まれて完成したように。

明瞭な記憶が、思考が、感情が、間桐臓硯マキリソオルケンという男を焼きつくす。

「!!!」

吠えるように上がった言葉にならない叫びに、しかし言葉は返らない。

彼女は、何も言うことはなくその存在を視界から外してしまったのだから。

彼の声は、自分に向けられたものではないとでもいうように。

憐憫の眼差しをひとつだけ残して、階段地下室の外の向こうへとその姿は眩んでしまった。

残されたものはただ何かにすぎること出来ず、追いつく時がきた罪禍を濯がなければならぬ。

それが善いこととも、悪いこととも。

善いことをしたとも、悪いことをしたとも。

水谷響という存在は考えてはいないが。

どう受け止めるのかは、間桐臓硯が断ずるべきことだろう。

もつとも、そんなことを思うことができるのかは、彼の意志次第にはなるけれど。

心中でそう呟いた少女に、小さな笑みが浮かんだ。

第二十九話

間桐桜は、間桐に養子として引き取られた。

引き取られてからの間桐家での日々は辛く険しく、恐ろしくて、怖いことばかりだった。

だから。

「私、は……ただ、おじいさまに、言われて……」

間桐の家の中心であり、恐れを中心である間桐臓硯に、彼女は逆らえない。

もしかしたら出来るのかもしれないけれど、それでもそんな勇氣は、持つことが出来ないでいた。それを諦めと、そう言うのかもしれない。

だから今日も、水谷響に孫である慎二と桜がここ数日世話になっているのだからという理由で話をしたいから連れてくるようにと。

そう言われてしまったから、従った。

祖父と呼ぶ人が、何をするつもりなのか、何を考えてるかもわからなくても。

「それが理由になると、思っている、と——」

本気で言っているのかと、静かながらも鋭い怒気が向けられる。

その間に入ったライダーは、桜を隠すように立ちながらかくりと首を傾げた。

「……では貴女は、どうしてシンジの監視を続けたのですか」

「それが主の命令だったからに過ぎません、ライダー。……マトウサクラ、我が主がどう扱われるか……貴方には予想できていたのではな
いか。あのようなおぞましい蟲が望む事など、私には理解できません
が」

アサシンの脳裏に浮かぶのは、先程見た光景だ。

響に集る蟲の、山のごとき群れ。

瞬き程の間に垣間見た過去から窺えた何かの願い。

それが何かを願ったのだらうという、推測を。

しかし目の前の少女がそれを知っているとは思ってはいない。

だからこれは、ただの八つ当たりなのだ、苛立つ心に冷や水を浴びせる。

言ったところで、主の下には行けないのだから。

「そんな……そんなの、……私には、私にだって、わかりません……！でも、水谷先輩は、迷わずにこの部屋に入って……私は、何も言っていないのに……ほんと、は……違うのに……！」

大きく体を震わせながら首を振って、強く拳を握りしめる。

胸のざわめきが止まらなくて、大きくなって、苦しくて、恐ろしい。

目の前の仮面アサシンの女にわかってもらえるとも、わかってもらおうとも思っていないけれど。

どうしてだろうと、桜は思う。

昼食作りを手伝って、祖父が話してみたがっているという事を伝えただけ。

けれど響は何ら疑う事もなく構わないと頷いて、そうして家の奥にある祖父の形をしたものがいる部屋に案内しようとした。

そして、地下室の扉を見ただけで「ああ、此方の場所ですね？」と自分は何も言っていないというのに。なのに、迷わずその扉を開けてしまったのだ。

間桐の醜魔術の形たる悪さが集うその場所を。

『ではおじいさんとお話してきますので、間桐さんは戻っていて大丈夫ですよ』

それから、ここ数日の間に見慣れた綺麗な微笑みを向けてその中へと入って行った。

止めた方がいいとはわかっていた。

止めようと、手をあげかけていた。

だけど、どうして。

どうして水谷先輩は迷いがいいのか。

どうして私は何も言えないのか。

「——あのようなおぞましく醜悪なものに殺されるのだと、わかっていたのではないですか？」

「それは、そんな……あ、……え……？　み、水谷、せんぱ、……先

輩、を……？ そんな……わた、し……ちが……っ！」

ああ、どうして。

私はそんなつもりではなかった。

おじいさまが殺すつもりだなんて、思ってたなかった。聞いてなかった。知らなかった！

どうして、なのに、先輩は。

水谷先輩は、殺されてしまったの？

私が、悪かったの？

いや、でも、違う。

私は何も、していない。

殺してなんて、殺そうとしたなんて。

……本当に？

違う、違うと首を振って、桜は胸元に作った拳をぎゅつと握りしめて踞る。

心臓が、いやに煩い音を立てていた。

何かが暴れるような痛みさえ伴う鼓動に、身体中全てが悲鳴を上げて軋む。

痛い、と口に来れないほど息を詰めて、彼女はなおも首を振った。

「アサシン。これ以上サクラを責めるのなら……私は、容赦しない」

「……間接的であれ、主が殺されかけたのを許せるとでも？」

「……………」

「……………」

ゆらりと二騎の間に敵意が揺らめく。

先程以上の張りつめた空気が、廊下の温度を下げていくようだった。

互いに僅かでも動けばどちらともなく開戦の合図にしようだろう。

だが、しかし。

そうはならなかった。

「うう?! くっ、い、ああああ……!」

緊迫を裂く細い悲鳴に、何かが倒れる音。

それが桜のものだと気づくのに数秒と必要ない。

「サクラ……!?!」

「……響様……?」

ただ、どちらも呼ばう名前は違っていた。

当然ながらそこには桜とライダー以外の姿はない。

だがアサシンには、馴染みのある気配を彼女から感じていた。

ほんの小さな、残り香にも似た微かな気配を。

「……っは、……ッ、あ、あ……!」

それが桜と重なるように、感じる気がする。

仮面の下でじっと目を眇めたアサシンから桜を隠すように長い髪がなびく。

ライダーはじつとりと疑うような、睨めつけるような気配を滲ませながら一歩進み出た。

「……ヒビキとサクラに、何の関係が?」

何をされているのだ、と問うその言葉に沈黙が返る。

しかしそれは答ええないのではなく、答えがわからないのだろうと、思い直す。

それを証拠に、引き結ばれていたはずの唇が微かに呼気を溢している。

実際、ハサンにはわかりようがなかった。

召喚されて契約し共に過ごしても、その生涯を知っているとしてみ、決してわからない。

死ぬことを願われた少女の想いを、想像することも難しい。

だが、そうだ。

水谷響という存在は願われたものを与えるという在り方を持つ。

——ハサンはそんな主に普通の、普遍的で、凡庸な、けれど誰よりも幸せな人間の生を歩んでほしいと。

そう、密やかな願いを抱いている。

故にこそ、苦悶の声を上げながら、けれどそれ以上に激しい痛みを覚えていない桜の姿に、少しだけわかることが見えた。

「サクラの願いを、知ったのかもしれませんが……それが何かは知りませんが。でも、響様は……きつと、ご自分に来るから、何かをさ

れている」

「……………」

「疑うなら疑えばいい、ライダー。けれど、サクラが苦しんでいるが、死にかけてはいない。その事実だけは、確かな事です」

その言葉は推測の域を越えてはいない。

ライダーは黙考しながらも、少しだけ敵意を薄れさせた。

完全にアサシンの言葉を信じてはいないのだが。

それでも、直に触れた響という人を、彼女は嫌ってはいなかった。

とても好ましいとは言えないけれど、それでも、と。

そうしてたわんだ敵意と空気の中——ギギギイイイと扉の開く音が大きく、大きく響き渡った。

ハツと扉を見たのは、ハサンが先だった。

主の名を呼ぼう声は無意識なのか余裕など薄く、何かを急くような焦りが見てとれる。

そんな声を向けられた当人はと言えば。

何かあっただろうか、と言わんばかりのきよとりと不思議そうな顔をするばかりだ。

「響、様……、お怪我は、ありませんか？ どこか、悪いところは」

「ああ。いえ、大丈夫ですよ。心配してくれてありがとう、アサシン」
直ぐに距離を詰めて主の不調がないか、変わったところはないかと確かめるように触れるハサンに、笑みが返る。

くすくすとかすくすぐつたいと笑うような声音には、常とは変わらないものがある。

だが、先程までの事を思い返せば不安が消え去ることはない。

「……………ヒビキ」

何を問うべきか迷うアサシンに気づいたのか否か。

彼女とは反対に、ライダーは静かなながらも力強い声で響を呼んだ。

「はい」と直ぐに返される眼差しは、敵意のひとつも見えない。

「貴女はサクラに、何をした？」

しかしそれで引くような事はない。

逃れず答えるようにといわんばかりに視線を絡み付かせながら問いかける。

刺すような冷たい声は嘘はつくなど含めているのか。

そうして返された言葉は、その様子は、はたして。

「そう、ですネ……簡単に言えば、臓器の移植……ですか。有るべきものを、有るべき形に。本来無いものを、無かったように繋げる。——私が彼女に出来るのは、それだけですから」

ふと考えるような短い思案の後に苦笑するように眉尻を下げて、そう答えたのだった。

そんな彼女を暫し見つめ、ライダーはそつと肩で息を吐く。

あくまでも善意しかなさそうな様子に、僅かに毒気が抜かれた。

……警戒を無くしはしないが。

だからこそ、何も手にしていないと両手を上げてから近づいてきた響に、否やは唱えなかった。

桜に触れようと膝について手を伸ばすのは、しっかりと見張っているが。

「間桐さん、痛みは酷いですか?」

「み、ず……たに、せ……ん……ぱ……」

すつと前髪を横に払いその頬に手を添えて少し上に向けられ、やつと桜の顔色が露になる。

見るほどに血の気が失せたように蒼白で、疲労の色が強い。

呼吸は浅く乱れて、絞り出されたような細かい声は近くにいなければしつかりとは聞き取れなかったことだろう。

サーヴァントたるライダーとアサシンには特別耳が悪いという逸話もないため、聞き取れてはいるが。それはともかく。

「はい。大丈夫、大丈夫ですよ。だから落ち着いて、しっかりと呼吸をしましょう。私の声に合わせて、息をして下さいね」

介抱を始めた響と、それを大人しく受け入れる桜という図に二騎は深く沈黙を守った。

邪魔をしては回復の妨げになるだろうという判断である。

ライダーはもう少し違う考えもあったようだが、現状を問題ないと見たようだ。

「せんぱい……水谷、先輩……？」

「はい、私はこの通りです。ふふ、大丈夫と。そう言った通りになったでしょう？」

「あ……、……」

呆然と目を見張るその瞳に、穏やかなしかし茶目のある笑みが映る。

ゆらゆらと虚空を漂っていた視線がしっかりとそれを捉え、触れられた熱が生きていると伝え。

じとりと、確かな実感が胸の内へと芽生えていく。

喘ぐような声で「水谷先輩」ともう一度呼べば、変わりない、でも一層優しく見える微笑みが返された。

「いき……生きて、た……わた、……し、違う、違うん、です……！」

私、……私はっ

「うん……うん。いいんですよ、間桐さん。私が勝手に判断した事ですから。むしろ、私の方が、ごめんなさい。痛くするつもりもなかったのですが、結果的に苦しませてしまったようで」

浅ましく、身勝手な事を思っていると、言っていると自覚していた。

本当は妬ましくて、羨ましかった人。

でも殺したいと、死んでほしいと、思ってたなんていなかった。

あんなどうしようもない人兄に手を伸ばしたのなら、私にも、私にだつて。

——ここから助けてくれる人が、いて欲しかったのに。

そう、小さな子供のような言葉が、どこからともなく首をもたげて心の中で響く。

水谷響という人は、姉だった人とも、衛宮先輩とも全然違うけれど。彼女なら、と勝手な想像をしてしまっていた。

兄はこの数日の内に変わっていたから、もしかしたらと。そう、思わずにはいられなかったから。

第三十話

もう痛くはないと、背中を撫でる温かさに桜は安心を覚えた。痛くて苦しくて嫌なものが、薄れていく。

何時も感じていたもやもやとした鬱陶しい気持ちも、少しだけ遠い。

どうしてだろうと幾度も巡る言葉は、けれど優しく慰撫されて流されていく。

それがいいとも、悪いとも、わからない。

「おじい、さまは……？」

「中にいらつしやいますよ。ただ、今は少し普段のお姿と離れていると思いますから、そつとしておく方がいいかと」

細く長い息を吐き出して、桜はのろのろと顔を上げた。

見上げれば、何時もより近い位置に優しい笑みが見える。

兄にも向けられていた、笑顔。

どこまでも優しいその姿に、憧れを。

同時に、羨望を覚えてしまう。

自分とは全く違う、その在り方に。

「ああ、動かないで。一時的な措置ではありますが、痛覚を抑えているからあまり激しく動いてはいけませんよ。……ライダー、間桐さんを抱えてあげてください。廊下に座り込むのは体に悪いですから」

「……そうですね。サクラ、構いませんか」

うんと小さく力なく頷いた桜を、長駆が危なげなく抱き上げる。

それを確認して立ち上がった響はすぐお昼の準備が出来るからとアサシンに慎二を呼びに行かせた。

「私はご飯の用意を終わらせてきますね。間桐さんはお部屋で少し休んでみてください。まだ顔色が優れないようですから。……では、先に行ってます」

それから二人を振り返って微笑んで、彼女はしっかりとした足取りで廊下を歩いてゆく。

後ろ姿はどこまでも無防備で、ライダーが少しやる気を出せば殺す

ことは容易いものだ。

だからこそ、ライダーは迷うことなく桜の部屋へと向かった。

桜は大丈夫だと口にしたけれど、響が言っていたことは本当の事だったから。

地下への扉を気にする事もなく、彼女は一人納得したように頷いたのだ。

昼食の用意を済ませ、桜とライダーの分にラップをかけた響に物言いたげな視線が向けられていた。

窺うような、疑うような。けれど、心配で不安そうな眼差しが、ふたつ。

それを受けても彼女は何時もの顔でにこりと首を傾げるだけだ。

「……なあ、水谷」

こそりとひとつ手だけ合わせて箸を持った慎二が、恐る恐ると口を開く。

それに「うん？」と瞬く表情も、これまた見慣れたもの。

「おじい様に、会ったのか」

故にこそか僅かな恐怖から目を伏せることで気を逸らして、慎二は眩くように問いかける。

問いかけ、というにはやや断定した物言いにはなってしまったが。当人にその自覚はない。

……微かに手が震えている事さえも。

「はい。少し困ったお願いをされたのでお断り申し上げましたけどね。……その、間桐君、だからね。おじいさんに自分からお会いしない方が、いいと思うよ。間桐君には悪いと思うけど、会うおつもりができるまで待つてみてください。死んではいけませんから」

困ったといわんばかりの顔に、一瞬言葉の意味を取り落とす。

水谷の事だから言葉のままだと言い張りそうだが、死んではいけない……とは、一体。

困惑する慎二のことなど気づいていないのか、はたまた気遣いなのか彼女は話題を変えてご飯を食べ進めていく。

少しだけ迷って、けれども言うべき言葉を見つけられず慎二は適当な相槌を打つてもそもそと口を動かした。

「……そうだ、間桐君。私、明後日は少し来られないかもしれませんが」「ふーん、そうかよ」

「うん。アサシンにはこちらに顔を出すように言ってますから、何かあれば伝えてください」

返事代わりに慎二はフンと鼻を鳴らした。

しかしすぐ様飛んできた刺々しい殺気にぷるりと震えて「わかつたつて」と頷いて、黙り込む。

別に、気にならないわけじゃない。

無理に問いたただすのは、気が乗らなかつただけだ。

決してアサシンが怖いとかそういうのでも、ない。ないっつらな
い。

祖父がどうなっているだとか想像がつかないが、死んでいないというならば、真実死んだわけではないのだろう。祖父は恐ろしい程、人並み外れた妖怪だし死ぬわけではないと思っているのもあるけれど。

生きているからどうなのか、どうなるのか、どうするのかなんて事も想像がつかないが。

ただ、水谷が善意にも近い厚意でもって答えを返す人間だと薄らと理解している。

故にこそ慎二はなんとなく、漠然と思うのだ。

(コイツのそういう律儀なところ、ほんと呆れるよね。……ま、衛宮よりは遥かにマシだけどさ)

それは少しだけズレているかもしれないけれど。

慎二の小さな本心は、曖昧な思考の渦に沈んで本人が見えない深いところへと消えていくだけだった。

「なあ、お前って魔導書は読めるわけ?」

「魔導書、ですか。実際に見たことがないのでわかりませんが、不可能ではないかと」

「そ。……じゃあさ——」

間桐慎二はそうして、響の変わらない様子に安心して疑問を放棄し

た。

どうせ祖父は水谷が帰った後に揶揄をしてくるに違いない。

幾ら水谷響が自分より魔術師として出来るからって、祖父が本当にやられるわけがない。

きっと先程聞いた言葉は、あくまで祖父が使う、あのおぞましい蟲たちをどうこうしたに過ぎないのだろう。

想像とはいえそういう事だと結論付けて、しかしそうではないと知ったのは二日後の事。

今はまだ一欠片も予想していないそれを知ることもなく、間桐慎二は目前の課題のみに意識を傾ける。

それだけが今の彼にとつての全てといっても過言ではないから。

そんな彼を見つつ、水谷響は少しだけ思う。

彼が望んだ事とはいえ、ちよつとやり過ぎてしまっているのだろうか。悪いことをしてしまったのではないかと。

間桐臓硯に行った一連の行為を悪いことと思う事はないが。慎二にはかなり無理をさせているのだけはわかつているつもりだ。

詰め込んで使い物にならなくなるのは避けてはいるが、それでも根を詰めて自分が帰った後も努力しているのに気づいているから。だからそろそろ、と考える。

息抜きも込めて、今度軽く外戦つてに出てみるべきだろうと。

相手は、こちらから頼んでキャスター竜牙兵の使い魔竜牙兵を用意してもらおう。

その対価は少し考えなくてはならないだろうけれども。恐らく直ぐ断られる事はないはずだ。

決めてしまえば後は伝えるだけ。

だが、当日にしようと考えて響はにっこりと微笑んだ。

その笑顔に少し嫌な予感を覚えた慎二は、間桐君なら死に急ぎはしないだろうという信頼を持たれているとは思ひもしないのだろう。

響が帰った後も限界まではせずしっかりと睡眠をとりながらも、ギリギリまで励んでいる事を知られていても、考えていない。

彼が考えているのは、また自分の嫌いな物を作ろうとか考えている

のかという疑惑程度のものだ。

のんびりと食事をする響と慎二がいるリビングから場所は変わり。自室のベッドに横たわった桜は、ぼんやりと天井を見上げていた。傍らにはライダーが座っている。

「……………」

先に食べていていいと伝えてから桜の元に戻ったライダーは、ただ静かに彼女を見守った。

何を考えているのか、問うこともなく。

だが、実際。問われたところで桜は答える事が出来なかつただろう。

自分が今、何を考えているのか。

泡沫のように浮かんでは消えるものを、どうしても留められないでいたから。

だからひたすらに、虚空を見つめる。

そこに答えがないとわかっていても。

「…………先輩」

ふと口に出して浮かべたのは響ではなく、もう一人の存在だった。ここ数日会っていないから、今はどうしているのだろう。

会いたいと思いつながら、忍び寄ってきた眠りの誘いにふつと瞼を落としました。

そうして間桐桜は、彼女にとって幸福な夢を見る。

大事な人たちと、笑い合う。

ただそれだけの夢を。

第三十一話

衛宮士郎は一人新都へと足を踏み出していった。

その片手には綺麗な折り目のついた紙が握りしめられている。彼の行く先。

それはあのいけすかない神父のいる教会——ではなく、教会の少し手前にあるひとつの家。

表道、という文字が彫られた表札を前にして、士郎は躊躇いを見せて紙へと視線を落とす。

「……で、間違いないよな」

水谷の伯母に書いてもらったそのメモは、彼女の祖父母の住んでいた家の住所だ。

詳しい話は聞かなかったが、どうにも彼女はこちらに住まい、学校へと通っていたらしい。

「……………」

小さく深呼吸して、チャイムのボタンを押す。

いてくれればいいのだが、という不安を抱きつつ立ち疎むように人が出てくるのを待つ。

一分か、二分ほどか。

もう一度鳴らそうと手を伸ばして、押し込んだところ。

「……私の眠りを妨げるとは……雑種風情が、何用だ」

とんでもなく不機嫌そうな顔をした美丈夫が玄関から顔を出した。

しかしこの男は、以前教会で見た……………？

何故水谷の住まう家から、と戸惑っていると赤い瞳がすうっと細まる。

「ふん……………貴様か。響ならば居らんぞ」

「は、はあ……………えっと、アンタは……………？」

つまらなさそうな顔でため息を吐く男に、士郎の足が一步下がる。

それでも小さく問いかけたのは、好奇心か。はたまた猜疑心か。

「我を知ろうなどと、雑種の癖に不遜な事を……………いや、しかし、そうだな……………」

微かに慄きながら様子を窺っていると、男はふと考え込むように士郎を眺めた。

頭の前から爪先まで、じつくりと検分するように。

そこにはおよそ感情もなく無機質なまでの冷たさだけを、感じさせる。そんな視線だ。

思わずごくり、と息を飲み込んだ士郎は息を抑えて男の様子を窺う。

前に見たときも思ったが、存在そのものが凄く威圧感だ。

見られているだけでじつりと嫌な汗が背筋に流れていく。

それでも、視線だけはそらせない。

そらした瞬間に、殺される。理由もなくそう思えるほど、男の威圧は鋭く恐ろしい。

「……入れ。この私の暇潰しとなる榮譽を誇るがよい」

フンと鼻を鳴らして扉の向こうに消えた姿に、どうしたものかと躊躇う。

水谷とあの男の関係はわからないが、女性の住まいに勝手に上がるのはという迷いがあった。

しかし、ここには知るために来たのだ。

それに男の正体も気にかかるし、と意を決して門を開く。

「お邪魔します……」

つい声を潜めてしまいつつ玄関を上がり、テレビの音がする部屋――居間へと足を踏み入れる。

真つ先に目についたのは家の主であるかのように堂々とソファに寛ぐ男の姿だった。

「何を突っ立っている？ 早く我に茶を淹れぬか、雑種」

「は……？」

「――いや待て、確か戸棚の下にワインを置いていたか。我にはワインでよいぞ。代わりに冷蔵庫の茶はくれてやる」

顎で使ってくる男に「早くしろ」と促され、士郎は疑問に思いつつもキッチンへと入る。

丁寧に使われているのか、キッチンは綺麗なものだ。

多少調味料の瓶が多いかな、と思うくらいで変わったものもない。人の領域を勝手に荒らすみたいで、それに抵抗感がある他は気になることはない。

気になること、は。

「……花、枯れてるな……」

何気なく見た、窓辺の小さな花瓶だった。

萎びれて茶色く変色し、花卉を落とした花。

彼女なら気づいて取り替えてそうなものだが、もしかしたら家に戻っていないのかもしれない。

だからそれは気になるという程でも、ない。はずだ。

どちらかというならやはり、あの男の正体こそ気にかかるというものの。

「遅いぞ雑種。我を待たせるなど言語道断。次はないと肝に銘じよ。

……もつとも、次があるかはわからんがな」

というかこんなにも俺様な人間が世の中にいるのが凄い。

初めて見たぞ、と少しズレた事をついつい考えてしまいつつも土郎はグラスにワインを注いでテーブルに差し出した。

「ふむ。この酒は中々悪くない。取り寄せた甲斐があったというものだ」

機嫌よくなつてワインを堪能しだした男の変わりぶりに呆気にとられる。

何が気に触れる事なのかも分からないまま少し離れてカーペットの上に座つて、土郎は「……それで」と切り出した。

「アンタは、一体……？」

その身から醸し出される威圧感に怖じ気づきながらも、ぐっと視線を上げる。

——ここで逃げ腰になる方が、よっぽど恐ろしい気もして。

「我が何か、など貴様にはなんら意味もないことだ。あえて言うのであれば響アレの所有者、であるが……雑種に分かりやすく言つてやるならば、ふむ」

アレ、という言葉が指すこととあまりに家の主然とした態度から、

男が水谷の事をどう扱っているのかと窺い知れるというものだ。

気づいた刹那に反発してしまいそうになって、けれど士郎は奥歯を噛みしめる事で言葉を封じる。

今はだめだ、と。感情ではなく理性の端が紐を引いたように。

「この聖杯戦争という兇戯を裁定する者だ。故にこそ、我は寛大な心を以って貴様のような雑種に教えてやろう」

男はフンと鼻を鳴らし、足を組み替える。

その動作はどこまでも様になっていて、同じ男でここまで美しいと思える人間はそうおるまい。

見るほどに同じ人間かも怪しく思えてくるが。

「……アレに聞きたい事があったのだろうか？ 疾く言うがよい。この我が答えてやらんこともない、と言っておるのだ」

早く言えという言葉の圧に、ギリリと噛み締めていた歯をぎこちなく浮かせる。

「水、谷は……あの後、怪我とか……してない、のか？」

喉が、何時の間にかからからに乾いていた。

男に威圧に体が緊張しているからかだろうか。

瞬きさえ覚束ず乾いた眼に、凜猛に喉を鳴らす姿が焼き付く。

「ククツ……」

「な、なにが、可笑しいんだ」

「いやなに、中々どうして面白い事を言うものだからな。アレと貴様は敵であろう？ 無事を確かめて喜ぶのか？」

グラスを揺らしながら男がニヤニヤと笑う。

心底から可笑しいといわんばかりにからかう声音もその笑みも、少しばかり気に障る。

士郎としては真つ当な問いのつもりだったのに、笑われるいわれはない。はずだ。

「別に、まだ敵と決まったわけじゃない」

思わず言い返した士郎に、一瞬呆気にとられた表情が浮かぶ。

そして、次の瞬間には。

「ハハハハハ！ 言うにことかいて、まだ決まっていな、とは！ フ

ハ、フハハハハ——!!」

大笑いにつぐ大笑いである。

「……なんでさ」

思わずそう呟いてしまったのは悪くない、はずだ。

いや。というか、だ。

そもそも話として何故この男はここまで我が物顔で他人の家に居座っているのか。

雰囲気飲み込まれてしまっていたが所有者だとか裁定者だとか、真面目腐って……いや真面目というよりは嘲笑いながら言うような言葉じゃないだろう。

いやなんか、なんかがこう似合ってるから何も言えないが、兎に角可笑しくないか？

「ハハハ……はあ、笑った笑った。道化と呼ぶには些か足りぬが、我を楽しませた褒美をくれてやらねばな」

まだ笑いが収まらない様子だが、多少なり落ち着いたらしく男は一息にワインを呷る。

「まず、響の事だったか。アレの調子ならば問題ない。どころか好調といったところだろう。貴様が敵でない、というならば構わんが、アレは貴様の味方には決してならないだろうと断言できるぞ」

「そんな事……」

「雑種共と違ったものだから、としかアレを形容できまいな。故にこそ理解しようなどと思うなよ。貴様ら雑種如きにアレは御せるものではない」

なんだ、それ。

怪訝な眼差しを向けるが、男は意に介した風もなくつまらなそうにテレビを見てため息を吐き出した。

思わずビクリとしてしまうが、気づかれただろうか。

「まあよい。そこらの有象無象が枯れてしまおうと、我に関わりない事だからな」

不機嫌を全面に押し出した表情。

それが何を示すのかはわからない。

だが、不吉なものを感じざるを得ない表情に、言葉に「何が」と口にしてしまった。

この男なら何かを出来るような、そんな気がして。

「フン。幾ら外殻が大きくなろうとも空木ならば誰かが整えてやらねばならぬだろう。私の役目ではないが、それを望むものがあるならば見届けてやるのも一興というものだろうよ。空木なれど抗い得るならばまだ見るものもある、というわけだ。尤も、有象無象どもには出来まいが」

とぶとぶとワインを注いだ男の唇は、笑みに歪んでいる。

それがひどく恐ろしくて、自然と体が震えた。

いいや。そもそも士郎には震えているという自覚はない。

ただ、大きな生き物に飲み込まれてしまいそうなイメージだけが強烈に浮かんでいただけだ。

「しかし貴様ののような雑種であれ、抗うというならば……ハ、もう少しばかり天秤を調整せねばならぬか。まあ、それもよかろう」

一人納得したように頷いた顔に、グラスが重なる。

震えて体を強張らせる士郎からは赤い液体越しに表情を窺うことは出来ない。

「——愚にも付かない有象無象に出来るのは視えぬ明日を夢見る事だけ。アレに望まれるものが何であれ、貴様らは今という夢の中で精々足掻くがいい。我が正すのは終醒わりまでの道行きだけだからな」

それはどこか遠く、誰に話すわけでもない独り言にも似ていた。

意味を掴むことも、意図を考えることなど求めていない。

そんな、感情のない声音だ。

「貴様にくれてやるものはこれで十分だろう。これ以上のものを欲するならば、我に相応しき物を献上する事だな」

コトン、とグラスが置かれた音に硬直が解かれたように散漫とした意識がハッキリとする。

完全に雰囲気飲み込まれていたと、ここにきてようやく自覚した。

男の言葉はよくわからないままだ。

ただひとつ確かな事は、眼前の男がこの聖杯戦争において何かしら関わりがある事だけ。それも、この家に住まう少女に深い関わりがあるようだ。

「……………」

深呼吸をひとつ。思考を巡らせて、乾いた空気を飲み込む。

そうして、意を決して口を開く。

「…………とりあえず、ありがとう。アンタは、だが…………結局のところ、なんなんだ」

最初の問いに帰結した士郎に、男はソファに寝る体勢を整えながら鼻を鳴らした。

流すように向けられた視線は変わらず冷たい。

だが、それでも…………それだけは、明確にしたかった。

この男は倒すべき相手なのか、否か。

「ハッ、我から見れば貴様なぞ塵芥に等しいが——貴様にとっては響共々『敵』だろうよ」

ガチリ、と奥歯が軋む。

殺意も向けられずただ淡々と口にされた言葉。

それだけなのに、ひどく恐ろしい。

——けれど。敵だというのであれば。

「…………邪魔をしたな」

この男は、きつとどうにかしなければいけない相手だ。

男の正体がどうあれ、敵対した先にどんな明日が待っているとしても。

水谷をこの男から引き剥がして、聖杯戦争という戦いを、終わらせなければならぬ。

それが自分に来るとは限らないが、幸いな事に衛宮士郎にはセイバーというサーヴァントと、協力者である遠坂凜がいる。

ならばきつと、何かは出来るはずだ。

決意したように背を向け、部屋を出ていく士郎の背中を男は眺めて。

それから小さく、フンと鼻を鳴らす。

「余興程度になればよいが」

耳に玄関の扉が音を立てたのを聞きながらそう呟き、欠伸を零した男——ギルガメツシユは、邪魔をされたうたた寝の続きをすべく瞼を閉じた。

脳裏にはこの先に起こる事を思い描きながら。ゆつたりと。

第三十二話

「響」とかけられた声に振り返り、水谷響は首を傾げた。

それを見ながら金色の王、ギルガメツシユはクイツと顎を動かすことと言いたい事を示す。

彼が示す先には、深い森が広がっていた。

広く、深く、静寂の支配する薄暗い森。

そこそは、聖杯戦争において始まりの御三家たるアインツベルンが一時的な拠点として置かれた場所。

かつて一度二人と、それからもう一人と共にやってきたことのある場所だ。

響にとつては一瞬の事で、ギルガメツシユにとつてはそう面白いとも思わなかった場所のため思い入れ、というものはないに等しいが。

「……本当に、やるんですか?」

困ったような笑みで最後の確認とばかりに響が尋ねる。

赤い瞳を眇めた英雄王はその言葉にフンと鼻を鳴らして「くどいぞ」と切り捨てた。

あまりにもバツサリとした肯定に少女はやれやれだと肩を竦め、隣に立つ男を仰ぐ。

「ランサー、この戦いに向けて正式に私のサーヴァント、という事になったわけですが……調子はいかがでしょうか?」

「おう。問題ないぜ。お前がマスターなら、あの狂戦士相手でもそれなりにやれるだろう」

「そうですか? アーチャーとの戦いでも問題なさそうでしたし、良かった」

ほっと頬を緩めた響に頷き、男は……ランサーは朱槍を軽く回して好調を示す。

その顔色はきたる戦闘に爛々と輝き、先日も戦って大きな負傷の末の勝利を頂いたようには見えない。

どころか、闘気に満ち溢れている。

その事に安堵した響はそつと2面の令呪を撫でて、小さく息を吐き

出すとひとつ頭を振る。

言峰が何のためにランサーのマスター契約まで自分に変えさせたのかはよくわからないが、彼らはそれぞれ楽しそうにしているからたぶんそれでいいのだろう。

深く考えたところで戦いに関して響に出来る事はそう多くないのだから。

「そら、行くぞ」

勝手知ったるといわんばかりに堂々と踏み入るその後を、二人は並ぶように追う。

——その気配を、この土地の管理者たるイリヤスフィールがわからぬ筈もなく。

険しい顔をした少女がメイドの声を背にして黄昏の闇に沈む西日を睨みつける。

「バーサーカー」

冷たく硬い声が、サーヴァントを呼ぶ。

瞬間、黒い巨軀がその傍らに膝をついた。

それを見ないまま少女は厳かに、ただ命じる。

「迎え撃ちなさい」

その視線の先の森を、一直線に貫くように飛んできた杖にも矢にも似たなにかを巖の如き肉体が受け止める。

何を投げたのかは知らないがバーサーカーにはこの程度の攻撃など効きはしないと、小さく嘲りを浮かべようとして。

しかし、その目を驚愕に見開いた。

「!!!」

咆哮のような声を轟かせ、心臓を貫く槍をバーサーカーは一息に抜き去る。

そうしてそのまま槍を森へと投じて、地面が抉れる程に足へと力を込めた。

ゴウツと風を唸らせて真っ直ぐに飛びゆく軌跡を追うように、巨影が遠のいていく。

胸に空いた風穴が塞がりかけながらも侵入した敵へと向かうその

背を見送り、イリヤは固く唇を引き結んだ。

「バーサーカーは最強なんだから。……何が側にいるのか知らないけど、貴女には負けないわよ。ヒビキ」

逃げ惑ったあの夜にこれで一矢報いたと思うならばそれは思い違いだ。

たった一度バーサーカーを殺しただけなのだから。

故に、小さく残っていたらしい悔りは消し去ろう。

一度とはいえ、投擲によつて最強のサーヴァントを殺しせしめた英雄を。

それに力を与える正式なマスターになったららしい水谷響を。

約束したように、最大の敵として叩き潰してみせよう。

完膚なきほどに跡形もなく。

「——では、ランサー」

「おうよ。お前は金ピカ王から離れるなよ」

「ええ。どうぞ、全力で戦ってきてください」

森を突き抜けるような槍が目の前で金色の波紋に沈むのを見届けながら、二人は対照的な笑みを互いへと向ける。

獣のように獰猛な笑みを。

穏やかな微笑みを。

「ヤル気満々ってやつ、だなアおい！」

二人が同時に地を蹴った瞬間、轟音と同時に土煙が立ち上った。

ギルガメッシュにお腹を抱えられた響は風に煽られる髪を押さえつけながらランサーへと支援を施す。

「ツ!! ……かつてえな！」

しかしその支援を受けてなお、朱槍は届いていないようだった。

振るわれる大剣を躲し、僅かな隙を縫うように槍を振るえども傷にはならず。

まるで、この槍では力不足だと言われているようだ。

それでも。

「距離は、十分……」

眩き、ランサーは朱槍へと魔力を滾らせる。

宝具の予兆を感じながらも、バーサーカーは更に一步を踏み入れ――

「刺し穿つ死棘の槍――!!」

常人の目には止まらぬ程速く、朱い軌跡だけが響の視界で踊る。

そうして、次の瞬間にはその穂先が。

「――!!?」

「ツハ、とりあえずこれで2回目、だ。　なア、楽しもうぜ、ギリシヤの英雄とやら!」

要塞と言い変えていいほど隆々たる肉体に、深く。

背中から心臓へと、必中の槍は深く突き刺さっていた。

大剣が横薙された剣圧により木々が揺れる中で、クー・フリーンは歯をむき出しにして笑う。

殺したのを誇るでも、槍が届いたのを喜ぶのではなく、ただただ楽しそうに――愉しそうに。

肉を削ぐように槍を引き抜いたランサーの足が、微かに浮き上がる。

その刹那、背後へと幹のように太い足が、踵が天を衝くように空を切った。

「フン……」

小さく、ギルガメッシュが鼻を鳴らす。

いや、本当にそうだろうか。折れた大小様々な枝木が倒れる音がひどいから、気のせいかもしれない。

というかそろそろお腹を抱えるのは止めてもらえないだろうかと呑気に考えつつ、また距離をとった二騎の姿を響は捉える。

「治癒の魔術、と……」

数分にも満たない攻防の全貌は、わからない。

だが確かに一度ランサーはバーサーカーを殺した事だけハッキリしている。

反撃の足蹴では傷という程深いものはないようだが、それでも逐一

治していくべきだろう。

ギリシヤの大英雄、ヘラクレス相手にそれで足りるとも思えないけれど。

「——ううん、ルーン魔術も面白いものですね」

何はともあれ自分に来るのはどこまでいっても支援だけだ。

本日何度目かのため息の後に、ポツリと呟く。

聞く者によつては呑気すぎると苦言を呈する発言だが……実際、激しい戦闘を前にしてもやや緊張感が薄い。

ギルガメツシユは呆れたようなため息を吐きながら抱えていた体を離れた。

いきなりの事に「わっ!？」と驚いた声を見下ろして、腕を組んで肩を落とす。

「お前ならやろうと思えば使えるだろう」

「ええ？ いや、確かにできない事はないでしょうけれど……でも、私が使いたいわけではないです」

「それはそうだろう。それで粗悪な魔術などを使いたがるのはわからんが」

「粗悪って、……もう」

そんな事を聞いては魔術師たちがどう思うものか。

苦笑しつつ咄嗟についた手の泥を叩き、裾を払う。

王様は呆れ顔をしているが、誰が汚したのだからため息をつきたいのはこちらの方だと響は思う。

それも状況からは些かズレた考えだが、残念ながら当人は真面目にそう思っている。

「そら、早くアレの傷を癒せ。腕が飛びかけているぞ」

「えっ？ ……ああ……中々こう、すごい事になってますね」

僅かな間目を離れただけで、状況は目まぐるしく変化しているようだ。

言われた通りに視線を向けながら、ハサンに流している魔力を少しだけ削りつつ治癒を行う。

地響きにも似た勢いで木々が大剣で薙払われる中、ランサーは硬化

してなお扱られた腕で倒木を利用しながら戦っていた。

飛んで、屈んで、また飛のいて。

ハッ、と笑うような息が口の端から溢れる。

(こいつア、楽しい殺し合いだな。殺しても斃れない、なんて——どこまでも死力を尽くす事ができる戦いに胸が踊るってもんだ)

アーチャーとの戦いも悪くはなかったが、と脳裏に先日戦いを微かに浮かべて、しかしすぐに掻き消す。

戦闘に勝った。それだけが結末で、今はただ目の前の難敵との死闘が全てだ。

骨を折られようとも即座に治してくれる存在もいるからこそ、楽しむ時間も長くなる。

長くも刹那の戦いを、どこまでも。

(これこそ渴望していた死闘だ)

形振りなんて構わない。

出し惜しみなくルーンを、槍を、全身を余すことなく用いてまた一撃。——そら二撃！

これで三度殺しせしめたぞ！

心臓を貫いた槍が持つていかれないように素早く引き抜いて、口の中の血を地面に吐き捨てる。

狂戦士はグツグツと煮え滾るように再生しながらもこちらを見据えて。

「ガヒュッ」

これはまた、重い一撃をくれたものだ。

暴れ狂うような勢いに任せ戦いから転じて、理性的にも見える腰の入った拳が脇腹を掠めただけで中々に響く。

ルーンと響の身体強化をしてもやや劣勢といった展開に、更に滾ってくる。

この痛みもいいスパイスだ。攻撃を見切りつつあるのも、槍自体を弾く肉体へ変化しつつあるのも戦い甲斐がある。

だが、その程度の変化で負けるつもりはない。

「突^ゲき、穿^イつ——」

木を駆け上るように踏みつけて高く飛び上がり、先程より魔力を込めた、しかし投げ構えをとった一撃を。

「死翔^{ポル}の槍^クッ！」

避けるためか、追撃のためか。

瞬く間に近づく巨体へと手から滑り落とすように、或いは突き刺すように放つ。

「——、——ッ——!!」

肩から心臓を貫き、巨体が墜落する。

「うおっ!？」

しかし、ランサーの視界は急にがくりと揺れた。

それはほんの刹那の瞬間に弾き出されたバーサーカーの行動が、ランサーを掴み力任せに引いた故に。

そして、次には。

ドオオ——オン

土煙と轟音が森の一角で立ち上った。

第三十三話

広がる土煙にげほっ、と咳を零す。

続けて何度かむせて、涙混じりになる目をやつとの事で薄く開く。

はじめに響の視界に映ったのは、金色の波に沈む盾の影だった。

それから目を凝らし、意識を研ぎ、先の様子を確認をする、と。

落窪んだ地面の中から「ヒュー……ヒュー……」とか細く呼吸するランサーの姿が。

それから、槍に縫い留められたように空を仰ぐバーサーカーの肉塊が、確認できた。

視認ではない。ただ情報として見えたそれは、しかしすぐに肉体の再生をはじめた。

「そら、戻せ」

耳に届いた言葉に、わかっていると小さく頷く。

英霊としての霊核が無事なれば、直ぐにとは言えないが肉体の損傷を戻す程度なら可能だ。

バーサーカーの再生が終わる前に出来るだろうかと首を捻ってしまうが、無理でもランサー自身の戦闘能力で動くだろう。

そう判断した通り、血で染まる青い槍兵はゆらりと立ち上がった。

「ハ」

これで幾度目か。

吐息のように吐き出した笑いを零して、目を眇める。

血で滲んで見えづらい。……そう考えたら、瞬きの間に消え失せた。

思考を読み取って優先順位を決めているのか、と呆れに近い感謝を送りつけて一步を踏み込む。

——それは、胸に穿たれた槍を抜き捨てたバーサーカーも同時だった。

「——！！」

拳が、双方をめがけて空を裂く。

唸るような、突き刺すような勢いで。

「ガッ、ツ——ラアッツ」

真正面から受けるには、分が悪い。

だがそれでもランサーは歯を食いしばりかろうじて頬で受け、顔を横に向ける事で僅かにでも流す。

そうしてその手は分厚い巖を貫き、拳をその腹の中へと押し込めていた。

「凍り付けッ」

一言。

口の中で転がしただけの言葉は、しかしその真価を示す。

「ッ——!？」

拳がズルリと引き抜かれた腹の穴から茨のような氷が咲いてゆく。蔓を掴もうとした手さえも凍てつかせ、巨躯を覆い尽くす。

僅かな動きさえも留めるように。阻むように。その芯まで氷の棺へと埋める。

「これでいっぺん……仕切り直し、だ」

己の朱槍を手元へと呼び戻し、地面へとうちつけて息を吐く。

同時に癒やしのルーンとマスター響の力で傷が引いていくのを感じる。

僅かに体を休めるその姿を、油断とはとれまい。

戦士としての警戒を怠る事なく視線を敵に向けたままなのだから。

「フウ——」

深呼吸するように、数度長い呼吸を繰り返す。

その間にもランサーは思考を巡らせる。

——バーサーカー、真名をヘラクレス。ギリシャの大英雄とされる存在は、なるほど聞きしに勝る豪傑だ。

狂化してなお卓越した戦いぶりは驚嘆に値した。

十二の試練、功業を越えしその身は、十二回の死を乗り越え立ち上がる。

響による反則じみた裏技で手に入れた宝具の内容情報ではあるが、ここまで六回。

残る六回、どうやってこの英雄を殺したものだか。

ピシッ、バキッ――

内からの熱で溶け、身じろぎでひび割れていく氷を見ながら、クツと喉を鳴らす。

「ま、限界までやるだけだ」

あれこれ考えたところで、小手先だけの策はこの手の相手に通用しない。

だからこそ事前策は幾つか考えてきたわけだが……さて、残る手札で何回殺せるだろう。

少なくとも二、三回はいける、か。

ギルガメツシユは響をこの戦いで死なせるつもりはないようだから、後ろを気にする必要もない。

だから、ああそうだ。

もつともつと、先程までよりずっと、楽しまなければならぬだろう。

感覚を研ぎ澄まして、無駄な思考を削ぎ落とす。

極限まで神経を張り詰めさせる。

――そうして見えてくる世界は、何時だって鮮烈だ。

空気を震わせる咆哮。

デタラメに見えるようで、しかし確実に逃げ道を塞ぐ木々の嵐。

槍で心臓を穿たれたながらも岩の如き大剣で自身を傷つける事も厭わぬ一撃。

今度こそもつ^千つ^切ていかれた^た腕は、しかし瞬きの間には元通りに戻されて。

そうして戻った指でルーンの小石を弾き、その皮膚を爛れさせる。塞がれた傷口に抜き去ることを阻まれた槍を、柔らかくなった肉から引き抜く。

しかしあと何度、その心臓を貫き穿つ事ができるだろうか。そろそろ通りが悪くなってきたし、次はまだ切っていないルーンを使うべきだろうか。

頭の隅で算段をつけながら、腐食した肉体を再生しながらも動く

バーサーカーへと更にルーンをもって動きを留め殺すべく朱槍へと魔力を迸らせる。

——幾度となく一進一退の死闘を繰り広げる二騎。

それを見守っていた響とギルガメツシュだが、このまま何もしないでいるつもりはない。響は支援を施しているのだが、それはそれとして。

「そろそろ頃合だろう」

「……そうですね。ランサーももつと大盤振る舞いをしたいそうですし、行きましようか」

念話で短くやり取りをして、ギルガメツシュの言葉に頷く。

ランサーとはこれで別れることになるかもしれないが、しかしやるべきことが変わりなどしない。それが契約なのだから。

『ランサー』

『おう』

『令呪に願います。巖さえ砕く力を、貴方に。……そして、その力でギリシヤの大英雄に勝利してください』

『——おう』

令呪による強化の力が全身へと駆け巡る。

最早肉を裂く事さえ敵わなかった朱槍が、肩の肉を抉るように穿つ。

いよいよ大詰めだ。

遠のく気配を感じながら、ここまで温存していたルーンの小石を弾く。

「よそ見してるようなら」

突進するかのような動きを見せたバーサーカーを阻むように小石が転がる先から枝木が伸びていく。

急速に生い茂り、絡みつき、縛りつけるように。

しかしその程度で阻めるものかといわんばかりに、巨体が大地を蹴り飛ばす。

直線上にはランサーがいる。だが、先をゆこうとする彼女を殺そう

とする理知を、その瞳に見た。

己のマスターに危機が及ぶ可能性を察したのか、はたまた逃げるから殺そうとしているのか、彼女ではなくあの男を警戒したのかはわからない。

だが、関係ない。刹那の隙を見逃すものか。

「――殺す」

自分は戦士だ。出し惜しみなどするつもりはない。
だからこそ、後はただただ残した力を注ぎ込むだけ。

「――!!!」
たとえば自身が作り出した火の海の中で戦うのだとしても、この血肉が動く限り戦い続ける。

「――!!」

燃え盛る猛火が、双方の身を焼きながら森を侵食していく。
どちらかが倒れるまで、あるいはどちらも死ぬまで、焔は燃え続ける。

戦いに、声はない。

重く何かがつかり合う音が、ごうごうと燃えあがる火の音に混じって森に響くだけだ。

やがてそれに別の音が紛れ込み、次第にその音を大きくしていった。

ザアアアと最初は細く弱い音が、大きく広く戦場へと降り注ぐ。

森を包むような雨の中、二騎の姿はしかしどこにも見当たらない。

むせ返るほどの黒煙も勢いをなくして鎮み込んで雨と煤けた臭いを残すだけだ。

何も動かない、誰も足を踏み入れない戦場の跡。

微かに金属が何かにつかるような音がして、雨音に消え入る。

音の発生源では、確かに誰かが存在したような大きく窪んだ地面が。

その周囲は何かが降り注いだかのように幾つもの穴とも窪みとも言える亀裂が広がっている。

……よく見ればその穴のひとつに、黒いものが転がっていた。

「……………」

天を仰ぐそれから、息さえ殆ど聞こえない。

全ての力を無くしたように不格好に倒れたその肉体が、徐々に崩れている。

解れるように、溶けるように、彼は——ランサーは消えていく。

傷と火傷を負った顔を満足げな微笑みに歪めながら。

「……………」

ああ、と瞼が落ちる。

バゼットというマスターに召喚されてからここまで色々であったものだ。短いようで長い日々が脳裏を過ぎていく。

彼女を殺してマスターにすぎ替わった言峰の野郎だとか、ギルガメッシュだとかにはかなり思うところはあがるが。

……年若い少女今を生きる人間である響に、最後の力を振り絞って言葉を送る。

たとえば彼女がどんな存在であれ、ものであれ。己が伝えるのはただ一言。

『たのし、かった、ぜ』

全力を出せる戦いを詠えた少女に、感謝を。

最終的に満足が出来たのだから別れを惜しみはしない。悔いることもない。

だから響にかけた願いは、叶うだろう。

——俺が勝ったら、笑えよ。俺の勝利に、笑え。

第三十四話

黒煙が天高く空へと手を伸ばす中、城の門前で響はどこか物珍しい様子でその威容を見上げていた。

こんなものだったろうかと過去の記憶を懐かしんでいるようでもある。実際、こんな感じだったかと思っっているので間違いない。

「こういう時はお邪魔します、でいいんでしょうか？」

「知らん。お前の思う通りにしろ」

「うーんそこで丸投げもどうかと思いますけど。……では、とりあえず」

ひとつ頷いた響は「ごめんくださあい」とにこやかに笑みを浮かべながら、扉を開く。

隣ではどうにも呆れた気配がするが、気にせず城内へと足を踏み入れる。

「よく来たわね、ヒビキ」

それを真正面から迎えたイリヤスフィールは軽やかに微笑んだ。同時に、背後にいるよくわからないもの共々殺すべく魔術を行使する。

だが、放たれたそれは響の体を貫くことなく眼前で霧散した。そんなものは無かったように呆気なく。

「お久しぶり、という程でもないですが……こんばんは、イリヤちゃん。今日はあなたと戦いに来ました。とはいえ、挨拶もなく先制攻撃をしてみましたわけですから」

「貴方達が森に入った時点でわかっていた事よ。なら、挨拶なんて不要じゃないかしら？」

「ふふ、そう仰るならそうなのかもしれませんね」

攻撃などなかったかのように少女たちはくすくすと笑い合う。その表情に敵意は見られない。

だが、それだけだ。敵意でなくても、戦う意思はある。

「バーサーカーが戻ってくるまでに、貴女を殺してあげる」

「貴女を無力化してしまいましたが、恨まないでくださいね」

二人の間で張り詰める空気に、金色の王は一人腕を組み愉しげに目を細めた。

ギルガメッシュからしてみればこんなものはただの茶番だ。勝手に動く人形同士が遊んでどちらかが動かなくなるだけの、ままごとのようなもの。

それでも確かな意思がある故に茶番劇としては悪くない。

見物するように壁に背を預けたその姿に一先ず男に対する判断を先延ばし、イリヤは手を振り上げた。

途端、空中に編まれた使い魔が剣へと変じ、振り下ろされた手を合図に舞い踊る。

響は動じることなくそれを見上げ、足を踏み出す。

ただ歩くだけの隙だらけな姿に飛びかかる剣が響の頬を、髪を、足を、腕を裂く。

「っ……っ！」

そうして使い魔を放ち、剣を操りながら違和感に眉を寄せる。

いいや違和感どころではない。これは。

「貴女の肉体、もう人から逸脱しているのではない、かしら……っ！」

「ふふ、そんな事はありませんよ」

槍のように鋭く細い鋒が、腹の真ん中を貫いた。

しかし、肉を貫いたはずのそれは地面に落ちる事もなく吸い込まれるように消失していく。柔い肉に取り込まれるかのように、閉じた穴の中へと溶けるように。あるいは、本当に消えてしまったかのように。

傷口を閉じた腹から溢れた血も、服も、傷など残っていない。

貫いたという確かな証は床に散った血液だけだ。それでも、人であることは違いないと淡く微笑みさえする響に、イリヤスフィールは僅かに足を引く。

近づいてくるその姿に一瞬だけ判断に迷いが生じた。

「ただ確かに」

くすりと笑う声がする。

それは刹那にも満たない隙。

しかし瞬きひとつの間に、ふつりと糸が途切れた。

「私は人よりは物に近いですから」

仕方ないですねと世間話のような気楽さで謳い、掌を貫く銀糸をすりと抜き取る。

周囲に落ちた銀糸と針金を踏みながら足を進めた響は、固まったように自身を見上げるイリヤへと手を伸ばす。

「イリヤちゃんとは少し、似ているのかもしれないね」

両手で円やかな頬を優しく包み込む。

そうして微笑まれてしまえば、何故だがひどく感情が揺らいだ。どこか、森のざわめきにも似ている。

イリヤはそれが何か、理解できない。理解できるようなものではないのだろう、きつと。

だから。

「だから」

指先が優しく鼻梁をくすぐって、目尻を撫でる。

けれど、抵抗しようとしても力は奮えない。いやこれは、むしろ。

「無効化レジストされて——っ、違う、これ、は……」

覗き込んでくる眼がキラキラと輝く。万華鏡の如く変化するように同じ色はなく。

本当は、どうだろうか。イリヤの視点からはそう見えるだけで、違うのかもしれない。

それとも、ああこれは、視認できる程の魔力？ 何も感じないのに。

何も。何も、知覚できないのに。

吸い込まれるように、見入ってしまう。魅せられて、しまう。

「貴女のそれは、いただいでいきますね。物の序で、というものです。

……と、おや？」

ぱちりと瞬いて、響は円やかで小さな顔から手を離す。途端に眩んだようにゆらりと傾いだ幼い体を抱きとめて、苦笑みを浮かべた。

どこか悪びれた様子で華奢な体を支えてギルガメッシュを振り返るが、金色の王は興味が失せたように欠伸をこぼしている。

どこまでいっても好きにしろというその態度に困らないでもないが、響としてはちようどいいのかと思ひ直す事にした。

「あまり、見過ぎてはいけませんよ、イリヤちゃん。私にはアインツベルンの願い貴女の負った責務は叶えられません、貴女に束の間の夢を与えるくらいはしてあげられますから。どうかその泡沫を恨まないでくださいね」

囁き、呆然と遠くを見つめる瞳に手をかざす。

ゆるゆると瞼を閉ざしていくのを確認すれば、糸が切れたように力が抜けてかくりと首が動いた。

「やっ」

小さな体を抱き上げて、上階に視線を巡らせる。

それから背後のギルガメッシュを見てみるが、顎を動かして構わない、行けと言われているようだ。

ならば迷う必要もないか。そう心の中で呟いて、ホールの大階段を上がつていく。

その途中で何かを思いついたように響は大きく口を開いた。

「えーと、すみませーん。メイドさんがた。イリヤちゃんを休ませたいのですが、どちらのお部屋に連れていけばよろしいですか？」

返答は、ない。

しかし階段を上がりきり、一步、二歩。

——ヒュツ

三歩目を踏み出そうとしてピタリと静止したその視界に、鈍い金属の輝きが広がっていた。

ハルバードといえればよいのか。斧の穂先を突きつけられた響はこてんと首を傾げる。

「……イリヤを離せ」

無表情ながらも睨みつけてくるメイドに、瞬きを返す。それから言うべき言葉を迷って、素直にはいと微笑む。

離せ返せと言われなくても、響としては当然そのつもりだ。だが、彼女が、彼女たちが警戒するのも当然だという認識は持っている。

だから響は微笑んで、敵意はないとアピールするように自然体で返

事を返す。

「はい。貴女は……武器が邪魔でしょうし、後ろのメイドさんにお渡しすればよろしいですか？」

斧から少し離れるように一歩を引いて振り返る響に、その背後で今にも飛びかかってきそうな形相をしたメイドが動きを止める。

そうして見つめ合った数秒後、彼女たちは警戒心を残したままどうぞと腕を上げた中に収まっていた主を受け取った。

無言でイリヤを守るようにそのまま距離を取るメイドと無表情なメイドに「では、外の勝負もつきそうですからこれで。イリヤちゃんによるしくお伝え下さい」とお辞儀と共に挨拶を残し、響は階段へと足を下ろす。

とん、とん、と軽やかな足取りで少女が去っていく。

それを見やるメイド——セラの胸中は何んとも形容し難いもので満たされていた。

イリヤ主からは戦いに関しては手出し無用だと命じられている。だがそれでも、ここでこの女敵を逃してもいいものだろうか。この、ちぐはぐとした違和感だらけの存在を。

「これでよろしかったですか？」

「フン。つまらん結末ではあるが、貴様にしては上々という事にしてやる」

「あはは、ありがとうございます」

くすくすと笑う背中には既に階下にあり、遠いはずなのに耳元で聞こえてくるような錯覚がある。

どうしてだろう。何故だろう。何故、何故その姿が近く、しかし遥かに遠く思えるのか。汎然とした距離感には違和感からやがて嫌悪へと変じていく。

だがそれは、響にとっては関係のない事だ。

聖杯戦争にも影響の少ない感情思。

故に少女は振り返る事もなく、アインツベルンの城を去っていく。

「……ああ、終わったんですね、ランサー」

ポツリと呟いて響が微笑む。

その顔を眺めて、ギルガメツシユは目を細めた。

赤い瞳が視る先。それはきつと、そう遠くない結末なのだろう。けれど響は彼の瞳に視えたものを確認する事はない。確認したところで響は受け入れるだけだ。

だが、金色の王が求めているのはそうではないと知っている。求めに応じるだけでは満足し得ないのだと知っているからこそ。

「——ギルガメツシユ。明日は間桐君のお勉強に行くのでご飯は作り置きしましょうか？ それとも、言峰さんのところで食べますか？」
別れの挨拶を済ませて、響はあつさりと日常を口にする。それは望むところなのかさしてどうなのか、ギルガメツシユは鼻で笑い飛ばした。

楽しめるならばよい、と。そういうように。

第三十五話

何だか変だぞ、と間桐慎二が気づいたのは響にひとつのビルを指さされた時だった。

昨日は一人で黙々と提示された修練を熟していた慎二は、アサシンから明日は新都に来るようにと告げられてバスへと乗り込んだ。

バスに揺られること数十分。新都の駅前に着いた彼はライダーの耳打ちによってある一点へと視線を向けた。

「水谷」

どう声をかけたものか、悩んだ末に刺々しい声で呼ぶと彼女はくりりと振り返ってよかったといわんばかりに微笑む。その笑みも、思い返せば含みがあるように思えて仕方ない。

とはいえその時点で間桐は特別何も思うことなく近づき、息抜きだと言われたのを真に受けてとりあえず適当にぶらつく事にしたのだった。

水谷とこうして出かけるのははじめての事だし、普通に他のやつと同じ事をするのなんてつまらないよな、なんて考えたり考えなかつたりしつつも二人はウィンドウショッピングを楽しみゲームセンターへと向かった。

はじめて来る場所だからと楽しそうに、そして物珍しそうに見て回るものだから見栄を張ってクレイジーゲームなんて楽勝と息巻いた間桐は、惨敗を味わっていた。

「なんつで取れないんだよクソ！ アーム設定おかしいんじゃないか!?!」

「頑張れ間桐君。ほら、今ちよつと出口に寄つたしもうちよつとじゃない?」

チャリン、と硬貨を投入しながら笑顔で促され「もうやめる!」なんて言えそうもなく。

結局九度目で取つた間桐はやや疲れた様子で肩を竦めてみせた。

無駄に得意げな顔をしているのが小憎たらしいと霊体化したハサンは呟いているが、響にしか聞こえていない。

「つたく、手こずらせやがって……!」

「ふふふ。お疲れ様です、間桐君」

プリンと怒りを振りまきながら取れたぬいぐるみをもふつと押し付けてきた間桐に感謝の言葉を述べる。当然みたいな顔で「はいはい」と頷いてまだ文句を言っている姿にハサンはこいつは本当にと仮面の下でじつとりとした視線を送った。

その視線を感知してか慌てたように視線を巡らせ、やや考えた末どうせまたアサシンだと結論づけて間桐は頷くが。それは嫌な慣れというものである。

それでいいのかと思わないでもないライダーだが、慎二だし構うまいとか思っているので、結局ツツコミを入れられる者にはいないという事だ。

唯一ツツコミに回れる間桐慎二がこの通りなので恙無く時間は経過していくのだった。

そうしてとつぷりと日のくれた冬の宵口。

人気も疎らになりつつある街の一角で、響はひとつのビルを指差す。

「では間桐君、あそこのビルで戦える場を整えましたので、どうぞ頑張ってください」

「はあ?」

そうして冒頭に繋がり、今の言葉が送られたわけだが。本当にいきなり言われたものだから心の底から困惑した声である。

いや、はあ?　しか言えくない?」

チキ。とわざとらしく耳元で鳴らされた音にビビりつつも慎二はできるだけゆっくりと水谷の顔を確認した。いつも通りの笑顔だ。

「人払いは出来ているようですし、何階までいけるか楽しみにしてますね」

「——いや、いやいやいや、水谷、もうちよつと説明しろよ!」

「へ? ……あれ、可笑しいな。私、ご飯の時に言ってなかった?」

まったく何も聞いていないが。そう返すと彼女は本当に言ったつもりだったらしく困った顔で数度瞬いて、少ししてから「ごめんない」と眉尻を下げた。

そんな水谷にまたチキチキ音がするから背筋が冷える。マスターならサーヴァントの行動をどうにか抑えてほしいものだ。手を組んでるのだから。

「ごほん。それでは少し、説明しますね」

響はこう語る。

キヤスターと接触していたので、指定されたビルを突破する事で勝敗を決そうと。突破する事が出来たら潔く負けを認め、響の出した条件を飲む。逆に突破出来なければそれはそこまで、という話だ。

ライダーと共に頑張ればそれなりに行けるでしょうと言うが、いや待て。

「可笑しくないか？　そこでなんで僕なんだよ」

「え、それはだって……いざって時に魔術が使えないのであればそれまでではありませんか？　間桐君。私だけだと行けますけど……」

実戦を積むというのは大事だし、才能がないと認めて諦めてもそれは無駄にはならない。経験、というのはそういうものなのだから。

少しだけ遠回しにそう言いかけて、響は黙り込んだ彼の背を軽く押した。そうしてライダーへと目配せし、頷く。

「それでは、いってらっしゃい。私は少し遅れてから入りますから。腐らず最大限頑張ってね、間桐君」

軽く手を振って二人を見送った響は気を取り直し、ビルの裏手へと向かう。

搬入口から侵入し、非常階段を使って上へ上へと。その足取りを邪魔をするものはなく、屋上付近の階まで進んでいく。

一気に上った事で息切れはしているが、それも数度深呼吸をすれば消え失せる。そうしてビルの屋上のドアを開いて笑みを浮かべた。

「ごんばんは、メディアさん」

「ええ。ごきげんよう、ヒビキ。……たった半日会わないだけで、随分と変わったわね」

「ふふ、気の所為にしておいてください」

響の様子に肩を竦め、キヤスターは椅子を作りそこへと座った。向かい側に作られた同じ椅子に響も座り、二人は階下で行われている使い魔と間桐、ライダーの戦いを見つめる。

見るというのも、比喩的なものだ。キヤスターは自身の支配下に置いたビルの様子なら手にとるようにわかるし、響は響で特異な力があるからこそ視認出来ずとも情報が入る。

故に二人はスポーツを観戦するように雑談をはじめた。

「あ、今のは痛いです」

「避けそこねて足がもつれたのね」

「脛を強打は中々辛いですよ」

二人のように見えないハサンはそれを聞きつつ、じつと足元を見る。正確には微かに伝わる振動を感じ取っているのだが。

——一方の間桐慎二はゴロゴロ転がされながら悲鳴を上げていた。転がした本人であるライダーは足元を気にせず、次から次へとやってくる骨の使い魔たち相手に獲物を飛ばしたり殴り壊したりと忙しく働いている。

「シンジ、それでは実力を証すことにならないのではないですか」

「つうる、さいなあ！」

致命傷を負いそうなところを眼前に飛んでいった鎖が弾いて助けられた事を理解する。

慎二はどうか起き上がり、ライダーの投げたそれを持ち上げ……ようとしてあまりに重いものだからすぐに手放した。コイツよくこんなのを軽々しく振り回してるな。

サーヴァントというものに対して少しでも認識を改めてやろうと頭の隅で考えていた彼はまた室内を転がされていった。

——やっぱ今のナシで。

とまあそんな一人と一騎を眺める響とキヤスターがくすくすと笑い声を上げた。間桐君らしい頑張り方なものだから、つい。とは響の眩きだ。

「でも、良かった」

そうして話している内に、ふとキャスターが苦々しい笑みを浮かべる。言葉と反するその表情には思わず首を傾げてしまう。

何を指す言葉なのかそれだけでは掴めない。

彼女が良いと思えそうなところなんてあつただろうか？ 間桐を連れてきた件は響から頼んだことだが、彼女としては関心が薄いといえれば薄いはず。なら他の事はというと、ハサンとは仲良くしてくれてるからここにきてわざわざ言う事でもない気がするし。

「あなたが、……あなたのままで居てくれて良かった、と思ったのよ、響。今のあなたは半分偏っているようだけど、それでも人であるなら私だって嬉しいわ。——あなたがどう感じるかはわからないけど」

本音ではなく嘘だと思うかと言われたら、そんな事はない。響は彼女の言葉を素直に受け止めていた。

彼女が言いたい事は、今ので少しは汲み取れたつもりだ。だがそれは、杞憂であると響は笑う。

「気づかれたのは柳洞寺にお邪魔した時、ですか？ あまり隠すつもりはなかったのでもいいのですけれど……そうですね。物に近いとはいえ、私は人間という枠は超えられませんよ。でも、いえ……だからこそ、貴女のお心は嬉しく思います」

「……そう。ええ、きつとそうなのでしょうね。ならばしかる後にわたくしは拠点を放棄します。あなたの好きなようになさい」

座り直して手を差し出したキャスターに、数度瞬く。いいのだろうか、と問う視線を向ければ頷くだけだ。

その言葉の意味するところは聖杯戦争から下りる事に他ならない。けれど彼女は、それでいいと柔らかく微笑む。彼女には聖杯戦争よりも大事な事があつたから。

「ありがとう、メディアさん。——貴女の願い、確かに受領しました」
自身に叶えられる願いを告げられていたからこそ、■谷■はわかる。

彼女は、メディアという女性は、細い運命を愛おしんでいた。その願いは、望みは、彼女のマスターに出会い、彼と過ごしてから変質したものだ。変化したものだ。生まれたものだ。

ならば、と■■■■響は手を伸ばす。

「貴女の人生が、幸多からんことを祈ってます。……これは、私自身の願いつてやつですね」

「ふふ、ええ。ありがとう、響」

その手が重なる事で、キャスターの感じる世界が少しだけ変化したのを感じる。やや体は重い。だが、ああ、やはり。

水谷響という少女は人間だ。物に近いのは、確かにそうだろう。けれどそれでも、決定的に。間違いようなく、人間という枠は超えられないという言葉の通りに彼女はさいごまで人間でいるのだろう。

すべてを理解したわけではないが、メディアはその先を想って小さく首を振った。……契約を成した以上、そこに口出しする権利はない。もとよりある、とは思ってもいないが。

しかし、ひとつだけ。たったひとつ、彼女に伝えるべき言葉はある。

「あんな傲慢な男が居ると気づかなかった私も悪いと思うけれど……本当に、大丈夫なのね？」

「はい。彼はあれで優しいので、最後まで付き合ってくださいるはずですよ」

「終わり方はどうあれ、でしょう」

「そこは否定できませんね。でも、そうですね。もしも私が残っていたら、その時は——」

彼女から紡がれたのは細やかな希望であり、仮定の話。だがメディアは、そうなりたい。そうしたいと同意を返して微笑んだ。

たとえそれが数多あるだろう内のそう可能性の高くない未来の話でも、慰め程度の言葉遊びなのだとしても。それを願う者が一人でも、二人でもいたら選択肢にはきつとなってくれるはずだから。

——■■■■はその願いを、穏やかな笑みを浮かべて見つめた。

第三十六話

息も絶え絶えにやっとの事でビルの屋上にやってきた間桐慎二を待っていたのは同級生と見知らぬ女、恐らくはキャスターだろう二人が談笑する姿だった。どういう事なのやら。

しかしその疑問も飲み込んで、とりあえず声を掛けたのだが。

「坊やは魔術師には向いてないわね」

開口一番に言われたその言葉に「はあ?!」と声が裏返る。わかつていた事とはいえ、知らない存在に、ましてや敵……だろう女に言われる筋合いはないはずだ。いやそもそも水谷が原因でこんな事になっているのだが。

とはいえ相手はサーヴァント。何をしてくるのかと身構えてライダーの後ろに隠れる判断は間違いではないだろう。ライダー的には邪魔だと思わないでもない。

でもなんか和やかだし、敵意はないし、警戒はしつつも構える程ではない気はしている。

「お疲れ様です、間桐君」

「……ああ。で?」

こいつ何だよ、と視線だけで問いかけを試みる。だが特に気にした様子もなく怪我の程を確認してくるのだから、水谷というやつは本当に空気が読めない。いや読んだ上での行動か? それならいつそう悪いと思う。

それはそれとしてアサシンの視線が棘のように痛い気がするため、慎二は付け足すように「この状況は何なんだ?」と尋ねた。

何せ真夜中のティータイムというのが相応しい有様だ。無機質なビルの屋上に似合わない椅子とテーブル。その上にホカホカと湯気を立てるコップ。中身は……微かに漂ってくる匂いからして紅茶だろう。

——いや、絶対に可笑しいって!

「キャスターとお茶にしてたんです。間桐君もいかがですか? ライダーも、お疲れでしょうからどうぞ」

「ではありがたく」

「アサシンも、ほらおいで。仕事は終わりですよ」

「はい」

キャスターが椅子を。響がお茶を用意していく机に、迷う事なく二騎のサーヴァントは近づいていく。あまりにもトントンと進んでいく状況は、先程までの戦闘——にもなっていない戦闘ではあるが——と打って変わった雰囲気戸惑いを覚える。

だがそんな慎二を置いて、この場の女性四人は聖杯戦争において本来敵であつたりするのも感じさせない和やかささえ出していた。……ライダーはやや警戒を残しているが。

それでもキャスターに対してアサシンを挟み、隣に響が座っているからこそいざという時は彼女を利用するという考えを頭の片隅において、慎二も応じる事にした。自己の安全のみを考える慎二だが、その考えを響は悪いと詰る事もない。

「努力をしたところで、坊やが魔術師として大成する事はないわ。それでも貴方はこの道を進もうと思うのかしら。思えるのかしら」
「……………」

「私が口出する必要もない話だし、貴方のような男は正直好きではないけれど。……響、貴女はどうしてこの坊やの魔術回路を？」

「悲痛そうな顔で願っていたので、つい」

キャスターの言葉は手厳しいものだ。けれど間桐慎二は、この数日の間に痛いほど直視した真実だった。

無理矢理つなぎ合わせられた力では、魔術回路というやつでは、響ほどにたどり着けないのだろうと。痛みだけが鮮明で、掴んだ成功なんて小さくて弱い、毒にも薬にもならない程度の魔術を身に着けて。そうして今日、突然とはいえ戦いの場に連れられてきた結果は……自分でもわかる。情けなくて、弱ちちくて、散々バカにしていたライダーに守られるだけだったのだから。これで大成する、なんて……それこそ夢物語ってやつだろう。

それに対する、響の言葉はどうだ。つい。ついて何だ。そんな片手間でやったような——いや、実際ものの数分で行われた改変。間違

えては、いないが。

そんなやつと比べたら、そりゃ薄々わかっていた事とはいえ認めざるを得ない。間桐慎二は、憧れに程遠い場所にいるってさ。

「貴女って、本当に……馬鹿な子ね」

「ふふ。そんな事初めて言われました」

くすくすと笑う魔女に更に口を閉ざす。何かを言っただって、惨めな自分を認めるだけだ。そんなのはちっぽけなプライドが許せない。

それさえ見抜いているだろう水谷響は「それじゃあ」と立ち上がった。

「間桐君、後の事はキャスターにお願いしてます。貴方が魔術を続けるかどうかは、彼女と話してから決めても遅くはないかと。……けれど、聖杯戦争からは離れる事をおすすめします。少なくとも、今回については。次回があるかはわかりませんが、まあ努力はしてみますので………それでも——」

にこにこ中々流暢に話していた響がそこで一度言葉を切り、ふとビルの床を見下ろして困ったように首を傾げた。

パチパチと瞬く目は何かを追うように動いているが、もしかして。何か、誰かが、来ようとしているというのだろうか。

「お開きですね。キャスター、退避してください。貴女はもう、聖杯戦争には関わらぬ人なのですから」

「……そうね。じゃあ、遠慮なく。坊やの後のことは任せて、貴女は貴女のやりたいようになさい」

「はい。間桐君」

アサシンが、キャスターが、続いてライダーが立ち上がり、間桐も流れに押されるように椅子を引く。

パチンと鳴らされた音と共に机も椅子も無くなれば、ただのビルの屋上が広がるだけ。肌を撫でる風がやけに痛い。

「……なんだよ」

捻り出した声に、柔らかい笑みが返る。

「——貴方はまだ戦いますか？ 死なせる事はないと思いますが、安全は保証しませんよ」

「っ……ば、馬鹿にしているのか、お前。僕は、僕は……僕だって……」
ギリツと齒を食いしぼるのを見つめて、響は小さく肩を竦める。無理をする必要はないけれど、意地っ張りなんだから。呆れたように見える仕草だ。

しかし咎めるわけでもない。彼の性格から迷うのは分かっていた事なのだから。

「ライダー！」

「なんですか、シンジ」

でも、と思う。……それでもこうして、いざという時は腹を括れるなら十分だ。魔術師としての才能がなくなたって、何でも出来る。元々頭の回転がいい方なのだから、心配する必要はなかったかな。

魔術師に対する甘い幻想も、既に形はない。だから、ならば。

「――戦うぞ」

「フ……良いでしょう、マスター」

きつとここで負けても、大丈夫だろう。負けたって、折れたって、きつと大丈夫。

相手も人を殺す事に躊躇いがない人間でもないのだから。お節介を焼けるのはここまで。後のことは、念の為にキャスターにも話を通してあるし。

「うん。時が来た、という事ですか。……アサシン、礼装を切り替えま
す。あとは、貴女のいいように働いてください」

「はっ、お任せを」

跪いて頭を垂れたアサシンの姿が揺らぎ、気配が薄らぐ。その気配を糸から感じながら、キャスターに向けて大きく頷く。

「ではね、ヒビキ。またいつか会いましょう」

「ええ、いつかどこかで」

笑みを交わし、二人の視線はどちらともなく逸らされる。別れをそれ以上惜しむ事もない。

惜しむ必要がない、とも言えるのかもしれないけれど。それは寂しいことだと、響は理解しているから。

だからまだ、響は響だった。この後どう転ぶのであれ、今はまだ。

「——こんばんは、衛宮君。遠坂さん。それからセイバー。……少々、遅かったですね？」

戦いの前の軽い作戦会議の後。

バタンツ！ と大きな音と共に開かれた屋上の扉に、間桐にひとつ目配せして響は言葉を被せる。何かを言いかけた衛宮は少ししたじろいで、状況をよく確認するようにぐるりと周囲を見渡した。

階下のビルの惨状はそれなりに酷く、机も椅子も、果ては壁も天井も傷だらけ。ぐしゃぐしゃにコピー用紙やらファイイルやらを踏み越えてきた割に、ここは違う。争いなんて無い平穏な形を保っている。元々このビルの屋上がどんな様子かなんて知る由もないが、それでも戦ったかどうかくらいは判別がつく。

「こんばんは、水谷さん。随分と余裕なのね」

「ふふ、余裕だなんて。そんな事はありませんよ」

先頭に立ち見えない剣を構えるセイバーの後ろから窺うようにして、凜は鋭く目を細めた。投げかけた言葉の通り、水谷響はひどく自然に微笑んでいる。それが少し、忌々しい。

衛宮が話をつけに行ったイリヤスフィールの言葉が正しいのならば、ランサーの他にもう一騎のサーヴァントが彼女に付き従っているはず。バーサーカーと激しい戦闘をしたのだというから、恐らく既にランサーは残ってはいないだろう。あの恐るべき狂戦士^{バーサーカー}を相手に相打ちになったのは、流石光の御子^{クー・フーリン}といったところだ。

それに、とチラリとその背後にいる間桐を見やり小さく息を吐く。

「間桐君と協力して狐狩りを楽しんだようだけれど、結果は上々といったところかしら」

「うーん、それは……まあ、そうですね。私としては良き結果を導き出せたかと。間桐君にもいい経験になったようですし」

あつさりとした肯定。協力関係にある事を否定しない今、純粋な戦力は互角といったところか。

ライダーを従える間桐の魔術師は慎二。彼ならば衛宮一人でも事足りる。最優のサーヴァントたるセイバーであれば、幾らマスターがへっぴこでもライダーとアサシンの二騎相手に互角の戦いを出来よ

う。

問題は、水谷響という存在だ。魔術師としての腕も特性も未知数。多くを語らなかつたイリヤスフィールに、もつと情報の開示を求めておきたかつたのだけど。……ここで文句を言ったって仕方ない。

「水谷」

「はい。なんででしょうか、衛宮君」

さらに情報を引き出そうとした遠坂を遮り、士郎は数歩前に歩み出た。その顔は非常に悩ましくしかめられている。

だが、今ここで問わねばならぬ事があつた。ただひとつだけ、必ず。「お前は」

緊張で、喉が渇く。

そうであつて欲しくないと、願いながら。しかし心の底ではそうである事を確信している自分を、見ないふりをして。

「――敵か?」

汗で滲む掌を強く握りしめる。

違え。違つていて、くれ。

「……………」

パチリと瞬く顔を真正面から見ながら、ゆっくりと唇が開くのを待つ。

「敵かどうか、なんて」

馴染み深い苦笑が、浮かんでこてんと首が傾げられる。どこことなく困つたように笑うその顔は、士郎にとってひどく好ましいものだった。

「貴方が一番、わかっているでしょう。衛宮君。それでも答えろというなら、そうですね」

すうつと持ち上げられた指先が、示すのはきつと心臓だろう。己が胸にある答えを見え透いたように。

「――貴方の行動理念にとっては、私は敵ですよ。貴方だけでなく、遠坂さんにとつても……………かな?」

くすりと知らぬ顔をした女が、笑つた。

第三十七話

ビルの屋上が戦場に変わったのは一瞬だった。

答えを返した響が一步引き下がるのと代わるようにライダーが、士郎の腕を引き背にしたセイバーが、己が武器をぶつけ合い弾き合う。そこから駆け出し目まぐるしく動く二騎のサーヴァントを他所にして、遠坂もまた腕を上げて指を突き出し。

「おっと、間桐君。アレは当たったら危ないですよ？ 気をつけてくださいいね」

指先から呪いの塊ガンを放つ。当たれば確実に戦力を削げたらうが、余裕綽々とした微笑みが崩れることはない。

あまりに急な展開を前に、士郎はイリヤスフィールとの会話を思い出すのだった。

——聖杯戦争の戦況は士郎とセイバーを他所に随分と変化していた。

協力者である遠坂とキャスターを追いかけていたものの、見事にそのマスター共々返り討ちにされ、アーチャーは敗れ。その後もキャスターの足取りを追うものの思うように情報は得られずにいて。しかし新都ではキャスターによる被害(ガス漏れによる事故と片付けられているが)は続いていた。

慎二は恐らく家にいただろうが、下手に刺激しなくても彼ならばどうにでもできるだろうという遠坂の言葉の通り、真剣に話せばわかってくる奴だしと頷いたものだ。それに以前、停戦の約束とは言わないうまでもとりあえず暫くは戦わない口約束をしているし。

そういつた訳で、状況を打破すべく士郎が提案したのはバーサーカーのマスターであるイリヤスフィールと話をつけようというものだった。無論危険性は高い。けれど、このまま何も出来ないでいるよりはいいと思っただの。

遠坂には随分呆れられたしセイバーにはかなり渋い顔をされてしまったが。それでも、少し前に公園で会って話した時の昼間は戦わな

いという少女の言葉を信じたかったから。

賭けではあったが、それでも土郎はそれを選んだ。

「……私はもうマスターじゃないわ」

けれど深い森の奥。城と呼ぶに相応しいその場所で三人を出迎えた冬を体現するような少女はそう首を振ったのだ。

「どういう事だ、と驚く言葉にイリヤスフィールは「そのままの意味よ」とツンと澄ました顔で肩を竦め、応接間らしき部屋へと案内してくれた。

「バーサーカーはランサーに負けて、私はヒビキに負けたのよ」

「あのバーサーカーに……」

「ええ。だからあなた達に与えられる情報は敗者に相応しく限らせてもらおうわ。勝ったのはヒビキだもの」

そう言う割にはかなり不満そうな顔をしているが。それほど、敗北が屈辱だったのだろうか。確かにイリヤの強さはとてもじゃないが簡単に勝てるものではなかったろう。

水谷はそれほどまでに、強かったのか。

「……アレは、違うわ。アレに勝ちも負けもない」

——また、その言い方。前日に金色の男からも飛び出した、物に対するような。そんな、示し方。

「悪いけど、ヒビキに簡単に勝てると思わない事ね。彼女、アサシンのマスターでもあるもの」

「なっ……どういうこと、イリヤスフィール。サーヴァントを二騎も使役してるって？ 冗談はよしてよね」

「冗談じゃないわ。元々ランサーの方がイレギュラーな契約だったんじゃないかしら？ はじめに戦った時、中途半端な契約をしていたようだし」

キャスターは柳洞寺。ライダーは間桐。アーチャーは遠坂凜。セイバーは衛宮士郎。ランサーと、そしてアサシンは水谷響。これで数は合う。

メイドから受け取った駒をひとつずつコトリと並べ、バーサーカーの駒を片手にしたまま少女が唇を不機嫌に曲げる。

「それよりも厄介なのが居るようだから気をつけた方がいいわよ。私の知らない奴が、いいえ………薄らげた記憶とアインツベルンに渡った記録が確かならば」

そつと駒を机に置いたイリヤスフィールは、駒を倒していく。コトン、コトンと。

最後に残ったのは――。

「前回の聖杯戦争に呼ばれたサーヴァント、アーチャー。英雄王ギルガメッシュが、あなたたちの真の敵だわ」

瞬間、ガチャリと鎧の音を勢いよく立ててセイバーが立ち上がる。その顔には困惑と驚愕に染まっていて、「馬鹿な」と呟く声は震えている。

「……私も目を疑ったけれど、アレは確かにサーヴァントの力を持っているわ。いかな理由で退去せず残っているのかはわからないけれど。そのあたりは貴女の方が詳しいのではなくて、セイバー」

鋭く目を細めたイリヤスフィールが「それとも」と更に声を尖らせる。

「アーサー・ペンドラゴンと呼んだ方がいいかしら？　ねえ、裏切り者キリツグのサーヴァントだった貴女。その様子では、サーヴァントのくせに前回の記憶があるようだけど」

「……」

息を飲んだのは、誰だったか。アーサー。アーサー・ペンドラゴン。かの有名な騎士王の名を堂々と明かされて、戸惑わずにはいられない。

切嗣がアインツベルンの下でマスターとして聖杯戦争に参加した事は、知っている。セイバーと言峰の二人の情報があつたのだから。

だから確かに、アインツベルンとして前回の記録を確認しているのも頷ける。だがしかし、ここまで刺々しくセイバーを睨むのは、果たして聖杯を得られなかったからなのか。それとも、セイバーが聖杯を破壊した事をアインツベルンが知っているからか。

「……確かに、私は前回。十年前の聖杯戦争についての記憶があります。ですがそれでは貴女は、本当に、イリヤスフィール、ですか

？ アイリスフィールと、そしてキリツグのご息女の」

まさか、という含みの込められた言葉に士郎までも馬鹿な、と小さく呟く。イリヤスフィールが、切嗣の娘？

「——ホントに覚えてるんだ。ええ、確かに私の記憶も間違いじゃないのね。お母様の護衛してたものね。私を見てたって、知ってるわ。……直接会った事は、一度も無かったけど」

「はい……そう、ですね。……情報がアインツベルンに渡っているでしょうが。キリツグは、最後の戦いにおいてアインツベルンを確かに裏切ったと言えるでしょう。私に、聖杯を破壊する事を命じる事によって」

その理由までは知らないがと続けて、力を無くしたようにゆるゆるとした動作でソファに腰を下ろしてセイバーは首を振った。

「聖杯を破壊した後は、私にはわかりません。全ての令呪を用い、破壊を命じられた私は退去してしまっただからです。我が宝具はアーチャーをも巻き込んだはずですが、貴女の言葉が正しいのならば彼はそういう手を使ったのか、聖杯戦争より後を生き延びたのでしょうか」「そう。なら、あなた達の敵はわかるわね。ヒビキと、そしてギルガメッシュ。最後に残る倒すべき敵は、アレらよ」

早くしないと、水谷響がキャスターもライダーも飲み込んで勝利に近づいてしまうかもねと意地悪げに笑って、イリヤスフィールは立ち上がった。

それならば、まだセイバーがここに居る今勝者にはなり得まい。しかしギルガメッシュという存在が、立ちはだかるのだろう。

そして、その理由も士郎にはわかっていて。直接見えた事のある、あの金色の男の姿が浮かぶのだから。

「リン、トオサカの血脈なんだから、土地の確認もしっかりなさいね。食い潰されても、知らないわよ」

「食い潰される？ 誰に……って、ええ、そうよね。話の流れからわかるわよ。でも水谷さんにそんな事ができる器があるとは思わないけど」

「ふふ、そうかもね。——帰りは送ってあげる。セラ、準備を」

「はい」

あの金色の男が、サーヴァント。それはひどく納得の行く事実だ。あの威圧ひとつで、息が詰まったのだから。

敵だとも、直接に言われているのもあるが、だがそうだとどうして。どうしてだ、と思う。

「……イリヤ。最後にひとつ、教えてくれ」

「なあに、おにいちゃん」

「水谷が敵だって、どうして思うんだ。あ、いや、直接戦ったんだからそれはそうかもだが」

士郎の言葉にきよとりとしたあどけない表情が返る。自分でも、正直どうしてここまで敵であるかどうかにこだわるのかとは思う。

確かに認めている自分があるのに、それでもと。

「馬鹿ね。そんなの、当たり前じゃない。……でもね、確かにそれだけじゃないわ。シロウに納得がいくかなんて知らないけど、私と彼女は違うけど同じだからよ」

アインツベルンの傑作としてここにあるイリヤスフィール。そして、ギルガメツシュの所有物である水谷響。なるほど、それは確かに違うようで同じであり、やはり違っている。

「シロウ。しょうがないから、お姉ちゃんがいいことを教えてあげる」
くすりと苦笑して、イリヤスフィールは考え込む士郎の頭に手を伸ばした。小さくて白い手が、子供をあやすように動く。

それに押されて腰を屈めれば、ヒソヒソとした声が耳をくすぐった。

「……ヒビキは必ず、あなたの間に答えるわ。そういうものだから。それにきつと、倒したってアレはもう殆ど完成しているの。けどね、戦う事に意味がないわけではないと思う。あの金色の男がどこまで見通しているのかは、わからないけど」

耳に、というよりは直接耳の奥に響くような声だった。もしかしたら、魔術による念話だったのかもしれない。

どういう意味かと問い返そうと顔を上げるが、既に手を離し、メイドに命じた以上は仕事は終わりだとばかりに座り直してお茶を飲む

イリヤは話を続けるつもりはなかった。

——だから、彼女がアドバイスした通りに問うたのだ。敵か、否か。

是と答えられた今、やはりもう迷いは切り捨てなければならない。

「水谷……！」

ここで止める。あの男のいない、ここで。

それがどんな結末を生むかは後で考える！

「っ僕を見ないなんて、いい度胸じゃないか衛宮ア！」

「慎二……ッ」

そしてその間に滑り込むように、しかし明確なギラついた敵意を剥き出しにした間桐慎二が立ち塞がる。

グツと一歩踏み込んで振りかぶった拳が、鼻先を掠めた。

「水谷の相手は遠坂で、お前の相手はこの僕だ」

決して存在を意識してなかったわけでは、ない。

だがそれでも、その視線が常に自分と対等ではないと間桐慎二は気づいていた。衛宮士郎本人にそうした認識がないにせよ。

だがようやく。ようやくその視線が、互いの姿を捉えた。

第三十八話

何でも持っているようで、一番欲しかったものを慎二は持っていない。だが今この場では、才能がないなりに欲しかった力を手にして立てている。

そして、彼の衛宮士郎に対する感情は簡単なものだ。

僕をその辺の有象無象と変わりなく扱うなんて！ という苛立ちからくる怒りである。

出会った頃はまだ、そんな事はなかった。慎二が思うように適当に話して、引っ張って、振り回して。だがいつからか、対等であったはずの関係は離れていた。いや、元々違っていたが。それでも、何でもかんでも領くなんて、違うだろ。もつと、あつたはずだ。イエスマンを友達にしたってつまんだから。

しかし中学の頃よりずっと、へらへら何でも請け負って慎二の声かけにも色良い返事を返さない衛宮に、そしてその家に入り浸るようになった妹に、ムカついた。

厄介な性格だが、慎二は自分を優先されたい質だったのでそれはもう大変苛立ったのである。それはこうして相対しても無くならない。

「いいかい、衛宮。僕はな、お前が大嫌いだ」

「だから戦うっていうのか？」

「ああそうさ」

桜の令呪を用いて己のサーヴァントとして使役するライダーをチラリと一瞥し、ニヤリと笑う。

ただひとつ、自分に無かったもの。それを衛宮が持つてると知って、腹が立った。遠坂と組むと言って誘いを断られたのも、そりやもう心底腹が立った。

だがそれでこの機会が得られたのだと思えば、水谷には感謝しなければならぬ。

「僕はお前の顔が変わるまで殴らないと、気がすまないものでね」

「……そうか。幾ら慎二でも、容赦しないぞ」

「そりや好都合、だよ!!」

痛いのは嫌いだ。だが、多少の痛みにはこの数日で慣れたものだ。それに、大変癪だけど攻撃に対する反射は何故かアサシンに鍛えられた。あいつ、水谷が見てなかったら命を取るぎりぎりを突いてきやがったからな。おじいさまの件の後はめつきりなくなっただが。

ああ、それにそう。おじいさま。今朝ようやつと姿を現した祖父は随分と変わり果てた姿だった。まるで小人にでもなったような一匹の小さな虫の羽を生やした祖父を最初に見た感想は、ホントに生きるんだという安堵だった。

とはいえ、そんな祖父から与えられたものなんて、なにもない。……いや、出かけようとする前に一言だけ。

「ッー」

流れる水のように、動かす事。あの翁には考えられなかった事だが、その言葉の意味は正しく魔術へのアドバイスだったのだろう。

意識をすれば、確かに多少はマシになっていた。

「……ハッ、そんなもんかよ!？」

「く、そ……!」

「いいねえ、その顔!」

辛うじて魔術で身体強化をした、泥のような殴り合い。慎二も、士郎も、その顔にはギリリとした戦意が宿っている。

だがそれもビルの外に吹き飛ばすほどの力のない、ただの喧嘩の延長線。

そんな男二人の泥臭い戦いとは反対に、サーヴァントの戦いはより激しく火花を散らして夜闇を踊っていた。

「……、……」

タンクの上やらマスター同士の戦いの間に着地したりしながらも、素早い動きでライダーが踏み込む。対するセイバーはその場から動かず、最低限の反撃をしながら注意深く周囲を警戒していた。

ギリギリと屋上の縁に押し出されてはいるが、一步、二歩と動けば済む話。だからこそ、影も形も見えないアサシンへの警戒に意識を割いていた。

無論自分への攻撃ならば難なく反撃出来よう。単純な白兵戦であ

ればライダーと組まれても問題はないつもりだ。

しかし、それぞれ戦っている現状でマスターを狙われてしまえば状況は一転する。こういった手合の暗殺者なのかもわからないのがもどかしい。近くにいると直感はあるが、情報はそれだけ。

わかることがあるならば、とチラリと凜と水谷響の戦いを一瞥する。

「っの、意外とやるわね、水谷さん」

「遠坂さんにお褒めいただけるなんて、光栄です」

ガンドは如何なる技か打ち消されると判断し、近接戦闘に持ち込もうと駆け出した凜。一瞬きよとりと目を丸くした水谷は、それでも焦る事なく小石を転がして。

「イーサ」

「!? ルーン、魔術……!!」

小石に刻まれた魔術を呟いた途端、そう広くもないビルの屋上に急速に氷の茨が壁のように盛り上がり、広がった。奇しくも、サーヴァントとマスターを分断する形で。

跳ねるように飛びよけ、セイバーの横に綺麗に着地して凜はギュツと眉根を寄せた。

「……リン、後ろに」

こうなれば、とセイバーは手の内の宝剣の切っ先を、氷の陰からひよいと顔を出した水谷がいる方向へと向けた。直後、キュルリと逆巻く風が指向性を持って迸る。

『風王結界』ツ！」

風王結界。宝剣を覆い隠していた風の鞘。

解放されたその風は竜巻のような激しい渦を起こしながら氷を割砕き、真っ直ぐに突き進んでいく。

その、刹那の間に。

「ツ!?!」

「フウウ——」

背後からぬるりと湿った気配がして、セイバーは振り返った。宝具による攻撃。しかし直感が働かなかったのは。

「あ……？ うっ、ゲボツ?!」

「リン……！ このっ」

遠坂凜を狙ったものだったから、だろう。振り抜いた剣を腕で受け流した仮面の女はトンツと踊るように後退し、屋上のフェンスに危なげなく乗り立った。

闇夜に紛れるような黒い服。薄黒い肌。しなやかな肉体美を持つ、サーヴァント。

その攻撃は、如何なる効果を持ったものか。背後から頬を両手で包まれ、耳に唇が触れた感触がしたけれど、と床に崩れ落ちた凜は息苦しい胸を押さえ、また咳き込む。

「……ライダー、やりますよ」

「ええ。遠慮なく」

たらりと血を流しながら、アサシンが宙を跳ねる。合わせるように、何やら眼帯を外したライダーが氷の壁を蹴りながら近づき腕を振り被った。

不味い、とセイバーは思う。凜は見るからに毒に侵されている。そして、思った以上に二騎のサーヴァントのコンビネーションが良い。

このまま凜を守りながらでは敗れてしまう可能性もある。ならば――。

「はあああー!」

逆に力づくで押し込んで、ビルより外へと長身の女を弾き飛ばす。続けて背後のアサシンの腕を掴み、放り投げる。掴めるかどうかは直感ではあったが、上手くいったか。

小さくそう判断し、追いかけるようにセイバーもまたビルの縁のフェンスへ足をかけ、それから。

「させ、るか……!」

「ッ――」

落ちながら、更にビルの壁を蹴ることで加速し、宝具を使うべく魔力を高めていたライダーへと宝剣を振り下ろす。ザクリと刺さった、あるいは吹き飛んだ腕が後方へと飛んでいく。

――薄黒く、細い腕が。そして、白い翼の生えた天馬が。

「フ——『騎英^{ベルレ}の』」

ライダーの手が金の手綱を引き、天馬を空高く走らせる。そうして金の鞭で美しい天馬をパシリと叩き。

「手綱^{フオイン}』ツッ！」

急降下することで一息にセイバーへと迫った。

「くっ……」

様々な面で後手に回っていると、己の判断に誤りがあったと認めざるを得ない。……だがそれが、どうした。

この程度で終わるはずも、終われるはずもない。聖杯に託すべき願いがあるのだ。負けてなど、いられない。まだ……！

——ガシャアアン

魔力を放出し、風を踏みしめて横飛びにビルの窓ガラスを突き破る。間一髪、ライダー^{ベルレ}の宝具^{フオイン}の直撃を免れたものの、どうにも片足に衝撃が残っていた。

少し経てば回復するようなものだ、が。

「……くるか」

攻撃の余波でガラリと崩れた壁の一部の向こう側。寝静まった街の仄かに明るく、星の輝きの見えない空に白く美しい彗星が如き光が駆け上る。再度の魔力の高まりが、全霊を尽くしてこちらを倒さんとする意思を感じた。

セイバーは一瞬、空を。正確にはビルの屋上にいる二人を思いながら、唇を引き結んだ。

時間は僅かだ。取るべき手段も、限られている。だが、ならば、しかし。

「いや……それでも」

ここに来る前。いや、もうもつと前になるのか。判断は任せると、真っ直ぐな眼差しで言われたことを思い返す。そして、その後の日常と、修練を。

「私はマスターを信じるだけだ」

だからここでライダーを打ち倒さねばならぬ。影を見失ったアサシンは惜しいが、すぐ目の前に見える危機は自分だけのものではない。

い。

故に、セイバーは宝剣を構え、魔力を込めた。

『約束された——勝利の剣』!!!」

本来の威力からは些か劣る、けれど眩く美しい光の帯がビルの空洞から暗い夜空を穿つように伸びていく。彗星が如きペガサスは、ライダーは歯を食いしばりながらその光の帯へと対抗し——。

「……………」

光の中でふと、柔らかな笑みを唇に浮かべた。悔いが残っていないわけでもないし、思い残すことはある。

それでもきつともう、あの少女の力でマスターが食べ物にされる未来も、己のような怪物になり果てる未来も遠い。だからライダーは微笑んだのだ。

響からもらった精気も美味しくて久しぶりに空腹が紛れたし、空も駆けた。桜のことはやっぱり少し心配だが、……満足がいった。十分だ。十分な、結末だろう。怪物たる己が関わった結果としては。

願わくは、とビルの屋上にいる二人の姿を思う。

(シンジ、はまあ中々しづといから大丈夫でしょう。……ヒビキは)

あの少女はまた、違うものだ。桜とは違い、怪物とはなり得まい。どちらかといえば、姉たちにも似たものだ。……いや姉たちよりは遙かに人間寄りではあるし恐らく姉たちからはダメ出しを受けることは間違いないが。それはそれ。

(形を、喪わないように……願いましよう……サクラを、留めてくれた、貴女に——)

消えゆく自分に出来るのは、その先行きが悍ましいものでないよう願うだけ。そしてそれは、あの少女には伝わるものだろう。

どんな願いであれ、どんな結果を導き出すのであれ、願いそのものを受け取る彼女には。

そうして静かに願うライダーは眩い光が途切れるように、指先から解けるように消えていった。

第三十九話

夜空を照らす極光を背に、咳き込みながら立つ姿がひとつ。やや疲れた顔をして、その手がパシパシと己の肉体を叩く。

それだけで痛々しい裂傷が、流れていた鮮血が、破れた布地が魔法のように元に戻っていった。地面に広がった血の跡だけを残して。

「ふう……」

ため息、次いで首を振った響が地面から空。空からビルの方へと視線を流してゆつくりと首を傾げる。

氷の茨は暴風に打ち砕かれ、形がなくなっただからよく見えるが、どうやら間桐と衛宮の戦いは衛宮の勝利に収まったらしい。下の、セイバーとライダーの戦いと同じくして。

けれどその頬は腫れ上がり、腕も疲労からか脱力しきって力なく揺れていた。眺めていると彼は何事かを間桐へと眩き、ゆるゆると周囲へと巡らせた目が、響へと向けられ。

「……………」

数度瞬いた。それから少し離れたところで崩れ落ちたまま浅く呼吸する遠坂の元へと焦りながら、しかしゆつくりと歩み寄っていく。

それを見た響は少しだけ考えて、間桐の方へと近づいて「大丈夫ですか」と声をかけて微笑んだ。

「……………無事に、見えるかよ……………」

「ふふ、そう言えるなら大丈夫そうですね。良かった」

「……………フン」

大の字で転がっている間桐の顔も、随分と腫れ上がっている。服もあちこち汚れて、いつもの自信に満ちてカツコつけた姿とは正反対だ。

——だが、それでも。

「清々したって感じがしますね？」

「誰がだよ、バーカ。…………でもまあ…………そう、だね。……………悪く、ない気分だよ…………痛いし、疲れた、けど……………」

言いながら、間桐の臉はゆっくりと落ちていく。張り詰めた糸が途切れたように、プツリと黒く意識が塗り潰されたように。

そんな彼に心底から労るように笑みを浮かべ、キヤスターの使う転移を再現した魔術の中に沈めて飛ばす。当然魔力の消耗は激しいが、むしろ今の響にとつてはちよūdい。

友人をはじめとした、普通の魔術師に近い人には怒られてしまいうな考えではあるだろうが。

「水、谷。……なあ、お前は……遠坂に、何をしたんだ」

「何をと言つても、衛宮君。殺してはいないはずですよ?」

小さく、しかし確かに届いた疑問に振り返り、クスクスと笑い声をあげる。かわいいハサンは、どうやら命までは取らずにいたらしい。響の用意したひとつきりの礼装を用いて。

殺して欲しいとも、死なせてもいいとも特別思っていないマスターの考えを尊重する、とてもいい子だ。これは後でいっぱい褒めよう。

ちよūdよく背後に戻ってきたハサンの無くなった片腕をもとに戻しながらそう伝えると。彼女は嬉しそうに頷いた。もつと我儘を言ってくれても構わないが……今は少しだけおいておこうか。

「遠坂さん程の方なら然る場所で療養すれば二、三日もしない内に回復してしまふかと」

「……………どう、して」

それは何に対する言葉だろう。彼の中でも明確な形になっていないものに、答えるのも躊躇われる。

いやそれよりも以前に、敵だと言い切った相手に未だ対話を求めようとするなんて、衛宮君は本当に優しいんだから。そう小さく苦笑が溢れる。

「その調子では、私を倒殺せませんよ衛宮君」

「……………」

軽い足取りで近づき、囁いた言葉に体が硬直した。どうしてそんな事を今言うのかと。

戸惑う様子を見ながら響はゆっくりと手を持ち上げる。

「ひとつ言っておきますが……誰かを助けたいなら、私は対象となり

えません。私は尽くし、叶えるものだから。だからね、直感を疑わないで。迷わないで。躊躇わないで——止めなければならぬと思つた時は殺したほうがいいですよ」

そして指先を唇に押し当てた。何かを言うことを禁じるような、しかし柔らかな手付きで。その眼差しも慈愛に満ちたものだ。

自分を通して、何かを見透かすような。そんなものさえ感じて。色々な感情が荒波を立てるのが、慎二との戦いで腫れた顔がじくじくと痛むのと同期するようだ。

「とはいえ。君が殺せなかつたとしても、私はそう長生きはできないでしょうけれど。……それではまた明日。聖杯の眠る場所で、最後の戦いと致しましょうね。衛宮君」

緊張とも呆然ともいえる状態の士郎の視界で何時もの水谷響らしい笑みが浮かぶ。しかしそれを認識した瞬間には、離れていった。そうして瞬きの間に、姿が掻き消える。

残された衛宮士郎はぼんやりと、背後で力強く地面を踏みしめるような足音がするまでビルの風景を眺めていた。体感としては、ひどく長い間。ただただ茫洋と。

—— 反対に。自宅まで転移した響は流石にといった様子で疲れた顔となつてソファに背を預けた。

「響様……」

霊体化を解いたハサンは心配そうに声をかけ、跪き眉尻を下げる。その様子に小さく笑つて、紫の髪を掻き回した響は「大丈夫」と呟く。

「……ねえ、ハサン」

ぼすりと体を横に倒し、ハサンに目を合わせた顔に苦笑が滲む。視界の中には泣きそうにも見える眼差しがあつた。

「貴女が悲しむ事はないですよ。王様がどうこう以前に元々死に損なつたものですから」

「でも、それでも、響様、貴女はもつと……普通に、生きられる、はずです。今からでも、きつと」

「……………ふふふ、ハサンは難しい事を願うんだから。ああでも……」

それ、なら……彼の願いは、叶えられていると言えるのでしょうか……」

優しく頭を抱きしめて、うつらと意識が微睡んでいく。腕を伸ばして抱きしめ返したハサンはくしゃりと顔を歪めて暫しの間そのままだった。

一秒でも長く、この時が続けばいい。このまま、ずっと。ずっと……。

永遠なんて存在しないと、わかっている。

「随分消耗したようだな」

「……………英雄王」

一時間程経った頃。ガチャリとドアが開き、やってきたのは金の偉丈夫であった。いや、この家を我が城とばかりに自由に過ぐす男だ。どうせ今日もゴロゴロと過ごしていたのだろう。

「ハ、愉快的顔をしているな。その顔に免じて何があったのか聞いてやらん事もないぞ、暗殺者」

一人がけのソファの方へと腰を下ろし、赤い瞳をニヤつかせて英雄王はそう促す。主をこんな事にしたのは目の前の男だというのに、それでも言葉にさせようとするあたり意地が悪い。

響はよき王様だというが、本当にどこがよいのかとハサンは思ってしまう。

「…………ライダーと共に、セイバーと戦ったまでです。その際、響様は致命傷を負いました。ですが、ご自身のお力で回復されました。転移の魔術も行使した事で魔力消耗が激しくお眠りになっています」

「ほう。それで？」

「……………それで、と言われましても」

いやわかっている。この男が言わせたいのは、もっと根本的なところだ。

即ち、主の——。

「響様は、……………少しだけ、飲み込まれていたように思います。……………でも、先程の響様は、響様で……………けれど私は……………私は我が主を手を掛けたくは、ありません。英雄王、ギルガメッシュ——何故、のですか」

何故。何が、彼女をそうさせる。彼女が彼女であることに変わりがないが、それでも。

「響様はどうして、そのまままで幸せになれるはずなのに」

その言葉に、ギルガメッシュはふむと考える仕草で部屋の一角を一瞥した。方向的には、響の部屋がある方だ。

十年前の聖杯戦争を、思い出しでもしているのだろうか。あまり主自身も話すことの少ない、短い日々のことを。

ハサンは深く聞くことはしなかった日々。そこにこの男も僅かに関わっていたことだけは聞き及んでいた。

「……アレは変化を望まれたようだからな。我という存在の前にあつたものを色々な面で噛み砕いた結果だろうよ。そして我の言葉が、言峰の望みが、聖杯と定義されたものがアレを今の形にしたにすぎん」
緩やかに弧を描いた眼差しが、静かに眠る顔を見下ろす。その赤い瞳が視る先には、果たしてどう映っているのか。

……この男の視界を理解出来る日はこないだろう、と思う。生前の立場の違いも、見ていた景色の違いも関係なく、この男の事をハサンは嫌いだから。だからこそ、たとえ無礼と言われようとも真つ直ぐにその瞳を見据える。

「聖杯が、何かを望むと？」

「正確には中身のものだがな。アレは」

くつり、と喉を震わせた男に、不可解だと眉根が寄った。聖杯の中心。願いを叶える杯の、中には何かがあるというのか。

主は何かを知ってるのか……いや。きっと、わかっている。おそらくは主である響が認識してなくても、その本質は知っているのだろう。魂、ともいうべき無意識の空白で。

「——呪いであろうとなかろうと、望まれたものを叶えるだけだろう。響も、そして聖杯もな」

道具というのはそういうものだ。だが、とギルガメッシュは意識せず笑みを浮かべて宝物庫に腕を伸ばした。

空に描かれた金色の波紋。そこから取り出した物が、アサシンへと向けられる。

「私の宝物庫には、全ての宝具の原形となりえる物が眠る。その内のひとつを我は貴様に授けよう」

「……………」

「扱いても結末も、盤上の駒たる貴様が選ぶものだ。が、私の期待に応えてみせよ、毒の娘」

楽しげに言って、ハサンの持ち上げた手に刃を乗せたギルガメツシユは立ち上がった。

「……………」、……………感謝します、英雄王」

その気配が遠のいたのを感じ取り、ハサンはゆっくりと目を閉じる。

思えば、長いようで短い日々だった。静謐のハサンにとってはまさしく夢のような日々。普通の人のように遊んで、笑って、触れ合って。最高の主であり、こう呼ぶのも烏澁がましいだろうが、最愛の友であつたのだ。

だからこそ、ではないけれど。……………心は、決まつた。

「響様。どうか」

眩くように願う。何をおいても幸せに、長く生きてくれたのなら、と。

ハサンは強く強く、拳を握りしめた。水谷響は人生というものの長短に重きをおくことにはないとわかつているけれど。

そうだとしても、願わずにはいられなかった。

第四十話

人の気のない円蔵山のはらの中。地下となったその場所で、小岩に腰掛ける影がひとつ。

小さく鼻歌を歌いながらゆらゆらと体を動かして、彼女はただ天を見上げた。暗い岩壁に埋め尽くされ、しかし微かに仄明るい光を放つ構造体を背にしながらぼんやりと。

「響様」

かけられた声にふわりと柔らかく微笑みを浮かべ、振り返る。その笑みはどこまでも自然で、ピクニツクにでも来ているような穏やかさだ。

だが、しかし。間違いなく最後の戦いが始まろうとしていた。聖杯戦争の終わりを迎える戦いが。

響には、それが手に取るようにわかっていた。山門に続く石段を踏みしめる足音も、迷うように茂みをかき分ける仕草も、潜めるような吐息さえも目に浮かぶように。

「アサシン。わたしからの最後の命令です。あなたの動きやすいように戦ってきてください。当然——あなたは、苦戦するでしょう。傷つきもするでしょう。それでもわたしはここであなたのことを支えながら待っています」

「はい。必ずや帰還してみせます、我が主」

強く頷いて、ハサンは毒を封ずる礼装をするりと外す。そうして閉ざされた洞窟に自身の毒を張り巡らせていく。最初は弱く薄い毒ではあるが、セイバーと戦う頃には流れた血が、詰めた息が降りかかれば幾ら優秀な騎士でさえ動きを鈍くすることだろう。

大聖杯と呼ばれる彼女たち英霊を召喚するための陣がここにはあるが、そんなものに毒はきくまい。主を汚染する忌々しい無機物なのだから、当然なのだろうが。

「……来た……」

仮面に隠した眼を閉ざしていたハサンが、小さく呟く。山中にわざとらしく痕跡を残したのだから、警戒すれど追うようにこの洞窟に足早くやってくるといふ読みは正しく当たっていたようだ。

セイバーほどの技量ある騎士であれば、対峙したアサシン自身は簡単にねじ伏せられるのは間違いない。あの短い戦闘でこちらの能力も理解したはずなのだから。

故にこの身の毒を警戒して対策は練ってきたはずだ。セイバーというよりは彼女のマスターの対策ではあろうが。

「シロウ、――」

「――つてる……、……だ……」

暗闇の中、微かに聞こえてきはじめた会話も、足取りも淀みない。多少はふらついてもいい頃合いだが、これはバーサーカーのマスターが手助けでもしたのだろうとは主の言である。現在アーチャーのマスターは治療中だと言峰も楽しげに言っていたことと照らし合わせれば自ずと出る答えだ。それは己の主でも同じことが言えるが、それはそれ。

一先ずと手の内にある暗器をジャラリと金属音を立てさせて空に擲つ。途端にとぷりと空間に沈んだ刃は響が遠隔で起動させた魔術によりセイバーとその主へと飛来していく。

間をおかずひとつ、ふたつと擲つ度に空に波紋が広がり、黒い雨のように洞窟のやや開けた空間に降りしきる。

「――！」

「――」

完全に手を止めて気配を遮断したハサンだが、雨が止むことはない。だが、その程度の攻撃で沈んでくれる程、セイバーというサーヴァントクラスは甘くはなからう。なにより金色の極光を放つ聖剣を持つ彼女は、世界にも名のしれた英霊なのだから。

昨日の今日で宝具を使用した反動があると見込むのはいささか甘い想定だ。マスターの衛宮士郎は間桐慎二と比較しても大した魔術の腕ではなく、その分サーヴァントとしての性能が落ちているはずだとキャスターが言っていたが……あの宝具に太刀打ちできることは

ない確信はある。

だからこそハサンはマスターからの支援を惜しむことなく浴びながらこの最後の戦いに臨むのだ。主のために。自身の望みのために。

「……………」

弾かれた刃さえ再び降り注ぐ雨とする魔術に痺れを切らしたのか、微かに風が唸る。次いで爆発さえするように岩肌を削り、小さな竜巻が狭い洞窟内を駆けていった。

大聖杯のある場所にまでは至っていないが、どうやら嵐のような風を纏った剣圧が昨日のように主のいる方向へと走ってしまったようだ。そして刃の雨が降り止んだ今を好機と見てセイバーは周囲を警戒しながら。衛宮士郎は急かされるような覚束ない足取りで。

だが、まだ機ではない。

『響様、お願いします』

『うん』

しかし次の手はそろそろだろう、と念話で主を頼れば柔らかかい了承の声と共に空を閃光が走る。ここでセイバーが反撃に転じようとしても、主の身を案じてはいけけない。それでは負けてしまう。

水谷響というヒトは、ここで終わってはいけけない。だから、と光が止む前に、できる限り接近する。

「あなたの命を、頂戴します」

そうして、ハサンは。光を眩い剣で打ち払うセイバーの不意をつくように彼女とそのマスターの左後方から刃を構え駆けた。

「っ——シロウ！ 伏せて！」

「あ、あ!？」

アサシンの表情は仮面に隠れて窺うことは出来ない。けれどその唇の笑みだけが、不吉な予感を与える。

そうして、一瞬の逡巡を行う。この暗殺者は毒を扱う。セイバー自身には効きが悪かったが、士郎という人間には耐えられないだろう。あの遠坂凜という優秀な魔術師でさえ触れられ、少量の血を浴びただけで皮膚が爛れたのだから。

衛宮邸に訪れていたイリヤスフィールによってそれ自体は癒され

はしたが、しかし意識を落とすほどの毒までは癒やしきることは出来ていない。だが、情報としては十分だ。

つまるところ今、この瞬間に斬り伏せるのは容易ではある。けれど共に来ることを選んだマスターを守るためには、そうするわけにはいかない。せめて遠ざけてからでないと、と足を浮かせて闇に潜む体に沈めて。

「はああっ」

「グッ……、……………！」

蹴り飛ばそうとした。けれどその存在に気づくのに遅れたが故か、はたまた蔓延する毒により集中が本人の意識しない内に撓んでいた故か。

「っ……!?!」

自身でも防ごうと身を捻った土郎の脇腹に刃が掠めた。それを認識しながらもセイバーは足を振り切り、くるりと空で一回転して岩の上に着地したアサシンへと剣を振って魔力を纏った風を放つ。

牽制程度にしかなくていいが、距離を稼いだ次は攻めたてるのみ。魔術の砲撃は止んでいないが、ハッキリ視認している今こそアサシンを倒すチャンスだ。だが、と目を細める。

「シロウ、走れますか?」

「……ああ。行ける」

「では行ってください」

「わかった」

マスターにそう声をかけて、セイバーはしっかりと両手で剣を握りしめ腰を低くし。それからすぐさま離脱しようとして後退するアサシンを逃さぬように駆ける。

アサシンとしては白兵戦に持ち込まれては分が悪い。しかしサーヴァントとして最後にこの二騎が残った以上、この戦いから退くなどできないことだ。それこそ、お互いに。

(想定以上に、効きが悪い)

セイバーの追撃を真正面から受け止めないように避けつつ、響が隆起させた岩や先程崩された岩を遮蔽物として利用しながらもハサン

は眉を寄せた。山中に充満した己の毒は間違いなく常人では身動きが取れなくなるものだ。

そして数度刃を弾いたハサンの手足にはかすり傷が幾つもつき、さらに毒を撒き散らしている。けれど、騎士王の剣技に陰りはない。

じりりと後退りするセイバーのマスターは流石にそろそろ効いてきたのか、息苦しそうな表情を浮かべている。これならばそちらは放っておいても問題ないだろう。

たとえ主のところへ向かおうとしたとて、辿り着く前に濃くなる毒によって倒れる。はずだ。ここよりもあちらの方が毒が染み付いているのだから。

「はああっー」

「ッ……」

しかし、問題はセイバーだ。主の支援砲撃もあり消耗はしているが、決定打に欠けている。

だからといって宝具を使うにもハサンのそれは他のハサン・サツバーハと比べて更に距離を詰める必要があるため、現状では難しい。もつとも、この剣技を相手に猶予があるわけではないが。

ならば、と脳裏に浮かんだ金色の王のニヤつく顔を振り払いつつ地面を蹴り、更に毒を撒き散らす。せめて屋内……この山の中にあるという洞窟内であればもう少しやりようはあったかもしれないけれど。

「そう逃げてばかりいても私は倒せないぞアサシン」

激しい剣戟に傷つきながら、セイバーの煽りにハッと鼻を鳴らす。その程度の煽り文句では心乱れることもない。微かな焦りは確かにないこともないが、顔にはまだ表れていないはずだ。

「最優のサーヴァントが暗殺者程度に手こずるなんて、マスターの質も知れたものですね」

煽り返しつつ、ハサンは目潰しも兼ねてザツクリと斬られた腕を振るい血を飛ばした。流石に避けられてしまうが、問題ない。

大きな傷口はすぐに塞がるが、汗と血の毒はセイバー自身の手で更に拡散していくのだから。だから焦りは禁物だ。落ち着け、と心中で

眩く。

セイバーのマスターの姿が暗闇に紛れて見えなくなってしまったが、大丈夫。大丈夫だ、とも言い聞かせる。

「今頃は貴様のマスターの元に辿り着いていよう。我々として無策で乗り込んできてはいないのでな」

「……そうだとして、あなたのマスターに我が主を害することは不可能です。我が主は優れた魔術師ですので」

それにその煽りは真実ではないとセイバーとて理解していよう。だが冗談いえ、と口にして支援に行かれも困る。

アサシンはこの場面でセイバーを倒さねばならないのだから。いや。倒さずとも、ギルガメッシュから渡された刃を突き立てることができたのならば。

そうすれば勝利することは可能だと見ている。白兵戦はどこまでいっても劣勢ではあるが。

「だとしても、それならば私が貴様に勝てばいい話、だっ！」

「つく、う……そう、簡単に、は、いかせません」

それでも、まだ戦いは続く。セイバーの魔力が尽きるまで。響からの支援がなくならない限り。

均衡は、保たれ続けた。

——ふたつの姿が、掻き消えるその時まで。

第四十一話

重たい体を引きずりながら、衛宮士郎は暗い獣道を歩く。見通しは、あまりよくない。自身の唇からこぼれる吐息は、やけにうるさい。だがそれでも、と足を動かすのは止めなかった。

「くっ……そ……」

しかし視界が悪く、込み上げてくる吐き気は気持ち悪く、限界は感じていいる。そろそろかと思いい、ここに来る前にイリヤスフィールから渡された薬を震える手で取り出して、口の中に含み急いで嚥下し口を手のひらで覆う。

痺れている気がする舌先に、エグみという刺激が走って別の吐き気が込み上げて、くる。しかしそれを我慢してまたのろろと歩きます。

まだ、まだ、もう少し。あとちよつとで、効くはず。大丈夫だ、イリヤもこれがあれば死にはしないと——たぶんと呟きながら——渡してくれたし大丈夫、のはず！

「っお、えええ……いや、セーフ……」

口からは勝手に嘔吐く声が出たが、吐瀉物はないからセーフだ。飲めている。胸焼けのような気持ち悪さは増しているが。

だが、多少視界は明瞭になった。そのことにイリヤに感謝の念を送りつつ、士郎は更に奥を目指す。

一步、一步。重く引きずるような足取りで。それでも、確かな一步を踏みしめて。

「……こんばんは、衛宮君」

そうして、ポツカリと空いたその場所で。

「水、谷」

同級生であり、友人の少女が微笑んでいた。

その姿はずっと変わらない柔らかさがある。いじめられていたことさえも気にしていないと言わんばかりだったあの頃から見慣れた笑み。

衛宮士郎は、その笑みに感じていた気持ちを思い出す。理不尽であつても微笑みながら受け止めていた彼女への憤り。反応が変わらぬことへの不安。そのままではよくないのではないかという心配。友人と認めてくれたことへの安堵。

付随する記憶は古くて十年近く前のものだ。だって彼女は自分の他の唯一の生き残りで、同じ地獄もを見たはずの仲間で、だから守るべき存在で。

だけど、今、この時は。この、聖杯戦争というものは。

「私を殺す覚悟は、できたんですね？」

くすくすと悪戯っぽく笑う彼女を、敵にさせた。

改めて相對してもどうして、と思う。どうして、彼女は、水谷響は。殺されたがっている？ 殺されるのを、許す？

——いいや、ずっとそうだ。出会った時から変わらず彼女はそうだった。

だから衛宮士郎は、見ないふりをし続けてきたのだ。そんなはずはないと、そんなことはさせないだろうと。でも、どうだ。

「俺は」

彼女の前に立つ男の胸中には、ふたつの選択が激しく渦巻いた。

そんなことをする必要はない。どちらが勝っても、きつと悪いことにはならないと思う自分。

反して、どうしようもなくここで彼女を殺さねばならない予感を抱いている自分。

どちらともが明確な未来ヴァイジョンを描いているわけではない。漠然とした感覚だ。

その動揺した顔を見上げて、響は微笑を溢してゆつくりと立ち上がる。並行して支援のための魔術行使を行っていたりするが、彼女にとって大したことはない。

だが、その決着が近いことは未来視の言葉を聞くことがなくたってわかっていた。

「言峰さんから、私のことをあなたに話したと聞かされました。だから、そうですね。……思い出話をひとつ、お聞かせしましょうか」

とはいえこれは時間稼ぎのようなものだ。アサシンとセイバーの決着までの。衛宮士郎あなの決断までの。

そう微笑んで、響は何かを思い出すように天を見上げた。

——十年前の聖杯戦争。水谷響は一騎のサーヴァントを召喚した。……事故のようなものだったが。

彼は戦闘能力なんてなく、ただ内側の傍観者として過ごしていただけだった。それでも、響にとっては不思議で特別な数日間という記憶があるのだけだ。

所詮子供のマスターと戦闘能力の低いサーヴァント。自滅のような形で、彼女らは静かに聖杯戦争から身を引いた。

……あるサーヴァントに気に入られて振り回されたが、そこは偉大なる英雄を召喚して戦い合う戦争なのだからそういうこともあるということ片付けるとする。

そして終わりの日。響は最初から最後まで特に何もしないまま過ごし、それから生きていた言峰の元で過ごすことになった。

とはいえそれは回復するまでの間のことで、響にとっては短い期間の話だ。なにせ親戚が冬木市内にいて知っていたものだから。

「ちよ、つと、待て。……言峰に世話になっていたのか？ あの野郎、一言もそんなこと言わなかったぞ……」

「あはは……言峰さんとしては言う必要がないと思ったからだと思うけど、なんだかごめんね」

「なんで水谷が謝るんだよ」

ややムツとした言葉に苦笑を返しつつ、肩をすくめる。世話になった人ではあるが、だからこそやや意地の悪いところがあることも知っているからだ。

「私の思い出話はその程度のもです。さて。それでは衛宮君。あなたは、私の背後にある大聖杯のことをどれだけ聞きましたか？」

「……遠坂とイリヤ、慎二の家がはじめたことくらいは知ってる」「なるほど。それでは聖杯の中身については？」

「中身？」

パチパチと目を瞬かせる衛宮に、イリヤスフィールが口を噤んだこ

とを知った。彼女なりの、勝者への褒美のようなものだろうか。水谷響が何かということも含めて。

いや、それは仕方ないことか。響のことを話すのならば自分自身のことを明かさねばならないのだから。

ならば響も、彼女のために必要ないことは話さないでいるとしよう。そう結論づけひとつ頷く。

「この器の中にはこの世すべての悪。アンリ・マユと呼ばれる反英雄の呪いで満たされています。だから誰が勝とうとも、結果として願望は歪んでしまうことになるでしょう。たとえばあなたが望まずとも、セイバーの望みは……十年前に聞いたものと違わないのなら、彼女の消滅で済めばいいところですか。多少違ったとしても、彼女に害が及ぶだけならばいいほうですね」

英霊の座に死せぬままこの地に降りた彼女がいくら望めど、あの願いでは……アーサー王の愛したブリテンを救うのならば、呪いが振りまかれるだけだ。

とはいえここにあるものだけでは、冬木の街が死滅する程度で済むだろう。無論、近隣の市にも被害が出はするはずだが。

セイバーだけに限るのなら、彼女自身には大きく影響が出るはずだ。単純に飲み込まれてしまうだけで済めば彼女の個が失われるだけの可愛らしい結末で、そうでないならば英霊の座ごと汚染されるのではないかというのが響の予想である。あくまでも予想ではあるが、近からずも遠からず、といったところだろう。

「……なら、水谷は。……水谷響お前は何を、願ってるんだ」

何を聖杯に託す。

そう問いかける眼差しに、彼女はただ凧いだ瞳で「何もありません」と口にした。

何もない。透き通るような、けれど世間話でもしているような柔らかい声音だ。たった数日前までの日常を感じさせるそれは、しかしこの場所においてはひどく違和感を感じさせる。

けれど「強いて言うならば」と続いた言葉に、土郎は大きく見開く。

「彼聖杯に望まれたから、と言ってもいいのでしょうか。聖杯に再び選ば

れたのも、ここに私がいるのも、呪い願望のようなものです。だから私はその呪い願を飲み干す……それが聖杯戦争に勝利した後の願い、というべきですか。私のアサシンの願いも両立しようとすると、少々難しい願いですけども」

困ったとでもいうような笑みが浮かぶ。愛おしいものを語るような表情に、聖杯に対する拒絶感はないようだった。

そのことにざらりとしたものが胸の内を撫でる。それは恐ろしい、とは違う。怒りでも、嫌悪でもない。ただ……何だろうか、この感情は。

『疑念』

不意に、気に食わない神父の言葉が士郎の脳裏に浮かんだ。だが、やはり疑念……とは些か違う。違う、はずだった。

その疑念、いや違和感というものを抱いた日を思い出す。あの日、新都の公園に彼女が居たのを目にした時から。どうしようもなく、その姿が気になっていた。ずっとずっと、この十年近く見てきたそのはずなのに。

「それは……そんなのは、願いなんて言わないだろう」

「ふふ、そうですね。ですが私にとってはそういうものですから」

この微笑みは、何かが違う。いや、いつもと同じではある。その顔立ちに損なわれたものがあるわけでもない。

ただただ友人が、友人性の在り方質が、決定的に変質してしまったのではないかと。そう感じてしまうのだ。

「……なら」

そこでイリヤスフィールからの言葉を思い返し、士郎は迷っていた言葉を、ひとつだけ選ぶ。

水谷響は問に答えると、彼女は言っていた。そして昨日。あのビルでも、真実彼女は敵だと即答した。

戦うためにと迷いは飲み込んだが、それでも話し合える今。問いかけるのは、もっと別のことだとそう思う。

「お前は、どうなるんだ水谷。願いを叶えた、その後は」

数歩空いている距離を一步、踏み出す。

呪いだという聖杯の中身を飲み干して、無事でいられるわけがないだろう。幾ら魔術の世界に疎くてもそう断ずることくらいはできる。「私の中に満ちた呪いに蝕まれるだけですよ。食い破られて街に被害が出るか、ただ食い潰されるだけなのか、それはわかりませんが」それは、想像するだけで悍ましい。水谷は平然と、さも当たり前のように言っているが、そんなの。そんなのは、だめに決まってる。彼女を死に至らしめる呪いなんて。

「俺は、認めない。そんなの、間違ってる」

「……間違い、ですか？」

そう、間違いだ。間違いだろう。士郎にはイリヤが言いたかったことの意味の半分も理解できていない。彼女らが自分自身をもののようにいう意味も、違うようで同じであるという意味も。

だけど、でも。水谷がそうなる必要も、そうする必要もない！彼女がどんな人間だとしても、犠牲になるような真似なんて、到底認められるはずもないだろう！

「ええと、お言葉は嬉しいですけど、衛宮君。私はあなたに会う前から——いいえ。遠い遠い、昔からこういうものですから。あなたが気に病むことはありませんよ。殺すのを躊躇う必要も、ですが」

それならば、選ぶべき道はたったひとつ。

「俺は聖杯なんて壊してやる！お前が、水谷響が呪い殺されるといふのなら、その前に！」

これまで士郎にとっての響は、鏡にも似たものだった。

同じ地獄から生還した者でありながらすべてが違う彼女。性別も生まれ育った環境も違うのだからそれは当然だが、そうではなく……もっと、根本的なところが。

しかし、それも違うのだとここに至って、理解した。彼女は自分自身をさも人形であるかのように言う。それは間違いではないのだろう。これまでの会話で続く平坦な声音も、言葉遣いも、以前よりもずっと温度が低い。

だが逆に、衛宮士郎が知っている彼女こそは人形ではない、人としての水谷響である。きつと、それは矛盾していないのだ。

「驚いた。……それだと正義の味方なんて夢、叶えられないよ？ 衛宮君。いいの？」

ほら見ろ。こうして戸惑ったように首を傾げる水谷は、水谷響だ。いつかに話した夢を、呆れもせず、『無理して体を壊さない程度にやりなよ』と微笑みながら背を押してくれたあの時と同じだ。

——彼女に語った正義の味方。士郎が目指す正義の味方は、目の前の命を助けるもの。

そして、今この場にいる命は、ただ一人。ならば、叶えられないなんてことは、ないはずだ。

「う、うーん、いや……なんていうか、私はもう聖杯の呪いこと自体は受け入れてるというか、ね？ 壊さない場合は腐りながら死ぬ生きるようなものになると思うけど、だからって壊しても聖杯彼が私の中に既にいるのも事実というか。選ぶ余地はあまりないというか」

「……お前、なあ……！ なんてそんな……そんなことになるんだ?! 水谷、お前はなんで、なんで」

困惑した様子の水谷の肩をがっとう掴んで、ギリリと奥歯を噛みしめる。

どうしたら、よかったんだ。慎二を放っておいて、凜と戦ったほうがよかった？ 教会にもう一度見舞いに行つたほうが？ それともあの新都の夜、声をかけていたならば違っていたのだろうか？

もしくはずっと前。出会った頃から、もっと彼女のことを知ろうとすればよかったのだろうか。そうしたらきっと。きっと、敵対なんてしなかったらうに。

「……ありがとう、衛宮君。君は本当に私のために怒ってくれる人ね。ありがたいよ。だから——……ああ、うん。なるほど。これが、キヤスター彼が願ったことの結実になるんだね。ふふ」

悔いたように顔を歪める衛宮を見上げ、響は心の底から安堵した。彼——アンデルセンが知れば、どう思うだろうか。どこが、と思ってしまうだろうか？

でも、響にとってはこれが水谷響の結実だった。それが人形ガラクマなり、答えなのだ。

聖杯の呪いに自身の中身を満たされながら、しかしハサンの、クー・フリーンの、メディアの、ライダーの願いに水谷響としての外殻^形は留められ。……言峰やギルガメッシュは結末を眺める観客だがそれは兎も角。衛宮士郎はただ彼女を終わらせるのではなく、破壊することを選ぼうとしている。

その結末が、彼にとって善きものか悪しきものなのかも気に留めずに。

——今までも、■■■にそうした人間が現れなかったわけではない。だけど、ただ、そこに至る芽が摘み取られていただけのことだ。それに今回だって、ハサンが願うような普通の人間らしく、なんていうのは土台から無理な話だった。だけれど水谷響が大舞台の幕引きに立ち会っていること。これが、違うものを見出させた。結末への分岐点とも言い換えよう。

「なあ、水谷。……俺は友人として、お前を助きたい」「うん」

「……だから、教えてくれ。お前が生きられる方法を。お前は、わかっているんじゃないのか」

その言葉にうんと困ったように頷いて、響はもう一度だけ彼のことを思い描いた。彼の願いを。

——水谷響の未来を願った、ひとつの物語を。

第四十二話

彼女の口から滑り落ちた言葉に、暫しの間衛宮士郎は呆然とした。瞬きさえも忘れたような見事な固まりぶりである。

けれど水谷響はそれで構わなかった。セイバーとアサシンの決着がつくのが先か、彼の決断が先か。ふたつの道しかないのだから。

その結末の差異も、そう大きなものではない。だから今彼に伝えたことも、他人から見れば似たようなものだと言われてしまうようなものだ。

響としては願われてきた末に迎える物語のこの終わりが、彼らの目に悪くないものであれば嬉しいと思う。

「……水谷は、……そんな人生で本当に、いいのか？ お前は魔術師としてすごいと、俺は思った。その力でも、どうにもできないのか？」
「ええ。私の魔術の腕は、人から映し得たようなものですから。私では古き^大妄執^杯を無きものにはできません。遠き日の事象を編纂するなど、ひとつの人間の魂で出来よう筈ありませんよ」

確かに^ア聖杯^リの力^マでなら可能ではあるだろう。少なくとも、この世^ユ全ての悪^クのことがなければ。

彼は人々を呪うだけのものだ。そうあれと望まれたもの。殺すために、生まれ出ようとするだけのもの。

「それに、既に存在するものを無にすることは、私にはできない。したくない、とも言えるね。……私という存在^魂の在り方の問題でもありませんが」

くすりと笑う彼女はアサシンへの支援を継続的に行っている。それを士郎が非難するのは違うが、それでもと唇を噛む。

それでも、魔術の腕は自身よりもずっと上にある。模倣だと言っても、もっと何か、別の方法を考えられてもいいというのに。

「……………わかった」

だが、士郎だつて響との付き合いはそれなりに長い。たとえここに立っている水谷響が以前の彼女と少し違うのだとしても、根本的なと

ころは変わらない。
すなわち、なに誰かかのためになっっているのなら、かまわないだろうという許容。あるいは、許し。
諦めというには柔らかすぎそれを、勝手に守った気になっていたけれど。彼女と自分の、性別差以上の断絶は、しかし心の底ではわかっていたことだ。それは変わらない。変わりようがないことだ。けれど今は、より理解したからこそその選択肢が衛宮士郎の手に残っている。だから。

「——来い！ セイバー！」

手の甲が熱くなり、突風と共に数日の内に見慣れた金糸が士郎の視界に映った。その向こうには同じように喚ばれたのか、仮面アサシンの女の姿が現れている。

双方ともに張り詰めた、士郎と響の間には無かったピリリとした殺気が場に広がっていく。しかし「少し話を聞いてくれ」とセイバーに制止の声を上げ、士郎は騎士の華奢な腕を掴む。

「なにを……！ まだ戦闘は終わっていません、シロウ！ ここに令呪をもって喚んだ以上は——」

「それはだめだ！ 水谷は死なせられないんだ！ 俺はそのためにお前を喚んだ！」

聖剣に魔力を込めようとするセイバーを遮るように言い切り、そう決めたんだと強い眼差しで振り返った青い瞳を見据えた。

そうして、訝しげな彼女に耳打ちするように簡潔にことの次第と自分の出した結論を告げる。

それを眺めながら響はアサシンを手招き、困ったように微笑んだ。「ごめんなさい、ハサン。私では、あなたを勝たせられなくて」

「そのようなこと、謝らないでください、我が主。セイバーに勝てないのは、我が身が至らぬ故……あなた様に勝利を捧げられぬ私こそが……」

「ふふ、あなたは十分尽くしてくれているわ。だから、いいの。ありがとう。……私の最後のお願いを、聞いてくれる？」

「……はい。勿論です、響様」

セイバーたちの動きを警戒しながらハサンは密かに唇を噛み締めた。ここで主を勝たせても自身の願いが果たせられないことは、わかっていた。だからといって、一切手を抜くことはなく……どころか主の手を借りた上でセイバーに致命的な一撃を食らわせることはついでできなかったことが、ひどく悔しい。

そう悔やむハサンの柔らかな髪が撫でられ、柔らかな声音が降り注ぐ。

仮面の下で目を伏せて聞きながら、あの金色の王はこれが視えていたのだろうかと思う。

「これから行うあなたの選択を、どうか気負わないで。アンデルセンもギルガメツ^様シユも関係なく、私の道行は私が定めたもの。だからあなたたちの決めた選択が私を損なうわけではないの。大丈夫」

自身の決断を促す、愛おしくもひどい人の綻ぶようなこの笑みが、生命を脅かす呪いそのものに飲まれながらもその形は失われないでいることへの安堵を覚える自分を。

……いや。どちらでも構うまい。ハサンにとつては水谷響という存在が少しでも長き時を生きることだけが大切なことなのだから。その願いは、それこそ彼女を主と認めた瞬間から抱いているものだ。

ハサンの願いは、既に叶えられているからこそ。いいやむしろそれは願った以上の、両腕で抱えきれないほどの幸福^{余白}で。故に彼女は、思念^{パス}を通して聞いていたその事実の前に使い所に迷っていた刃へと手を伸ばす。

——聖杯戦争の終焉は、もうすぐそこに。

一方で士郎からもたらされた大聖杯についての真実に、セイバーは苦り切ったような顔で聖剣を握りしめる。なんだ、それはと吐き捨てたくなるのを堪えているようでもあった。

そのまま黙り込む彼女に、前回の聖杯戦争でのことを思い返しているのだろうか。士郎は思う。切嗣がどんな考えでセイバーに聖杯を破壊させたのか、その答えの一端でもあったはずだ。

「……シロウは、この儀式ごと壊してしまいたい、というのですね」
「ああ。このままにはしておけない。だからセイバー。——お前に、大聖杯を破壊してほしい」

衛宮士郎もまた、過程は違えども同じ結末を選ぶ。それが全てにとつてよいことだと信じて。水谷^{友人}を、少しでも守れるのだと信じて。

これは切嗣とは似ているようで似ていない道だろう。己の思う正義の味方でもないだろう。それでも、選んだことに後悔なんてない。
「……………」

その決然とした表情に、セイバーは細く長いため息を吐き出した。士郎から伝え聞いた響の言葉を信じるのならば、確かにこの聖杯は自分には必要のないものだ。自分自身が変じたとしても願いは叶わぬのならば。

だが、ひどく複雑だ。確かにあの時——前回の聖杯戦争と違い、士郎はセイバーの意志を確認してくれている。だから多少、納得はいく。それが信じられる真実かは別物として。

「……………いいでしょう、シロウ」

「！ ああ、わかった。ありがとう、セイバー」

しかし長い沈黙の後に彼女が出した答えは、肯定だった。直感としても、サーヴァントとしても、マスターである士郎の言を疑ってはいなかったのが大きいだろう。

それに、サーヴァントこそ暗殺者^{アサシン}であったが、水谷響の戦法それぞれのもものに卑劣な行いがなかったから、というのもある。ギルガメツ^{英雄}王^王が気がかりではあるが、あの男の執着は響へと向けられている。それこそ、前回の聖杯戦争から。

だからこそ彼女へと聞かねばならぬだろうと剣をあえて下げ、響とアサシンへと向かい直した。

「ヒビキ。貴方に少々、聞きたいことがある」

「はい。構いませんよ、セイバー。何でしょうか？」

返ってくる笑みには、記憶に残る面差しとはあまり重ならない。だがどこまでも自然体でいる雰囲気は、はじめて彼女を認識した時と同じような気がする。

そもそも直接顔を見たのは二度だけ、ではあるが。

「ギルガメツシュが貴女の側にいると聞いた。彼奴を放置しては何が起きるかわからない。貴女はそれをどうするつもりだ？」

「そうですね……確かにあの人は受肉してもなお強大な力を持っています。少なくとも私が生きている間は何もしませんよ。まあ自惚れといえはそうかもしれませんが」

「……しかし貴女は長生きできないと、自身で確信しているのだろうか？」

少なくとも士郎伝いに聞いた話ではそうだと思えた。

だが確かに、改めて彼女を見やると違和感を覚える気配を感じる。それが何、とはやや言葉にはし難いが、聖杯の呪いが所以と考えればそうした類のものと彼女自身が混ざり合っているからだろうか。死の気配、にも似ているといえは似てはいる。

「セイバーの心配は理解できます。彼は気分屋の王様ですからね。……だけど、大丈夫ですよ。なんだかんだ愉しみを見出すことが得意な人ですから。でもそうですね。聖杯が貴女の願いを叶えられない以上は、そちらについて努力させていただきます。多少のお願いくらいは聞いてくれると思うので……」

「……そうか。では、そのように」

風いだ眼差しをじつと見つめ、セイバーはゆつくりと頷いた。自分の不始末ではあっただろうが、受肉している以上後のことは現代に生きる者たちに任せるべきなのだろう。

あの男が人類にとって高き壁となるのかどうかはわからないが。少なくとも、時間の猶予は得られるのだろう。この大聖杯を壊したのならば。

「シロウ」

だから未だ未熟さの残るマスターに彼女は後事の懸念とここに至るまで協力してきた遠坂凜への言伝を託し、黄金に輝く聖剣を掲げた。

その光が集束し、膨らんでいく中で。

「……響様」

ハサンは振り返る主を見つめ、ギルガメッシュから渡された刃——契約破りの短剣ともいふべきそれ——を胸の前に持ち上げた。その意図するものを読み取った響はいつもと同じ微笑みで、うんとひとつ頷く。

その笑みを目に焼き付けながら、ハサンはゆつくりとその刃を彼女の胸へと沈める。

——かつてのハサン^毒・サツバー^娘ハとしての行為とは、これは違う。違う意味を持つ、行いだ。それが何だという話ではあるうが、静謐のハサンにとってはそれそのものに価値があるものだ。

「ありがとう、ハサン。私のアサシン。あなたに会えて、良かった」
「私も、貴女に会えて幸せでした、響様——」

金の極光が龍洞を満たす中で、二人はいつものように微笑みあつて——そうして、すべては光に飲み込まれていく。

終わりを示すように。されど始まりを告げる朝焼けのように。

エピローグ

これは夢だ、と気づいた赤い髪をした女は何度か瞬きゆつくりと周囲を見渡した。見慣れていないようで見慣れた、女からしてみればややこちんまりとした一般家庭のリビングである。

慣れたように陽光の射す窓から離れ、彼女はソファに座りいつの間にか用意された紅茶に手を付けた。夢の中であつてなお感じる香りは芳しい。

少々ぼやけた味に感じるのが惜しい点だが、夢の主が以前に『夢と現は区別できねばならないからそれぐらいがちょうどいい』と言っていた。だからさほど気にせず彼女はその紅茶を味わう。不味いわけではないからそれでいいのである。

「久しぶり、ソラウ」

「ええ。久しぶりね、ヒビキ」

堪能している内にソファの向かいに座っていた友人に、ソラウは美しい顔に笑みを浮かべた。この夢での交流も、もう十五年ほどになるか。

思い返せば長い付き合いであり、そのくせ現実で会ったのは片手で数える程度にしかない、が。不思議と充足した関係だとも思える。夫とも違う関係は彼女にとってかけがえのないもののひとつだ。

「ベルベットの中間報告を見たけれど、冬木の地脈は随分と弱ってるのね」

「弱るだけで済んでよかったよ、逆にね。大聖杯を破壊された影響だけだもの。ふふ、ウェイバーさん殆ど毎日眉間にシワを寄せて唸ってますよ?」

「あら。エルメロイのバックアップは万全のはずだけど不足していたかしらね?」

「それを聞いたらたぶん青い顔で首を振ると思うなあ。……あ、何か言伝はありますか?」

「そうねえ今のところはないと思うわ。ケイネスも頭を抱える災厄の

片割れは一時帰省中だもの」

様々な要因と流れからエルメロイの後見する現代魔術科の講師として活躍する男と時計塔にやってきた生徒の話をしながら、ここ暫くのことを思い起こす。

そもそも彼、ウエイバー・ベルベットを冬木に送り付けたのは第五次聖杯戦争の終結に起因するものだ。破壊されたとはいえ、サーヴァント^{英霊}を召喚し使役するという特殊性が今後も起こせ得るのか否かの調査。大聖杯と呼ばれたものの破壊状態の確認。というのが主な名目である。

ソラウとしては彼女が再び聖杯に選ばれ、生き抜いてこうして夢で会えている。その事実だけで満足してはいるのだけど、世の中そういうわけにもいかない。特に魔術の世界はそれを放つてはおかかないだ。変^{不審な動き}わつた者を見かけないわけでもないらしいし、念のためともいえるが。

「最近はどう？ 育児疲れしてはいない？」

「ふふ、大変ではあるけど、大丈夫。ああ、そうだ。ウエイバーさんに診てくれるよう言ってくれたんだよね？ ありがとう」

「友人のことを心配してのことだし、礼はいらないわ。それで貴女の環境が変わるわけでもないし」

ふわふわとした笑みを浮かべる友人に肩をすくめてみせる。この友人をとりまく状態は魔術師からしてみれば非常に興味深く、場合によっては検体として欲する者が現れてもおかしくない。

聖杯の器になり、その中に蓄えられていた呪いそのものを生命として産^{変換し直し}み落とした事実が明るみに出てしまえば、だが。

「私は私の影響を及ぼせる範囲内でたった一人の友を守りたいから守ってるにすぎないもの」

きつとこの考えは魔導を操る家のものとしては失敗なのだろう。でも、と彼女は考える。

……それでも、ものであった自分が得た至宝は、水谷響という人と過ごす時そのもの。だからソラウは、遠い国に在りながらも近い彼女をこの遠い手だからこそできる方法で大切な友を守るのだ。たと

えどれだけ自分以外の力を使つたとしても、この時間を手放さないために。

「ふふ。本当に、私にはもつたいたない友人ですね。……ありがとう、ソラウ」

「どういたしまして、というのよね、こういう時は。でも、私としてはそうさせるに至つた英雄王を殴りたい気持ちが湧いてくるわ。貴女もベルベットも今のところは問題ない、だなんていうけど。私的には問題だらけよ！」

「あはは、させられたわけではないんだよ？ 私は私の意志で受け入れていることだから。でも、ウェイバーさんはあんまり怒らないであげてね。彼も色々心配してくれてますから」

くすくすと笑う響だが、聖杯戦争での顛末を聞かされた身としては納得がいけないものである。

そもそもギルガメツシュが生きているのは聞いていなかった。第四次聖杯戦争の後に監督役の息子聖堂教会の者だった男に一時世話になったことは聞いているが。だがそれがどうして協力者として第五次聖杯戦争を戦うことになるのやら。

まあ何度その流れを聞いても我が事のように怒ってしまうだろうけれど。

「……すぐくめんどくさいことを言ってるのはわかつて聞くのだけど」

「うん。なあに？」

友人の安否を案じてはいるけれど、ソラウにとってはもうひとつ気になることがあった。ウェイバーを派遣することによって友の言葉以外による実態と安全を確認した今だからこそ聞くつもりになった、子供が拗ねたような戯言ではあるが。

「……………私とサーヴァント、どちらの方が貴女の友として役に立てていたのかしら」

遠い地にいる、夢でしか通じ合えないソラウ。かつて共に傍観者であったというキャスター。同じ年頃の友人のようだったというアサシン。

より近くにいた者たちこそが、彼女の力になれたのではないか。自分分は、友人の助けになれたことはあつただろうか、と。

これは状況が落ち着いた今現在だからこそ、聞ける言葉である。

「ふふふ。私にとっては、ソラウもアンデルセンもハサンも。等しく私に大事な思もい出のをくれたと、そう思つてますから。だから、私の人生はこんなにも楽しく過ごせたの。……もう少しあの子が大きくなれば、私というものは朽ちてしまうけれど、それでも」

だが、実のところ予想はついていた。だつて響とソラウは似ていて、でも確かに違つていて。それでも近しい感情をきつと抱けていると信じていたから。

「——この夢のように鮮やかで、優しく、私の心は幸せな気持ちに満ち溢れているよ」

景色が移ろいで、座る場所だけを残して柔らかな風が吹き抜けていく。

その優しさに眩んで瞬けば、次には色とりどりの花々に囲まれ、はらはらと雪のような花卉が舞い踊っていた。空を見上げた視線を戻すと、響の膝には一人の男児が抱かれ眠っている。

ひどく穏やかで、温かい夢だ。

「私の人生幸福を願つてくれて、ありがとう」

中心で微笑む友の表情さえ眩いほどに。

同じ母であるからこそ、そこには子を想う気持ちが入り混じっているのがわかつて、吐息のように笑みがこぼれる。

貴女は私のおかげだというけれど。

それは私にだつて言える事なのだ。

「私幸福に感情を教えてくれたのは貴女だわ。だから、私のほうこそ、ありがとう」

すべてを覆い隠すような、優しい花の雨に降られながら。

そうして二人は微笑みあつた。

——誰よりも何よりも尊い、初めての友人の幸福を私たちは願っている。たとえ未来にどんな破滅何かが待っているとしてもこの祈りだけは、

幼小さな日芽はから確かに存在していたものだ。

その果実を成すことは、実のところ水谷響には難しかったけれど。……でも。色んな願いが、思惑が、想いが、約束が、選択が、注ぎ込まれたから。

響はこうして友を想い、子を想い、過去を想い、未来を想い。■ ■

■ にとってはあまりにも優しい終わりの足音に、これまで以上に悔いは残らないと信じられた。

このために長く、遠く、果てのない魂の放浪を続けていたのかもしれない。

一番最初に手放したものを、もう一度取り戻すかのような旅だったのかもしれない。

それは擦り切れて喪われた ■ ■ ■ の願いなのか、祈りなのか、決意なのかは不明ではあるけれど。

「ああ本当に、幸せな夢ですね」

たとえば誰かが私を壊したとしても、もうこの夢果実は完成実している。これをどうするのかは、響が決めることはないけれど。

今はただ、時間の許す限り友と語らうだけだと彼女は眠る我が子の頭を慈しむように撫でつけた。